

重力少女のヒーローアカデミア

縞猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーローがあまり好きではない寡黙な少女は、成り行きで雄英高校に入学する。

肉体だけでなく精神も普通でない彼女は、厄介事に巻き込まれながらも決して諦めず
にマイペースを貫き、明るく楽しい日常を過ごすために頑張るのだった。

シリアスではなくコメディ寄りで、何番煎じかのオリ主ヒーローものです。

目次

原作開始

オリジン

111	オールマイイトから見た見た斥流陰子	101	個性把握テスト終了	250
	緑谷出久から見た見た斥流陰子	101	個性把握テスト	239
	暴走新幹線	89	入学初日	221
76	斥流陰子 vs ムーンフィッシュ	67	雄英高校入学	213
	ヒーローデビュー？	40	試験結果発表	200
	斥流陰子 vs マスキュラー	26	入試中の教師陣	191
	爆豪君の挑戦	11	市街地演習	175
	緑谷君との出会い	1	雄英高校入試の説明	166
	斥流陰子の原点		ヴィラン退治のその後	158
			斥流陰子 vs ヘドロヴィラン	141
			中学三年生の進路希望	129

新しい友人	261
麗日さんのルームシェア	272
ヒーローコスチューム	282
緑谷出久vs爆豪勝己	290
斥流陰子vsオールマイト	300
学級委員長	308
USJの救助訓練	323
斥流陰子vsヴィラン連合	340
斥流陰子vs怪人脳無	358
襲撃事件の終わり	372
雄英体育祭	
雄英体育祭	378
障害物競走	393

第二種目の準備	405
騎馬戦	412
騎馬戦の決着	425
緑谷出久vs心操人使、追加で斥流陰子	433
エンデヴァーと轟君の関係	448
斥流陰子vs芦戸三奈	459
緑谷出久とエンデヴァー	467
斥流陰子vs一年A組上位陣	479
闇を祓う流星	
ヒーローネーム	493
職場体験学習	503
保須市の事件	512

期末試験	527
シヨツピングモールの事件	539
林間合宿	548
個性強化訓練	559
上空からの監視	571
シューティングスター vs オール	580
フォーワン	580

オリジン

斥流陰子の原点

赤ん坊の私は、布にくるまれて孤児院の入り口に捨てられていた。

親が誰かはわからなくても名付けられてはいたらしく、斥流陰子せきりゆういんこが自分の名になった。

でも捨て子がどうか言われていても、私の親は孤児院の院長先生だと思っている。顔も名前も知らない親族のことは正直どうでも良かった。

しかし斥流陰子せきりゆういんこと院長先生が呼んでくれるので、その名前自体は割りど気に入っている。

貧しくても精神的には満たされた生活を送り、四歳になって物心がつき言葉を流暢に喋れるようになった。

そして、個性も発現した。

昔は少数だったが、今では世界的な総人口の八割が個性を持つ超人社会だ。

なので私も、多数派に組み込まれたらしい。

しかし、まだどういった個性かわからない。

詳しく調べるために、近くの病院に院長先生と一緒に向かうことになった。

先に電話予約を取っていたので、到着後は受け付けで話を通して、専用の機械が並んでいる部屋に移動する。

そこで良くわからないが、詳しい検査を行った。

結果が出るまでは少しかかり、待合室で院長先生と一緒に待つ。

しばらくすると呼び出しを受け、指定の医務室の扉を開けて中に入る。

それなりに歳を重ねた医師が椅子に座っていて、後ろには若い看護師が控えていた。

自分と院長先生も座るように促されたので、言われた通りに椅子に腰かけて話を聞く。

「キミの個性は、重力操作のようだね」

用紙に書かれた項目を読みながら、詳しく丁寧に説明してくれる。

しかし、この頃の私はまだ四歳だ。

良くわかっていなかったけれど、体の動かし方と同じように、自身の個性の扱いは本能的には理解していた。

「キミなら、このボールペンを浮かせられるはずだよ」

そう言つて先生が、机の上にボールペンを静かに置いた。

「さあ、やつてごらん」

発現したばかりの個性なので、扱い慣れてはいない。

言われた通りに意識を集中するが、残念ながらピクリとも動かない。

しばらく続けて疲れてくると、ようやくボールペンが浮き上がる。

だがふわりとはなく、まるで重力が逆転したかのように上に向かって真つ逆さまに落ちていく。

そのまま天井にピツタリとくつつき、そこで動きが止まってしまう。

「ありがとう。もう解除していいよ」

解除するようにと促されたが、まだ全然制御ができていない。

なのでどうやれば重力を元に戻せるかがいまいちわからず、しばらく天井に張り付かせたまま四苦八苦するのだった。

苦労はしたが何とかボールペンを机に落とすことに成功し、自分の個性についてまとめた書類を受け取る。

お医者さんにお礼を言ったあとに病院を出て、迷子にならないように院長先生と手を繋いで孤児院に歩いて帰る。

その途中で色々と説明してくれたが、自分は視界に入って認識したモノの重力を、自在に操れる。

だが対象が大きいと効果を發揮できないようで、今のところはボールペンサイズがやっただ。

そして飛ばすのではなく、落とすのだ。

重力を反転させて空に向かって落下させるので、浮遊や飛行とは異なる個性である。

しかし私の頭ではこの辺りの情報を処理できずに、道中はひたすらウンウン唸っていたらしい。

そのことに気づいた院長先生は、続きは帰ってからねと笑顔で話しかけて、穏やかな雰囲気で町中をのんびりと歩いていた。

けれど、そんな幸せな時間は突然崩れ去る。

「退け退けえ！ ヴイラン様のお通りだあ！」

「邪魔する奴は轢き殺すぜえ！」

すぐ前のコンビニエンスストアの窓ガラスが割れる。

そこから凶悪な面構えの男たちが外に飛び出し、用意してあった軽トラに急いで乗り込む。

「誰か！ 誰かヒーローを呼んでくれえっ！」

周りの通行人が一斉に騒ぎ出すが、彼らはそれを気にすることなく運転を任せている仲間に指示を出す。

アクセルをベタ踏みさせて急発進し、真っ直ぐにこちらに向かつて突っ込んできた。「おらっ！ テメエら！ 邪魔をするなら轢き殺しちまうぞ！」

他の乗用車を避けて歩道も関係なく走ってきて、止まる気配は全くない。

周囲の市民も口々に危ないと叫ぶが、残念ながら私の足は震えて動かなかつた。

「避けてっ！」

恐怖のあまりギョツと目を閉じた私に、院長先生の声が聞こえてくる。

そして彼女に抱えられたと思つたら何故か一瞬だけ宙を舞い、そのあとは地面をゴロゴロと転がっていく。

私はただただ震えながら院長先生にくっついていたが、軽トラのエンジン音が遠ざかっていって少しだけ安堵した。

まだ怖いのが現状を把握するために、荒い呼吸を繰り返しながらゆっくりと目を開ける。

「……院長先生？」

「貴女が無事で、良かったわ」

院長先生は私を抱えたまま苦しそうな声を出し、突然足を押さえた。

恐る恐るそちらに視線を向けると、彼女の右足が不自然な方向に曲がっていることに気づく。

「やった！ ヒーローが来てくれたぞ！」

「頑張れ！ ヒーロー！ ヴィランなんてぶっ飛ばしちまえ！」

自分たちの近くで、ヒーローがヴィランと戦っているようだ。

市民の声援や戦闘音が絶え間なく聞こえてくるが、今の私にとっては何処か遠い場所で行われているようにしか思えない。

「お母さん！ 早く病院に！」

「ようやく、お母さんって呼んで……痛っ！」

今までは何だか恥ずかしくて、母親のように慕っていても院長か先生と呼んでいた。けれど、突然の事態に本音が出てしまったようだ。

しかし恥ずかしがっている余裕はなく、たまたま近くで私たちを見ていた親切な人に必死に助けを求めて、急いで救急車を呼んでもらう。

幸い病院が近くて処置も早かったので、折れた足の骨は三ヶ月後には完治するらしい。

しかし元通りに歩けるようになるには、辛いリハビリを行わなければいけない。

そして通報を受けて駆けつけたヒーローたちは、ヴィランを倒して周囲の人々の称賛を受けて喜んでいたが、怪我をした院長先生には最後まで気づかなかった。

それでも彼らがたまたまそうだっただけで、他のヒーローは違うかも知れない。

だが私は院長先生の一日も早い回復を願いつつ、心中に複雑な感情が渦巻いていた。
(次にまた、同じことが起きたら)

ヴィランに襲われても、ヒーローが駆けつけて助けてくれるとは限らない。

今回のように見捨てられる可能性は低いだろうが、それでも絶対大丈夫とは言い切れないし、被害が出てから出動するのがヒーローである。

自分がヴィランに襲われる、最初の一人にならないとは限らなかった。

(自分の身は、自分で守らないと)

別にヒーローになって平和のために戦ったり、皆を守りたいわけではない。

けれど彼らに任せきりにするのは危険で、まだ四歳とはいえ、私は院長先生に大怪我をさせてしまった。

言いようのない自責の念に苛まれた私は、もしヴィランの襲撃に巻き込まれても次は危機を退けられるようになりたかった。

なので、ヒーローに頼らなくても自衛できるだけの力を手に入れるため、個性と体を鍛えようと決意を固めるのだった。

やがて時が流れて、せきりゆういんこ 斥流陰子は中学一年生になる。

今は孤児院の自室から外の景色を眺めて、やかましいセミの声を聞きながら昔の思い

出を振り返っていた。

(ヴィランに襲われて、院長先生が大怪我したのが私の原点)

今は七月の下旬で、夏休みが始まってから数日経った。

本当は宿題をやりたいのだが。孤児院の子供たちも長期休暇中である。

浮かれて大騒ぎしているため、ある意味ではセミの鳴き声よりもやかましい。

これで集中して勉強というのは難しく、うちはあまり裕福ではないこともあつて壁が薄い。

古くて穴が開いていたり、修理も業者ではなく自分たちがやるので塞ぎきれておらず、隣室の音がよく聞こえた。

なので宿題が手につかなくて、現実逃避として昔のことを順番に思い出していく。
(個性を倒れるまで酷使したり、常時自身を重くして体も鍛えた)

四歳の頃から自身の重力を増やし続けて、個性と肉体の両方を鍛え続けた。

視界に入れた対象を認識するという発動条件ではあるが、自分だけは例外らしい。

しかしその影響を受けたのか、身長が小学校低学年から全然伸びなくなってしまう。

百二十センチで止まってしまったが、超重力下でも横には伸びるよう、胸だけほとんど大きくなる。

たまに他者の視線が胸部に集中することから、ロリ体型で巨乳など冗談ではないと身

を震わせた。

しかし私が思うに、もつとも効率が良い訓練方法が自身の重力の増加だ。

個性の無断使用は原則として禁止されているが、バレなければ問題ない。

四歳から常時この状態で生活しているからか、今では体重が百キロ以上になっても誰も疑問に思わない。

そういう重力操作の個性のデメリットで済ませられるのは、とてもありがたかった。

ただし小学生の頃はマラソン大会を完走できても、ダントツのビリで息も絶え絶えだった。

運動音痴の女子として、クラスでは戦力外として扱われるのも致し方なしだ。

中学に上がる頃には体力がついたのか、超重力下でも息切れしなくなる。

気になって色々と計測したら、百キロ以上のロリ体型でもプロのアスリートレベルの身体能力を発揮していた。

けれど、積極的にアピールするつもりもない。

今のほうが学校で人との付き合いが減るので、逆に修行に集中できる時間が増えるからだ。

そして毎日鍛え続けたおかげで、個性も成長した。

百キロ以上の体重を維持したままで、自身への重力操作を自在に行えるようになった

のだ。

これに関しては考えても良くわからないし、何だかわからないが便利に使えるようになったのでとにかく良しにしておく。

それはともかく基本的に行き当たりばったりでマイペースな私は、宿題は早めに終わらせるに越したことはないと考ええる。

しかし、孤児院内で勉強しようにも周りがうるさくて集中できないことに大いに嘆いた。

だがここであることを思いつき、椅子から立ち上がり自室から出て院長室へと向かう。

外出許可を取って何処か静かなところで勉強に集中すれば、効率良く宿題を進められるだろうから、早速実行に移すのだった。

緑谷君との出会い

私ことせきりゆういんこ斥流陰子のクラス内の評価は、影が薄くていつも本を読んでいる地味な少女である。

けれど別にコミュ障ではなく、他人と関わるより修行や勉強に時間を使ったほうが有意義だと思っているからだ。

将来的には大手の企業に就職して、孤児院での貧乏生活を少しでも早く脱したいという、割りと切実な思いがあった。

あとは院長先生には日頃からお世話になっているし、育ててくれて感謝しているので恩を返したい。

幼い頃に彼女の足を折ってしまった自責の念はまだ消えておらず、独り立ちしたら孤児院に毎月寄付金を入れるつもりだ。

ただし正直に告げるのはお母さん呼びと同じで、とても恥ずかしい。

それに院長先生や家族の誰にも、個性の無断使用は打ち明けておらず、少々後ろめた
い気持ちもあった。

だがまあそれはそれとして、外出許可は無事に取れた。

お礼を言い、頭を下げて扉を開けて外に出ると、小さい子供たちが楽しそうに駆け回っていた。

しかし自分の目の前を横切った時に、運悪くつまずいて転んでしまう。

私はすぐに個性を使用して、重力を逆転させることで衝撃を和らげ、床に触れたところで素早く解除する。

「足元には気をつけて」

「わかった！ ありがとう！ 陰子姉ちゃん！」

廊下を走るなど注意しなかったのは、急いでいる時には自分も良くやっているからだ。何にせよ怪我がなくて良かった。

ホッと息を吐いて自室に戻った私は、長期休みに出された宿題と筆記用具、さらに気分転換のためにお気に入りの小説をお気に入りのカバンに入れる。

外出用の服に着替えてから、家族に行ってきますと告げて孤児院の外に出た。

夏休みの図書館は人が大勢居て賑やかだし、近所の公園のほうが静かで勉強に集中できると考えて、目的地に向かって歩いて行く。

地元は都会で人が多いが、今はそれよりもセミの鳴き声のほうが良く響いている。

麦わら帽子を被って真夏の日差しを和らげてはいるものの、早いところ木陰に避難したいものだ。

少し歩いて近所の公園に到着して、何処か静かに勉強できる場所はと周囲を見回すと、幸いなことに人は殆どいなかった。

せいぜい自分と同じ年ぐらいの子供たちが、仲良く遊んでいるぐらいだ。

なので私は木陰のベンチに腰かけて、いそいそと勉強道具を広げて夏休みの宿題を片付け始める。

しかしその途中で、子供の集団を何処かで見たことがあるようなと気になり、小休止して彼らをじつと観察した。

「無個性のデクが、ヒーローになれるかよ！」

「やつ、止めてよ！　かつちゃん！」

やはり年齢的には私と同じぐらいで、男子連中が賑やかに騒いでいる。

今は気弱そうな少年から一冊のノートを取り上げ、ツンツン頭の少年は得意気な表情で見せびらかすように掲げていた。

それを取り返そうとモジャモジャ頭の少年が近づいてくると、ギリギリまで引き付けてから他の仲間へ投げ渡す。

「ははっ！　悔しかったら取り返してみろよ！　個性を使つてよお！」

「ほらほら！　ノートはこっちだぜ！」

「かつ、返して！」

気弱な少年にとって大切なノートのように、苛めっ子集団がパスし続けていて、彼はそれを必死に追っていた。

しかしあと一步というところで投げられるため、いつまで経っても取り返せない。

教室なら先生が居るので気づいたら止めてくれるが、公園は彼らの他には私以外に人がいないので、騒ぎっぱなしだ。

それでも気にせず、我関せずとばかりに、夏休みの宿題を膝に乗せて問題を解いていく。

けれど集中力は削がれるし彼らは気づいていないが、少しずつこっちに近づいてきていた。

なので私はとうとう我慢の限界を越えて、ついイラツとして手を出してしまった。

「静かにして」

そう言って、個性を発動させる。

すると宙を舞っていたノートが急に軌道を変えて、真っ直ぐこちらに飛んできた。

重力操作によって狙い通りの位置に誘導した私は、手元で解除して危なげなく掴まえる。

「なっ！ 何だテメエはっ！」

「きつ、キミは！ 斥流さん!?!」

苛めっ子のリーダーであるツンツン頭と、モジャモジャの気弱な少年が殆ど同時に声を出した。

「勉強の邪魔だし、近所迷惑」

「んだと！ いきなり現れて、好き放題に言いやがって！」

勢いで口走ったが、後半の近所迷惑に突っ込まれなくて良かった。

しかしホツとしたのもつかの間で、すぐに取り巻きが騒ぎ始める。

「そうだ！ そうだ！ かっちゃん強えんだぞ！」

「弱い女子が調子に乗るんじゃないよ！」

「何しろ俺は、オールマイト以上のトップヒーローになるんだからな！」

彼らは急な乱入者に最初は驚いたものの、すぐに苛めっ子グループが口々に反論してくる。

「えっ？ オールマイトを越える？」

木陰のベンチから一步も動かずに彼らの話を聞いていたが、呆れて物が言えなくなる。

けれど少しだけ考えて、思ったことを口に出した。

「でも、オールマイトは少年を苛めたりしない。」

それに困っている人は、必ず助ける」

つまり彼はナンバーワンヒーローにはなれたとしても、決してオールマイイトは越えられない。

この先に更生すれば可能性はあるが、今のままでは夢で終わってしまう。

「てめえっ！ さつきから言いたい放題言いやがって！」

こちらを威嚇するのが目的なのか、ゆっくり距離を詰めて両手から火花を散らす。

彼の個性が何なのかはまだ良くわからないが、きつと私を脅すして負けを認めなければ、直接攻撃するつもりだろう。

「じゃあ、正当防衛でいい？」

「上等だコラア！ ぶっ殺してやらあ！」

個性の使用は、原則として禁止されている。

下手をすれば子供でも警察署に連れて行かれて、そのまま捕まることもあるのだ。

なのでせめて非常事態ゆえの行動か、正当防衛を認めてもらうのが大前提である。

何にせよ彼は両手から火花を散らしながら、もはや交渉の余地なしに真正面から突っ込んできた。

私はこれで正当防衛が成立すると考えて、すぐに自分の個性を発動させた。

「ぐはっ!!？」

すると目の前の彼が何も無い地面で突然転倒し、苦しげな声を出す。

「てつ、テメエ！ 何しやがった！」

「貴方の重力を倍にした」

「重力を！ 倍に!?!」

先程苛められていた子が驚きの声をあげているが、いつの間にか解説役になつたらしい。

「さらに出力をあげれば、キミはヒキガエルのように潰れて死ぬ」

私は身動きが取れない苛めつ子に静かに語りかけると、彼はたちまち青い顔に変わる。

「かつ、かつちゃんが死ぬ?!」

しかし意外なことに、気弱な少年のほうも顔を青くして驚いていた。

さつきまで酷い扱いを受けていたのに、何で彼の心配をするのかわからない。

だがきつと、私にはわからないような事情があるのだろう。

ここは適当にわかつたフリをしておいて、話を先に進める。

「私たちが扱う個性は、それだけ危険。

今後は脅しとはいえ、無闇に暴力を振るうのは止めたほうがいい」

「くつ、くつ、このクソアマア?!」

警察のお世話になりたくなければと続けようとしたが、彼はまだまだ元気いっぱい

ようだ。

仕方ないので私は溜息を吐き、さらに出力を上げる。

「がっ、がはあああっ!!?」

これで彼はうつ伏せに地面に横たわったまま、指一本満足に動かせなくなる。

「やっ、止めて! 斥流せきりゅうさん!

かつちやんが死んじやうよ!」

「殺しはしない。少し脅かすだけ」

私もまだ警察に捕まりたくはないし、モジャモジャ頭の言うように殺すつもりはない。

なので頃合いを見計らい、もはや息も絶え絶えで全身から滝のような汗を流す苛めっ子にかけた個性を、完全に解除して自由にする。

「はあ……! はあ……!」

「貴方たち」

「はっ、はい!」

自力では起き上がれないほど消耗した彼ではなく、遠巻きに様子をうかがっていた少年たちに声をかける。

「彼を病院か自宅に連れてって」

「たつ、ただちに！」

「しつ、失礼しましたあ！」

苛めつ子グループはやたら機敏な動作で、動けない少年を担いで公園から逃げるように立ち去る。

私はそれを見届けて、ようやく静かになったと大きく息を吐く。

そして夏休みの宿題の続きを行おうと視線をそちらに向けると、外から声がかかる。

「あつ、あのー！」

声が聞こえた方角に顔を向けると、先程の気弱な少年が自分のすぐ目の前に立っていた。

「さつきは助けてくれて！　ありがとうございます！」

「このノートは、キミの？」

「はっ、はい！　そうです！」

そう言えば、彼のノートは私が所持していた。

今は無造作にベンチに置いてあるが、手書きのタイトルからヒーローに関して調べているようだ。

私は別に興味はないし中身を覗き見る趣味もなく、そのまま手渡しで返却しようとするが、ふとそこで動きを止める。

「ところで貴方は、……誰？」

「僕は緑谷！ みどりや 緑谷出久です！」

他人と関わるのが面倒で、クラスメイトの名前も殆ど覚えていない。

それでも緑谷出久 みどりやいずく と爆豪勝己は、色んな意味で有名人なのですぐに思い出す。

「思い出した。同じクラスの緑谷君」

そう言つて、今度こそ取り返したノートを彼に手渡す。

たちまち嬉しそうな表情に変わったことから、余程大切な物だったんだなと思う。

何にせよ面倒事は片付いたので、また勉強に戻ろうとすると、緑谷君が緊張しながら私を真っ直ぐに見つめてきた。

「あつ、あのー！」

「なつ、何？」

彼の表情は真剣そのものだった。

なので私もつい身構えてしまうが、そうなる理由に心当たりは全くない。

しばらく互いに見つめ合ったまま動きを止め、一分もしないうちに緑谷君が大きな声を出す。

「無個性でも！ ヒーローになれますか！」

一瞬何を言われたのか理解できず、私は首を傾げる。

けれどそう言えば彼は爆豪君や取り巻き連中に、無個性ではヒーローになれないと、散々馬鹿にされていたことを思い出す。

どう答えたものかと少し思案したのち、取りあえず率直な気持ちをはつきりと口にすることに決めた。

「緑谷君は、ヒーローになれる」

「えっ！ ほっ、本当ですか!？」

笑顔で喜んでいるが、短い言葉だけではヒーローになれる根拠を説明できないので、私なりに噛み砕いて緑谷君に伝えていく。

「緑谷君は優しい」

「はっ、はい!？」

急に何を言っているのかと思うかも知れないが、彼は苛めっ子に暴力を振るわなかった。

気弱なものもあるかも知れないけれど、普段の緑谷君のことを思い出すと、面倒見が良くて優しい人だとわかつている。

「個性が強いだけでは、ヒーローにはなれない。

心が邪悪なら、ヴィランになってしまう」

「そっ、それは確かに!」

彼は何やら小声でブツブツと呟きながら、考え込んでいるようだ。

若干挙動不審だが、私の話はちゃんと聞いてくれていると信じたい。

「だから緑谷君には、ヒーローの素質がある」

せきりゆう
「斥流さん！」

私は嬉しそうに答える彼の姿を見て、満足そうに頷いた。

「でも、慈善事業ではなくヒーローを職業にしたいなら、個性持ちが有利」

「そつ、そんなあ!？」

天国と地獄ではないが、今度は一気にテンションが下がる。

緑谷君は気持ちの浮き沈みが激しいものの、取りあえず先程よりは元気が出たらし

い。

これで今度こそ用事が済んだと思った矢先に、彼はまた話しかけてくる。

「あの、もう一つ聞きたいんだけど」

「何?」

気弱な少年だと思っていたのに意外とグイグイ来るが、今回は深刻な人生相談ではなく普通の会話なので、夏休みの宿題を片付けながらも問題はない。

「斥流さんもヒーローを目指してるんだよね?」

私は勉強の準備を進めながら、彼の質問に応じる。

「目指してないし、そもそも私は、ヒーローに対する興味も憧れも全くない」
「そつ、そうなんだ」

個性と体を鍛えているのは、自分の命を守るためだ。

市民を守るためなら自己犠牲が当たり前前の仕事など、就きたくはなかった。

「私は夏休みの宿題に戻る」

「あつ、うつ……うん」

ようやく本来の目的を果たせると静かに息を吐き、準備を終えて問題集に向き合う。

しばらく無言で解答を書き加えていると、再び緑谷君がおっかなびつくりと声をかけてくる。

「あつ、あの、斥流さん。隣に座っても、……いいかな？」

彼は私が腰かけているベンチを指さしていた。

夏休みの宿題が乗せてあるとはいえスペースには余裕があるので、問題ないと許可する。

「あつ、ありがとう」

彼はお礼を言い、緊張しながら腰を下ろす。

しかし、公園には他にもベンチや休める場所があるのにとはいはした。

けれど別の木陰を探するのは面倒だし、先程まで忙しく動き回っていた。

きつと疲れて、これ以上は歩きたくないのだろう。

「無個性の僕がヒーローになるには、どうしたらいいのかな？」

「質問ばかり」

「ごっつ、ごめんなさい！ でも、今までこんなことを相談できる人がいなくて！」

彼が今まで相談できる人が居なかったのと同じように、自分に積極的に話しかけてくるのは孤児院の家族以外では珍しかった。

「怒つてないし、構わない」

なので少し驚いただけで、別に怒つてはいない。

首を横に振って大丈夫だと告げる。

「家族や友人に相談は？」

「あつ、うん。……でも」

彼の欲する答えではなかったのか、もしくはヒーローを諦めるように言われたのかのどちらかだろう。

大勢に囲まれての矢継ぎ早の質問責めは面倒に感じるが、緑谷君だけなら勉強をしながらの片手間で済む。

なので私は問題集を解きながら、無難な答えを口に出す。

「だったら、筋トレを勧める。」

どんなヒーローも、何より体が資本」

「たつ、確かに！ ヒーロー活動に体力は必要不可欠だ！」

緑谷君が天啓を得たようにイキイキとした表情に変わっただけでなく、またもや小声でブツブツと呟き始めた。

私には良くわからないが、元気になったなら何よりだ。

「ありがとう！ 斥流さん！」

「どういたしまして」

凄く嬉しそうにお礼を言う緑谷君だが、やっぱり気持ち沈んでいるより明るいほうが一緒に居て安心すると思えた。

そして彼の悩みは取りあえずの解決はしたらしく、早速トレーニングメニューを考えると、ベンチから勢い良く立ち上がる。

そのまま急いで、何処かに走り去っていったのだった。

爆豪君の挑戦

まともにも話したことが滅多にないクラスメイトの相談に乗り、予定通りに夏休みの宿題を行うことができた。

そして次の日、私は日の出前の薄暗い町を、多くの荷物を持つて軽快に走る。

早朝のジョギングは昔からの日課で苦ではなく、逆にやらないと落ち着かない。

なので私は院長先生に紹介してもらった新聞配達のバイトを行い、自転車に乗らずに雨の日も風の日も普通に走って届けている。

今日もいつも通りに指定のポストに荷物を入れつつ、ペース配分に気を配りながら指定の時間までに全ての家を回れるように気をつけていた。

だが曲がり角で意外な人物とばったり出会い、少しだけ足を止める。

「緑谷君？」
みどりや

「ええっ！ 斥流さん?!
せきりゅう こんな朝早くに何やつてるの?!」

彼はジャージ姿で、朝のジョギングをしている途中のようだ。

緑谷君は驚きのあまり足を止めており、心底意外そうな顔をしている。

「新聞配達のバイト」

「そつ、そつか」

背負っている荷物を見せると、緑谷君は納得してくれたようだ。

私はバイトの途中なので、やることがあるからと断りを入れて再び走り出す。

「ちよつ！ ちよつと待って！ まだ、聞きたいことが！」

「待たない。仕事中、あとにして」

彼は慌てて呼び止めるが、自分は新聞配達の途中なので振り向かず走り続ける。

「質問があるなら、走りながらでお願い」

「……っ！ わかった！」

何故かは知らないが、凄くやる気になっている緑谷君が後ろに続く。

私はいつもと変わらずに、マイペースで新聞配達を行っていく。

「斥流さんは！ 自転車は使わないの！」

「他の人は使ってる。でも、私は走ったほうがいい」

自転車だと百キロ以上の私を支えきれないだろうし、もし乗れても耐用年数がかなり

削られることになる。

それに個性と体を鍛えるには、普通に走ったほうが効率が良い。

けれど自分の体重が百キロ以上あることは、個性によって強制されたデメリットで

通っている。

実は無断使用による修行の一貫なのは、緑谷君に教える必要はない。

誰にも話す気はないので、お口チャックで黙っておいた。

「いつから！ 走ってる！ のっ！」

「新聞配達のパイトは中学からで、早朝ジョギングは四歳」

「よっ、四歳!?!」

思いつきで驚いているが、私は走行ペースを維持してポストに新聞を入れる。

この時点で緑谷君はかなり疲れているようだが、配達時間は限られているので止まる気はなかった。

そのまましばらく指定のルートを走り続けていると、緑谷君は滝のような汗を流して息も絶え絶えになり、とうとう付いて行けなくなつて脱落してしまう。

流石に何も言わずに置いていくのも悪いと思つた私は、少しだけ後ろを向いて口を開く。

「緑谷君。またね」

「ぜえっ！ はあっ！ まっ、また！ あっ明日！ 斥流さん！」

自分は中学の登校日にクラスで再会するつもりで、またと言つたのだ。

別に明日も一緒に走ろうとは口にしておらず、彼が同行しなくてもいつも通りに新聞配達をするだけである。

けれど緑谷君は壁に寄りかかるようにして、全身汗だくで息を切らしていても、何処か満足そうだった。

私は重箱の隅をつつくように訂正するのも悪いと考え、気にせず指定区域内の家々を回るのだった。

新聞配達中に緑谷君と会ってから、何故か一緒に走るようになった。

私はいつも通りにジョギングを続けるだけだが、彼は毎度息も絶え絶えになつていく。

しかし真面目に体力作りをしているようで、夏休みの後半に差しかかると最後まで着いて来られるようになった。

個人的にはまさか緑谷君がここまで早く走り切れるとは思わず、とんでもない成長速度だと驚く。

「緑谷君は、ヒーローの才能がある」

「そつ、そうかな？ でも、セキリゆう斥流さんに褒められると嬉しいよ！」

ポストに最後の朝刊を投函した私は、彼の才能を率直に褒める。

嘘をつく理由もないし、思ったことをそのままストレートに告げただけだ。

ただそれだけのことなのに、緑谷君はとても嬉しそうだつた。

「これでいつでも新聞配達のバイトができる」

「いつ、いや、新聞配達は別にいいかな!」

緑谷君が急にガツクリと肩を落としたので、何故気落ちしたのかわからず、少々困惑する。

しかし私が回答を導き出す前に、聞き覚えのある大声が早朝の市内に響き渡つた。

「見つけたぞ! クソアマ!」

私と緑谷君は、突然の大声が聞こえた方向に顔を向ける。

すると夏休みが始まって間もない頃に公園で会つた、ツンツン頭の爆豪君ばくごうがそこに居た。

「私はクソアマじゃない。斥流陰子せきりゆういんこ」

「うるせえ! テメエなんかクソアマで十分だ!」

すぐに訂正したのだが、全く話を聞いてくれない。

それどころか、彼はこつちに真つ直ぐズンズン歩きながら憤慨していた。

「テメエ! 何で公園に来やがらねえんだつ!」

何故そんなことを尋ねるのかさっぱりわからないが、私は頭を働かせて答えを出す。

「宿題が終わるまで、外出禁止になつた」

孤児院の子供たちが夏休み中に課題をこなさずに遊び呆けていたことで、院長先生の堪忍袋の緒が切れた。

表情は穏やかだったが、宿題が終わるまでは家で騒ぐのと不要不急の外出以外は禁止という、無慈悲な通達を出した。

多くの子供たちが泣き喚いたが、手心を加えることなく現在も継続中だ。

「ああん！　じゃあ teme は、まだ宿題終わってないのか！」
「とつくに終わってる」

私としては孤児院が静かなら、わざわざ炎天下に外出をする必要もない。

宿題が一通り終わったあとは、バレないように自室か裏庭で個性を使用しての自主トレニングの毎日である。

「だったら来いや！　公園！」

相変わらず、わけがわからない理由で怒りをぶつけてくる爆豪君ばくろうに、ただただ困惑する。

正直私だけではどうしようもないため、助けを求めるように緑谷君に顔を向ける。

「かつちゃんは斥流せきりゅうさんと勝負して、今度こそ勝ちたいんだと思うよ！」

彼は狼狽えながらも答えを口にしてくれたので、それを聞いた私はなるほど頷く。

確かに自分は、爆豪君を一度負かしている。

先程の発言から、きつと公園で私に来るのを待っていたのだろう。

貴重な長期休暇を無駄に浪費する愚かな行いは、憐れみを感じるには十分であった。

「勝手に俺を！ 憐れんでんじや！ ねええええっ!!」

どうやら私はまた、彼の我慢の限界を越えてしまったようだ。

爆豪君は両手から火花を散らしながら、またもや真正面から突っ込んでくる。

「正当防衛。致し方なし」

相変わらずの猪突猛進に、私は個性を発動して動きを止めようとする。

だが、その瞬間に爆豪君は路上駐車している車の影に入り、こちらの視界から逃れた。

「……やられた」

「テメエの個性は！ 視界に入ってねえと効果がねえようだな！」

私との戦闘はこれで二度目だ。

しかし個性も殆ど使ったことはないし、役所の届け出にも詳細までは記入していない。
い。

それにも関わらず、爆豪君は見事に弱点を突いてきた。

「凄い。緑谷君みたい」

「テメエ！ 俺が無個性のデクと、同じわけねえだろうが！」

そうやって彼は爆破による目眩ましを使いつつ、障害物の影から影に移動して、私の

すぐ近くまで接近する。

「くらいやがれ！」

私としては卓越した戦闘センスを褒めたつもりなのに、失敗したようだ。

隙を突いて殴りかかってくる彼を見つめながら、大きな溜息を吐いた。

「でもまだ、詰めが甘い」

「何イっ!？」

直前まで迫った爆豪君の体が急に沈み込んだことで、彼は慌てて受け身を取ろうと両手を地面に突き出す。

「これで、終わり」

もはや隠れることができないう爆豪君に向けて、私は改めて重力操作の個性を発動する。

すると彼の重量がさらに重くなり、勢い良く地面に叩きつけられた。

「がはっ！ てっ、……テメエ！」

一応受け身はとったようだが、それでもう彼は起き上がることはできない。

その様子を一部始終目撃した緑谷君が何かに気づいたように、声をあげる。

「そっ、そうか！」

斥流せきりゅうさんは事前に、目の前の空間の重力を操作していたんだ！

だから、近づいたかっちゃんを転倒したのか！」
私が重力を操作できるのは、人や物だけでない。

視界内なら空間も効果対象に指定できることを、完全に見抜かれたようだ。

(けれど、空間の重力操作は問題がある)

具体的に何処から何処まで操作したのかが、非常にわかりにくいのだ。

それに広範囲を指定すると、無関係な人や市街地への被害が危ぶまれるため、滅多に使うことはない。

(それに、正面以外は罨を張れない)

重力操作は、視界に入っていないと駄目だ。

なので、それ以外の角度から攻撃されたら効果がないのだ。

とにかく緑谷君が気づいたということは、爆豪君にも個性の弱点を知られたと考えたほうがいいだろう。

「ちっ、ちくしようがア！」

しかし体が重くて動けないのに、未だに戦意を失っていないのは素直に凄い。

「私の勝ち」

「まだ！ 負けてねえっ！」

そうは言ってもこれ以上出力を上げると、きつと爆豪君は耐えられない。

夏休み初めの公園のように、一人ではまともに歩けなくなるだろう。

彼は人の話を聞かずに襲いかかってくる悪人ではあるが、暴力の限りを尽くすヴィランではない。

私も正当防衛が過剰すぎて、警察のお世話にはなりたくなかった。

それに歩けなくなった爆豪君を抱えて彼の家まで送りたくはないので、どうしたものかと頭を悩ませる。

「爆豪君は負けてない。今回は引き分け」

「どういう！ 意味だ！」

重力に押し潰されながら必死に声を出す彼を見下ろしながら、私は淡々と説きを説明していく。

「私は逃げも隠れもしない。勝てるまで何度でも挑んでくればいい」

今回は引き分けということで潔く手を引いて、別の機会にまた挑戦してねということだ。

「当たり前だ！ 俺が負けるわけねえだろ！

だが、わかった！ 今日はいもう止めにしてやる！」

「そう、ありがとう」

どうやらわかってくれたらしいので、私は個性を解除して彼を自由にする。

悔しそうな顔をして立ち上がったが不意打ち狙いで襲いかかって来ないだけ、ヴィランよりはマシだと思った。

けれどここであることに気づいた私は、爆豪君に声をかける。

「私は^{せきりゆういんこ}斥流陰子」

「そんなもん、とつくに知ってるわ！ クソアマあ！」

知っててもクソアマ呼ばわりはどうかと思うので、私も引き下がるつもりはない。

「名前で呼ばないと、今後の再戦を拒否する」

「はあ!? 何でそんなクソ面倒なことを！」

私はそれ以上何も言わずに、起き上がった彼の顔を真っ直ぐに見つめる。

するとやがて根負けしたのか、露骨に視線をそらして口を開く。

「ちっ！ わあつたよ！ ^{せきりゆう}斥流だな！」

「それでいい」

「たくっ！ 調子が狂う女だぜ！」

それでも再戦を拒否されるよりはマシなのか、渋々ながら名前呼びを承諾した。

ここで私は完全に蚊帳の外になっていた緑谷君の存在を思い出し、そつちに顔を向ける。

「緑谷君も戦う？」

「ええっ!? ぼっ、僕!？」

「戦いたがつてるように見えた」

さつきは私の個性について真面目に解説していたし自分はヒーローではないが、余程そういうのが好きなんだなと思った。

「無個性のデクが teme! ……斥流に勝てるわけねえだろうが!」

爆豪君はそう言つて一蹴すると、緑谷君は怯えの混じった表情でうつむいた。

しかし私は溜息を吐き、ツンツン頭の彼を真つ直ぐに見つめる。

「爆豪君は、一人でヒーローになるつもり?」

「当たり前だ! 俺は誰よりも強いヒーローになる!」

弱いモブなんか邪魔なだけだ!」

自信満々に言い切れるのは凄いなと思うが、私は首を振つて否定する。

「貴方たちが憧れるオールマイトも、一人では戦えないの?」

「何だとお!」

爆豪君の威圧に怯むことなく、私は続きを話していく。

「個人で活動している人も、他のヒーローに協力を頼んだりする。

サイドキックやサポートも必要だし、一人での活動は非効率的でオススメしない」

「……………うぐっ!」

ヒーローには興味ないが、このぐらい社会の常識だ。

知らないとちよつと恥ずかしい思いをするので、一応覚えておいて良かった。

「ヒーローを目指すなら、共闘に慣れておいて損はない。

将来、きつと役に立つ」

しかし、何で私は二人に助言をしているのだろうと考えてしまう。

強いて言えば、爆豪君のあまりの自尊心の高さに呆れたということだろう。

だがそんな彼もヒーローになろうと頑張っているし、もしも試験に落ちてヴィランへの転落人生になったら大変だ。

なのでここは放つて置かず、余計なお世話を焼いておくほうが良いと判断した。

「ちっ！ やりたくねえが仕方ねえ！

デクウ！ 俺の邪魔だけはするんじゃねえぞ！」

「えっ？ ええっ！ うっ、うん！ わかったよ！ かっちゃん！」

緑谷君は驚きつつも少しだけ嬉しそうだが、爆豪君は見るからに嫌々である。

けれど終わり良ければ全て良しと言うし、今はまだ連携のレの字もないが悪くない結果だと納得しておく。

「そんじゃ、二回戦だ！ いくぜ！ 斥流！」

「いつ、いや！ でも今日は戦わないんじゃ！」

今日はもう終わりだと言っていたのに、何故かは知らないが爆豪君のやる気が全回復してしまつたようだ。

緑谷君が焦つた顔でこちらをチラチラ見てくるので、私は安心させるように微笑む。

「大丈夫。どうせすぐに終わる」

「言つてろ！ 吠え面をかかせてやる！」

それに強いヒーローがデビューしたほうが、日本の治安が良くなつて私が面倒に巻き込まれることも減る。

未来はまだわからないが、緑谷君のほうも実際にはやる気十分なのであつた。

あとは警察のお世話にならない程度に個性を抑制して戦えるかだが、そろそろ日が登つて周辺住民が起きてくる時間だ。

だからこそ速攻で二人を戦闘不能にして一目散に逃げるために、私は内心で気合を入れて迎え撃つのだつた。

斥流陰子 v s マスキュラー

色々あつて夏休み中に、緑谷君だけでなく爆豪君とも仲良くなった。

拳で殴り合う仲ではあるが、別に夕日をバックに河原で横になって互いの健闘を称え合うわけではない。

私はラスボス的な存在であり、緑谷君と爆豪君が協力して攻略するのだ。

最初は連携を取るどころか反発して足の引つ張り合いをしていたので、彼らがどれだけ弱いのかを徹底的に思い知らせた。

結果、お山の大将で有頂天になっていた彼のチョモランマ並の自尊心は、バツキバキにへし折れることになる。

おかげで一人で戦っても絶対に勝てないと理解してくれたようで、渋々ながら緑谷君と共闘するようになった。

あとは回数を重ねればもう少し連携がマシになるだろうが、それでも勝ちを譲るつもりはない。

何にせよ長期休みが終わっても相変わらず私に挑んでくるので、よくも心が折れずに挑戦できるものだと感じる。

それはそれとして強きの秘訣を聞かれ、毎朝のジョギングだと答えたなら爆豪君も付き合うようになった。

緑谷君もそうだが、二人のヒーローへの憧れは筋金入りのようだ。

なので最近、アルバイトを終えたあとの早朝の公園で一戦交えるのが恒例の流れになっっている。

今のところは無敗であつても、二人の成長速度は半端ではない。

油断すると負けそうなのでヒヤヒヤするが、将来を考えればヒーローが自分より強いほうが日本の治安向上には良いはずだ。

けれど彼らの性格から手加減やわざと負けるのは好ましくないため、周囲への被害が出ない範囲で真面目に戦うのだった。

やがて二学期が始まって少し経ち、商店街の福引で一泊二日の温泉旅行が当たった。

自分はいくじ運とは無縁だと思っていたが、ここに来てようやく運が向いてきたようだ。

ただし一名様ご招待だったので、最初は院長先生に日頃の感謝を込めて譲渡しようとした。

けれどやんわりとお断りされて、結局引き当てた私が行くことになる。

お土産に期待していると微笑みながら言われたら、素直に引き下がるしかない。

とにかく私は予定を開けて電車とバスで他県の温泉旅館に向かい、現地に到着したの
で施設を外から眺める。

商店街の福引にそこまで期待はしていなかったが、小さくでもなかなか趣おもむきのある旅館のようだ。

「温泉旅館に泊まるのは初。

素人意見だけど、見た目は良し」

修学旅行では常に集団行動で、大きなホテルに泊まって温泉もなかった。

だが今回は和風旅館で違うため、少しだけワクワクしつつ正面玄関の暖簾をくぐり、受付で手続きを済ませようとする。

「いらつしやいませ。お嬢さん、ご両親かお友達は一緒じゃないの？」

自分は見た目こそ身長百二十センチの小学生低学年だが、これでも中学一年生である。

「電話で予約した、斥流せきりゅう」

「えっ？ 確かにご予約を承ってるけど」

女将さんに何処かと心配されたけれど、宿泊券だけでなく学生証を見せて説得した。

それだけでは足りず、念のために実家の孤児院に電話で確認を行い、何とか泊めてく

れることになる。

部屋に案内してもらったあとは、何かと申し訳なさそうな顔をする女将さんに、勘違いされるのは慣れているので気にしないでと言っておく。

とにかく荷物を置いて身軽になった私は、貴重品を持って観光地の散策に出かける。院長先生にお土産を期待していると言われたし、孤児院の皆の分も買って帰られないといけないのだ。

旅館の外に出て観光地を適当にぶらつき、辺りに立ち並んでいる土産物屋を覗き見る。

地元とは明らかに違う景色を眺めながら散策していると、何だか感慨深くなってくる。

「緑谷君と爆豪君のお土産は」

何気なく口に出したが、二人は友達と言えるかは微妙な関係だった。

強敵と書いて友と呼ぶなら、そう言えなくもない。

緑谷君はともかく爆豪君とまで親しいかと言うと首を傾げる。

なのでしばらく二人のお土産を買うべきか買わざるべきか悩みつつ、観光地をぶらついていた。

すると何処からともなく、悲鳴のような声が聞こえてきた。

「たっ、助けてくれえー!」

「ヴィランだ! 逃げろおお!!!」

けれどこれは私にしか聞こえていないようで、周りの人々は誰も気づいていない。

「五感が常人以上なのも、考えもの」

過酷な重力修行を長年続けてきたせいで、いつの間にか常人以上に鍛えられていた。

身体能力は加重による抑制が行えるが、感覚器官は常時フルパワーを発揮しているのだ。

さらに肉體強度も超重力下でも平然としていられるぐらい頑強で、怪我や病気とは無縁になった。

だが自分なりに嚴重に封印しても外部に漏れ出してしまうモノがあるのは、もうどうしようもないと受け入れるしかない。

今重要なのは、何処からともなく聞こえた悲鳴への対処だ。

私は足を止めてどうしたものかと考える。

オールマイトという平和の象徴が存在するおかげで、日本は他国よりもヴィランによる犯罪率がかなり低い。

けれど決してゼロではないため、旅先で厄介事に巻き込まれる不運な少女も居るようだ。

それでも、わざわざ見えている地雷を踏むことはない。

自分はヒーローではない一般人なので、少しでも早く安全な場所に避難するべきだ。

やがて結論が出て、私は来た道を引き返えそうと背を向ける。

「でも、気になる」

実は今回のように、知らない土地で事件や事故に巻き込まれることは珍しいことではない。

昔から重力操作の修行で、空を自由に飛んであちこち出歩いていたのだ。

けれどその場合は決して矢面に立たずに、物陰に身を潜めて様子を伺ってこつそり人助けをしていたのだ。

「やっぱり、見て見ぬ振りはできない」

たとえ凶悪なヴィランだとしても、隠れていれば安全だと言いつ聞かせる。

旅館に引き返すのではなく、絶え間なく聞こえてくる悲鳴に近づくように歩き始める。

だがここで、予想外のことが起きた。

何故か空から筋肉ムキムキの大男が降ってきて、私の目の前に地面を陥没させる勢いで着地したのだ。

「この町に強え奴はいねえのかよ！　もっと血を見せろよおおお!!!」

彼は衝撃でアスファルトの破片を撒き散らしながらも、全く動じずに大声で叫んでいた。

正直意味がわからないし、こんな形で表舞台に立たされるのは初めてである。

「目の前のガキを殺せば、少しは晴れるか？」

やがて叫ぶことで冷静になったのか、彼はこちらに顔を向ける。

周りの人たちは悲鳴をあげたり逃げようように指示するが、私はその場から一步も動かなかった。

(うゝむ、全然怖くない)

ここまで凶悪で強そうなヴィランと遭遇するのは初めだ。

しかも自分が人前に出るだけでなく、被害者になるのも初である。

けれど何故はわからないが、これっぽっちも恐怖を感じずに足も震えない。

(私のほうが強くない?)

見た目では完全に負けてるし、何の確証もない。

けれど生物としての本能が、目の前のヴィランは自分よりも格下だと訴えてくる。

だが少しずつこちらに近づいてくる強面の大男を前にして、ヒーローでもないのに個性を使って人を傷つけるのは不味いことを思い出す。

人が大勢見ていると隠し通せないし、やり過ぎて正当防衛の主張が通らなかつたら警

察に捕まってしまう。

下手をすれば法律で罰せられて院長先生に迷惑をかけてしまうので、ここは逃げたほうが得策だと判断する。

反射的に一步後ずさると、何処からともなく勇ましい声が聞こえてきた。

「そこまでだ！ ヴイラン！」

「その子を離しなさい！ ウォーターホースが相手よ！」

急ぎ駆けつけた二人のヒーローは、私を庇うように大男との間に立った。

それだけではく大声をあげて、ヴィランの注意を引き付けてくれる。

なので彼は、すぐに自分への興味を失ったようだ。

「来たか！ ヒーロー！ 待ってたぜえ！」

ヴィランは嬉しそうな顔で個性を使い、無数の筋繊維を身にまとってヒーローに襲いかかる。

「ヒーローだ！ ウォーターホースが来てくれたんだ！」

「良かった！ 私たち、助かったのね！」

そのまま自分は蚊帳の外で、ヒーローとヴィランの激しい戦いが始まった。

別に怖くはないが、個性の無断使用で警察のお世話になるのは嫌だ。

適当な物陰に身を潜めて、こっそりと顔を覗かせて彼らの様子を窺う。

(あれ? もしかして、負ける?)

だが状況を見る限り、ヒーローが不利なようだ。

筋肉ムキムキの大男は増強系の個性で、とんでもないパワーである。

しかも筋繊維を増やすほどに威力が増していき、ウォーターホース水を使った連携で辛うじて凌いでいるが、明らかに劣勢だった。

もしもここでヒーローが負けたら誰も止められずに、ヴィランによる一方的な破壊が始まる。

そうなる温泉街は壊滅して、怪我人や死傷者が大勢出てしまう。

(自分だけなら逃げられるけど)

私はヒーローにはならないし、人々を守るために命をかける気もない。

それにあのヴィランは自分よりも弱そうに見えるが、過去に遭遇した中でも強い部類なのは間違いない。

こつそり個性で助けようとしても視界を確保しないとイケないし、周囲の人々の動きとは真逆の行動をするため、私が使ったと高確率でバレる。

ならばやはり手を貸さずに逃げるべきかと考えていると、何故か胸の奥に熱いものがこみ上げてきた。

おまけに自分でも感情の制御ができず、気づけば勝手に立ち上がって物陰から姿を現

していた。

私は堂々とした立ち姿で大通りの中央に歩み出て、倒れたヒーローにトドメを刺そうとしているヴィランに大声で呼びかける。

「待って！」

突然の乱入者に驚いたのは、ヴィランだけではなかった。

傷つき倒れかけている二人のヒーローと、絶望の表情を浮かべる周囲の大勢の人々もだ。

「何だあ？ さっきのガキじゃねえか。わざわざ殺されにきたのか？」

「駄目だ！ 逃げなさい！」

「私たちが時間を稼いでいるうちに！ 早く！ 遠くへ！」

ヒーローたちが大声で呼びかけているが、私も何でこんなことをしているかわからない。
い。

今自分を動かしているのは、何とても彼らを助けなければという強い思いだ。

「安心しろ！ ヒーローをぶつ殺したら、すぐにお前も殺してやるからよ！」

それまでそこで、大人しく待ってな！」

ヴィランはそう言って両腕をさらに巨大化して振り上げ、傷ついたヒーローにトドメを刺そうと拳で殴りつける。

だがそれより先に個性を発動し、ウォーターホースの二人を横に落とした。

「馬鹿な！ あの怪我で避けただどっ!？」

彼には満身創痍のヒーローが、素早く真横に飛んで避けたように見えたはずだ。

しかし現実的に考えて、それはあまりにも不自然だった。

全力の一撃が放たれたあとには巨大なクレータができ、ヴィランはしばらく眺めていたが、やがて私に視線を向ける。

「ガキイ！ お前の仕業だな！」

私は何も語らずに筋肉で体を覆っているヴィランを、怯まずに真っ直ぐに睨みつける。

「はははっ！ いいぞ！ 面白くなってきやがった！」

何が面白いのか、さっぱりわからない。

しかしヴィランは、空を見上げながら大笑いをしている。

「ガキイ！ ヒーロー名は……まだないか！ だったら、お前の名前を教えろ！」

「えっ!？ ええと、斥流陰子^{せきりゆういんこ}！」

まさかヴィランに名前を聞かれるとは、予想していなかった。

なので、つい条件反射で馬鹿正直に答えてしまう。

「そうか！ お前はガキだが特別に、遊びでなく本気で殺してやるぜ！」

きつとそれが強者との戦いを渴望する、彼なりの流儀なのだろう。

しかし私としては理解できないし、巻き込まれただけの身としては全く嬉しくなかった。

「私は殺されない！ 逆に貴方を刑務所にぶち込む！」

平和の象徴！ オールマイトのように！」

「やってみろよ！ ガキイ！」

自信満々に言い切るヴィランを目標に定め、私は個性を発動させた。

すると不敵な笑みを浮かべていた巨大な筋肉男が片膝をつき、驚愕の表情へと変わる。

「何だ?! 一体何が起きてやがる?!」

「私の個性は、重力を操る」

これ以上の説明は不要とばかりに、さらに出力を上げる。

もはや両手足を地面につけて体を支えるだけでは持ち堪えられず、重さに耐えかねたアスファルトがヒビ割れ、ヴィランの巨体が大地に沈んでいく。

「うおおおおっ?!」

彼の個性は増強系で、筋繊維を身にまとうほどパワーが上がる。

だが同時に重量も増していくため、重力を操る個性との相性は良かった。

「今ので理解した。やはり貴方は、私より弱い」

「ガキが！ この俺を舐めるなよ！」

彼は大声で叫んで脱出を図るが、無駄な抵抗だ。

ろくに動けないのに問題なく喋れるのは凄いが、ヴィランは自らの重量に耐えかねて地面に沈み続けている。

しかし私はここで、自らの失態に気づく。

「しまった！」

増強系の個性持ちに近づくのは危険だと思い、遠くから重力操作で倒そうとしたのは失敗だった。

ヴィランの体は地面に深く沈み、視界から外れたことで私の力も解除される。

しかし嘆いたところで手遅れで、再び動けるようになった大男が力の限り叫んだ。

「おらあああつ!!!」

個性が解除されて体が軽くなった隙を突いて、巨大な拳を足元に勢い良く叩き込む。

クレーターができるだけでなく、周囲には大量の砂埃が巻き上げられて完全にヴィランを見失った。

私は焦りながらも、注意深く辺りを見回す。

「一体、何処に！」

すると突然、背後から凄まじい衝撃を受けて呆気なく吹き飛ばされた。

ギリギリで振り向いてガードしたが、私の小さな体が枯れ葉のように宙を舞う。

「はっ！ どうやら視界に入らなければ、個性は発動しないようだな！」

勝ち誇るヴィランの言葉を聞きながら、何だか最近は自分の個性がどんどん通用しなくなってきたと思いつつ、割りと余裕のある空中浮遊のあとに自身の重力を操る。

そのまま危なげなく地面に降り立ち、再び大男と対峙した。

「ほうっ！ 今の一撃を耐えるかっ！ やるじゃねえか！」

本当に心底嬉しそうな顔をするが、攻撃を受けてゴム毬のようにふっ飛ばされたのだ。

私としてはいくらダメージがなくても、かなり驚いて衝撃を感じた直後は正直生きた心地がしなかった。

「攻撃が来る直前に、自分を落としただけ」

接近に気づいて咄嗟に両手でガードしたことで、相手の拳に触れた箇所が破れてしまった。

剥き出しになった素肌は無傷ではあったが、外行き用の高い服は予備が殆どないのだ
思わぬ出費が発生して顔をしかめていると、ヴィランが何故か大笑いし始める。

「お前！ 面白い奴だな！ ヴィランにならないか！」

「ヒーローは好きじゃないけど、ヴィランはもっと嫌い」

「おっと、嫌われちゃったか！ 残念だぜ！」

先程の砂塵はまだ晴れておらず、ヴィランの姿はまだはつきりとしない。

しかし姿を消したあとに殆ど音もなく背後を取られたことから、かなりのスピードで動けることもわかった。

(この際、自身の加重を解く?)

自分にかけている加重を解いたことは殆どなく、特にここ最近はずっと封印状態だ。

正直、有り余るパワーを制御できる自信はなく、周辺被害を抑えて戦えるとはとても思えない。

「どうした？ 来ないのか？」

「今、考え中！」

ヴィラン相手に会話が通じるとは思わないが、自分はいつもマイペースである。

そして敵は待つてくれており、私はやがて結論を出した。

「被害が増えるけど、やむを得ない」

私は目の前の空間の重力を片っ端から倍増し、未だに周囲に立ち込める砂塵を強引にかき消していく。

すぐ近くは避難して人が居ないのが幸いだ、何故かヴィランの姿もなかった。

「あれ？」

おかしいと思って辺りを見回していると、一度は確認したはずの背後から声が聞こえてきた。

「こつちだ！」

どうやら一度調べたところは二度は調べないと考えて、こつそり身を潜めていたようだ。

私が慌てて振り返ると、相手は既に筋肉の鎧を展開していた。

また殴られる前に避けなければと、私は横に落ちるために個性を発動させる。

だがヴィランはこちらの行動を読んでいたのか、両手で逃げ場を塞ぐ。

「もう逃げられねえぞ！ さあ！ 血を見せろ！」

両側から物凄い力で、体を締めつけられている。

封印状態でもプロのアスリートぐらいの力が出るが、ヴィランはそれよりも遥かに強大だ。

しかし私が痛がりもせず平然としているため、大男は思いつきり動揺する。

「どういうことだ！ お前！ まさか個性を二つ持つてんのか?！」

「違う。私の個性は重力操作」

顔を真っ赤にして全力で締めつけているヴィランが尋ねてきた。

別に隠すことないので、正直に答える。

「では！ 何故だ！」

「……秘密」

個性の無断使用は犯罪になる場合があるため、重力修行を教えたくはない。たとえデメリットだと周りが勘違いしてくれていても、その点について探られるのは困るのだ。

「ん？ この重さ？ まさかお前?!」

「女の子に、体重の話をしちや駄目」

ヴィランが、表に出したくない話題を口に出そうとした。

私の体重は個性のせいで通しているが、いつ何時にバレないとも限らない。なので磁石が反発するように重力を操作し、強引に拘束から逃れる。

「このガキ!」

今度は服が腕だけでなく、全身がビリビリに破れてしまった。

もはや修繕もできずに買い替えるしかなくなり、私は大きな溜息を吐く。だがこうなったら以上、もう失っても惜しくはない。

私は地面を蹴って空に向かって落ちながら、ヴィランに大声で呼びかけた。

「勝負！」

十分な高度に達したあと落下する方向を調整して蹴りの姿勢になると、私の意図がわかったのが嬉しそうな顔で大声を出す。

「真つ向勝負は、嫌いじゃないぜ！ 受けて立ってやるぜ！」
やっぱり相手は戦闘狂のようだ。

けれど脳筋の自分と相性が良いような気がして、少しだけ悲しくなった。

「重力加速！ 二倍！」

「俺の全力で！ ぶっ潰す!!!」

重力加速の原理としては落下の加速による蹴り技で、二倍はちゃんと測ったわけではないが大体2Gだ。

そして今の彼は本気状態のため、筋繊維を大量に生みだして身にまとい、逃げずに迎え撃つつもりである。

おかげで十分な距離と加速を得られたが、周囲の空気が圧縮されてプラズマ化してしまふ。

現実の大気圏突入ほど速くはないだろうし、重力操作の個性が周りに影響を及ぼしているのだ。

けれど詳しい理屈は不明でも、結果的に足先が燃え始めている。

それでも火傷はしないし、耐えられているので問題はない。

だが、衣服まで灰になれば社会的な死は避けられないため、内心で早まったかもと冷や汗をかく。

その直後にヴィランの拳と自分の素足が激突し、ほんの少しだけ拮抗する。

「ぐあああああ!!」

ヴィランの拳が衝撃を受け切れずに、全身の骨が砕け、血管が裂けたり弾けて血が流れる。

思った以上のグロさに若干引いたが、吐くのは我慢して個性を解除せずに大男の固い守りを突破する。

直後に、強面の顔に蹴りが当たって派手に吹き飛ばす。

さらには地面に衝撃が伝わり、隕石が落下したかのような巨大なクレーターが出来上がった。

辺りに突風が吹き荒れて、盛大に土砂が舞う。

私は重力を逆転させて少しだけ離れた位置に着地し、燃えている服を手で払って消そうとする。

しかしどうにも上手くいかず、ふと怪我をしたヒーローのことを思い出して、彼らの元に走って行く。

「ウォーターホース！ お願い！ 火を消して！」

全身火だるまではないが、服のあちこちが発火していて、下半身は完全に素足が丸見えである。

幸い下着は無事だったので社会的な死は避けられたと思いたいものの、ウォーターホースはすぐに気づいて消火をしてくれた。

「全く！ 無茶をする！」

「そうよ！ まだ幼い女の子なのに！ 火傷が残ったらどうするの！」

水を出せるヒーローが居てくれて助かった。

やがて服についた火が完全に消えて、ようやく一安心した。

殆ど燃えてしまったが辛うじて全裸だけは免れたし、自分は頑丈なので火傷の心配もない。

「ありがとう」

頭を下げてお礼を言ったあとにヴィランの方を向くと、砂埃が消えて巨大なクレーターがしつかりと見えていた。

中心には気を失った大男が横たわっていたが、肥大した筋繊維が霧散するように消えていく。

微かに息はあるが全身傷だらけで、地面に仰向けになったまま動かない。

しかしヴィランは狡猾と聞くし、気絶したフリをしているのかどうかを確認するべき

だ。

私はクレーターの中心に横たわっている大男に近づいて、靴は靴下ごと燃えてしまったので素足でゲシゲシと蹴ってみる。

「気絶、確認」

左目の辺りがえぐれて出血しているが、そこはきつと私の蹴りが当たった箇所だ。

しかし命に別条はないし相手がヴィランだからか、申し訳ないという気持ちはこれっぽっちも湧いてこない。

結果的に周囲にかなりの被害が出てしまったが、取りあえず勝利した。だが周りで様子を伺っている人たちは、まだ不安そうな顔をしていた。

「勝利ー」

なので私は右手を天高く掲げて、ヴィランに勝ったことをアピールする。

孤児院の子供たちはヒーロー番組が好きで、ナンバーワンヒーローであるオールマイトが特に人気があった。

私はこれっぽっちも興味はないが、いつの間にか覚えていた彼の勝利のポーズだ。

しばらくは無反応で失敗したかなと思いつつも、やがてこちらの意図が伝わったのか、周りから喜びの声が聞こえてくる。

「うおおおっ！ やったぞおおおー！」

「嬢ちゃん、凄えよ！　まるでオールマイトみたいだ！」

「可愛いし強いし！　ヒーローデビューしたら、絶対推すわ！」

それ以外にも様々な声が聞こえてくるが、危機は去ったので良しである。

次に私は先程消火をしてくれて、怪我をしてまともに動けないウォーターホースの元に向かう。

そのまま彼らの目の前で足を止めると、申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

「すぐに助けなくて、ごめん」

謝罪された二人は、少しの間啞然とした表情を浮かべていた。

けれどすぐに全身傷だらけで痛そうなのに、優しく笑いかけてくる。

「子供を守るのは大人の役目で、ヒーローならなおさらだ」

「そうよ。貴女が気にすることじゃないわ。」

私たちの代わりにヴィランを倒してくれたし、逆に感謝したいぐらいよ」

彼らにありがとうと返されて、私は内心で頑張つて戦つて良かったと嬉しくなる。

けれどそれを言うのと恥ずかしいので口には出さずに、少しだけ照れながら視線をそらす。

次に、それとは別のお願いをする。

「じゃあ、ヴィランを拘束するから、道具を貸して」

「ああ、別に構わないが」

「ありがとう」

私はお礼を言つて、ヴィランを拘束するための縄つばい道具を受け取る。

そのまま倒れている大男の元に向かったものの、犯人逮捕はやったことない。

今までは隠れてこっそりだったので、どうやって縛ったものかと悩む。

なので結局、再びウォーターホースの元に戻る。

そして大怪我をしたヒーローを現場に引つ張り出して、拘束のやり方を教えてもらった。

「お嬢さんも、将来はヒーローになるんだ。良い機会だし、学んでおくといい」

「えっ？ あの、私」

「何ならうちの事務所で勉強してもいいわよ？」

でも他にライバルが多そうだし、私たちはしばらく入院ね」

彼らの中では、私の将来は決定しているようだ。

高校に進学するならヒーロー科ではなく、断然普通科希望である。

しかし今の彼らに告げたところで、RPGで選択肢がありがちな無限ループに突入し

そうだ。

ならばお茶を濁して、無難に切り抜けるほうが良さそうだ。

人の噂も七十五日と言うし、どうせすぐに忘れ去られるだろう。

ヴィランの拘束を終えたあとは警察が到着するのを待ちつつ、ウォーターホースの二人に電話を貸りて孤児院に連絡を取る。

その際に全国ニュースで私が報道されたとか聞こえた気がするが、気のせいだと思いたい。

ちなみに外行きの服は上下とも破れただけでなく、殆ど燃えカスになってしまい、靴も同様である。

親切な人が無償で提供してくれたので事なきを得たが、そのままと色んな意味でヤバかった。

何にせよそれから間もなく増援のヒーローたちが駆けつけ、警察も一緒に来てくれた。

彼らは気絶したヴィランを確保し、免許無しでの戦闘行為は駄目だと説教される。

だがそれはあくまでも建前で、実際には注意だけで済ませ、皆を守ってくれてありがとうと心の底からの感謝の言葉を受ける。

ついでに将来はうちの事務所にと、他のヒーローたちに熱心に勧誘された。

対応に困った私は事情聴取があるのでと逃れ、警察署の外に出待ちしている報道陣や

ヒーロー事務所の方々には、病院で検査があるのでと逃亡を図る。

本人は無傷でピンピンしているが、傍目には地面にクレーターを作るほどの拳をまともに受けただけでない。

さらには両手で押し潰されて、プラズマ化するほどの熱を身にまとったのだ。

戦闘能力の高いプロヒーローでも大怪我をして動けなくなったのに、それより明らかに弱そうな見た目の幼女を心配する気持ちはわかる。

しかしいくら大きな病院で精密検査をしようと、わかるのは増強系の個性持ちもドン引きする骨密度や筋繊維や、年齢は中学生なのに小学生低学年の容姿と百キロ超えの体重ぐらいいだ。

これに関しては、個性が常時発動しているからだと誤魔化した。

本当は修行のために常時負荷をかけているのだが、無断使用は法律では禁止されている。

もしバレたら説教程度では済まないだろうし、秘密は守られるべきだ。

それはともかくいくら調べても異常なしだったが、宿泊施設に帰れたのは日が暮れてからだった。

もう観光地を巡り、お土産を買う時間もない。

しかも噂がかなり広まっているようで、小さな旅館には大勢の人が押しかけていた。

ヒーローの勧誘やマスコミの取材だけでなく、命を救われたりヴィランをやっつけてくれてありがとうなどの、お礼や感謝を伝える人も集まっている。

気持ちはあるがたいが、旅行に來たのに全然気が休まらない。

元々他者との関わりを面倒に感じるタイプで、そもそも話すのが苦手なのだ。

正しく返答できる自信はなかった。

戦闘で破れた服や靴などをもらえたのは、個人的に凄く嬉しいがそれはそれである。

スポンサーになるのでぜひともヒーローコスチュームを作らせて欲しいとお願ひされた時は、せっかくですが遠慮しますと若干引きつつ丁寧にお断りさせてもらった。

そのような接待合戦を突破して、ようやく個室に戻ったのは日付が変わる直前だった。

時間は遅くても女将さんに食事を用意してくれていたもので、人心地つけたのありがたい。

あとは温泉に浸かって休みたかったが、浴場は大変混雑していた。

結果、知り合いでもない人たちにあれこれ話しかけられて気疲れし、部屋に戻ったあとは布団に身を投げ出すように横になり、一泊二日の短い旅で良かったと溜息を吐く。

けれど次の日は、いつもの癖でまだ日が昇っていないうちに目が覚めたので、人の居

ない朝風呂を存分に堪能させてもらった。

なお、人の気配を感じたら急いでお湯からあがり、逃げるように自室へと戻る。

孤児院よりも豪華な朝食をいただいたあとは、何日でも泊まっていつて良いと言う女将さんの誘いを丁寧断った。

宿の入り口付近に設けてあるお土産コーナーで全員分を手早く購入し、実家の孤児院に最短ルートで脇目も振らず帰るのだった。

ヒーローデビュー？

地獄への道は善意で舗装されていると聞くが、まさにその通りであった。

旅行先でのヴィランの戦闘は地元のマスコミや色んな人が撮影していたらしく、小柄な私が巨人かと思えるほどの凶悪犯を相手に大立ち回りをしている映像が、全国のお茶の間に様々な視点から何度も流れたのだ。

まだ未成年ということでもザイクがかけられていたが、正体はバレバレである。

そして子供が戦ったり個性の無断使用、さらには負けたヒーローを責めるような発言も多くあった。

けれど世論的には危険なヴィランから命がけで市民を守ったヒーローに感謝しているし、私は注意を受けただけで警察に逮捕はされていない。

だが問題がないわけではなかった。

何故か自分が新しいヒーローとして報道されたことで、孤児院に帰ってきてお土産を手渡している最中に思わぬ発言を聞かされる。

「姉ちゃんは、いつヒーローデビューするの？」

「お姉ちゃん、凄く格好良かった！」

「大活躍だったね！ 流石は私たちのお姉さんだよ！」

家族は皆嬉しそうな様子で、心からの称賛の言葉をかけてくれた。

それでも私としては甚だ本意であり、神妙な顔になってしまう。

「勘違いしちや駄目。私はヒーローじゃないし、それを目指す予定もない」

「ええー！ 格好良いのにー！」

「そだよ！ せっかくの強個性なんだしきー！」

確かにヴィランと戦っている私は、子供たちにとってはヒーローっぽく見えたかも知れない。

けれど自分は免許を持っていない一般人で、あのときはとにかく無我夢中だったのだ。

個性の相性が良かったため、辛うじて勝てただけである。

「私の個性は重力操作で、一見強そうに見える。」

でも色々制限もあって、実際には相性が良かったのでギリギリ勝てただけ」

「えっ!? そうなの！」

「凄く意外！」

私は帰りがけに旅館で購入したお土産を広げて、一つずつ家族に配りながら説明する。

「それに、私はヒーローになる気はない。

だから自分の代わりに、貴方たちが目指せばいい」

子供たちはお土産をもらえた嬉しさと、将来のヒーロー像を思い描いて大喜びしていた。

誰もがヒーローになれる可能性があるのを、遠回しでも伝えて話題を変えることができなくて良かった。

内心で安堵の息を吐いた私は、改めて家族に声をかける。

「私は院長先生に報告してくる」

とても騒がしいので聞こえているかはわからないが、この場を離れることを告げて院長先生の部屋に向かって歩いて行く。

やがて扉の前に到着し、コンコンとノックをすると、どうぞと声がかかった。

慣れているので緊張はせずに、すぐに中に入れてもらう。

「ただいま」

「おかえりなさい。旅行先では大変だったみたいですね」

「大丈夫。全然平気」

ヴィランとの戦いはノーダメージだったし、後処理のほうに疲れたぐらいだ。

それでも開口一番に気遣ってくれる育ての親の優しさに、表情には出さないが嬉しく

なる。

すると、彼女はさらに言葉を続けた。

「地元の報道機関も、ぜひ取材させて欲しいと連絡がありましたよ」

「断固拒否する！」

「ふふっ、では断っておきますね」

取材費を取れば、孤児院の経営が楽になる。

けれど院長先生は私のために、断ってくれるらしい。

自分がヒーローや報道機関に対して、あまり良い印象を持っていないことを、付き合いの長い彼女は良く理解していた。

「複数のヒーロー事務所からもお話があったわ」

「内容は？」

「事務所の見学や勧誘ですね」

将来のために、今のうちから粉をかけておきたいのだろう。

だがやはり私は、ヒーローは好きではない。

「お断り」

「わかったわ。断っておくわね」

わざわざ考えるまでもなく溜息を吐きながら首を横に振り、他にはないかと尋ねる。

「あとは公安警察から——」

「断固拒否！」

警察は、ヒーロー以上に関わり合いになりたくはない筆頭組織である。

もはや院長先生の話の内容を聞く気も起きずに、叫び声をあげて両耳を塞ぐ。

「わかつたわ。こちらで断りを入れておくわ。」

……今のところは、それだけですね」

どうやら院長先生の要件は終わったようで、私はホツと息を吐いた。

そして旅行中の出来事は到着前に伝えていたため、この場で話すことも特にない。

なので自室に戻ろうと、一礼して背を向けた。

「陰子ちゃんいんこはヒーローが嫌いなのに、ごめんなさいね」

「構わない。ただ、関わりたくないだけ」

警察と同じように、治安維持や人命救助を頑張ってくれるのは素直に感謝している。

けれど積極的に関わりたいとは思わずに、むしろ距離を取りたい存在である。

「そろそろ部屋に戻る」

「長旅、お疲れ様。明日も大変でしょうけど、頑張つてね」

「うん、頑張る」

登校拒否は院長先生に迷惑がかかるので無遅刻無欠席を守ってきたが、今回ばかりは

中学校に行きたくない。

執務室の扉を開けて廊下に出た私は、大きな溜息を吐いてしまう。

そして孤児院で起きたことが学校でも起きるのだと容易に想像できてしまい、足取り重く自室へと戻るのだった。

次の日の早朝、私はいつも通りに起きてアルバイトの新聞配達を行う。

いつの間にか一緒にジョギングするようになった緑谷君と爆豪君が、ペースを乱さずに後ろを走っているが気にしない。

「その、^{せきりゆう}斥流さん。ニユースで見たよ」

緑谷君の発言を聞いても、ポストに投函したり走るペースは落とさない。

だが、やっぱりかと内心で愚痴り、学校でも同じことが起きるなら今のうちに心構えをしておくのも悪くないと判断し、振り向かず彼に質問する。

「どうだった？」

「凄く、格好良かった!」

今は走りながらも問題なく受け答えができるので、緑谷君も随分と逞しくなったものだ。

けれど女の子にその褒め言葉はどうかと思うし、私は別にヒーローを目指していないので、何と返して良いのか困った。

「オールマイトみたいだったよ！」

「馬鹿かデクウ！ 斥流せきりゅうがオールマイトなわけねえだろ！」

苗字呼びに慣れた爆豪君が、即ツツコミを入れる。

私も同意とばかりに頷きながら返答させてもらう。

「その通り。私はオールマイトじゃない」

「へっ！ だろうな！」

何故か勝ち誇ったような顔をしている爆豪君は、喋りながらもペースを乱さずに真面目にジョギングを続けている。

きつと彼も、成長著しい緑谷君と同じような天才なのだろう。

すると後ろでブツブツと呟いていたボサ髪の少年が、別の質問を口にする。

「あのっ、斥流せきりゅうさんは、どうやってあれ程の強さを？」

「そんなに気になるの？」

「ごっ、ごめん！ パワー系のヴィランと真っ向勝負をした斥流さんのことを、どうしても知りたくて！」

確かにあのヴィランは人並み外れたパワーだったし、最終的には全力の拳を真正面か

ら打ち砕いたのだ。

強さの秘密を知りたいと尋ねるのも、別におかしなことではない。

けれど超重力下で日常生活を送っているのは、個性の仕様で処理されている。

体を鍛えるために自分の意思で常時発動しているとは言えないし、どう答えたものかと考えながら新聞配達を続ける。

「自分では、良くわからない。

でも四歳から、暇さえあればずっと体を鍛えてる」

「マジかよ！ 脳筋ゴリラだったのか！」

爆豪君が失礼なことを口にしたが、私が脳筋なのは事実なので何も言わない。

そこで緑谷君が疑問に思ったようで、恐る恐る口を開く。

「でも斥せきりゆう流りゅうさんって、小学校の頃は、その」

「うん、小学校の頃は運動音痴だった。でも、いっぱい頑張った」

「そっか、いっぱい頑張ったんだ」

緑谷君は納得してくれたが、代わりに彼は自己嫌悪に陥ったのか頭を抱えていた。

「僕も、もつと体を鍛えないと！」

彼は今でも十分頑張ってるし、血反吐を吐いたりぶつ倒れる重力修行がおかしいだけだ。

しかし外からあだこうだ言っても、緑谷君が体を鍛えるのを止めるとは思わないし、筋トレは別に悪いことではないので黙っておいた。

「そんだけ鍛えてるのに、ヒーローを目指さねえのかよ」

「私が訓練してるのは、自衛のため」

なのでヒーローには、全く興味はないと爆豪君に告げる。

「……そうかよ」

彼の素っ気ない返事はいつものことだし、そのあとは会話がなくなったが気にしない。
い。

私はマイペースで黙々と、新聞配達のアルバイトを続けるのだった。

斥流陰子 v s ムーンフィッシュ

新聞配達が終わったあとは、いつもの公園で一戦交える。

連勝記録を更新して二人と別れ、孤児院に帰って準備をしてから地元の中學に登校した。

だがしかし、正直そこから先は地獄だった。

日が昇って地域住民が起き始めたため、行く先々で声をかけられる。

それだけではなく、声援を送られたり握手やサインを頼まれたりもした。

もちろん自分は一般人でヒーローではないし、名声が欲しくてヴィランと戦ったわけではない。

丁寧にお断りするか、聞いてもらえない場合はスルーして学校に向かったけれど、いざ到着すると周囲はさらに騒がしくなった。

ちなみに良くされる質問は、どのヒーローが好きか、もしくは憧れているかだ。

私は無難にオールマイトと答えておいたが、やっぱりナンバーワンヒーローは有名だと納得してくれるし、深く追求されずに済んでいる。

実際には子供たちと一緒にテレビを見るとときに画面に映る比率が高いので、何となく

覚えた程度の情報しか持っていない。

なので彼以外は殆ど知らないのです、そこで会話が終わってくれると面倒がなくて助かる。

けれど担任の先生が、ゆうえい 雄英高校の合格は確実だとか言い出したのは、本当に困った。

進路希望調査では地元の普通科高校を記入したのに、勝手に私の人生を決めないで欲しい。

そういうわけで質問責めにされたり、動物園の客寄せパンダのように騒がれて、精神的に疲れきっていた。

同じクラスの緑谷君と爆豪君も哀れに思ったようで、間に入って話題をそらしてくれたのは本当に助かった。

そうでなければ無遅刻無欠席を諦めて、院長先生に迷惑をかけても孤児院に引き籠もっていただろう。

それでも一ヶ月ほど過ぎた頃には、騒がれることも減り始めた。

クラスメイトの緑谷君と爆豪君が防波堤になってくれたり、毎日のように世界中でヒーローが活躍しているので、そっちに話題が移ったのだろう。

とにかく二人は私の数少ない友人に認定し、あまり喋らず関わりなくても、学校で唯一親しい生徒となったのだった。

やがて時は流れて、私は中学二年生になった。

相変わらず早朝の新聞配達や、一対二の戦闘訓練を殆ど休まず続けている。

一年近く勝ち続けていると、わざと負けたほうが彼らのために良いのではないのかと思いはじめた。

だが爆豪君に手加減して負けたらぶつ殺すと釘を刺されたし、緑谷君も口には出さないうが正々堂々がご所望のようだ。

なので仕方なく周辺被害を抑えめのガチ戦闘を行い、連勝記録を更新し続けていた。

それはそれとして、またもや夏休み中に商店街の福引で温泉旅行を当てる。

運が良くてラッキーだと喜ぶべきなのだが、前回がアレだったのでとても嫌な予感がした。

心配であるが極めて低確率なヴィランの襲撃に、二度も巻き込まれはしないだろう。

それにまたもや突っ返された育ての親の厚意を、無下にする訳にはいかない。

なので私は少しだけ緊張しながら、電車に乗って他県の旅館に向かうのだった。

外から見る限り、規模は小さいが悪くはない佇まいだ。

商店街の予算の都合上だろうが、私的には豪華すぎると萎縮してしまうのでこのぐら
いがちょうどいい。

玄関の暖簾のれんをくぐって中に入ると、女将さんや他の従業員が熱心に仕事をしていた。
そのまま受け付けに向かつて歩いて行くと、来客の存在に気づいて驚きの声をあげ
る。

「あらあらあら！ お客様せきりゆうって斥流せきりゆうちゃんだったのね！」

「えっ!? 本せきりゆう当せきりゆうにあの斥流せきりゆうちゃん!？」

電話予約も斥流せきりゆうで取ったはずだが、その時は何の問題もなかった。

なので直接会ったときに、何故そこまで驚かれるのかさっぱりわからない。

「斥流せきりゆうちゃんってアレでしょ！ ほらっ！ 一年ぐらい前に！」

きつと一年ほど前に、ヴィランと戦ったことを言いたいのだろう。

「ええ、まあ、多分」

「やっぱりそうなのね！」

静かに頷いたが、旅館の従業員は私のことを知っているらしい。

だがあまり特別扱いされては、純粋に旅行を気軽に楽しめなくなるので正直困る。

「娘が斥流せきりゆうちゃんの大ファンなのよ！」

「なあなあ、サインしてくれよ！」

「あつ！ 私もサイン欲しいー！」

ただの一般人なのにファンが居るのはおかしいし、何より私をヒーローとして扱わないでと思って、つい強い口調で返してしまふ。

「私はヒーローじゃない！」

「でも、いつかはヒーローになるんだろう？」

「ならないー！」

旅館の人たちが悪い訳ではない。

けれど旅行に来て早々に、他人からヒーローの話題を何度も振られたのだ。

自分が好きではないモノを押し付けられたように感じて、少しだけ不機嫌になってしまふ。

私は女将さんに真っ直ぐ視線を向けて、荒々しく声をかける。

「私の部屋は！」

「えっ？ あつ……その、お客様にとんだ失礼を！」

機嫌が悪いのが、顔に出てしまったようだ。

旅館の人たちは、何とも申し訳なきような表情を浮かべている。

そして各々の謝罪のあとに、気を取り直して真摯に対応してくれた。

「ただ今お部屋にご案内致します。どうぞこちらに」

そのまま女将さんが個室に案内してくれて、私は小さな和室に入って荷物を下ろす。

その間に、食事やチェックアウトの時間を教えてくれた。

「それでは、ごゆっくりお寛くわぎください」

「どうも」

女将さんが一礼して扉を閉めて足音が遠ざかる。

取りあえず窓の外の景色を眺めながら、座布団に腰を下ろして一息つく。

近くに置かれていたポットを使ってお茶を入れたあとは、テーブルの上にあった饅頭の包装を外していく。

「……はあ、悪いことした」

旅館の従業員の対応としては褒められたことではないが、感極まったと考えれば仕方ない。

それにヒーローとして称賛させれば普通は嬉しいものだし、自分が世間一般の常識に当てはまらないのがおかしいと言える。

けれど私は自らの性格を変えるつもりはないし、やはり苦手なものを無理に好きになりたくはない。

「私はヒーローじゃないし、アレが正解」

この先も私の活躍を信じてデビューせずにガツカリするよりは、この件で幻滅してフアンを辞めたほうが幸せだ。

ヒーローは飽和状態で星の数ほど居るのだから、すぐに新しい推しを見つけられる。やがて饅頭を食べ終わって少しだけ気分が上向いた私は、よつこらしよと座布団から立ち上がる。

「よし、散歩に行こう」

今は双方が顔を合わせ辛い雰囲気で、旅館に留まるよりは外で気晴らしをして時間を置いたほうがいい。

なので出発前にお茶を飲んで乾いた喉を潤してから、財布などの貴重品を持って旅館の外に出かけるのだった。

これといったあてもなく観光地を散歩していると、いつの間にか空には満月が輝いていた。

街路灯や建物の光も合わさって、夜でも明るいので助かる。

見知らぬ土地を適当にぶらつくのは良い気晴らしになり、おかげでかなり気持ち楽になった。

「そろそろ帰ろうかな」

今の私なら旅館の人たちに会っても、気まずくはならない。

向こうも理解して、ヒーローについての話題を振られることもないだろう。

景色を見ながら帰り道をのんびりと歩き始める。

しかし一年ほど前にはヴィランとばったり遭遇してしまったが、そんな極めて低確率な厄介事が何度も起きるはずがない。

重力操作の修行でこつそり遠出したときにも、あそこまで凶悪な敵とは出会わなかったのだ。

「ようやく旅行を楽しめる」

今回は空を落ちるという手段ではなく、電車やバスに乗ってきた。

地元とは別の市街を歩いていると、遠くに来たことを実感する。

だがそのとき、またもや何処からか助けを求め悲鳴が聞こえた。

そこから先は考えるよりも先に体が動き、殆ど条件反射で個性を発動させて、勢い良く空に落ちていっていた。

周辺住民は誰も気づいていなかったことから、超感覚を持つ私だけが聞き取れたのかも知れない。

「何処？」

自分でも何故こんなことをしているか、理由は良くわかっていない。

けれど私は止まることなく、悲鳴が聞こえたと思われる地点を空を飛びながら探す。

「見つけた！」

まだ遠くて、詳しいことはわからない。

けれど大通りで男性らしき人影が、刃物のような何かを振り回している。

周りの人たちは一目散に逃げるか必死に説得しているようだが、まるで聞く耳を持たない。

おまけに彼は、恐怖で腰が抜けてその場から一步も動けなくなっている少女たちを狙い、長い刃物で斬りつけようとしていた。

衝撃的な瞬間を目撃した私は、自分が失敗したらあの子たちが殺されると内心で焦りながらも、それでも何処か冷静に対象を指定して個性を発動させる。

「落ちろー！」

どうやら犯人の男は、刃を伸ばす個性らしい。

腰が抜けて青い顔した少女たちの重力を操作して、遠くに落とすことで安全な場所に避難させる。

支離滅裂なことを喋りながら暴れていた男性の刃物は、攻撃目標が突然移動したことで空振りする。

地面に無数の刃が突き刺さった。

だが不可思議な現象に驚いたのは彼だけでなく、助けた少女たちや逃げ惑っている人々も同じであった。

ヒーローはまた来ていないようで、このままでは他の犠牲者が出てしまうと判断した私は、再び表舞台に立つ覚悟を決めた。

なので彼女たちを庇うように、刃物男の前にアメコミヒーローのように勢い良く落下する。

「もう大丈夫！ 何故なら！ 私が来た！」

怖がらせるのではなく少しでも安心させるために、ナンバーワンヒーローを真似て彼の台詞を口にする。

とにかく私がやらないと、大勢の犠牲者が出てしまう。

本当は矢面に立って戦いたくなくても、非常時ゆえに仕方ない。

何とか気持ちを奮い立たせて、目の前のヴィランを睨みつける。

(どうか、訴えられませんかように)

しかし反射的に口にしたが、先程の言葉はオールマイトが良く使うもので私には似合っていないし、勝手にパクったことを訴えられたら、とても困る。

けれど今は、そんなことを考えている余裕はない。

自分の目の前に、刃物を操るヴィランが居るのだ。

私から見れば特に脅威とは思えなかったが、危険なことには違いない。

「肉、ああ！ 綺麗だ！ 子供の肉！ 見せて！」

そう言ってヴィランは、攻撃対象を切り替えた。

私をめがけて自らの歯を刃に変え、高速で伸ばしてきたのだ。

ここで先程は意図せずスーパーヒーロー着地を決め、地面がえぐれて周囲に破片が飛び散っていることに気づく。

なので私はそれを利用することを思いつき、右手を前にかざす。

「剣よ！」

大声を出すと散乱している破片が一斉に舞い上がって寄り集まり、無骨な剣を形作る。

「肉！ 見せてええええっ!!!」

「断固拒否！」

そしてヴィランの刃と、私が振るう剣が激しくぶつかり合う。

月夜の晩の大通りに、明るい火花を散らした。

この形体は殺傷能力が高すぎるし、勝手に地面を掘り返して素材にするのは犯罪なので、滅多に使うことはない。

さらに言えば視界を確保している前方しか振れず、攻撃範囲はとても狭い。

しかしその代わりに密度が半端ではなく、重力操作で補助していることもあって簡単には破壊されない。

「これでっ！」

そして見た目よりも遥かに重いため、やがてヴィランの刃物が耐えられずにへし折れた。

まさか押し負けるとは思っていなかったのか、敵は思いつきり動揺している。

「今が好機！」

私は一瞬とはいえ動きを止めたヴィランを、重力の檻で捕らえる。

「がひっ!？」

体重が急に倍になったことでヴィランはバランスを崩して、前のめりに倒れる。

増強系の個性ならこの状態でも動けるが、彼はそうではないようだ。

しかし身動きが取れなくなったが、まだ諦めていない。

再び歯を刃に変えて、私をめがけて高速で伸ばしてくる。

「せいっ！」

刃物に怯むことなく無骨な剣を振るうと、先程と同じようにへし折れる。

だが次から次へと伸ばしてくるので、正直キリがない。

「はあ、面倒」

しばらくの間、歯の刃が伸びるたびにペチペチ叩いて潰していた。

けれど同じ作業の繰り返しなので、飽きたというか段々と面倒に感じてくる。

そこで私は手に持っていた剣をポイツと投げ捨てて、その形状をギロチンの刃に変化させた。

続けてプレス機のように上下運動させることで、ヴィランの個性を片手間に切断し始める。

「止め！ 止めで！」

「止めない」

何やら必死に懇願しているが、止めて欲しければ抵抗せずに大人しく捕まればいい。諦め悪く歯の刃を伸ばしているから、こっちも切り落とし続けていっているのだ。

しかし、まともな精神状態でないヴィランに愚痴つても仕方がない。

(私はヒーローじゃないし、ここは彼らに任せる)

そして刃物を無尽蔵に生み出せるヴィランに、危険を冒して近づく必要はない。

私は彼の心がバキバキに折れて無抵抗になり、要請したヒーローが駆けつけるまで、伸び続ける刃を片手間に処理し続けるのだった。

暴走新幹線

前に戦ったヴィランとは違い、攻撃を一度もまともに受けなかった。

さらに空気が圧縮されて、赤熱するほどの速度で蹴りを放つたりもしていない。

しかしスーパーヒーロー着地を決めたことで、気づいたら靴がボロボロになっていた。

幸いあの場に居て助けられた人が無料で提供してくれて、買い換えなくて済んだ。

心からのお礼を言っておいたが、相変わらず大勢の人々に囲まれたり、取り調べや怪
私の検査をした。

その際に嚴重注意や孤児院への連絡など、概ね前回と同じような展開となった。

ちなみに襲われていた女の子の片方は、実は女将さんの娘さんだったことが判明す
る。

一緒に居た友人も私の大ファンになり、どうか早まらないでと真面目に説得したりと
大変だった。

なお、結局説得できずに仕方なく諦める。

その後は個室に引き籠もり、一泊二日の宿泊を終えると旅館の入口辺りのコーナード

速やかに皆の分のお土産を購入した。

あとは一も二もなく帰宅の途につく流れは、去年の旅行と殆ど同じなのだった。

色々あったが新幹線に乗り換えて指定席に座った私は、周囲に騒がれることがなくなつてようやく一息ついた。

あとは数時間揺られていれば地元に戻れるので、気楽なものである。

「それにしても、疲れた」

窓の外を高速で流れている景色を見ながら、率直な眩きを漏らす。

特にやることもないのでお茶を飲んで乾いた喉を潤してから、一眠りしようと目を閉じる。

ここ数日の精神的な疲労を癒すために、襲い来る睡魔に身を任せたのだった。

だが気持ち良くまどろんでいると、急に周りが騒がしくなつて自然に目が覚める。

「ヴィランが新幹線を占拠したって!？」

「どうするんだよ! マジでやばいじゃん!？」

「誰か! 誰かヒーローはいないの!？」

周りの乗客が大慌てでスマートフォンを操作したり、互いに大声で話したりしている会話の内容が耳に入ってくる。

「皆さん！ 落ち着いてください！」

乗務員はそんな彼らを落ち着かせるために、一生懸命に説明している。

起きたばかりでのんびりと欠伸をしている私にも、何だか知らないが大変な状況なのは理解できた。

「救援要請は出しています！」

もう間もなくヒーローが到着するはずです！」

私は眠い目をこすりながら体を軽くほぐしつつ、今がどんな状況かを推測する。

だがまあわざわざ考えるまでもなく、新幹線がヴィランに乗っ取られたのだろう。

ヒーローが助けてくれるなら私が動くまでもないし、周りの乗客と同じように大人しく席に座って、落ち着いて救援を待つのが賢い選択だ。

「ヴィランたちは先頭車両を占拠しています！」

ヒーローが到着するまでの間、皆さんはなるべく動かずに、冷静な行動を心がけてください！」

先頭車両に近づかなければ安全だ。

ここは五車両目なので、危険が及ぶことはないだろう。

窓の外の景色を眺めながらそんなことを考えていると、周りの乗客が何やら騒ぎ出した。

「けどよ！ 新幹線は今も走ってるんだぞ！

どうやって乗り込むんだよ！」

「列車事故で死ぬなんて！ そんなの嫌よ！」

確かに外の景色は目まぐるしく移り変わっている。新幹線が高速で走行している証だ。

普通なら異常を感知した時点で強制的に停止させられるが、現実にはそうなっていない。

ならばヴィランの中にそれ系の個性持ちがいて、外からの干渉を妨害しているのだろう。

（時間が私たちの味方とは限らない）

ヴィランの目的は不明ではあるが、新幹線は未だに止まることなく走り続けている。

カーブを曲がり切れずに脱線するか、前方の列車に衝突、もしくは何処かの駅に突っ込むなどの大事故も十分にありえた。

（しかし去年の後半あたりから、ヴィランとの遭遇頻度が増した）

きちんと統計したわけではないが、外出先でヴィラン犯罪に良く巻き込まれた。

被害妄想だとわかつてはいるものの、誰かが自分に刺客を差し向けているのではとさえ勘ぐってしまう。

それでも自分が表舞台に立つことはなく、何とか正体を隠しながら駆けつけたヒーローや襲われている人々を助けている。

人知れず事件を解決することができるのは良いことで、サポートだけで片付くのは何よりであった。

けれど、今回ばかりはそうはいかない。

(隠れてこっそり、無理)

自分が表立って動かなければ、新幹線の暴走は止められそうにない。

少なくとも重力操作でパパッと解決とはいかないと判断した私は、相変わらず忙しく動いている乗務員に横から声をかける。

「あの」

「何だい？ お嬢ちゃん」

彼は職務に忠実なようで、見た目は小さな子供でも真面目に対応してくれた。

「今から新幹線を停めるから、窓ガラスを割っていい？」

「えっ!? そりゃ新幹線を停めてくれたら助かるけど！ お嬢ちゃんには無理だよ！

良い子だから、ヒーローが到着するまで大人しくしてようね！」

乗務員は困惑しているが、一応の許可は取れた。

周りの乗客も変な少女だなという視線が一斉に向けられている。

けれど私は気にせず席から立ち上がり、窓から少しだけ離れて個性を発動させた。「割れろー!」

重力操作の対象を新幹線の窓に指定して、やり過ぎないように少しずつ出力を上げていく。

やがてミシミシという音が聞こえてヒビが少しだけ大きくなり、ガラスが割れて破片が外に飛び散った。

「こつ! この個性は一体?!」

「まさか! 斥流せきりゅうちゃん!」

「ムーンフィッシュを捕まえたヒーローか!」

乗客の何人かは、私の正体に気づいたようだ。

どうやら昨日の全国ニュースで大々的に報道されたようで、すぐに思いだたらしく驚きや歓声が次々とあがる。

しかし私は、ヒーローではなく一般人だ。勘違いされるのは正直困る。

おまけに、まだ事件は解決していないのだ。

なので割れた窓に小さな足をかけて、許可は取っていないが乗客を安心させるために大きな声を出す。

「もう大丈夫! 私^が来た!」

短い台詞で済むし、周囲の人たちを落ち着かせるのに向いている。

だが実は、オールマイトに訴えられないかと内心でドキドキしていた。

それはそれとして、私は個性を発動させて新幹線を上回る速度で進行方向に落ちていく。

空中から地上を見下ろしながら高速で移動し、先頭車両を通り過ぎる寸前で速度を落とす。

そのまま並走するように正面に回り込んで、静かに手で触れる。

「新品の靴だけど、仕方ない」

飛んでる最中に東京都内に入ったようで、もし事故が起きれば大勢の犠牲者が出てしまう。

当然私も巻き込まれるし、それが靴が駄目になるだけで解決できるなら安いものだ。

なので私は新幹線の真正面に降下して、地面に両足をつけて飛ばされないように踏ん張る。

「生まれ！ 生まれえええっ！」

幸いなことに自分の体は頑丈なので、新幹線を受け止めても怪我をすることはない。

列車や乗客を気遣って一度に止めるのではなく、少しずつ速度を落としていく。

地面がえぐれるような音が断続的に響いてくるが、肉体的には何の問題もない。

超重力化で平然と日常生活を送れる人間が、新幹線にぶつかったぐらいで死ぬわけがないのだ。

「でも、靴はやっぱり駄目だった」

靴だけでなく靴下も、たび重なる摩擦でボロボロになる。

けれど私の柔肌は何ともなく、重力制御でバランスを取りつつ新幹線の速度を少しずつつ落としていく。

どのぐらいそうしていたのかはわからない。

けれど都内の大きな駅に突っ込む直前に、何とか停車が間に合った。

気づけば連絡を受けて駆けつけたヒーローたちが、動きが止まった新幹線を囲んでいて、次々と乗り込んでいく。

「ありがとう！ 斥せきりゅう流ちゃん！」

「キミのおかげで助かったよ！」

「あとは我々の仕事だ！ 任せておきたまえ！」

取りあえず脱線や衝突事故が起きる前に、なんとかなって良かった。

私は安堵の息を吐いて、先頭車両を押さえていた両手を静かに離す。

「どう致しまして」

相変わらずヒーローは苦手だが、社交辞令で返事をしておいた。

しかし旅先でいただいた新品の靴を、早くも駄目にしてしまった。

素足で歩いてても怪我はしないが、とても目立つので早急に買い替える必要がある。

「はあ、困った」

「おっと、可愛らしいお嬢ちゃん！ 何かお困りかな！」

この先どうしたものかと頭を悩ませていると、赤い翼を生やした若いヒーローが私に声をかけてきた。

どう答えたものかと迷って、何となく自分の足元にじつと視線を向ける。

「あちゃー、靴が駄目になっちゃったかあ！」

増強系の個性は、装備が壊れやすいのが難点だよなあ！」

「どうした？ 何かあったのか？」

「実は、^{せきりゆう}斥流ちゃん靴がさあ！」

どうやら新幹線が乗っ取られる事件は、余程の大事だったようだ。

集まっているヒーローの数はかなり多い。

なので多勢に無勢だったようで、列車内に立て籠もっていたヴィランはすぐ捕まった。

手が空いた人たちが、私の前で何やら相談を始める。

「やっぱり^{せきりゆう}斥流ちゃんのサポートアイテムは、耐久性重視でしょ」

「確かにそうだが、重力操作を補助する機能も欲しいぞ」

いつの間にか、ヒーローが装着するサポートアイテムの話に変わっていた。

しかも、当事者である自分は完全に蚊帳の外である。

「ならば、予算はうちが出そう!」

「さてはサポートアイテムで釣って、斥流せきりゅうちゃんを抱え込むつもりだな!」

「彼女に助けられたのは、お前だけじゃねえぞ! うちにも予算を出させろ!」

一体どういう流れなのか、良くわからなくなってくる。

けれどこの場に居る皆が、私を取り合っているのはわかった。

放置するわけにはいかないのでとにかく会話を遮ろうとすると、青い服で口元を隠し

た金髪のヒーローが横槍を入れてくる。

「列車が停まって困っているなら、車で家まで送ろう。なに、遠慮することはない」

「おいこら! 抜け駆けは止めろやあ!」

どうにも收拾がつきそうにない状況に、私は頭を抱える。

けれど、これだけはわかって欲しいのでヤケクソ気味に大声を出す。

「私は! ヒーローには興味ないし! 絶対ならない!」

私にあれこれ世話を焼いてくれる彼らには申し訳ないが、誤解されたまま勝手に進められるわけにはいけない。

今この場ではつきり言ったほうが良いし、これでわかってくれたはずと期待する。なので、大きく息を吐いてヒーローたちの様子を伺う。

「うんうん、斥流ちゃんの気持ちは良くわかるよ」

「その通りだ。真のヒーローとは、行動で示すものだ」

何がその通りかは全く理解できないが、取りあえず落ち着いてくれたようだ。

「んじゃ、まずは靴と靴下を買いに行こっか」

「うむ。近くの靴屋まで送ろう」

翼を生やした親切なヒーローがスマートフォンで検索し、青い服の人が車を出して近くの靴屋に連れて行ってくれた。

ヴィラン襲撃事件に助力してくれたお礼ということで、新品を無償提供してくれたので、こちらも深々と頭を下げてお礼を言わせてもらう。

ちなみに新幹線は停まったままで、ダイヤの乱れを修正に追われて電車も道路も大変混雑していた。

ヒーローの人たちは孤児院まで乗せていってけると言ってくれたが、そこまで甘えるわけにはいかない。

都内に入ったので、あと少しで自分の県に入れるのだ。

新しい靴の慣らしにもちようど良いと考えて、私は走って帰ることにした。

「本気か？」

「うん」

「斥流ちゃんて、増強系の個性持ちだっけ？」

「違う。重力操作」

そう言いながら、簡単な準備運動をする。

そしてコンビニでお弁当や飲み物まで奢ってくれたヒーローの皆さんに、再度お礼を言つて手を振つて別れる。

（ヒーローは悪い人じゃない。でも、職業としては駄目）

前日もそうだったが、今回もヒーローにも良い人がいることがわかった。

それでも市民のために危険に飛び込む職業に就きたいとは、これっぽっちも思えない。

だが今とはかく地図を見ながら、我が家まで走つて帰つてお土産を渡すのを優先するのだった。

緑谷出久から見た斥流陰子

〈みどりやいずく
緑谷出久〉

僕が彼女と初めてまともに話したのは、中学一年生の夏休みのことだ。

それまで同じクラスであつても目立つことはなく、彼女も積極的に他人と関わろうとはしなかつた。

いつも一人で本を読んでいた、大人しくて運動が苦手な物静かな女の子だ。

あとは顔立ちが整つた美人ではあるが、身長は百二十センチしかない幼児体型である。

なお口下手だが喋る姿は可愛いし、胸も本来の体格よりも大きめだ。

あとは困つている人には迷わず手を差し伸べる優しいところもあつて、実はこつそり狙つている男子もかなり多い。

それに斥流さんは他人と大きく違うところがあり、小学生低学年ほどの体格から変わらないのに、何故か体重と胸位だけは増え続け、今では百キロを越えている。

これは重力操作の個性が悪影響を及ぼしているので、仕方のないことだった。

とにかく殆ど接点がないどころか、学校で会話をしたことすらなかった斥流陰子せきりゆういんこさんである。

けれど中学一年生の夏休みの公園で僕たちは出会い、今までの関係が大きく変化することになった。

そのときの自分は、幼馴染のかっちゃんたちに、ヒーローノートを取り上げられて困っていた。

そこで彼女は人前ではめつたに使わない個性を使用して、僕を助けてくれたのだ。

理由は、騒がしくて勉強の邪魔になるからと聞いた。

確かに大声で騒げば近所迷惑になるだろうし、気が散るのもわかる。

結果的に彼女は重力を操り、かっちゃんを爆破を使うこともできずに完敗した。

地元の中学で最強は爆豪勝己ばくごうかつぎであると、同じ学校の生徒だけでなく教師でさえもそう信じて疑っていなかった。

けれど彼女はそれを、真正面から打ち破って見せたのだ。

何にせよ僕は斥流さんに助けられ、彼女に強く興味を惹かれた。

それは恋ではなく憧れなのだろうが、とにかくその場の勢いに流されるように、駄目で元々ではあるが無個性でもヒーローになれるかを聞いてしまう。

彼女の答えは、無個性でもヒーローになれるだ。

即答であったが、そのあとに個性はないよりあったほうが良いとも言われる。

けれど人を助けるのに個性のあるなしは関係ないし、僕は誰かにとつての英雄にはなれるらしい。

僕はオールマイトに憧れていて、彼のような立派なヒーローを目指していた。

今までは無個性だからと理由をつけて諦め、外から見ているだけで特にこれといった努力をしてこなかった。

だけど今は違う。

斥流せきりゅうさんから元気をもらい、将来に向けて少しずつでも体を鍛えることに決めたのだった。

斥流さんは毎日新聞配達のアルバイトをしているらしい。

早朝ジョギングでばったり出会って、そこで始めて知った。

僕は付いていくのが精一杯どころか、情けないが途中で脱落してしまった。

斥流せきりゅうさんも少しは呼吸が乱れているものの、まだまだ余裕そうだ。

今まで体を鍛えていなかったのもあるが、個性を使つていない女の子に負けるのはとても恥ずかしく思えた。

なので悩んだ末に当面の目標をオールマイトから変更し、クラスメイトの斥流せきりゅうさんに

体力的に追いつくことに決める。

夏休みが終わる前には新聞配達を途中で脱落せずに付いていくことができたが、色々あつてかつちゃんせきりゆうと二人で協力して斥流せきりゆうさんに挑戦することになった。

けれど将来はオールマイトのような立派なヒーローを目指している僕には、とても良い訓練になる。

さらに彼女がかつちゃんの自尊心をへし折りまくったからか、ほんの少しだが他人のことを思いやるようになった気がした。

けれど相変わらず周囲に対する風当たりが強く、斥流さん以外にはかなりの喧嘩腰である。

おまけに二人がかりで作戦を練っても、斥流さんには一度も勝てていない。

とても高い壁となつて立ち塞がっているが、ヒーローとは限界を超えて前に進むものだ。

僕たちが倒されるまでの時間も少しずつ伸びているし、体力も確実にについている。自身の成長を実感できる。

最初はぎこちないどころか足を引つ張り合っていた連携も、一ヶ月もすれば互いの視線だけで何を狙つていつ仕掛けるかがわかるようになる。

僕に対するかつちゃんの態度、言葉遣いは相変わらず刺々しいけど、それでも昔と比

べれば多少は優しくなったのだった。

少しだけ時が流れて中学一年生の秋になり、僕が自室でダンベルを持ち上げて筋トレをしていると、母さんの呼ぶ声が聞こえてきた。

「ちよつと出久いずく！ 貴方のお友達がテレビに出てるわよ！」

「えっ？ 友達？ ……誰？」

自慢ではないが、僕は友達がとても少ない。

無個性だと友好関係を築くのもなかなか難しく、特に母さんに顔を知られている同学年の子は数えるほどしかいなかった。

とにかく僕は疑問に思いつつも居間に向かうと、母さんがテレビ画面から目を離さずに興奮気味に叫んでいた。

「ほら、この子よ！ 怪我をした出久いずくを、家まで運んでくれた子！」

「何で斥流さんが!？」

テレビの全国ニュースには、斥流せきりゅうさんらしき女の子が映っていた。

そして確かに戦闘訓練による疲労と転倒による軽い怪我で、その場から動けなくなつた僕を抱えて家まで送ってくれたことがある。

幸いなことに早朝だったので、見た目は小学生低学年の女子に担いで運ばれる恥ずかしい姿を、近隣住民に見られることはなかった。

だが今はそれはどうでも良いので頭の隅に置いておき、テレビの全国ニュースに集中する。

すると、どうやら彼女は傷ついたヒーローや大勢の市民を守るために、凶悪なヴィランに単身で戦いを挑んだらしい。

「斥流ちゃんって、凄く強いよね」

「うん、彼女はとても強いよ」

彼女はプロヒーローのウオーターホースが敵わなかったヴィランを、たった一人で倒してしまえるほどに強かった。

途中で何度か危ない場面もあったが、咄嗟に機転を利かせて器用に立ち回り逆転の一手に繋げるので、見た目こそ幼くてもプロ並みの戦闘能力を有している。

「斥流せきりゅうさんはオールマイトと同じ、僕の憧れなんだ」

「あらあら、うふふ！」

何やら母が変に勘違いしているようなので、僕はすぐに訂正を口にする。

「言っておくけど、母さん！ そういう意味じゃないからね！」

「ええ、出久いずくのことは、ちゃんとわかってるわよ」

その顔はわかってないなと思いつつ、困った顔で溜息を吐いた。しかし母は、最近になって良く笑うようになった。

理由は僕がオールマイトに憧れるのは変わらなくても、無個性だからと諦めたりせず、に前向きに体を鍛え始めたからだ。

斥流せきりゅうさんのおかげで、前よりも自分に少しだけ自信が持てた。

だがそんな凄い彼女だが、別にヒーローは目指していない。

それどころか興味もなく、警察と同じで極力関わりたくないと常々口にしていた。

なお彼女の行動はヒーローを体現した立派なものであるが、このことを伝えると絶対に不機嫌になるので見えている地雷を踏む趣味はなかった。

僕がそんなことを考えていると、母が斥流さんの華々しい活躍を見ながら、もつともな疑問を口にする。

「けど斥流せきりゅうちゃんって、増強系の個性なのね」

「いや、彼女は重力操作だよ。ええと、そのはずなんだけどね」

凶悪なヴィランが拳を地面に叩きつけければ、小さなながらもクレーターができた。流石にオールマイトには及ばないが、それに近い実力があるのは明らかだ。

けれど斥流せきりゅうさんは重力操作でダメージを軽減したとはいえ、その一撃を受けている。

さらに筋骨隆々の両腕で掴まれ、握り潰されかけた。

必殺の飛び蹴りはあまりの速さで周囲の大気が圧縮され、高熱を発して靴や服が燃えてしまう。

どう考えても常人の身体能力では耐えきれずに大怪我どころか、どれか一つを受けるだけで致命傷である。

「でも、意外と元氣そうね」

「うん、怪我がなくて良かったよ」

斥流さんは怪我一つなくピンピンしてるし、色々気になることはあるが無事で良かった。

しかし、彼女の活躍が全国ニュースになるとは思わなかった。

今まで全く注目されていなかった少女が、プロヒーローでも勝てなかった凶悪なヴィランを倒したのだ。

ウォーターホースが相当なダメージを与えていたとしても、ニュースの映像では斥流さんが一人で倒したように見えてしまう。

それにヴィランを真っ向から打ち倒した、赤熱した流星のような高速の飛び蹴りだ。

あれは敵の渾身の一撃をも、上回る破壊力を有していた。

もし斥流さんがプロヒーローになれば、あの速すぎる男の異名を持つホークスと同じように、デビューしたその年にトップテンに入るのも夢ではないだろう。

だが僕はここで大きく息を吐き、世の中はそう上手くはいかないと首を振る。

「でも斥流せきりゅうさんは、ヒーローを目指してないんだ」

「あんなに強いのに?」

母さんの疑問に静かに頷く。

僕はテレビの向こうでマスコミの取材に対して、考える余地なしで逃げの一手を選ぶ斥流せきりゅうさんを眺める。

こういった取材にも、彼女はあまり良い感情を持っていなかった。

行動そのものはとてもヒーローらしいのに、それでも断固拒否するのが容易に想像で

きる。

「彼女はヒーローじゃなくて、自衛のために体を鍛えているだけだよ」

「護身術かしら?」

過酷なトレーニングを続けているようだが、内容については不明な点が多い。

それでも筋トレを頑張っているのは、今までの付き合いから容易に想像できる。

僕は現時点で大きく差をつけられていると言っても過言ではないが、諦める気はない。

最高のヒーローになるための歩みを止めるつもりもなかった。

「あれが斥流さん、僕の憧れる師匠なんだ」

「えっ？ そっちなの!？」

驚いている母さんは置いておいて、具体的なイメージが固まってむしろやる気が湧いてきた。

あれ程の強さを持った人が僕の訓練相手で、さらにアドバイスも聞かせてくれるのだ。

これは意地でも追いついて、彼女を驚かせたいと思った。

きつと斥流さんは笑顔で拍手を送り、祝福の言葉をかけてくれるだろう。

そんな光景が容易に想像できてしまい、少しでも早く憧れの彼女に追いつきたい。

なので僕は自室に戻って、中断していた筋トレを再開するのだった。

オールマイトから見た斥流陰子

〈やぎとしのり
八木俊典〉

一線級のヒーローは大抵、学生時代に逸話を残している。

彼女はその中でも別格で、行く先々でヴィランに遭遇するか何らかの事故が起きた。

そして決して表には出ずに、隠れて大勢の人々を救ってきた。

だが日本の犯罪率が高いわけではなく、斥流少女が常人よりも遥かに優れた五感を有しているからだ。

ゆえに一般的なヒーローよりも索敵範囲が広く、さらに重力操作によつて空を飛べば何処にでもすぐに駆けつけられる。

個性の弊害によつて超重力下での生活を余儀なくされているものの、彼女は血も滲むような努力の末に乗り越え、とてつもないパワーを修得したのだ。

そのような驚くべき事実を育ての親である孤児院の院長先生から聞き、不鮮明になっていた事件を新情報と照合した結果、明らかになった隠された事実であった。

そんな現時点でもプロヒーロー並の能力を持ちながら、未だに発展途上で可能性の塊

のような斥流少女である。

しかし欠点がないわけではなく、当の本人はヒーロー活動をやる気が全くなかった。目の前でヴィランが暴れていても、ヒーローが居れば裏に回って見守るだけで何もしない。

事故現場でも各関係者が指揮を取り、解決できそうなら傍観者に徹する。

たとえばヴィランと戦闘状態になったとしても、他にヒーローが存在するか増援を呼んでいた場合、あくまでサポートに徹して積極的には戦おうとしない。彼らの補助に回って、とにかく相手が逃げなければそれで良しとするのだ。

けれど彼女はヒーロー免許を持っていないし、まだ学生だ。

行動的には正しいので、こちらからは何も言えない。

それでも斥流少女の活躍を見ると、既に第一線級のプロヒーローと言っても過言ではない程の実績を上げているし、なかなか複雑である。

ゆえに特例で仮免許を発行しようとか関係各所が水面下で動いているが、彼女が断固拒否するのは目に見えていた。

あまりに強引に進めると関係悪化を招くため、今は少しでもヒーローに興味を持ってもらい、あわよくば将来の進路希望としてあげてもらおうことを期待したい。

そして斥流少女は、ナンバーワンヒーローである自分以外は殆ど知らない。

逆に言えば他のヒーローには見向きもせず、オールマイトを応援してくれているのだ。

私の決め台詞も真似ているし、やる気が皆無という点以外はワンフォーオールを継承するのに文句なしの逸材と言える。

自分もオールフオーワンとの激戦で負った怪我により、平和の象徴でいられる時間は、もうあまり残されていない。

ここは一度会って確かめるべきと考え、入念に準備を行って斥流少女せきりゆうに連絡を取るのだった。

今までは、ヒーローや警察やマスメディアなどの勧誘には色好い返事はもらえていない。

しかしオールマイトが直接会って話したいと、院長先生に伝言を頼んだ。

育ての親は斥流少女せきりゆうを全面的に支持していて、どんな脅しや権力にも屈しない芯の強さを持っている。

だが幸い彼女が私のファンということもあり、ちゃんと指定の場所まで来てくれたよ

うだ。

知り合いのヒーローが運転する車から降りた彼女の前に広がるのは、土や石以外には何も無い広々とした空間である。

自分がどうしてこの場所に呼び出されたのか、斥流少女は良くわかっていないようだった。

ここまで案内してくれたヒーローに、少し待つようにと言われて首を傾げていた。

なので崖の上待機していた私は、頃合いを見てマッスルフォームになって飛び降り、すぐ下の彼女の前に華麗に着地する。

「私が！ 来たっ！」

「オールマイト!?!」

驚きの表情を浮かべる斥流少女を見て、ナンバーワンヒーローとしての演出が成功したことを確信する。

そしてすぐに彼女は鞆の中に手を入れ、何枚ものサイン色紙をこちらに向けて差し出す。

「オールマイト。あの、サインを」

「もちろん良いとも！ しかし、随分多いね！」

普通一枚か、多くても二、三枚だ。

しかし彼女は二桁の枚数を用意しており、少しだけ驚いた。

「家族がオールマイトのファン」

「そつ、そうか！ 斥流少女はどうなのかな！」

平静を装って色紙にサインをしつつ、さり気なく斥流少女に尋ねる。

すると彼女は申し訳なさそうに、視線をそらせた。

「私は別に、あまり興味は」

ファンではないと、はつきりとは断言しなかった。

こちらを気遣う優しさで心が痛かったが、少なくとも嫌われていないことがわかる。

ちなみに本日呼び出した場所である採石場には、信頼できるヒーローたちが集められている。

だが彼らは私を哀れんだり、声を押し殺して笑っていた。

秘密を守る間柄なので怒りはしないが、内心としては複雑であった。

「さあ、書き終わったよ！」

そう言つて全ての色紙にサインを書き終わった私は、彼女に返却してからコホンと咳払いをする。

マッスルフォームでいられる時間は限られているので、できるだけ早く本題に入るに越したことはない。

「早速で悪いんだが、私と模擬戦をしてもらいたい！」

「えっ!？」

話があると呼び出したのに模擬戦と聞かされて戸惑うのはわかるが、正直に内容を伝えたら拒否されていただろう。

騙すような真似をして申し訳ないものの、今後の日本の平和のためにはどうしても必要なことだった。

「斥流少女が、ヒーローになりたいたくないのを知っている！」

だがこの模擬戦は、とても重要なことなんだ！

本当に申し訳ないが、どうか受け入れてもらいたい日と」

私は彼女を真っ直ぐに見つめて説得する。

まだ斥流少女がワンフォーオールの後継者に相応しいかはわからないが、それを確かめるための模擬戦であった。

「……………うーん」

彼女はかなり悩んでいるようで、腕を組んで空を見上げている。

その姿は見た見た目相応の幼い少女であり、とても可愛らしかった。

ヒーローデビューはしていなくても、多くのファンが応援しているのもわかる。

例えるなら妖精のように可憐な姿で、近くに居るだけで周りの者に安心を与える。

私が斥流少女について分析していると、やがて結論が出たのか視線を合わせて答えを口に出す。

「オールマイトはサインをくれた。少し戦うぐらいなら構わない」

「協力に感謝する！ 服や靴などが破損した場合、全てこちらで弁償しよう！」

「ありがとう」

口数は少ないが、やはり彼女は善性の人だ。

騙して連れてきたと受け取られても仕方がないのに、家族が世話になったからと私の提案を受け入れてくれた。

なので少しだけ離れて、斥流少女と静かに向かい合う。

他のヒーローは安全な場所に移動し、監視や邪魔が入らないように周囲の警戒を行う。

「まずは斥流少女から、打ち込んできてくれ！ 私がキミに合わせよう！」

今回は彼女のヒーローとしての素質、戦闘能力を見るのが目的だ。

マッスルフォームなら大抵の攻撃には耐えられるので、防御に回ってしばらく様子を探る。

いくら模擬戦といっても、斥流少女に怪我をさせるわけにはいかないのだ。

孤児院の院長先生には事前に詳しく説明してあるが、それでも謝罪案件になるのは困

るのだった。

少し思考が横道にそれたが、いよいよ模擬戦が始まった。

「じゃあ、遠慮なく」

開始と同時に、彼女は私めがけて突っ込んできた。

それは通常の跳躍を重力操作で加速し、まるで弾丸のような高速の飛び蹴りを放つ技だ。

テレビのニュースでもたびたび紹介されているのもあるが、斥流少女の個性や使い方は調べさせてもらっている。

「ふんっ！」

「やあっ！」

重力操作の個性にも関わらず、プロのアスリート並の身体能力を持っていることも知っているのだ。

彼女の蹴りに拳を衝突させて、そのまま吹き飛ばす。

様子を見るために手加減したとはいえ、斥流少女は足せきりゆうを痛めることもなく飛び退り、危なげなく着地して予想通りのノーダメージであった。

「では、ギアを上げていくぞー！」

私は大きく息を吸い込んで、ワンフオーオールの出力を上げる。

手加減はするが彼女が何処まで対応できるか、それを見極めるのが目的だ。

「速いっ!?!」

だがしかし、攻勢に転じた私の拳はあっさり避けられた。

驚きの表情を浮かべたものの、どうやら動きが見えていたので自身の重力を操作して緊急回避しようだ。

けれど、それで終わりではない。

私はすぐさま距離を詰めて、ラッシュによる追撃を行う。

今度は一発で終わりではなく、彼女は頑張つてガードや回避を行っているもの、たちまち防戦一方になった。

「ならばっ! ……変! 身!」

斥流少女^{せきりゅう}が大声で叫ぶと、彼女の全身から煌めく光の粒子のようなものが放出された。

そして私の速度にあっさり追いつくだけでなく、防御や回避にも余裕ができたようだ。

「これは、初めて見るな!」

私の渾身の一撃を、まるで妖精のように華麗に舞って避けた彼女は、遠くの岩場に軽

やかに着地する。

「斥流少女！ やるな！」

「えっ？ ありがとう？」

斥流少女は急に褒められたことで、若干困惑している。

少しだけ動きが止まったが、余裕ができたからか今度は彼女から攻撃してきた。

岩場から飛び降りて、互いの拳と拳がぶつかり合う。

少し遅れて衝撃波が広がり、周囲の地面が大きくえぐれる。

だが私も斥流少女も全く気にせずに、今度はラッシュの速さ比べを行う。

「私の動きに対処できるヒーローは！ そうはいない！」

「それは！ どうも！」

互いに拳を交えつつ、少しずつワンフオーオールを出力を上げていく。

徐々にギアを上げていくと、やがて彼女は対処しきれなくなる。

私の本気の一撃に辛うじてガードに間に合ったものの、不安定な姿勢を受けたことで

斥流少女は大きく吹き飛ばされて崖に激突した

「どうやら……まで、……何だっ！」

だが次の瞬間には彼女の周囲の砂煙が吹き散らされて、全身から絶えず放出される煌めく粒子が先程よりも増加し、より成長した斥流少女が無傷で立っていた。

彼女の頑丈さはわかっていたが、まだ奥の手を隠し持っていたようだ。

経験から判断すれば先程よりも強くなっているのはほぼ間違いない、私は自然と不敵な笑みを浮かべた。

しかし他にも気になることがあり、そのことについて尋ねるためにその場から動かずに、大きな声で質問する。

「斥流少女！ その輝きと成長はどういうことかなー！」

「えっ？ 輝き？ 成長？」

質問の意味がわかっていないのか、明らかに困惑している。

しかし周りで成り行きを見守っているヒーローたちも皆気づいており、口は開かないがコクコクと頷いていた。

てつきり斥流少女も知っていることかと思っていたが、一体どういうことなのだろうか。

「キミは戦闘前よりも、明らかに成長している！」

私がビシツと指を指して伝えると、彼女はかつてない程に動揺していた。

そこでようやく自分の体に起きた異常に気づいたようで、困惑しつつもあちこちを触って確認する。

「あつ、わわわっ！ 何これっ!? 何これえー!？」

可愛らしい絶叫が採石場に響き渡った。

だが当人にわからないことが、今日会ったばかりの私を知るわけがなかった。

最初は小学生低学年だったが、今は高学年の体格だ。

服や靴のサイズが小さいため、色んな箇所がパツンパツンである。

さらには謎の輝く粒子が全身から放出されているし、はつきり言つてとても目立っていた。

パワーやスピードも格段に上がっており、手加減した私と互角に打ち合っていた。

そして先程彼女が二段階までギアを上げたことで、本気のワンフオーオールに迫るほどに高まっているはずだ。

「まあ、私には良くわからないが、悪いものではないだろうか。」

「……確かに」

何とか平静を取り戻せたようで良かった。

彼女は個性の扱いにかけては既に一線級のヒーローだと思っていたが、意外な一面を知った。

だがそれはそれとして、模擬戦はまだ終わっていない。

「さあ！……続きといこうか！」

彼女の底は見えずに、私は再び構える。

すると斥流少女は体の具合を確かめるような軽く柔軟体操をしたあと、いきなり彼女の姿がブレた。

「やはり！ 速いな！」

先程よりも遥かに強化された身体能力は、本気のワンフォーオールと互角に打ち合えている。

そこに重力制御まで加われば、いくら私でも対処するのは難しい。

しかし戦闘経験が豊富な私は斥流少女の不意打ちに対処し、逆に拳で殴りかかろうとした瞬間、全身が鉛のように重くなった。

「これは！ まさか！」

模擬戦を開始してから、もつとも重い一撃が私のみぞおちに叩き込まれる。

「がはっ!？」

今の斥流少女は私と同等の身体能力で、こちらの戦闘経験を重力操作の個性で対抗している。

まだ全力全開には至っていないが、それでも互角と言って良いほどの強さだ。

「だがっ！ まだまだあ！」

「遅いっ！」

重りを背負っている状態だが、私はまだ動ける。

しかしこちらの攻撃は一発も当たらず、逆に向こうの拳が次々と叩き込まれていた。現時点での彼女の實力は、名だたるトップヒーローと比べても遜色ないどころか、斥流少女に勝てる相手を探すほうが難しい。

模擬戦が始まって短い時間しか戦っていないが、私はそう確信した。

「まだ倒れない?」

ダメージはかなり蓄積しているが、まだ耐えられる範囲だ。

「ナンバーワンヒーローだからね!」

そう言つて繰り出した拳は、またもや空振りした。

今のままでは不味いかも知れない。

「本気を出すべきか!」

「本気!?!」

彼女は一瞬驚いて距離を取り、次に空中に落ちていった。

いつの間にか体が軽くなっていたので、次で勝負を決めるのだと自ずと察する。

「あの技を使うつもりか!」

斥流少女が、せきりゆうヴィランとの戦いで良く使う技だ。

加速するための距離が必要で直線的な軌道なのでカウンターを狙いやすくはあるが、あの高速の蹴りを迎え撃てる者は殆ど居ない。

初手で使用した時は加速が足りずに、身体強化も行つてなかった。けれど、今度は確実に仕留めに来るようだ。

「いいとも！ 勝負だ！ 斥流少女！」

ナンバーワンヒーローの私は、ワンフォーオールの出力を最大まで高めていく。そして斥流少女の一挙手一投足を観察し、いつでも動けるように呼吸を整える。

「重力加速！ 三倍！」

常人なら死は避けられない強力な一撃が、物凄い勢いで迫ってきた。

光の粒子を放出しながら赤熱した蹴りを放つ斥流少女を、こっちも全力全開の拳で真正面から迎撃する。

「アトロイトッ！ スマアアッシュウーツ!!」

私と彼女の互いの大技が、真正面から衝突した。

反動で両者が勢い良く弾き飛ばされたが、殆ど互角だったので距離が開いた以外は二人共危な気なく着地する。

巨大なクレーターを中心に渦巻いていた砂煙が止んだあと、再び視線が交差した。

「斥流少女！ まだやれそうだね！」

ダメージはともかく疲労は蓄積しているはずなのに、まだまだ元気そうだ。

彼女も私と同じ増強系の個性じゃないのかと、そう疑ってしまいそうである。

しかし斥流少女は困ったような表情を浮かべて、やがてこつちを真っ直ぐに見つめてきた。

「まだやれる。けど、これ以上は危険」

確かに戦闘の余波によって着ている服がビリビリに破れている。

私のように耐久性に優れたヒーローコスチュームではないので当たり前だが、大切な部位を隠す下着は無事なのは不幸中の幸いだった。

しかし彼女がそのことを言っているとは限らないので、念のために尋ねておく。

「何故かね？」

「全力で戦うと大怪我するし、最悪死ぬ」

この発言を受けて、私だけでなく周りのヒーローたちに驚きが広がる。

そして斥流少女が今までひた隠してきた事実を知り、我々は確信した。

「なるほど！ そうだったのか！」

既に一線級のヒーローと言っても過言ではない斥流少女だが、自らの個性による弊害を克服できてはいない。

模擬戦の最中に急成長したり光り輝く粒子を放出していることに、全く気づかなかつたのも頷ける。

「斥流少女は、自らの個性を制御しきれていないのか！」

彼女は口は開かなかったが、静かに頷いた。

それを確認した私は、頭の中で状況を整理していく。

(あの急成長は、心身にかなりの負荷がかかっているようだな！)

さらに段階を上げることにならざるが心身への負荷も高まり、一定のラインを越えると耐えられなくなり、命を落とす危険がある。

今の状態は彼女にとっての切り札であって、今までずっと使わずに封印していたのも無理もなかった。

けれどももし斥流少女が全力で戦えるようなれば、とてつもないヒーローになるのは容易に想像できた。

そのことを強く自覚した私は、真っ直ぐ彼女を見つめる。

「ならば！ 我々が斥流少女を教え導こう！

それがヒーローの！ いや、大人の役目だからね！」

大声を出して私が構えを解くと、彼女は若干困惑しつつも大きく息を吐く。

斥流少女は良くわかっていないようだが、見た目は小さな子供で年齢もまだ中学生だ。

しかし現時点の実力はプロヒーローと遜色なく、まだ底が見えないという規格外な少女だ。

個性を完全に制御できるようになれば、さらに大きく伸びるのは間違いない。

ならば、ここは我々が教え導くべきだろう

いくら強くても全力を出すたびに体を壊して病院に担ぎ込まれるヒーローでは、命がいくらあっても足りない。

しかしヒーローになるのを嫌がっている少女に、日本の平和を守るように説得するのは骨が折れそうだ。

さらにワンフオーオール継承者としての素質はあっても、今のところは全くやる気がないのに、いつか巨悪と対峙する使命を背負わせるわけにはいかなかった。

(痛し痒しだな)

私がそんなことを考えていると、斥流少女はいつの間にか煌めく粒子の放出が止まり、小学校低学年の体格に戻っていた。

「斥流少女、あちらの岩陰で替えの服に着替えるんだ」

「わかった」

彼女は女性のヒーローに案内されて、誰も見えない岩陰に向かった。

しかし、どういう理屈かは不明だが肉体が急激に変化するのだ。

やはり自分に近い増強系の個性なのではと、何度目かの疑問を抱くのがあった。

原作開始

中学三年生の進路希望

時は流れて、私は中学三年生になった。

相変わらず幼女体型から変化せずに、胸だけが毎年少しずつ育っていた。

旅行以外にも個性の修行で他県に落ちて行くこともあり、成り行きで色んな事件に陰ながら首を突っ込んだりと、平穩とは言い辛い日々を過ごしている。

ヒーローの勧誘も何度もあったが、私はこれっぽっちもその気がないのでお断りさせてもらっていた。

昔と変わらず学業に専念できるのは、きつと院長先生のおかげだ。

とてもありがたいので、将来は孤児院に寄付金を払うことで少しずつでも恩を返していきたい。

ちなみに三年生のクラスでも、緑谷君と爆豪君と一緒にだった。

つくづく縁があるものだと思いますが、私は担任の先生に話に耳を傾ける。

彼は教卓の前に立って、何かのプリントを用意しているようだ。

「お前らも三年ということ、本格的に将来を考えていく時期だ。

今から進路希望のプリントを配るが——」

そう言つて先生をプリントを手に持ち、良い笑顔で教室中にばらまいた。

「皆、大体ヒーロー科志望だよね！」

「「はい!!!」」

緑谷君と自分以外が個性を使って楽しそうな雰囲気の中で、先生からも原則として禁止だと笑いながら注意する。

何にせよ生徒の心を掴むパフォーマンスは成功してのか、しばらく教室が騒がしく皆は色んなことを話し合っていた。

(けど、私は普通科希望)

ヒーローを目指さない生徒は少数派で、しかも口下手で場の雰囲気について行けない自分は完全なアウエーである。

別に寂しくはないが皆と違って一步引いた状態で外から眺めていると、爆豪君が何かに気づいたようで大きなを出した。

「先生！ 皆とか一緒くたにすんなよ！ 斥流は普通科希望だぜ！」

「そうだった！ 斥流は、地元の普通科高校を希望してたな！ すまんすまん！」

地元の普通科を希望しているのは、中学一年生から変わっていない。

く。担任の先生も覚えていてくれたらしく、私は口を開かないが肯定するように静かに頷く。

「しかし勿体ないな！ 雄英志望ゆうえいなら、推薦合格は確実なのだが！」

「私は普通科がいい」

「そうか！ まあ、斥流せきりゅうの進路だ！」

後悔しないように、良く考えて決めるといい！」

取りあえず先生からの追及はなくなつたので、私はホツと息を吐く。

次に担任はふと思ひ出したように、爆豪君に視線を向ける。

「そう言えば爆豪は、雄英志望だつたな」

先生の発言で教室中がざわめき、爆豪君に自然と視線が集まる。

雄英高校は毎年大勢のヒーロー志望が受験して、その殆どが落ちるといふ超名門ゆえの最難関なのだ。

余程優秀な成績と強個性を持っていない限りは、止めておいたほうが無難である。

しかし爆豪君は模試でA判定を取つたと、早朝の訓練を終えて一休みしていたときに自慢気に語っていた。

さらに将来的にオールマイトを越えて、納税者ランキングに名を刻むとも言っていたが、きっと合格確実なのが嬉しくてテンションが上がっていたのだろう。

そんなことを考えていると、担任の先生がまた何か思い出したようだ。

「そう言えば、緑谷も雄英志望だったな」

その瞬間、教室中の視線が緑谷君に集中する。

誰も喋らずに静まり返ったのは短い時間だけで、すぐに爆笑の嵐が吹き荒れた。

「緑谷？ 無理っしょ！」

「勉強できるだけで、ヒーロー科は入れねえんだぞ！」

他の生徒は笑いながら話しているが、緑谷君はとても肩身が狭そうだ。

「そつ、そんな規定はもうないよ！ 前例がないだけで！」

彼が慌てながら反論すると、爆豪君が席から立ち上がる。

そして無言で緑谷君の元まで歩いていく。

「デクウー！」

「かつ、かつちゃん!？」

あれだけ騒がしかった教室も静かになり、いつもと様子が違う二人の様子を固唾を飲んで見守っている。

「ちつ、小さい頃からの目標なんだ！ そつ、それに！ やってみないとわからないし

！」

「デメエが何をやれるんだ！ 無個性のくせによオ！」

緑谷君はあたふたしながらも、威圧してくる爆豪君を相手に一步も引かない。

私にはとても立派に見えたからなのか、気づいたら自分も席を立っていた。

「強い個性でも、ヴィランに落ちる人もいる！」

私は緑谷君がヒーローになれると信じてる！」

教室が静まり返っていたので、普段は無口な私の声はとても良く響いた。

それに緑谷君は昔は貧弱だったが、今の彼は体力がついて無個性でもかなりの強さだ。

なので地元の中学では、彼は勉強と運動共に上位に入っている

しばらく誰も口を開かなかつたが、やがて爆豪君を頭をかいて緑谷君を睨みつける。

「デクウ！ 猿山のボスじゃ！ 雄英は合格できねえぞ！」

「えっ!? そつ、その！ かっちゃん！ 応援してくれるの!?!」

「誰が応援するか！ 死ぬっ！」

爆豪君を最後にそう言つて、苛ついた表情で自分の席に帰っていく。

相変わらず仲が良いのか悪いのか良くわからないけれど、おかげで生徒たちは落ち着いたようだ。

そして先生は手を叩いて場を仕切り直し、平常通りの授業に戻るのだった。

三年生の進路希望調査を行った日、修業を終えた私は緑谷君と一緒に下校していた。当たり前だが別に恋人同士ではないし、小学生低学年の容姿なので歳の離れた家族に見られることも多い。

私は元々人付き合いが殆どなく、恋愛どころか交友関係も良くわからない。

けれど彼と一緒に帰ることは不快ではなく、自分の数少ない友人として認定している。

まあそれはともかくとして、彼と同じ道を歩いている理由だが、院長先生に買い物を買ったからだ。

「お一人様二パック限りの卵。」

付き合ってくれてありがとう」

「僕もちょうど買いたい物があつたし、気にしないでよ」

緑谷君は本当にいい人だ。彼が付き合ってくれたおかげで、特売の卵がもう二つ購入できる。

並んで通学路を歩きながら、他愛もない話を続ける。

「そう言えば、斥流さんは料理をするの？」

「孤児院の料理は、年長組の役目」

小さい子供が包丁を扱うのは危険なので、年長組が交代で調理を行うのがうちの孤児院の決まりだ。

なので自分の料理スキルはプロ並とは言わないが、初心者よりもできる方だと思つて
いる。

そんな話をしながら歩き、少し薄暗い道路の下のトンネルに足を踏み入れた。

すると突然何の前触れもなく、排水溝から緑色のヘドロのような何かが、まるで意思を持つているかのように私たちに襲いかかってくる。

「Sサイズの！ 隠れ蓑！」

「斥流さん！」

私の感覚器官は並の人間よりも優れているが、あまりに予想外で対処が遅れてしまった。
た。

緑谷君は自分を庇うように前に出て、謎のヘドロに取り込まれる。

「緑谷君!？」

「大丈夫！ 体に乗っ取るだけさあ！」

ヘドロが意思を持っているだけでもおかしいのに、人の言葉を喋っている。

つまり目の前で起きているのは個性による攻撃で、体に乗っ取るのは悪いことだ。

なのでコイツはヴィランなのは間違いない、今この瞬間も緑谷君は苦しみから逃れる

ために必死にもがいている。

個性を使用するは原則として禁止であり、人に向けて使うのはもつと駄目だ。

しかし現状を理解した私は、もはや躊躇いはなかった。

「緑谷君！ 大丈夫！ 必ず助ける！」

素早く重力操作を行い、両者を引き離すように落とす。

「ばっ、馬鹿なっ!?!」

「けほっ！」

流体なのでまともに掴めずに、自力での脱出はきつと困難だった。

けれど今回は油断していたし、まさか重力によつて強引に引き剥がされるとは予想もしていなかったのだろう。

拘束から逃れた緑谷君は怪我をしないように私が受け止めると、ヘドロのヴィランは受け身を取れずに地面に撒き散らされた。

「せつ、斥流せきりゅうさん、助けてくれてありがとう」

「気にしないでいい」

少し咳き込んでいるが、無事なようでホッと息を吐く。

だがその隙を突いて、ヴィランが地面を張って排水溝に潜り込もうとしている。

「逃さない！」

幸いなことに動きは普通に目で追える程度だったので、今度は重力を反転させてヘッドの塊をトンネルの天井に叩きつけた。

「がぁあっ!?!」

そのままヴィランが動けなくなるまで、少しずつ出力を上げていく。

やがて殆ど平面に広がったまま身動きが取れなくなったところで、私は静かに息を吐いた。

「コレ、どうしよう?」

「やっぱり警察に通報かな」

私はスマートフォンを持っていないので、警察への連絡は緑谷君に任せるしかない。

「じゃあ、お願い」

彼が懐から取り出すのを気配で何となく察して、重力操作を解除しないためにヴィランに注意を向け続けた。

すると今度は突然背後のマンホールの蓋が吹き飛んで、そこからテレビに良く出ている有名人が颯爽と現れる。

「もう大丈夫だ! 少年少女!」

彼はお決まりの台詞を堂々と口にして、格好良くポーズを取る。

ちなみに私の視線はヴィランに向けているので、全て超感覚による想像であった。

「何故ならー！ 私が来たー！」

「おっ、おっ！ オールマイトおおお!!!」

緑谷君は突然のナンバーワンヒーローの登場に、子供のように瞳を輝かせて大喜びしていた。

私は彼とは何度か顔を合わせたことがあるが、別にファンというわけじゃないし、驚いたりもしない。

ただオールマイトは自分の個性に興味があつたようで、採石場で戦闘訓練を受けさせられたがあつたのだ。

他にもプロヒーローが勢揃いしていたが、誰も止める様子はなかった。

子供たちのためにサインを書いてもらったし、お礼も兼ねて付き合うことにした。

その際に重力加速三倍で飛び蹴りしたらデトロイトスマッシュで相殺されたし、オールマイトは別に必殺技ではない全力パンチだ。

こっちは十分な加速を得るために時間や距離が必要なもので、残念ながら連続使用はできない。

衣服が損傷する以外にデメリットがないから良いが、斥流少女の本気を見せて欲しいとまで言ってきたのだ。

大怪我するか最悪死ぬので無理と訴えると、ようやくわかつてくれたのか戦闘訓練は

終了となる。

もしデトロイトスマッシュがオールマイトの全力だとしたら、下手をすれば平和の象徴を殺してしまう可能性がある。

あの状態への移行は初めてで慣れていないこともあって、正直強大なパワーを持って余っていた。

なのでこれ以上の抑制解除は、危険と言わざるをえない。

けれど一応は納得してくれたので、その場は新品の衣服や靴を提供されてお開きになったのだった。

ちなみに後日、オールマイトのサイドキックだったサー・ナイトアイが孤児院にやって来て、ヒーローになって欲しいとしつこく勧誘される。

彼が言うには、惨たらしい最後を遂げるはずのナンバーワンヒーローを間一髪で救うのが、女子高生に成長した私らしい。

抑制解除を行えば小学生低学年から急成長するため、未来予知で見た少女が私であると判断したようだ。

けれど未来のことなんて誰にもわからないし、実は別人かも知れない。

しかもサーナイトアイのイメージは、物凄い美人の天使が煌めく翼を羽ばたかせて戦

場に降り立つという、何とも神々しいものだった。

彼女は凶悪なヴィランの軍勢を前に一歩も引かず、大勢のヒーローを率いて先頭に立って戦い、どんな絶望的な状況でも決して諦めずに困難を打ち破り、勝利を掴み取っていた。

さらには日曜の朝のアニメに登場するような、綺羅びやかな魔法少女の衣装を着用していたというが、自分はヒーローでもコスプレイヤーでもなく一般人だ。

それが私だとは、絶対に認めたくなかった。

なのでサー・ナイトアイに未来を読み取られる前に、断固拒否の姿勢として台所から塩を持ってきて、ヤケクソ気味に撒いてお帰りいただいたのだった。

斥流陰子 V S ヘドロヴィラン

私はナンバーワンヒーローとの模擬戦や、サー・ナイトアイに会った過去を振り返っていた。

その間にオールマイトが重力で捕らえていたヘドロのヴィランを回収し、それをきつちりペットボトルに詰めて、封印完了である。

ちなみに緑谷君は憧れのオールマイトに会えて嬉しいのか、ただ今大混乱中であった。

「いやー！ 悪かった！ ヴィラン退治に巻き込んでしまった！

いつもはこんなミスはしないのだから！

慣れない土地で浮かれちゃったかなあ！ あーはっはっはっはっ！

ここまで一息で喋れるのは、流石はナンバーワンヒーローだと感心する。

「しかし！ キミたちのおかげさ！ ありがとうー！

褒められても私は緑谷君からヘドロを引き剥がし、天井に落とすただけだ。

そこまで大したことはしていないが、ここで遠慮しても話が長引くだけなので、お礼は素直に受け取っておく。

「ああっ！ そうだ！」

ようやく緑谷君が正気に戻ったようで、慌てて何かを探しだす。

「サイン！ サインを！」

やがて鞆の中からノートを取り出して、オールマイトに渡してサインをお願いする。彼はそれを受け取ると、快く応じてくれた。

「あつ、ありがとうございますー！ 家宝ー お宝にいいい！」

緑谷君は喜びすぎて、さらに混乱していた。

流石はナンバーワンヒーローだけあつて冷静だ。

フアンの扱いに、慣れているのかも知れない。

「せきりゆう斥流少女は、サインはいいのかね！」

「私はいらない」

「そつ、そうか！」

ナンバーワンヒーローのサインは、家族のために何枚かお願いしたことがある。

もちろん快く応じてくれたが、私個人としては別に欲しくはない。

彼は少し残念がっていたが気を取り直して、ペットボトルに詰め込まれたヘドロヴィランをズボンのポケットに入れる。

「じゃあ、私はコレを警察に届けるので！」

そう言つて彼は、ペットボトルをポンポンと叩いて背を向けた。

「液晶越しに！ また会おう！」

あまり興味がない私としては、別に会えなくても困らない。

決め台詞の許可はもらつているし、特に問題はなかった。

緑谷君がまだ何か言いたそうにしているが、オールマイトはそのことに気づいていても軽く流す。

「プロは常に、敵か時間かの戦いさー！」

準備運動を欠かさないのも、戦闘に備えているかも知れない。

私は我関せずとばかりに少し離れた位置に立つて、二人のやり取りをのんびり眺めていた。

「それでは！ 今後とも！ 応援よろしくねー！」

オールマイトは物凄い脚力でジャンプして、空の彼方に飛び去る。

けれど私はここで、あることに気づいた。

「あれは、緑谷君？」

何故かナンバーワンヒーローの足に、緑谷君がくっついて一緒に飛んでいったのだ。

オールマイトに着いて行つたのは彼の意思である。

何か考えがあるだろうし、自分が同行したり無理に連れ戻すのもどうかと思う。

「卵二パック買ったかった」

特売はお一人様二パック限りなので、緑谷君が居ないと合計四パックの購入はできない。
い。

私はもう一度空の彼方を眺めて溜息を吐く。

けれどクヨクヨしても始まらないため、気持ちを切り替えていつも買い出しに行っているスーパーマーケットに向かうのだった。

オールマイトと緑谷君と別れた私は、帰り道に行きつけのスーパーに寄って院長先生に頼まれた買い物済ませる。

あとは孤児院に戻るだけだが、その途中で何処か遠くで火災が発生していることに気づいた。

近くまで行って近隣住民の話を聞く限りは、ヴィランが人質を取って暴れていて、集まったヒーローも迂闊に手出しができない状況らしい。

何が起きているかは確認してないので何とも言えない。

けれど既にヒーローが集まっているため、焦らずに人混みをかき分けて現場の様子をこの目で確かめることにする。

(見て見ぬ振りにはできないし)

私が孤児院に帰ったあとに犠牲者が出たら、寢覚めが悪くなる。

けれど既にヒーローが駆けつけていて増援も呼んだらしいし、自分の出番はないかも知れない。

おっとり刀で前の方までやって来ると、何やら聞き慣れた声が聞こえてくる。

「爆豪君？」

私の五感常人以上なので、遠くの音まで聞き取れる。

数少ない友人の声が聞こえてきたので、少し焦りつつ隙間を通って前に歩いて行く。

すると緑谷君がヘドロのヴィランに掴まっている爆豪君を助けるために、皆の静止を振り切り一人で駆け出したところだった。

「かつちゃん！」

人混みでごった返していることもあり、身長の高い私ではまだ良く見えない。

けれど今はずとも不味い状況だということは、周囲の会話だけで十分に理解できた。

「何で！ デクがああ！」

「何故って！ 足が勝手に！」

緑谷君はそう言って鞆の中身をぶつけ、ヴィランの気をそらす。

取り込まれつつある爆豪君を助けようと、泣きながら必死に手を差し伸べていた。

「君が！ 助けを求める顔してた！」

その瞬間に私は地面を蹴り、個性を発動して空中を飛びつつ敵に向かって突っ込む。けれど自分が介入するよりも先にヴィランが触手を振り上げ、緑谷君を攻撃するほうが少しだけ速そうだ。

「もう大丈夫！ 私が来た！」

定番の台詞を口に出してヴィランの注意を引いた私は、孤児院の子供からもらった玩具のコインを素早く取り出した。

「撃ち抜く！」

相手は流体なので、穴が空いても死にはしないだろう。

玩具のコインを急加速させて撃ち出した。

「がつー！」

狙い通りにヴィランの体に小さな穴が空いて、一瞬だけ攻撃の手が止まった。

通り過ぎたコインは後ろの建物に深々とめり込み、あとで多額の損害賠償を要求されたらどうしようと内心冷や汗をかいたのは秘密だ。

「邪魔を！ するなああああ！」

しかし今は、そんなことを気にしている暇はない。

僅かとはいえ敵が怯んでいる間に、抑制を一段階だけ解除する。

「変！ 身！」

超重力を少しだけ軽くすることで、小学生低学年から二年ほど急成長する。

前にオールマイトと模擬戦をした時には、彼の手加減状態と互角に打ち合えた。

なのでヘドロヴィランの触手による連続攻撃を次々といなし、続いて地面に足をつけて勢い良く跳躍する。

爆豪君に当たらないように気をつけて飛び蹴りを放つ。

「重力加速！ 二倍！」

敵は人質を捕らえたまま離さないし、緑谷君もすぐ近くに居る。

さらに商店街のど真ん中で道幅も狭く、大勢がろくに避難もせずに集まったままだ。

周辺への被害を考えると、大技は使えない。

そこで私は、至近距離から高速の飛び蹴りを当てた。

オールマイトとの模擬戦以降は、この状態での修業も始めたので力加減はバツチリだ。

「ぐわあああっ?!?!」

赤熱する程の加速は得られなくても、流体のヴィランに大ダメージは与えられた。

蹴りを当てた箇所が大きくへこみ、一部が吹き飛んだ。

攻撃の反動を受けた私は、光り輝く粒子を放出しながら空中で一回転する。

そして緑谷君を庇うように、華麗に着地した。

理由は不明だが超重力というデバフを解除すると、全身からキラキラした粒子が放出されて一時的に急成長する。

今のところは二段階までしか解除したことはないし、まだあまり慣れてはいない。

それでも目の前のヴィランなら一段階で十分対処できるし、初披露のオールマイト戦とは違い、加減を誤って大怪我をさせたり殺してしまう心配もなさそうだ。

自分の背後に居る緑谷君が、パツンパツンの私を見て大きな声を出す。

「せつ、斥流せきりゅうさん!？」

「話はあとにして」

振り向かないが、緑谷君が驚きの表情を浮かべているのはわかる。

二歳ほど急成長した私の姿は見慣れていても、突然参戦したのでびっくりしたのだらう。

「今から重力操作で引き剥がす。爆豪君をお願い」

「わっ、わかったよ!」

とにかく急いで緑谷君に指示を出すと、ヘドロヴィランに開けた穴が塞がる。

そして私を、憎々し気に睨みつけてきた。

「お前ええ! お前はあ! まさかああ! 二代目オールマイトかあああ!？」

二代目オールマイトとは、ヴィランの間で広まっている私の通称だ。

彼の決め台詞を使っている、さらに増強系の個性だと勘違いされているのが原因である。

「私は斥流陰子せきりゆういんこ！ いい加減覚えて！」

しかし今は爆豪君を助けたいといけないので、気にしている余裕はない。

念のために、個性を発動させる前に確認を取る。

「爆豪君！ 痛いけど我慢して！」

「いつ、いいから！ さっさとやりやがれ！ 斥流！」

当人のゴーサインが出たので、重力操作によってヘドロヴィランとの分離を図る。

やっていることは緑谷君と同じだが、相手は私の個性を知っているし引き剥がされたら終わりだと判断したらしい。

何としても彼を取り込もうと、必死に抵抗していた。

「離れてなるものかあああ!!!」

「むうっ！ 往生際が悪い！」

私がしていることを簡単に例えるなら、糊付けした二枚の紙を綺麗に剥がそうとしているようなものだ。

しかし今回はかなりしつかりくっついてるので、傷つけずに剥がすのはなかなか難

しい。

「あだだだっ！ 斥流！ もっと優しくやりやがれ！」

「これでも優しくしてる！」

爆豪君が痛がつているが、少しずつ分離は進んでいた。

「あと少しだけ、我慢して！」

「あと少しだど!? どれぐらいだ！」

「んー……五分? ううん、十分ぐらい！」

ヴィランが根負けすれば、その時点でこちらの勝利だ。

しかし全力組み付きが維持されれば、最低でも十分は作業が続きそうだ。

緑谷君も爆豪君の両手を持って、一生懸命引つ張っている。

だが、なかなか脱出は難しそうである。

「そんなに待てるか！ 馬鹿野郎！ 痛みで発狂するわ！」

「大丈夫！ 痛いだけで、怪我は大したことない！ 死ななきゃセーフ！」

「余裕でアウトだわ！ 精神的に死ぬだろうがあっ!!」

個人的にそれだけ元気があれば大丈夫だと思うのだが、爆豪君の望みを叶えるのは難しそうだ。

けれど双方の怪我は抑えるには、今のペースで時間をかけて引き剥がしていくのが一

番である。

私たちが爆豪君の救出に動いていると、すぐ後ろから聞き覚えのある声が響いてきた。

「本当に！ 情けない！」

自分はヴィランから視線をそらせないが、何が起きているかは想像できる。

「キミに諭しておいて！ 俺が実践しないなんて！」

緑谷君の表情が一変したことから、オールマイトは彼に何かを言ったのだろう。

「プロはいつだって！ 命がけえええ！」

そう言つて彼が拳を強く握りしめる音を感じ取った私は、この後に起きることを予想して身を固くする。

「デトロイト！ スマッアアアシューツ！！」

ヴィランに向けて超。パワーの拳が叩きつけられた。

とんでもない突風が発生して吹き荒れる中で、私は個性を発動して緑谷君と爆豪君を急いで確保する。

けれど自分と違つて攻撃の余波をまともに受けた二人はあっさり気絶し、私は彼らの手を掴んで木の葉のように空に舞うのを防ぐのだった。

事件のあと、周囲のヒーローや市民は流石はオールマイトだと称賛の嵐だった。

何だかんだで怪我人は殆どいないし、上昇気流で雨が降って火災も消えた。

終わり良ければ全て良しだろう。

「斥流少女も、協力感謝する！」

「どう致しまして」

私はただ、困っている知り合いを放って置けなかっただけだ。

命を捨ててまで市民を守る正義の味方とは違い、そんな崇高な心は持っていない。

だが何にせよヴィランは倒されてめでたしめでたしで、自分の役目は終わった。

気絶している二人を放置して先に帰るのは少し悪い気がしたが、この場に残っても面

倒が増えるだけだ。

「オールマイト」

「何だね！」

けれど一言だけ、ナンバーワンヒーローに向けて心配そうに声をかける。

「今、貴方に倒れられたら困る。」

だから、無理はしないで」

戦闘は終わったので自身に加重をかけ直し、粒子の放出を止めて元の体型に戻る。

すると彼は一瞬言葉に詰まったものの、こちらを真っ直ぐに見返してくる。

「はっはっはっ！ キミがヒーローになってくれれば、私の負担も減るのだがね！」
ナンバーワンヒーローは辛いなど、軽快に笑い飛ばした。

つまり彼は無理をするのは止める気はないらしく、私は良く観察する。

（明らかに前より弱体化してる）

私は過去に、オールマイトと戦闘訓練をしたことを振り返った。

あの時よりもさらに弱っていて、今も明らかに無理をしている。

このまま続ければ遠からず肉体が耐えられなくなり、ヒーローを引退することになるだろう。

（正直、それは困る）

平和の象徴が居るから日本の治安が保たれ、他国よりもヴィランの犯罪率が低いのだ。

（彼が引退したら、私が忙しくなる）

なので平和の象徴が消えればヴィランたちは息を吹き返し、日本中の治安が大きく悪化する。

私も流石に目の前で起きる事故や犯罪は無視することができず、速やかに解決するために危険に飛び込むだろう。

ぶっちゃけ、そんな面倒なこととはしたくない。

ヒーローは好きではないが、今の平穩な日本は嫌いではないのだ。

なので私はしばらく頭を悩ませたあとに、正直な気持ちを口に出す。

「わかった。ヒーローの件、考えておく」

「それはっ！ どういう心境の変化かな！」

相変わらずヒーローには全然興味がないし、命がけの仕事に就くつもりもない。

ちなみにいつの間にか、オールマイトだけでなく周囲のヒーローや市民も、私の発言に耳を澄ませていた。

けれどマイペースな自分は、特に気にせず素っ気なく答える。

「平和の象徴に、倒れられたら困る。」

だから、しばらく近くで様子を見たい」

色々考えた末の答えだ。

オールマイトは良くわからなかったようで、もう少し踏み込んで尋ねてくる。

「では、斥流少女はヒーローを目指すのかな！」

「ヒーローにはならない」

オールマイトや周りの人たちに変化はないが、何となくガツカリしたような空気を感じ取った。

「けど、雄英高校を受験する予定」

「ほうっ！ 雄英をかい！」

すると彼は嬉しそうに胸を張って、説明を始める。

「雄英は多くのヒーローにとって憧れの高校だが、全国屈指の難関だ！

でも大丈夫！ 斥流少女なら、きつと合格できるさ！

いいや！ その気になれば、推薦入学も可能だろう！」

オールマイトが太鼓判を押ししてくれたので、私も率直にお礼を口にする。

「ありがとう。私も合格できるように頑張る」

ただし受験するのは雄英高校でも、ヒーロー科ではない。

他にも様々な学科あるのは知っているので、普通科を受けるつもりだ。

「雄英高校なら、オールマイトの様子を見られる」

来年には雄英高校の教師をするらしいし、同じ学校ならオールマイトが無茶をしない

かと気にかけることができる。

実際に見つけて何をするかまでは決めていないが、私の行き当たりばつたりは今に始

まったことではない。

取りあえずナンバーワンヒーローを影からサポートをすれば、彼の引退を先延ばしす

ることができるだろう。

「待ちたまえ！ 斥流少女！ その情報は一体何処から!？」

しかしオールマイトは、とても驚いていた。

情報の出どころが気になるようだ。

やけに真面目な顔で質問してくるので、もしかして一般公開はされておらず、まだ秘密だったのかも知れない。

だったら悪いことをしてしまつたと、ナンバーワンヒーローに隠さず正直に話す。

「サー・ナイトアイが教えてくれた。……ごめんなさい」

彼が未来を読ませて欲しいと頼まれても断り、今もその気はない。

けれどサー・ナイトアイは諦めておらず、今もたまに孤児院を訪れるのだ。

その時に話題が出たのだが、きつとナンバーワンヒーローなら私の気が引けると考えたのだろう。

結果は適当に話をしたあと、体に触れる前にお帰りいただいた。

まあ、それは今は関係ないので置いておく。

とにかく私が深々と頭を下げると、オールマイトが豪快に笑い飛ばす。

「いやいや！ 別に責めているわけじゃないさ！」

何やら複雑な事情があるらしく、それ以上は追及してこなかった。

彼の表情は明るい、内心はかなり複雑なようだ。

しかし結局その後は特に何もなく、雄英高校の受験を頑張ってくれと励ましてくれたのだった。

ヴィラン退治のその後

ヘドロヴィランから爆豪君を救出したあと、捕まっても必死に抵抗を続けていた彼は称賛され、ヒーロー事務所から熱心に勧誘されていた。

逆に無我夢中で飛び出した緑谷君は説教されていたが、確かに彼だけでは無事に助けられたとは思えない。

けれど結果的に何とかなったので、私としては終わり良ければ全て良しである。

そんな事情はともかく、事情聴取や精密検査を受けた以外は、誰も罰を受けることもなく比較的早く解放された。

自分はヒーロー免許は持っていないが、個性を使ってもある程度は見逃してくれるので本当に助かっている。

まあそのような事情はともかく、孤児院の食事当番を休むわけにはいかない。

二人にまた明日と別れて、真っ直ぐ帰宅するのだった。

毎日のように全国各地でヴィランによる犯罪が起きている。

今回はたまたま地元で発生したが、余程のことでない限りはやがて平穏が戻ってく

る。

次の日もいつも通りの早朝に起きて、私は新聞配達のアルバイトを行っていた。緑谷君と爆豪君もすっかり慣れ、合流してからは私のすぐ後ろをジョギングしている。

だが今日は、いつもと様子が違うように思えた。

「二人共、何かあった？」

「えっ？ えっ!? なななっ！ 何もないよー！」

「ああ？ 別にいつもと変わらねえぞ」

ポストに投函しながら尋ねると、爆豪君はあつさり流した。

しかし、緑谷君はあからさまに動揺している。

これはやはり、何かあったと思ったほうが良いだろう。

けれど向こうに話す気がないので追及するのも悪い。

私個人としては少し気になったが、無理に尋ねるほどでもない。

結局いつも通りに新聞配達を終わらせて、公園に移動して恒例の戦闘訓練を行う。

何とか防衛に成功して無敗を守ったが、やはり二人は確実に成長している。

最近是完全抑制ではなく一段階だけ解放して戦わざるを得なくなるほど、彼らは強く

なった。

そして怪我をさせないように手加減しているとはいえ、倒れずに立つていられる時間も着実に伸びている。

「相変わらず、容赦がない」

「当たり前だろ！ 全力で戦わねえと！ 斥流は倒せねえだろ！」

「やっぱり！ 勝ちたいからね！」

勝利への渴望は彼らほど強くはない。

ヴィランと遭遇した時にヒーローが不在で市民に被害が出るから、重い腰を上げるぐらいいだ。

だが今はそんな事情は置いておいて、早朝の新聞配達をしている時からずっと誰かに見られていた。

ちなみに私が注目を浴びるのは良くあるので、その程度では動じない。

そして視線の向きから、その人物は緑谷君に用があるらしい。

悪意は感じないし、こっさり横目で様子を窺うと何となくだが見覚えがある気がした。そしてここは事情を知ってそうな緑谷君に尋ねるのが、手っ取り早いだろう。

「あの、緑谷君」

「何かな。斥流さん」

「あの人、緑谷君の知り合い？」

そう言つて指は差さないが、電柱の影に隠れている男の人に顔を向ける。緑谷君も気づいたようで、次の瞬間には大慌てで彼の方に走つて行く。

二人はこつそり話しているようつもりのようなのだが、自分は常人よりも五感が優れているので丸聞こえだった。

(やっぱりあの人、オールマイトだったんだ)

詳しい事情まではわからないけれど、痩せ型のオールマイトは緑谷君のトレーナーらしい。

しかしあの状態の彼と、ナンバーワンヒーローを関連付ける人は殆ど居なさそうだ。彼らの会話の内容からはつきりしたが、別に知る気はなかった。

取りあえず私は爆豪君に少し待つようと告げて、二人に向かつて真つ直ぐに歩いて行く。

「緑谷君、秘密の話はもつと遠くでして」

「えっ!？」

二人揃つて、思いつきり狼狽していた。

私はさつき知つたことを正直に伝えておく。

「耳が良いから、その人がオールマイトだと聞こえた。

別に誰かに話すつもりはない」

元々人付き合いを面倒に思うタイプだ。

それに口下手で他人との会話は得意ではなく、条件反射で距離を取ってしまう。

「斥流少女！ すまない！」

「あああつ！ 僕は！ なんてことを！」

私の交友関係はかなり狭く、家族の殆どはオールマイトのファンだ。

夢を壊すようなことは口にできないので、心配無用である。

「貴方には、できるだけ長く平和の象徴でいて欲しい」

「ああ！ 私はこれからも平和の象徴で居続けよう！」

短い会話であったが私の意思は伝わり、承諾してくれるなら良しとしておく。

けれど、あることを思い出して口を開く。

「でも、無理だけはしないで。」

引退するにしても後継者を見つけて、引き継ぎをしつかり済ませて」

「斥流少女が後継者じゃ、駄目かな？」

「駄目」

確かにオールマイトは素晴らしいヒーローだが、自分とはとてもではないが平和の象徴は務まらない。

それにヒーローの職に就くつもりも毛頭ないので、はつきりお断りする。

「ヴィランや事故は、他に適任がいなければ私が倒す。

でもヒーロー活動やマスメディア関連は、断固拒否」

「確かに、斥流さんは人と喋るのが苦手だしね」

緑谷君の発言に、私は同意とばかりに静かに頷いた。

過去に遭遇したヴィランは、全員倒している。

しかし、市民のために命をかけて仕事をしたくない。

テレビに出てファンサービスも、断固拒否だ。

「雄英高校を受験するのも、オールマイトを見張ったり、名門校の卒業資格が欲しいだけ」

「えっ?! 斥流さんも雄英高校受けるの!?!」

「ここで私は、ヘドロヴィランとの戦いのあとに緑谷君が気を失っていたことを思い出す。」

雄英高校を受けると口にしたのは、あの場だけだ。きっと聞き逃していたのだろう。

だがまあ別に隠すようなことではない。

こちらでも静かに頷いて、肯定しておいた。

「そっかあ。まさかうちの中学から、受験者が三人も出るとは思わなかったよ」

全国屈指の難問ではあるが個性の訓練や筋トレと同じように、毎日コツコツ真面目に

勉強してきた。

まだ模試は受けていなくても、現実とは言えないが頑張ればワンチャンいけるはずだ。

「私も頑張るから、緑谷君も頑張って」

「うん！ かつちゃんと一緒に、三人で合格しよう！」

取りあえず言いたいことは口にしたので、緑谷君とオールマイトと別れて爆豪君の元に戻る。

すると彼は近くの自販機でスポーツドリンクを購入していたようで、それに口をつけながら話しかけてくる。

「何の話をしてたんだ？」

「私が雄英高校を受験する話」

「斥流も受けるのかよ！ と言うか！ あのおっさん関係ねえじゃねえか！」

爆豪君に思いつきり驚かれたが、相変わらず斥流はマイペースすぎるだと溜息を吐かれるだけで終わった。

そこまで興味がなかったのか、無理に問い質すつもりはないようだ。

そして早朝の訓練のあとは中学に登校しないといけないので適当なところで解散して、二人と別れて孤児院に戻るのだった。

痩せてる方のオールマイトは、初日以降は姿を見せなくなった。

私が思うに、彼は緑谷君のトレーナーだ。

自分の見てないところでヒーロー活動を行いつつ、筋トレメニューを考えているのだろう。

だがまあそれはそれとして自分は地元の普通科高校ではなく、全国屈指の難関である雄英高校に進路を変えた。

模試の結果はまだ出てないが、たとえばA判定を取れても落ちる可能性はゼロではない。

とんでもない倍率らしいし、万全の体制で挑むべきだろう。

しかしもし合格及び卒業できたら、履歴書に雄英高校の普通科卒と記載できる。

就職活動に有利になるのは確実だ。

爆豪君が言っていたように、高額納税者ランキングに名を連ねるとは思えないが、それでも他の高校よりも学歴ステータスとして扱われるのは確かだろう。

頑張った苦勞が報われるのは悪いことではないと思いつつ、いつも通りに自身の重量を増やして筋トレと受験勉強を同時進行で行う。

そして来るべき日に備えて、毎日コツコツと修行や勉強を頑張るのだった。

雄英高校入試の説明

雄英高校の入学試験当日になった。

同じ中学だから三人一緒に行動するとか、そんなことはない。

孤児院を出たあとは電車やバスを利用して、試験会場へと向かう。

幸いなことに受験者は全国から集ってくるため、案内板もあちこちに置かれていた。会場までは殆ど迷うことなく辿り着けた。

しかしヒーローを志す人たちの登竜門だけはあつて、とにかく人が多い。

「おいつ、あの子！もしかして！」

「ああ、斥流ちゃんだ！またの名を、二代目オールマイト！」

「遭遇したヴィランは、一人残らず捕まえてるらしいぜ！」

「オールマイトと同じで、存在自体が犯罪への抑止力だな！」

耳が良いこともあり、受験生たちが自分のことを話しているのが聞こえてくる。

それにヒーロー活動や自己アピールはしていないのに、何故かとても詳しく知っているのだ。

注目を浴びるには慣れたが、それがずっと続くのはキツイ。

とにかくこの場から離脱するために、さっさと建物の中に避難しようと早足で歩く。すると見知った顔を見つけたので、何気なく声をかける。

「おはよう。緑谷君」

「おつ、おはよう！ 斥流さん！」

同じ中学のクラスメイトで、数少ない友人と話していると気も紛れてきた。

すると後ろに知り合いの気配を感じて、足を止めてそちらを振り向く。

「爆豪君。おはよう」

「おう、デクと斥流」

「かつちゃん!? おおお互い！ がががっ頑張ろうね！」

緑谷君は相変わらず緊張しているようだが、爆豪君は口数少なく通り過ぎる。

彼はそのまま建物の中に入っていったので、きつと受験に集中したいのだろう。

「爆豪君は、喋ると勉強内容を忘れるタイプ？」

「そつ、そんなんじゃないと思うけど」

緑谷君は若干焦りながらも、微妙な表情を浮かべていた。

しかし今は、私たちも足を止めずに会場に向かうべきだ。

「緑谷君。私たちも」

「あつ、うん！ そつそうだね！」

緑谷君が相変わらず足が震えているが、何とか前に進もうとしている。

マイペースな私は、彼よりもほんの少しだけ先を歩く。

「……あつー！」

けれどそんな緑谷君が一步を踏み出して、早々に転びそうになった。

私が慌てて個性を発動しようとする、その前に他の受験生が彼に触れて動きを止めた。

「大丈夫？」

「うわわわあああつ?!」

突然空中で静止した緑谷君が混乱しているが、彼女は笑顔で体を起こしてしつかり立たせる。

「私の個性。ごめんね。勝手に。」

転んじゃったら縁起悪いもんね！ 緊張するよね〜！」

緑谷君はまともに受け答えができずに、ただただ戸惑っていた。

しかし喋るのが得意ではない私とは違い、彼女はとんでもないコミュ力だと理解する。

「お互い頑張ろう！ じゃあ……って！ 斥流ちゃん!」

「ここでようやく私の存在に気づいたらしく、その受験生は瞳を輝かせて真っ直ぐに見

つめてくる。

「うわあ！ 本物!？」

「確かに私は、斥流で間違いない。でも、同姓同名の別人かも知れない」

「本物だああ!!！」

斥流せきりゅうという名字は珍しいが、彼女が想像している人とは違うかも知れないと伝えた。すると何故か、本物認定されてしまった。

「とにかく、会場に行く。遅刻は不味い」

「えっ、あつ！ そうだね！」

「そうだった！ 私も急がないと！」

私たちは受験生だ。外で長話をして試験に遅れるのは不味い。

二人もそのことに気づいたのか、少し慌てた様子で建物の中に入っていくのだった。

案内通りに廊下を歩いて会場に入ると、既に受験生が大勢集まっていた。

私は受験番号と座席を見比べながら、指定の席に座る。

緑谷君と爆豪君が同じ中学出身だからか、挟まれるような配置であった。

やがてそれほど間を置かずに、室内の照明が消えて暗くなる。

そして一人の試験官に、スポットライトが当たる。

「受験生の皆！ 今日俺のライブによーうこそ！」

隣の緑谷君がヒーローのプレゼントマイクに会えて感動しているが、私の反応は薄い。

行く先々で遭遇するヴィランと同様に、何だかんだでプロの人とも関わることが多かったのだ。

それも向こうからわざわざ会いに来たりするし、試験の説明をしている彼もその一人である。

「斥流ちゃんも！ 久しぶりに会えて嬉しいぜ！」

「私は別に」

「かー！ 相変わらずの塩対応だあ！」

別にそこまで親しいわけではないし、せいぜい顔見知り程度の間柄だ。

それにプレゼントマイク一人の判断で合格できるほど、雄英高校の試験難易度は低くないだろう。

すると彼は少しだけ落ち込んでいたが、向こうもプロだ。

すぐに元のテンションに戻り、説明の続きを行う。

「んじゃ！ 入試要項通り！ リスナーにはこのあと、十分間の模擬市街地演習を行ってもらうぜ！」

「えっ?」

思わず変な声が出てしまった私は、頭の中で先程の言葉を反芻しつつ、鞆からプリントを取り出して確認する。

「持ち込みは自由! プレゼン後は! 各自指定の演習会場に向かってくれよな!」

試験内容は事前に何度も確認したので間違いはない。

プレゼントマイクの発言と私の受け取ったプリントの説明は、明らかに食い違っていた。

「OK!」

テンションの高い試験官の前に、ビシッと手をあげる。

きっと受験生の質問には真摯に対応してくれるだろう。

「あの! 質問が!」

「んっ? 斥流せきりゅうちゃん?」

周りの視線が一齐に私に集まるのが恥ずかしいが、多少は慣れている。

いかなる時もマイペースなのが自分で、ここは臆さずに堂々と質問させてもらう。

「私は普通科の入試のはず! どうして市街地演習を!」

事前に郵送されたプリントと違って、今説明されているのはヒーロー科の試験だ。

ならば普通科を希望している自分が、この場に居る必要はないはずである。

私がそう主張すると、プレゼントマイクはテンション高めに発言する。

「雄英のヒーロー科の推薦枠を蹴って、普通科を希望する！」

そんなクレイジーな受験生は、初めてだぜ！

だから今回は、適性だけでも審査させてもらうぜえ！」

「なっ、なるほど？」

良く意味がわからなかったので、頭の中で色々考えてみた。

推薦入試を蹴って普通科を受ける生徒は非常に珍しく、私のヒーロー適性を調べたいのだろう。

「市街地演習も加点されるから、雄英高校の合格を狙うならお得だぜえ！」

そんな一個人を鼻負して良いものかと思いはあるが、ヒーロー科の推薦枠に入るぐらいなら殆ど合格と言っても過言ではない。

それに学校側が公式に認めているなら、他の受験生から抗議の余地はなさそうだ。

「説明してくれて、ありがとう」

プレゼントマイクにお礼を言うと、彼は嬉しそうに頷いてもう少しだけ説明を続ける。

「わかってくれて嬉しいぜ！」

模試のA判定でも絶対に受かるわけではないし、せっかく点数を稼げるチャンスなのだ。

これを逃すのは惜しいので、取りあえずこのまま入試を受けることにする。そして私は、受験票を見ながら考える。

(試験会場Cで、仮想ヴィランを倒せば良い。単純明快)

ロボットの仮想ヴィランは三種とのことだが、説明には四つ目が映し出されている。メガネをかけた真面目そうな受験生が立ち上がり、堂々とした態度でプレゼントマイクに質問していた。

さらに彼はこちらをビシッと指差して、大きな声で発言する。

「ついでにその縮れ毛のキミ！ 先程からボソボソと！ 気が散る！

物見遊山のつもりなら！ 即刻！ この場から去りたまえ！」

「すっ、すみません！」

思わず緑谷君が小さくなっているが、確かに一理ありだ。

すっかり縮こまっている彼を周囲の受験生たちがクスクスと笑っている中で、さらにメガネの人は指摘する。

「斥流君の隣に座れて光栄なのはわかるが！

今は入学試験中だ！ 気を引き締めたまえ！」

「えっ？ 私？」

急に話題を振られても困惑しかない。

頭の中にハテナマークをたくさん浮かべたが、緑谷君との付き合いは長いので今さら緊張はしないだろう。

結局良くわからないまま説明に戻り、四種目の仮想ヴィランは各会場に一体いるお邪魔虫で、倒しても0ポイントだということがわかった。

最後に、プレゼントマイクは雄英高校の校訓を口にする。

「かの英雄、ナポレオン・ボナパルトは言った！

真の英雄とは！ 人生の不幸を乗り越えているものだど！

さらに向こうへ！ プルス！ ウルトラ！」

この言葉で市街地演習の説明は終わった。

私を含めた受験生たちは、指定の会場へと移動するのだった。

市街地演習

色々あって、ヒーロー科の試験を受けることになった。

特例として市街地演習が加点されるらしく、合格基準点を満たしやすくなる。

雄英（ゆうえい） 高校が決定したことなので、不正ではないのだった。

そんなこんなで市街地演習Cにやって来た。

私はヒーローを目指している他の受験生をのんびり観察しながら、どう立ち回るかを考える

（合格点さえ越えればいい）

私が好き勝手に乱獲したせいで、市街地演習Cだけ不合格者が続出したら申し訳ない。

なのである程度の仮想ヴィランを倒したら、あとは他の受験生のサポートに徹するのだ。

何しろマイペースで気楽なのは私ぐらいで、他の受験生の表情は真剣そのものである。

人生の岐路に立たされておられ、当たり前であった。

自分は合格を確実にするための一押しのもりで参加しているが、皆は違う。

やはり必要以上に狩りすぎるのは不味そうだと再確認していると、突然辺りに大声が響き渡った。

「はいっ！ スタートオー！」

試験官であるプレゼントマイクの声だと理解した私は抑制を一段階解除し、脇目も振らずに正面ゲートに向かって疾走する。

「どうしたあ！ 実戦にカウントなんかねえんだよっ！」

走れ！ 走れえ！ 賽は投げられてんぞお！」

他の受験生も試験官の発言を受けて気づいたようで、慌てて走り出す。

身体能力を強化した私は一足先に正面ゲートを潜り抜けて、すぐに見晴らしの良いビルを見つけて迷うことなく跳躍する。

すると解放状態の加減を覚える修行をやり始めたおかげで、問題なく屋上に降り立つことができた。

「……さてと」

何気地上を見ると、入口から受験生の集団が大勢駆け込んできている。

そして市街地Cの各所に仮想ヴィランが配置され、索敵を行っていることがわかつ

た。

「ならば、遠い敵を狙う」

当たり前だが、受験生は少しでも多くの得点が欲しい。

なので入口近くではなく、遠くの仮想ヴィランを倒していくことに決める。

普通科希望の私にとっては、今回の試験はボーナスゲームだ。そこまで焦る狩る必要はない。

呼吸を整えて精神を集中し、遥か遠くを見つめて個性を発動する。

「やはり、距離が遠いと難しい」

常人よりも優れた視力ではあるが、個性の有効射程範囲は数百メートルといったところだ。

仮想ヴィランを超重力で押し潰したり、コインを加速させて機械の体を撃ち抜きながら冷静に分析する。

そして効果対象の重力を操作するには、私が直接目で見て認識する必要がある。

距離が遠すぎると輪郭がぼやけたり、遮蔽物などで見失うのだ。

さらに遠いと目を凝らさないといけなくなり、視野が狭くなつて効果範囲も大きく狭まる。

「何事も限界はある」

それはともかく相手がロボットなので、手加減無用で個性の良い練習になる。

しかし、あまり狩りすぎると他の受験生の得点がなくなってしまうため、程々のところで切り上げるべきだ。

「あとは、サポートに回る」

私はきつちり二十点取ったところで、仮想ヴィランへの攻撃を止めた。

そして次は辺りを見回し、怪我をしそうだったり苦戦している受験生を重力操作で援護する。

しばらくビルの屋上からサポートしていると、やがてお邪魔虫が現れた。

倒してもゼロポイントの巨大ロボットは、市街地で派手に暴れている。

受験者たちは蜂の巣を突いたように逃げ惑い、とてもではないが点数を稼ぐどころではない。

私はどうしたものかと少しだけ考えて、大きな溜息を吐く。

「倒す意味はないけど、放置もできない」

巨大なため市街地演習場の被害が拡大するだけでなく、放置すると怪我人が出てしまう。

なので、ここは速やかに排除するのが良いと判断した。

「私が倒してもいいけど」

個性を発動して巨大ロボの重量を増やし、一步踏み出した瞬間にバランスを崩して転倒させる。

地球の重力を参考にして作られた機械なので、解除しない限りは二度と起き上がれないだろう。

幸いなことに銃火器などの武器は所持しておらず、殴りや踏み潰しがメインのようだ。

そして身動きが取れないと何もできないため、何とか起き上がろうとしている。

実際には手足をばたつかせるのが精一杯だが、残り時間も迫っているので早めに片付けたほうがいいだろう。

ビルの上に立っている私は、周囲の受験生たちに向けて大声で呼びかける。

「巨大ロボットを倒したい人！ どうぞ！」

今の私はサポートに徹しているので、自分でやる気はない。

それに倒しても点数は得られないし、これ以上の周辺被害の拡大を止めるために転倒させたのだ。

あとは倒したい人が倒せばいいと考えて声をかけたが、少し待っても名乗り出る人は居なかった。

(残り時間はあと僅か。……うーん)

ロボットはとても大きいので、転倒状態とはいえ普通の攻撃では倒すのは難しい。そして市街地Cの受験生たちの中には、特別相性の良い個性持ちはいなかった。

(言い出しつぺの法則)

この程度の相手なら片手間で済むし、転倒して動けなくなっていたのでちょうど良いと考える。

私は屋上から跳躍しながら蹴りの姿勢になり、敵に向かって真っ直ぐ落ちていく。

「重力加速！ 一二倍！」

巨大ロボットの中心部に吸い込まれるように、高速の蹴りが叩き込まれる。

重力加速は破壊力を高めるだけでなく、軌道を修正して確実に命中させる役目も果たしていた。

自分は見た目以上に重くて頑丈で、装甲の隙間を狙ったこともあり、十分な加速でなくても貫くことができた。

発生した衝撃波によって、破片や部品が周囲に飛び散る。

爆発に巻き込まれたくないので、すぐさまその場から離脱する。

だが途中で火花を散らす巨大ロボットの近くに、まだ避難が終わっていない受験生を見つけた。

「危ない！」

爆発で飛ばされた大きな破片が、彼をめぐけて落ちていくのを目撃する。

私は考えるよりも早く受験生を庇うために素早く移動し、重力制御によつて勢いを弱めた。

「よいしょ……つと」

飛んできた大きな破片を受け止めた私は、ゆっくりと地面に置いた。

その際に倒れている受験生の様子が気になったので、そちらにも顔を向ける。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「あつ、ああ、俺は大丈夫だ。おかげで助かった」

見た感じ怪我はなさそうだが、転んでいたので念のために手を差し伸べる。

すると彼は一瞬驚いたような顔をしたものの、すぐに手を取つて起きあがった。

「試験！ 終了ーっ！」

その直後にプレゼントマイクの大声が聞こえ、サイレンの音が響き渡る。

取りあえず再び封印状態に戻ってから試験官からの指示を待つが、しばらく経つても何も起きない。

なので手持ち無沙汰になった私は、助けた受験生の手を離して倒れた巨大ロボットの残骸を眺める。

だが彼も暇になったようで、何故か真剣な表情でこちらに声をかけてくる。

「あの、斥流せきりゅうさん。少し聞きたいことがあるんだが」

「……何？」

彼の質問に答えるのは構わないが、相変わらず私は全く名乗ってない。

けれど自分の名前を知っているのです、内心は少々複雑であった。

表に出すと相手の気分が悪くなるので、なるべく平静を装う。

「斥流せきりゅうさん。俺はヒーローになれると思うか？」

緑谷君も同じようなことを聞かれたが、それに対する私の答えは決まっていた。

「なれる」

「えっ?」

「キミは、ヒーローになれる」

周りの受験生たちもやることなく暇なのか、私たちの会話に口を挟むことなく静かに見守っている。

横槍を入れてこないのです、空気を読んでいるらしい。

とにかく私が迷うことなく即答すると、彼は戸惑うように口を開く。

「なっ、何で! 何でそう言えるんだ!」

「キミがどんな個性か、私は知らない。……でも」

ビルの屋上から彼を何度か見かけたが、仮想ヴィランを倒して点数を稼ぐのに苦勞し

ていた。

つまり少なくとも、戦闘が得意で派手なヒーロー向きな個性ではない。

「どんな個性も使い方次第で、善にも悪にもなる。

それに戦うだけが、ヒーローじゃない」

私の答えは昔から変わらずに、彼を真つ直ぐに見つめて続きを話していく。

「だからキミはヒーローになれる。

でも、今はまだ卵」

「たっ、卵なのか？」

彼は先程よりは落ち着いてはいるが、それでもかなり緊張しているようだ。

「この先の頑張り次第で卵の殻を破って立派なヒーローになるか、腐らせてヴィランになるかが決まる」

もしくは夢を諦めて一般人のまままで居ることも選べるが、それは口にはしなかった。

ちなみに自分が中学に上がるよりも前に、飛田弾柔郎とびただんじゆうろうという青年に同じような悩みを

相談された経験があった。

今はヒーロー名ジェントル・クリミナルとして活動しているが、あの時の彼はヴィランに堕ちかけていた。

(目の前の彼は、昔の飛田さんに似てる)

私は過去に会った飛田弾柔郎とびただんじゆうろうのことを思い出す。

現在の彼はたまにテレビに登場して、ヒーローインタビューを受けるほど有名で立派せきりゆういんこになつた。

斥流陰子ちゃんと出会えたおかげで、今の自分がある。

彼女にヴィランに堕ちかけていたところを救われ、人生をやり直す機会を与えてくれた。

そんな小つ恥ずかしくなるようなことを、取材のたびに口にしていた。

ちなみに最近ではラブラバというサイドキックを雇つたようで、大変仲がよろしくて息ピッタリだと評判である。

孤児院のテレビに彼が登場すると、私はたちまち恥ずかしくなつて赤面して自室に逃げ込むのだ。

チャンネル権は多数決なので、少数派は辛いのであつた。

それはそれとして目の前の受験生から、何やら予想外の発言が飛び出してきた。

「そう言えば斥流さんも最初は、ボールペン一つ持ち上げるのがやつとだったな」「えっ？ 何でキミがそれを知ってるの？」

確かに自分の知名度が上がってからは、顔や名前を知る人が多く居る。

しかし過去のことは殆ど話さないし、一体何処から情報が漏れたやらだ。

私が疑問に思っていると、彼はすぐに答えてくれた。

「名もなきヒーローの軌跡、という本を読んだんだ」

聞いたことないタイトルに、私ははてと首を傾げる。

「最近出版された、世界的な大ベストセラーの書籍だ」

そう言つて彼がスマートフォンを取り出し、素早く操作を行う。

その様子を呑気に眺めていた私だが、ここで今さらながら彼の名前を知らないことに気がつく。

入学試験だけの付き合いになるだろうし詳しく知る必要はないけれど、結構長々と話している。

少し遅いが、礼儀として聞いておいたほうが良いだろう。

「あの、貴方の名前は？」

「コホンとわざとらしく咳払いしてから尋ねると、すぐに答えが返ってくる。

「心操人使だ」

「そう。私は斥流陰子。よろしく」

もう知っているだろうけれど、流れで自己紹介をする。

やがて心操君はスマートフォンが一段落したようので、問題の書物を見せてくれた。

「電子書籍で購入したんだ。

少し読めばわかると思う」

そう言つて彼はスマートフォンを貸してくれた。

けれど受け取つた私は、画面を見て思わず固まってしまう。

「あの、ごめん。私、スマートフォンを使い方がわからない」

「そつ、そうか。いや、そうだったな」

現代人では珍しく、自分はスマートフォンやパソコンなどの電子機器に触つたことがない。

せいぜいテレビや固定電話、あとは家事に使用する旧型の機械ぐらいだ。

だが心操君は使い慣れているらしく、すぐに教えてくれた。

ありがたく思いながら、問題の書籍を流し読みさせてもらうとすぐに気づいた。

「私が主人公で、視点は院長先生？」

ここで何ヶ月も前に、院長先生が物語の登場人物として使つてよいかと尋ねてきたことを思い出す。

その時は何処かのサイトに小説でも投稿するのかと考え、酷いこと書かなければいいよと軽い気持ちで許可した。

それつきり音沙汰がなかったので、良い構想が思いつかないか筆を置いたのかと思つ

ていた。

だがそれがまさか、投稿サイトではなく書籍として出版されるなど予想外にも程がある。

少しだけ読み進めたが羞恥に耐えられなくなった私は、顔を赤くして心操君にスマートフォンを返した。

「心操君！　ありがとう！　返す！」

「おっ、おう」

過去の私に向き合うには、羞恥心のキャパが足りなかった。

一部事実ではあるが脚色された自分が主人公のフィクション小説が、世界中で大ベストセラーなど世も末だ。

確かに原案を元にして有名な作者が監修しているので、素材が良ければどうとでも料理はできる。

けれど感情的に納得できるかと言えば、それはまた全然違うのだ。

(けど、警察に通報されなくて良かった)

孤児院の裏庭でこっそり個性を使っていたのを、院長先生は知っていて遠くから見守っていた。

そして警察関係者には、黙っていてくれたのだ。

個性の使用は無免許では原則として禁止されているので、良い子は絶対に真似をしてはいけません。

発現したばかりで制御が不完全な幼年期は、下手をしたら大怪我からのあの世逝きもあり得るのだ。

私が頭を抱えていると、心操君が真面目に声をかけてくる。

「俺も頑張つてはいるが、斥流さんと比べればまだまだだ」

「そんなことない！ 心操君も私に負けないぐらい頑張つてるー！」

彼は本気でヒーローになりたいと思つているし、私とは違った努力してきたはずだ。

それを見下したり笑うことなど、自分にはでない。

今の小つ恥ずかしさを誤魔化すように、つい大声が出してしまった。

「ありがとう。斥流さんが認めてくれると、自信になるよ」

心操君はとても穏やかな笑みを浮かべて、私を真っ直ぐに見つめてくる。

だが自分はそのような彼を直視することはできず、口を閉ざして露骨に視線をそらしてしまふ。

先程から色々ありすぎて赤面しっぱなしだし、どうにも恥ずかしいのだ。

そして今の心情は、孤児院から距離を取りたいというものだった。

「……………どうしよう」

別に院長先生に怒っているわけではない。

深く考えずに許可を出したのは私だし、この物語はフィクションだ。

現実の人物や団体とは、何も関係がないことが記載されている。

もし院長先生が原案を出したなら、本が売れば孤児院の運営資金になる。

良いことだし私も嬉しく思うが、隠していた過去を家族に知られるのは、とても恥ずかしいのだ。

未だかつてない複雑な感情を抱いた私は、腕を組んで空を見上げて考える。

「……良い機会だし、一人暮らししよう」

「えっ?」

試験の手応えから、高い確率で雄英高校に受かっているだろう。

なので少し早いですが、今のうちに手頃な下宿先を探しておくのだ。

お金なら新聞配達でコツコツ貯めてきたし、中学も卒業まで登校しなくても出席日数的に問題はない。

「顔を合わせなければ、そこまで恥ずかしくない」

この機会にスマートフォンを購入して、顔を合わせずに電話で連絡を取れるようにしておくのも良い。

取りあえず思い立ったが吉日ということで、孤児院から巣立つ準備を進めることに決

めたのだった。

入試中の教師陣

〈やぎとしのり
八木俊典〉

今年も雄英高校の入学試験が始まった。

様々な個性を持ちで一癖も二癖もある大勢の受験者たちが、市街地試験会場で仮想
ヴィランを倒している。

雄英ゆうえいの教師が集まる大会議室では、監視カメラやドローンが撮影した映像が様々な視
点や角度から投影されていた。

そこでは先を争うようにして受験者たちが無人ロボットに襲いかかつては、あつとい
う間にスクラップに変えている。

「この実技試験は、受験生にヴィランの総数も配置も伝えていない。

限られた時間と配置、そこから炙り出されるのさ」

根津校長ねづが実技試験の概要について語りつつ、実際の映像を交えてわかりやすく解説
する。

「情報をいち早く把握するための情報力。あらゆる局面に対応する機動力。

どんな状況でも冷静でいられる判断力。そして、純然たる戦闘力」

「ここで一度言葉を切り、息を吸って最後のまとめを告げる。

「治世の平和を守るための基礎能力が。ポイント数という形でね」

この場に集められた審査員を務める教師陣は、根津校長の今の発言で己の役目を再確認する。

ちなみに今回の試験は、自分は審査しない。

それでも今年から雄英高校の教師になるので、大会議室への立ち入りを許されている。る。

なので他の教師と同じように椅子に座り、各市街地演習場で行われている試験映像を閲覧していた。

「しかし、予想通りではあるが圧倒的な戦闘力だな」

ビルの上に立つ幼い少女を見つめて熱血漢のブラドキングが、難しい顔で顎を弄りながら口を開く。

「そうね。もう彼女だけでいいんじゃないかしら？」

全くの同意とばかりに、十八禁ヒーローのミッドナイトが率直な感想を告げる。

なお、これは彼らだけでない。この場の満場一致の意見と言える。

何しろ話題の中心である斥流少女は、情報力、機動力、判断力、戦闘力の全てが受験生の中でダントツで高い。

免許を修得していないにも関わらず、プロヒーローと比べても全く遜色はなかった。別に現役のヒーローのレベルが低いわけではなく、斥流少女が規格外なだけだ。

個性を全力で解放すると負荷に肉体が耐えられないというデメリットこそあるが、全国指名手配のマスクュラーやムーンフィッシュは封印状態で倒したし、暴走する新幹線を受け止めて、大事故が起きる前に停車させて見せた。

今の日本でそれ程の実力を持ったヒーローは、私を含めて極めて少数だろう。

念願叶い斥流少女は雄英高校を受験しているので、我が国の未来は明るいと言えるが、そこには避けて通れないある問題があった。

「だが斥流少女は、ヒーロー科ではなく普通科を希望している」

私の発言は大会議室に良く響く。

途端に静まり返り、何人もの教師が思わず頭を抱える。

「彼女には、方針を変えてもらわないと」

「その通りだ。既にトップヒーローと遜色ない実力を持ちながら、普通科への編入とは」
「日本の未来にとつての、大きな損失ですね」

斥流少女のヒーローデビューを望む声は非常に大きい。

だが彼女は私たちヒーローという存在に憧れてはいないし、それ程良い感情を持っていない。

無理強いし過ぎると、やぶ蛇になって関係が悪化する可能性が高い。

何故なら彼女から見た我々は、せいぜいヴィランよりもマシという認識だからだ。

もしこちらに敵意を向けられたら目も当てられず、間違いなくとんでもない強さのヴィランが誕生してしまう。

幸い斥流少女は口では何だかんだ言いつつ、決して揺るがぬ善性を持っている。

困っている人を見かけたら必ず助けるし、悪事を働くヴィランは決して許さない。

まさに理想のヒーローを体現したかのような人物で、私の決め台詞を真似していることから、二代目オールマイトと呼ばれている。

そこも個人的にポイントが高いが、斥流陰子はせきりゆういんこプロヒーローだと信じている人も少なくはない。

何故ビルボードチャートJPに登録されていないのかと、問い合わせの電話や抗議文が送られてくるのはもはや日常茶飯事だ。

彼女に免許を与えないように政府が圧力をかけているのではないかと、そんな陰謀論まで噂される有様であった。

だが日に日に社会的な影響が大きくなっていくのに、斥流少女は相変わらずヒーローになる気はなかった。

ヒーロー免許の試験を受ける気はないかと何度も打診しているが、今のところ色好い返事はもらえていない。

上からも下からも突き上げられているのに全く動じず、我が道を行くのは、ある意味ではヒーローらしい思考と言えた。

けれど恩師であるグラントリノも、私を鍛えるためだけに免許を修得したのだ。非常に珍しいが、中にはそういうヒーローも居るのだろう。

何にせよ、世間の評価と本人の資質は全く正反対だ。

誰もが声を揃えて、違うそうじゃないと叫びたくなつた。

なので困つた我々は彼女の育ての親である孤児院の院長先生を尋ねて、何度か相談させてもらう。

そして^{せきりゆういんこ}斥流陰子の意思を尊重して危害を加えないことを条件にして、協力を取り付けることができた。

その後、紆余曲折があつて名もなきヒーローの軌跡が出版される。

それは^{せきりゆういんこ}斥流陰子の人生を、一冊にまとめた書物だ。

私たちが読ませてもらったが、日本政府が前面が協力してくれたこともあつて、フィクション小説とは思えないほど現実に近く真に迫っていた。

彼女が何故ヒーローを嫌うようになって、どのような考えで行動しているのかも、しっかりと記されている。

脚色が入っているとはいえ、壮絶な人生だが、決して絶望せずに歩みを止めずに、立ち塞がる困難を自らの意思で打ち破ってきた。

彼女が一体どれだけの人々を救ってきたかは、院長先生も全てを把握できていない。政府にも協力してもらって各方面から情報を集めたが、今回把握できたものは氷山の一角の可能性は高い。

そう考えると、やはり彼女はヒーローになるべき人間だ。

斥流陰子せきりゆういんこの存在は人々に希望を与え、ヴィランを退ける抑止力になり、私と同じように平和の象徴になれる。

何にせよ過去の事件や彼女の考えを広く伝えることで、どれだけ優れた個性を持っていても強者であろうと、年相応の一人の少女であると世間に知らしめる。

ヒーローを強要する動きは、確実に鈍るだろう。

私たちへの突き上げも多少は減るし、少なくとも過度な干渉は控えるようになり、彼女の知名度が上がる代わりに世間は多少は落ち着くはずだ。

院長先生なりに斥流少女を気遣ったことだが、結果的には上手くいっている。

何にせよ彼女をナンバーワンヒーローにするのを、諦めたわけではなく、表面的に

は落ち着いたとはいえ、その思いはより強固になったと言っても過言ではないのだ。

だが逆に我々プロヒーローの不甲斐なさと、社会の歪さを直視させられることになった。

けれどもおかげで、それを正すことができる。

今すぐには無理だが、水面下ではもう動き出しているので、少しずつでも良い方向に変わっていくのだ。

だがそれはそれとして、ワンフォーオールを継承した緑谷少年は苦戦しているようだ。

サーナイトアイからも、斥流少女にしておくようにと何度も言われていた。

しかし私は、緑谷少年を後継者に選んだ。

自分と同じ無個性だったこともあるが、精神的にヒーローの資格は十分にあった。

今後の成長次第ではあるものの、私を追い抜くかも知れない。

(もしもの時は斥流少女に継承させる条件で託したが、未来は不確定だ)

私の肉体は既に限界を迎えており、ヒーロー活動も長くは続けられなくなった。

そこで、力尽きる前にワンフォーオールを託さないといけない。

次の器として緑谷少年を選んだが、彼はまだ未熟である。

いくら今後の成長次第とはいえ、確定はしていないのだ。

私が資格なしと判断すれば、その時点で速やかに斥流少女に継がせる契約を結ばせてもらった。

ただし、こちらも一筋縄ではいかない。

継承者候補である彼女が首を縦に振る未来が、現時点では全く見えないのだ。

巨悪と戦う使命を背負わされるのは勘弁して欲しいと、正面から突っぱねられるに決まっている。

そのような事情があり、緑谷少年が仮の器で終わるか、本当に私の後継者となりうるのかはまだわからない。

今後の状況次第とはいえ、私は緑谷少年ならば最高のヒーローになれると信じている。

けれど彼が大怪我をしたり、死の危機に瀕することもあるだろう。

何しろ命を賭けて市民を守る職業だ。

万が一の事故が起きないとも限らない以上、斥流少女の意志はともかく候補者として定めておく必要があった。

それに彼女はもはや平穏な人生を歩むことは不可能で、この先様々な勢力が接触して

くるだろう。

ヒーローは言うに及ばず、公安やマスコミ、果てはヴィランまでもだ。

今の實力でもトップヒーローと同等で、秘められている素質も未知数となれば、否が応でも確保しておきたい人材だからだ。

私たち雄英高校の教師としては、できれば斥流少女の望む道を歩ませたかった。

しかし現状がそれを許さず、彼女の素質や精神性を考えれば、ヒーローになる以外の道はない。

たとえ職業に就かなくても構わない。

国民を納得させるために、名門と呼ばれる雄英高校を卒業して、免許だけでも修得しておくべきなのだ。

現時点で我々が望むのは、それだけではある。

それでもやはりトップヒーローとしてデビューして欲しい。

だがそこは世間の害意から守りつつ、斥流少女の心変わりを気長に待つしかないと思つたのだつた。

ジェントルから見た斥流陰子

〈飛田弾柔郎〉
とびただんじゆうろう

飛田弾柔郎は、ジェントル・クリミナルとして活動しているプロヒーローである。

かつては歴史に名を残す偉大な人物になるという志で、ヒーローを目指していた。

だが四度も仮免試験に落ちて留年し、高校に自主退学を勧められるほどの落第生であつた。

それが変われば変わるもので、今はパトロールを終えて事務所に戻り、紅茶を嗜みながら優雅に小休止だ。

ちなみにヴィランに落ちかけていた過去を忘れないために、クリミナル。犯罪的という意味を、あえてヒーローネームにしていた。

けれど今の私は名実共にヒーローであり、椅子に座っているだけでなく紳士らしい立ち振舞に気を配る。

そして最近出版された小説のページを、一枚ずつ丁寧にめくっていく。

タイトルは名もなきヒーローの軌跡だ。

何処にでもあるような題名ではあるが、世界的な大ベストセラーになった一冊であった。

多少の脚色はあるが事実を元に描かれていて、私の一番のお気に入りでもある。

物語は雪が降る凍えるように寒い早朝に、孤児院の院長が籠に入れて捨てられていた一人の赤ん坊を拾うところから始まる。

近くに親はおらず名前が書かれているのみで、施設で引き取って育てることになった。

彼女は口数が少ないが根は優しい子で、他の家族とすぐに打ち解ける。

それに面倒見が良く、のびのび健やかに育っていった。

やがて四歳になると個性が発現し、近くの病院に連れて行って検査を行う。

目で見て認識したモノの重力を操れることが判明する。

けれど万能や強力な個性ではなく、最初はボールペン一つを浮かせるのが精一杯だった。

だが孤児院への帰り道でウイルスの騒動に巻き込まれ、少女を庇った院長先生が大怪我を負ってしまう。

幸いなことに命に別条はなかったが三ヶ月もともに歩けず、斥流少女は自責の念を抱いてしまった。

さらにその時はヒーローの助けもなく、近くで大勢から称賛を受けていた彼らは見舞いにも来なかったので、ヒーローの存在そのものに失望して期待しなくなってしまう。結果、彼女は孤児院の自室や裏庭でこっそり個性の練習を行うようになった。何度も失敗を繰り返し、時には大怪我をして周りに迷惑や心配をかけることもあった。

こつぴどく叱られてその場は引き下がったが、決して諦めることない。

個性の使いすぎや自身が重くなるデメリットにより、血反吐を吐いて倒れたのちに病院に担ぎ込まれたこともあった。

けれど泣き言は口にせず、転んだなどと言い訳をして誤魔化して、一步步確実に前に進んでいった。

雨の日も風の日も休まず訓練している少女を、育ての親である院長は何も言わずに静かに見守る。

そしてときには優しく手を差し伸べて、心と体を癒やした。

歳を重ねるごとに段々と隠すのが上手くなっていき、これ以上注意すると個性を使っても気づかなくなりそうだと思ひ、黙って遠くから様子を伺うだけに留めた。

しかし少女の個性は代償として自身に多大な加重がかかるため、運動がとても苦手であった。

短距離走はダントツのビリだし、マラソン大会では完走はしても息も絶え絶えでゴールするだけで精一杯だ。

それに小学校低学年から、身長が全く伸びなくなった。笑われたり、からかわれりしたこともあった。

けれど少女は決して怒らず、反撃に個性を使わずに黙ったままだ。

やがてじつと耐えるだけでつまらないと感じたのか、誰からも話しかけられずに孤独になった。

彼女いつしか最初から居ないものとして扱われるようになったが、それでも決して自分を曲げず修行を止めることもない。

だが世間には知られていないだけで、少女は幼い頃から多くの者を救ってきた。

私もその一人で、孤児院の院長先生からぜひ話を聞きたいと言われる。

本人に許可を取っているため、喜んで情報を提供させてもらったのだった。

つい懐かしくなった私は、書物を読みながら己の過去を振り返る。

あれは毎度のようにヒーロー仮免試験に落ちて、高校を留年した十八歳の頃のことだ。

飛田弾柔郎とびただんじゅうろうは暗い気持ちで大通りを歩いていった。

その途中で、ビルから転落しかけている清掃作業員を見つける。

あとはとにかく無我夢中で、気づけば体が勝手に動いて個性を使っていた。

空気を弾性のある膜に変え、落下事故を防ごうとしたのだ。

しかし結果は違い、空を飛んで駆けつけたヒーローが跳ね返って救助の邪魔をしてしまう。

さらに清掃員とゴンドラの軌道が変わり、重なり合うように落ちていく。

自分が咄嗟に使った個性は、救助の妨害にしかならなかったのだ。

誰もがこのあとの大惨事を予見した。

だが地面まであと少しの距離で、ヒーローと清掃員の落下速度が急激に落ちていく。

着地する頃にはほぼゼロになり、まるで羽のようにふわりと足をつけた。

さらにゴンドラは何故か途中で軌道が変わり、人の居ない場所にゆっくりと落ちる。

見ている人は私も含めて意味がわからないが、誰も怪我をせずに済んだのは良いことだ。

「おおー！ 凄えぞー！」

「素晴らしい個性だ！ 他のヒーローの救助が間に合ったのか！」

「でも、一体何処に!?!」

周りに集まっている人たちが、大喜びで騒ぎ出す。

私も慌てて見回すと、喜びに湧く民衆の中で一人だけ我関せずとばかりに背を向ける。

そしてパーカーを被って顔を隠し、早足で去っていく少女を見つける。

恐らくは彼女が個性を使い、皆を助けたのだと察した。

今すぐ追いかけてお礼を言いたい、自分はヒーローの行動を妨害してしまったのだ。

被害が出る前に防がれたが、警察の事情聴取は受けなくてはいけない。

それにヒーローを妨害した私が礼を言っても、迷惑なだけだろう。

結局この場から動かずに、去りゆく少女の後ろ姿を黙って見送ることしかできなかったのだった。

私は逮捕はされなかったが、警察から嚴重注意を受ける。

迎えに来た両親からも失望され、幸い世間からの誹謗中傷はなかったし勘当されることもなかったが、今後は世間体の息苦しさを感じて高校にも通い辛くなるだろう。

プロヒーローになる夢を諦めるべきかと、気落ちしながら夕焼け空の下をあてもなく歩く。

いつの間にか私は公園に足を踏み入れ、少し離れたベンチに一人の少女が座っている

ことに気づく。

「おや、あの子は？」

良く見ると事故現場で何も言わずに去っていった少女だ。

今はパーカーで顔を隠しておらず、他には人が居ないので一人静かに本を読んでいた。

かなり迷ったが、やがて意を決して彼女に近づく。

「隣、いいかな？」

ベンチに座ったまま少しだけ顔をあげて、私の顔をじつと見つめてくる。

やがて興味を失ったのか、読書に戻ってページをめくりながら返答する。

「……………」

不審者として通報されないように距離を開けて腰を下ろし、緊張しながら話しかける。

「変なこと聞くけど、キミは清掃員がビルから落ちた現場に居なかったかな？」

少女は答えずに読書を続けている。

だが私は構わずに、話を続けた。

「勘違いだったらすまない。」

そして、このことは誰にも言わない。

キミのお陰で救われた。本当にありがとう」
私がヒーローの妨害をした事実が消えない。

けれど、誰も怪我をせずに無事だったのだ。正直な感謝の気持ちを伝える。

少女は溜息を吐き、読んでいた本をパタリと閉じる。

そのままこちらを真っ直ぐに見つめて、小さな口を開いた。

「でも、貴方は救われてない。……何故？」

まるで私の心境を見透かしたような発言だ。

少女の綺麗な瞳に射抜かれて、思わず言葉に詰まった。

自分の悩みを打ち明けて良いものかと、かなり悩んだ。

だがその時は相当参っていたようで、結局愚痴に付き合ってもらった。

長くなったので途中で一旦話を区切り、自販機のジュースを奢ったらとても喜ばれた。

そして彼女のことでも少しだけ聞いたが、あまり裕福ではない家庭で日々の小遣いに苦勞しており、個性の練習で偶然この街に落ちてきたらしい。

今は疲れたのでベンチに座って休息中で、回復したら帰るのだと教えてくれた。

やがて少女は周囲を見回して、他に人が居ないことを確認する。

飲み終わったオレンジジュースの缶に、個性を使って自由自在に空を舞わせて見せ

た。

「おおっ!」

さらに私の飲み終わった紅茶の缶や、目に見える範囲の公園に捨てられていた様々なゴミまで次々と持ち上げる。

それぞれを指定のゴミ箱に落としていく。

きちんと分別しているのです、親御さんがしっかり教育しているようだ。

そして一息ついたあとに、彼女はこちらを見ずに口を開く。

「私の個性は最初はとても弱く、小石の一つも持ち上げられなかった」

今の光景を見る限り、とても信じられない。

しかし彼女が嘘をついているようには見えないし、話はまだ続いている。

「ここまで鍛えるのに凄く頑張ったし、今も修行を続けてる」

少女がどう頑張っているのかは、私は想像することしかできない。

だがたとえ最初は小石も持ち上げられなかったとしても、彼女は今日人を救ったのだ。

「どんな個性も使い次第。

だからお兄さんは、ヒーローになれる」

「それは慰めかい?」

私はそう聞くと、彼女は首を横に振る。

「違う。お兄さんが諦めなければ、いつか必ずヒーローになれる。」

そう私は信じている」

少女は真剣だった。

今まで友人や学校、親にまでヒーローを辞めるようにと散々言われてきた。

だが今日会ったばかりの彼女は、自分がヒーローになれると心の底から信じてくれているのだ。

「……そろそろ帰る。」

ジューズを奢ってくれて、ありがとう」

日が暮れて空に影が差し始めた頃、少女が私に笑顔でお礼を言ってベンチから立ち上がる。

「待ってくれ！　せめてキミの名前を！」

今日という日に、自分が変わるキツカケを与えてくれた少女の名前を私は知らない。そのことに気づいて慌てるが、自分の願いが叶うことはなかった。

彼女はこちらを向いて微笑みながら、宵闇模様が広がりつつある空に音もなく落ちていった。

とても静かな飛行で、公園の外に人が居ても誰も気がづかない。

名も知らぬ謎めいた少女は文字通り、忽然と姿を消してしまったのだ。

「行ってしまった。私の小さな天使」

現時点では、私にとつての唯一の理解者だった。

できればもつと話して交流を深めたかったと、寂しく思う。

けれど少女が私にヒーローになれると断言したように、自分もいつかまた会えると信じている。

「彼女は、私だけのヒーローではない。」

その輝きは大勢の人々を救い、この世の闇を照らすに違いない」

平和の象徴であるオールマイトと同じように、私は名も知らぬ少女に強く憧れた。

彼女がいつかヒーローとしてデビューし、やがてトップに名を連ねるだろう。

その頃には自分も、一翼を担うほどの有名なヒーローになりたいと強くそう思ったのだった。

そして私は、未だかつてないほどにやる気に満ち溢れて猛勉強した。

次の免許試験は無事に合格し、念願叶ってヒーローとしてデビューすることができたのだ。

そんな過去を思い出していると、部屋の扉が外からノックされた音が聞こえて現実を意識を戻す。

続いて時計を見ると、休憩時間が終わったことに気づく。

途中かけた小説にしおりを挟み、机の上に丁寧に置いた。

既に何度も読了しているが、斥流少女は自身の憧れなものもあり、一向に飽きが来ない。

ちなみに扉をノックしている人物に心当たりがあるので、私は落ち着いて紳士らしく振る舞う。

「ラブラブ。入りましたまえ」

扉を開けて入ってくる小さなサイドキックを、笑顔で出迎える。

彼女は慌てた様子でノートパソコンを持って入ってきた。

「ジェントル！ 大変よ！」

街でヴィランが暴れて、出勤要請が入ったわ！」

「ふむ、どうや休憩は終わりのようだね」

オールマイトの活躍で、他国と比べると日本の治安はかなり良い。

だがそれでも、ヴィランによる犯罪は後を絶たない。

「悪しきヴィランに、ヒーローとは何たるかを教えてやろうではないか！」

「きゃーっ！ 素敵よ！ ジェントル！」

私のことを慕ってくれるサイドキックを連れて、速やかに事務所の外に出る。

モタモタしていると、ヴィランによる被害が広がってしまう。

重力を操作する彼女のように超高速ではないが、私は個性を発動して空気に弾力を付与し、ラブラバを抱えて空中を移動する。

憧れである斥流^{せきりゅう}少女がいつもしているように、最短距離を最速で飛んで現場に向かうのだった。

試験結果発表

色々あったが、入学試験は無事に終わった。

同じように入試を受けた二人の様子はというと、爆豪君は相変わらず自信満々だったが、緑谷君は死んだ目をしていた。

きつと結果が思わしくないのだと容易に察してしまえる。

普段は相手を責めたり挑発的な言葉をかける爆豪君だが、今回は口を開かずに始終無言であった。

どうやら彼も、そのぐらいの優しさは持ち合わせていたようだ。

ちなみに私も、緑谷君にかける言葉が見つからなかった。

元々喋るのが苦手で寡黙なものもあるが、別れの挨拶まではほぼ無言である。

だが私も今日は色々あったし、色んな意味で頭がいつぱいだったのだ。

試験の結果には自信があっても、足取り重く孤児院に帰宅するのだった。

正門を潜って孤児院の入り口を開けて中に入ると、いつものように仲の良い家族にお帰りなさいと挨拶される。

こちらもただいまと返したが、彼らは自分の黒歴史を知っている可能性があった。なので表面上は平静を装いつつも、内心では羞恥で顔が真っ赤になる。

けれど私は表面上は平静を装い、院長先生に報告があるからと、早々に切り上げて真っ直ぐに執務室に向かう。

呼吸を落ち着けて扉をノックして入室の許可を取ったあとは、失礼しますと中に入り、まずは簡単な挨拶を行う。

「ただいま。院長先生」

「おかえりなさい。陰子ちゃん」

何のことはない、普通の会話である。

だが今日はいつもマイペースな私にしては緊張しているからか、いつもよりも若干空気が重い。

「入学試験はどうでしたか？」

「ぼちぼち」

一応は本来の実力は出せたかと思う。

結果に自信があっても落ちる可能性がゼロではないため、ぼちぼちである。

あとは当たり障りのない報告をして、部屋から出るのが恒例の流れだ。

けれど今日はそれだけでは終わらず、聞きたいことを口にする。

「院長先生、本を出したの？」

「ええ、そうよ。報告が遅れてごめんなさい。」

確かに最近、陰子ちゃんを題材に出版協力したわ」

育ての親の申し訳なさそうな顔は、久しぶりに見た気がする。

だが確認が取ればあとはどうでも良いので、私はすぐに首を横に振った。

「本を出したことを、責めているわけではない」

そして少しだけ呼吸を落ち着けてから、本題を切り出す。

「雄英高校に合格したら、孤児院から出て一人暮らしたい」

院長先生は、少しだけ驚いていた。

しかしすぐに微笑みを浮かべ、私に声をかける。

「寂しがる子も多いし、巣立ちにはまだ早いけど。」

……貴女なら大丈夫でしょう。許可します」

「ありがとう」

そう言つて私は、深々と頭を下げる。

すると院長先生は書類の山をかき分けて、一枚の紙を取り出した。

「知り合いの不動産会社の住所と連絡先です。」

良い下宿先を紹介してくれるでしょう」

確かに自分だけだと、下宿探しに苦労しそうだ。

ちなみに先に院長先生が話を通しておいて、いくつかある候補から私が好きを選んでいいらしい。

こうやって聞くと、本当に自分のことを信頼して巢立たせる気のようなだ。

何にせよ院長先生の知り合いなら、こちらの懐事情も知っていて信頼できるときつと良い物件が見つかるだろう。

「それと学費と同じく、家賃は孤児院から出します」

「私も少しは貯金が——」

「高校卒業までは援助を続けるのが、うちの方針です」

私もマイペースで一度決めたら譲らないが、院長先生の表情はとても真剣だ。

ちよつとやさつとじや折れそうにないし、どうやって断るかと悩む。

「斥流ちゃんのおかげで、孤児院の運営に余裕ができました。」

政府からも補助金は出ていますが、この機会に少しでも恩を返させてください」

その発言を受けて、今回は仕方ないと降参する。

「わかった。お世話になる」

小説が売れて孤児院にお金が入ってきたことで、運営が楽になったのだろう。

当然の権利だと援助を受け入れる気はないが、自分の黒歴史を全世界に拡散したの

だ。

少しぐらい見返りがあっても良いだろう。

なので高校卒業までは、学費や家賃を負担してもらっても問題なしだ。

とにかく援助を受けることに決めたのだから、今さらああだこうだと悩んでも仕方ない。

マイペースな私は、明日から下宿探しを頑張ろうとこつそり気合を入れるのだった。

下宿探しや引越しの準備で忙しくなるので、新聞配達や戦闘訓練はお休みだ。

地元の中学も黒歴史が拡散していて通い辛いため、ほとぼりが冷めるまではお休みさせてもらう。

代わりに実家の孤児院で自主勉強や、修行をすることにしたのだった。

そんなある日、雄英高校からの合否通知が実家の孤児院に届けられた。

ちょうど私が居たので良かったが、もし留守だったら興味津々な子供たちによって、当人よりも先に開封されていただろう。

何とか確保して自室に避難した私は、素早くカーテンを閉め、扉の鍵は昔から壊れた

ままなので簡単なバリケードを設置する。

これではらくは、誰も入らない。

合格確実とはいえ、落ちる可能性はゼロではない。

家族に泣き顔なんて見られたら、恥ずかしいなんてものではなかった。

大切に使ってきた学習机に備え付けられている椅子を引き、ゆつくりと腰を下ろす。

そして気持ちを落ち着けるために、お茶を一口飲んでから封筒を開く。

すると中から何やら見慣れない丸い板状の機械が出てきたので、私は首を傾げながら

机に置いた。

やがて自動的に電源が入ったのか、空中に立体映像が投影される。

「私が！ 投影された！」

「オールマイト？！」

オールマイトには多少の苦手意識はあるが、決め台詞を借りてるし別に嫌いなわけではない。

だが何故投影されたのかがさっぱりわからず、とにかく続きが気になった。

「せきりゆう斥流少女は、筆記は十分！」

実技は二十点と、残念ながらあまり振るわなかった！」

筆記が十分に取れているなら、実技と合わせて落とされなければ普通科に編入でき

る。

けれど残念ながらとついたので、もしかしたら落ちるのかも少し緊張してしまう。それでも何とか呼吸を落ち着けて、オールマイトの言葉に耳を傾けた。

「しかし先日の入試！ 見ていたのはヴィランポイントだけにあらず！

人助け！ 正しいことをした人間を排斥しちまうヒーロー科など、あつてたまるかつて話だよ！」

私はヒーロー科ではなく普通科志望だ。

関係のないことを力説されても、正直反応に困る。

「綺麗事？ 上等だ！ 命を賭して綺麗事実践するお仕事だ！」

これが雄英高校の校風だろうが、私がヒーローをやりたくない理由でもある。

しかし彼にとつては台本通りだろうし、今は黙って聞くことにした。

「レスキューポイント！ しかも新査定！

せきりゆういんこ
斥流陰子！ 九十二ポイント！」

ポイントの最大値が不明なので何とも言えない。

だが、仮想ヴィランの二十点と比べればかなり高い。

「文句なしの合格だ！」

「やった！」

志望校の合格が発表されて、ようやく肩の荷が下りた。

思わず椅子から立ち上がり、ガッツポーズを取る。

「来いよ！ 斥流少女！ ここがキミのヒーローアカデミアだ！」

オールマイトがまだ何か言っているが、その時にはもはや聞こえていなかった。扉の前のバリケードを撤去して、廊下に飛び出す。

院長先生や家族に、雄英高校に合格したことを喜んで伝えるのだった。

雄英高校入学

入学初日

時は流れて、私は地元の中学校を卒業した。

だがその際に自分の第二ボタンや記念の品を欲しがったり、連絡先の交換をしようと言話しかけてくる生徒が大勢現れる。

最初は丁寧な断っていたがいつまで経っても終わる気配がないため、途中で面倒になつて用事があるからお先に失礼させてもらった。

私は学校では地味で目立たずに、人付き合いも悪いので空気として扱われていた。友人も緑谷君と爆豪君ぐらいいしか居ないし、早めに帰っても問題はないだろう。

とにかく季節は暖かい春になり、いよいよ雄英高校の入学となった。

実家にあまり負担をかけたくないの、なるべく安いアパートを下宿先に選んだ。

一人暮らしではかなり広いが、院長先生の知り合いの不動産屋の口利きで格安にしてもらう、

学校だけでなく公共交通機関にも近く、自分が利用するかは別としてコンビニやスー

パーなども気軽に行ける距離である。

何より管理人さんに裏庭で修行をしても良いと許可が取れたので、その時点で確定と言っても過言ではなかった。

そんなこんなでいつもの時間に起きて早朝ジョギングを済ませ、帰ったら裏庭で個性の訓練を行う。

時間になったら自室に戻ってシャワーで汗を流し、食事したら最低限の身だしなみのあとに指定の制服を着用する。

念のために鏡で確認すると、万が一の抑制解除に備えて大きめにしてもらったことで、ちよつとダボダボしていた。

しかし腕や足の先をまくれば、問題はないだろう。

「雄英高校をヴィランが襲撃するわけないし、必要はなさそうだけど」

流星にヒーローの名門である雄英高校や、その周辺地域でヴィランが暴れることはないだろう。

けれど校外学習や年間行事で、何かしらのトラブルが起きる可能性もゼロではない。さらに抑制解除まで行うとなれば、確率はさらに低くなる。

だが今までの経験から、世の中は何が起きるかわからないのだ。

「転ばぬ先の杖」

キャストオフによる社会的な死を避けるため、万が一に備えておいて損はない。

何にせよ準備ができたので、鏡の前から移動し、鞆の中身や窓や扉、ガスの元栓などの確認をする。

一通りのチェックを済ませた私は現場猫のように指差し確認を行い、アパートを出て玄関の鍵をかけた。

春の暖かな日差しを受けながら、新しい生活に少しだけワクワクしつつ雄英高校に向かうのだった。

雄英高校は小高い山の上に建てられているが、そこまでも道はきっちり整備されていた。

下宿から近いので遅刻の心配はなく、のんびりとした歩みで正門を抜けて校舎の中に入る。

事前に確認した限り、私は一年A組に所属しているらしい。

周囲を見回しながら、長い廊下を歩いていく。

「私のクラスは一年A組、一年A組は」

地図の通りにしばらく進むと、やがて一年A組を見つけてホッと息を吐く。

時間にはまだ余裕があり、初日から遅刻しなくて済んだようだ。

しかし教室に入る前に気になるモノを見つけた私は、廊下で足を止める。それに向かつて、首を傾げながら声をかけた。

「何やってるの？ イレイザーヘッド」

「あいざわここでは相澤先生と呼べ。せきりゆう斥流」

何故か廊下で寝袋にくるまっている相澤先生を発見したのだ。

けれど彼は全く動じずに、平然とした表情で寝ながらゼリー飲料を飲んでいる。

さらに栄養補給が終わったからか、スックと起き上がった。

私の視線も下から上へと自然に移動する。

その時になってようやく入試で会った女子が、教室の入口で緑谷君と立ち話をしてい
ることに気がついた。

「緑谷君？」

「えっ!? 斥流さん!？」

ここで私にしては珍しく、すぐに現状を理解する。

緑谷君はヒーロー科を受験したが、残念ながら合格点を取ることはできなかった。

自分と同じ普通科への編入となり、今まで必死に努力してきたのに不合格だったのだ。
だ。

入試のときに出会った優しい女の子も、同じく落ちたのである。

しかし個人的には数少ない友人の彼が居てくれて、私としては少し嬉しかった。

「緑谷君は残念だろうけど、代わりに爆豪君にヒーローになってもらえばいい」

彼にとって友人関係かは断言し辛い幼馴染ではあるが、爆豪君ならきつと合格している。

だから一旦ヒーローのことは置いておいて、自分と一緒に普通科を頑張ろうと励ます。

けれど私が緑谷君に声をかけっていると、教室の中から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「斥流、俺がどうかしたって?」

私は驚き、慌てて教室内を覗き見る。

するといつも通りに若干不機嫌そうな顔をした爆豪君が、机に足を乗せて堂々と席に座っていた。

少しだけ固まってしまったものの、何とか再起動を行う。

「もしかして、爆豪君も落ちた?」

「はあ? 何の話だ?」

「ここは、普通科の教室」

念のために鞆からプリントを出して再度確認する。

やっぱり私は一年A組の所属になっていた。

校内地図に詳しい場所も記載されている。

「見間違いないじゃないか？ 一年A組はヒーロー科だぞ？」

そう言つて彼も鞆の中からプリントを取り出し、確認したあとに堂々と口にした。

「えっ？ でも私、普通科 ……あれ？」

入試に合格したら普通科に編入という話だった。

もし爆豪君の発言が本当なら、何故自分はヒーロー科の教室に居るのだろうか。

全く意味がわからないが、背後から声がかかる。

私そちらに顔を向けると、相澤先生が気怠そうな表情を浮かべていた。

「せきりゆう斥流、今からそれを説明する。取りあえず教室に入れ」

「ええと、……はい」

未だに状況がさっぱりわからないが、この場で考えても結論は出ない。

取りあえず私は緑谷君と女子生徒の間を通つて、教室に入つていく。

既に集まっていた生徒に挨拶代わりに軽く頭を下げ、開いている席に探した。

その間に相澤先生は寝袋のチャックを下ろしながら、ダメ出しを行う。

「時間は有限、君たちは合理性に欠けるな」

私が空いている席を見つけて腰を下ろすと、あいさわ相澤先生が教室に入つて簡単な自己紹介

を行う。

「担任の相澤消太だ。あいざわしょうたよろしくね」

「「担任?」」

皆が驚いていても、彼はそのまま一切動じずに教卓の前に立つ。

そのまま私に顔を向けて、はつきりと説明を始める。

「んで、斥流が一年A組に配属になった理由だ。」

それはヒーロー科志望の中で、総合最高得点を出したからだ」

それだけでは良くわからずに、つまりどういうことなのかと首を傾げる。

「ようは特別に、機会が与えられたってことだ」

けれど機会がヒーロー科に通うことなら、私は全然欲しくない。

いつもマイペースの私の表情に若干怒りが交じると、相澤先生は冷や汗をかきながら

説明を最後まで聞いてくれと続ける。

「まずヒーロー科を卒業した場合、ヒーロー免許と普通科卒業資格を同時取得できる。」

資格は複数持つておくと、越したことはないぞ」

相澤先生の話の聞いた私は確かにと頷き、少しだけ考える。

やがて結論が出て、じっと彼を見つめて口を開く。

「就職に有利?」

担任の先生はその通りだと頷く。

「ヒーロー免許を所持しているだけで、世間の印象は大きく変わる。

超人社会ゆえに、そういった評価は始終ついて回るんだよ」

確かにヒーロー資格を持つていれば、誠実で品行方正な世間的なイメージが付与される。

人や企業から信用されやすくなるが、悪いことをすれば剥奪される。

ヒーロー絶対主義の現代社会において、免許を所持しているだけで一目置かれるのは想像に難しくない。

「それに免許を持っているからと言って、ヒーロー活動は強制ではないんだ」

ようは自動車免許と同じだ。

ただ持っているからと言っても、必ず車を購入して運転する必要はない。

（ふむ、私はヒーローにはなりたくない。でも、修得だけなら）

さらに個性の使用も許可され、警察や世間の目を気にする必要はなくなる。

そう考えるとヒーロー科を卒業して同時取得を目指すのも、ありなのではと思えてしまう。

「でも、修得は大変？」

「確かにヒーロー科は通常の授業と同時進行で、普通科よりも忙しい。」

しかし俺たち教師も、全力でサポートする」

充血気味の目で、真つ直ぐに私を見つめてくる。

相澤先生の言葉には熱が込められていて、嘘は言っていないさそうだ。

なお、自分は相変わらず、ヒーローになるつもりは毛頭ない。

だが資格さえ持っていれば、履歴書に記載できる。

就職に有利と聞けば、この機会に修得しておいて損はないと思えてしまう。

「資格試験も、きちんと指導してくれる？」

「もちろんだ」

ヒーロー免許をどうやって修得するかは、私は知らない。

けれど雄英高校ヒーロー科は、全国屈指の難関だ。

他校で免許試験を受けるよりは、一発で合格しやすいだろう。

(そう考えると、特例制度を受けて損はない?)

特例制度を利用しても良いが、その前に聞いておきたいことがある。

「ヒーロー科に合わなかったら、普通科に編入してくれる？」

「もちろん、斥流の進路希望が最優先だ。」

普通科に編入したくなったら、いつでも申し出てくれ」

ここまで親身になってくれるのなら、ヒーロー科でも良いかなと考えた。

だが私は、ここでもっとも重要なことを思い出し、ビシツと手を上げる。慌てた様子で、相澤先生に質問する。

「授業料や学費！」

「えっ!? あー、追加費用は全額免除される。

普通科の学費以外は、支払わなくていい。……はずだ」

「やったー！」

実家の孤児院にはお金が入ったので、貧困から抜け出せた。

しかしあくまで一時的なため、あまり負担はかけたくはない。

だが特例制度の追加分は、雄英高校が全額負担してくれる。

授業内容が変わる以外は、特に心配はいらなさそうだ。

私が安堵の息を吐いていると、相澤先生から声がかかる。

「質問はもういいのか？」

「うん、ありがとう。相澤先生」

すると相澤先生が、少しだけ笑ったように見えた。

「礼はいらん。斥流が自分で選んでくれたなら、それが一番いいんだ」

確かに進路は自分が選ぶのが普通だが、振り返れば今まで散々振り回されてきた気がする。

(でも、ようやくのんびりできる)

もし無理そうなら普通科に編入すればいいので、気楽なものだ。

それに表向きはヒーロー科の生徒だから、外からあだこうだ言われることもない。少なくとも卒業までは穏やかな学校生活が過ごせそうで、今から楽しみである。

ちなみに親の許可や複数の書類を用意する必要があるが、あとは相澤先生がやっておいてくれるらしい。

後日、私の方にも書類が郵送されてくるようだが、それはまだ先になりそうだ。

とにかく担任はまた無愛想な表情に戻り、仕切り直してコホンと咳払いをした。

そして何故か寝袋をまさぐり、学校指定のジャージを取り出す。

「早速だが、これ着てグラウンドに出ろ」

「「えっ?」」

いきなりの急展開についていけないのは、私も同じだった。

雄英高校の普通科もこのノリなのか、それともヒーロー科が特殊なだけなのかと困惑する。

けれど理解不能なれど、郷に入れば郷に従えだ。

取りあえず言われた通りに女子更衣室に向かい、指定のジャージを着用してグラウン

ドに移動するのだった。

私が一年A組で名前を知っているのは、緑谷君と爆豪君だけだ。

そして印象に残っているのは、入試で転びそうになっていた友人を助けてくれた優しい人と、試験の説明中にビシッと質問や苦情を言っていたメガネ君ぐらいである。

(それと、轟君も居た)

轟焦凍君とは、少しだけ話したことがある。

けれど緑谷君たち程交流があったわけではなく、浅い付き合いなので向こうがこちらを覚えているかはわからない。

とにかく他の生徒のことは全く知らなかったため、この中では一番話しやすい緑谷君の近くに移動する。

そこで相澤先生からの説明を聞くことにした。

「個性把握テストオ!?!」

取りあえず個性を使うなら、体操服も制服と同じで変身を前提とした大きめサイズで良かった。

抑制解除を行うは別として、備えておいて損はないのだ。

「入学式は!?! ガイダンスは!?!」

「ヒーローになるなら、そんな悠長な行事、出る時間ないよー」

けれど万が一の備えはしていても、まさか入学初日からこうなるとは思わなかった。

この先ヒーロー科でやっていけるのかと、不安になる。

想像していた普通科の授業内容と差がありすぎて、何だか平穩な高校生活からどんどん遠ざかっている気がした。

そんな私の心境を完全に無視して、相澤先生が続きを説明していく。

「雄英は自由な校風が売り文句。そして、それは先生側もまた然り。」

お前たちも、中学の頃からやってるだろう」

そう言つて相澤先生はタブレット端末を取り出して、私たちに見せてくれた。

「個性禁止の体力テスト」

各種目が表示されているタブレット端末を見ながら、私は引きつった表情に変わつて挙動不審になつてしまう。

（実はこつそり個性使つてたなんて、絶対言えない！）

今も個性で、肉体に超重力をかけ続けているのだ。

幸いなことに永続デバフ状態は仕様上避けられないもので、無理に解除すると命に関わると勘違いしてくれている。

だがドーピングではなく逆に身体能力に大幅な制限をかけているので、バフではない

からセーフだろう。

なのでここは気にせず、相澤先生の説明に耳を傾ける。

「国は未だ画一的な結果を取って、平均を作り続けている。合理的じゃない」

相澤先生が少しだけこちらを見たので、私は首を傾げる。

しかしすぐに何事もないように視線を戻し、続きを話す。

「まあ、文部科学省の怠慢だな」

次に相澤先生は爆豪君に顔を向けて、彼に声をかける。

「実技入試成績のトップは、爆豪だったな」

急に話題を振られた彼は一瞬驚いたような表情になり、またもやこっちに私に顔を向

ける。

全く嬉しくないが、どうしても注目される定めらしい。

「せきりゆう斥流はレスキューポイントはトップだが、本人のやる気がないため実技の成績は低い」

簡単な説明ではあったが、爆豪君は納得したように大きな溜息を吐いた。

まるで私が悪いような言い方ではあるものの、はつきりそうだとは言っていないので

気にしない。

とにかく相澤先生は続きを説明していく。

「中学の時、ボール投げの距離、何メートルだった？」

担任の質問にしばし考えて、爆豪君は率直に答える。

「六十七メートル」

私の記録は何メートルだったかなと考える。

だがそこまで記憶力は良くないし、思い出せなくても良いかとスルーした。

「じゃあ、個性を使ってやってみろ」

私が考えている間に爆豪君は相澤先生の指示に従い、ボールを持つて白線で囲んだ円の中に入っていく。

自分を含めた周りの生徒は、一体何が起こるのかと固唾を飲んで見守っていた。

「円から出なきゃ、何してもいい。思いつきりな」

軽く準備運動をしている爆豪君にゴーサインを出して、いよいよ投球開始である。

「じゃあまあ、球威に爆風を乗せる！ 死ねええええ!!」

何とも豪快な爆発と同時に、ボールが炎に包まれて空の彼方に飛んでいった。

「……死ね？」

緑谷君が彼の台詞の意味を考えているが、今までの付き合いから爆豪君は深く考えて喋っていない。

私はその場のノリなのだ判断する。

「まずは自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

担任がタブレット端末を見せてくれたが、爆豪君のボールは実に千メートル近く飛んでいたようだ。

「「おおー!!!」」

私は彼の實力に驚くよりも、雄英高校の敷地の広大さにびつくりした。地元の小中学校とは規模が全然違う。

何にせよ生徒たちはワイワイ騒いで、大盛り上がりだ。

しかし相澤先生は違うらしく、あくまでも淡々と言葉を続ける。

「面白そうか。ヒーローになるための最難関、そんな腹積もりで過ごす気なのか？」
先程までの雰囲気が一変し、担任は良い笑顔で口を開く。

「よし、トータル成績が最下位の者は見込みなしと判断し、除籍処分しよう！」
「「はあぁーっ?!」」

完全に周りの空気が凍りつく中で、私は相変わらずのマイペースを發揮して堂々と手を上げる。

「相澤先生！ 私が最下位になったら、普通科に編入——」

「斥流は最下位になってもヒーロー科だ。除籍はしない」

元々ヒーロー科に所属していないし、自由な校風のノリについて行くのも大変そうなので、ここよりは楽な普通科に編入しても構わなかった。

しかし念のために確認を取ると、私は例外扱いらしい。
「そもそも、斥流なら余裕で上位に入れるだろ。」

あと、あまり手を抜くな。他の生徒のためにならん」
一年A組の実力がどれぐらいかはわからないが、相澤先生が言うならきつとそうなのだろう。

そして自分としては別に手を抜いているつもりはなく、完全封印状態で精一杯頑張っている。

だがどうやらリミッターを解除して欲しいようで、体が鈍らないように短時間と一段回だけなら良いかと考えた。

「生徒の如何は、俺たちの自由だ。」

ようこそ！　これが雄英高校ヒーロー科だ！」

ノリノリで発言する相澤先生を見て、いくら何でもフリーダムすぎると頭を抱える。

「とんでもないクラスに編入してしまった！」

特例制度を受け入れたのは、早まったかも知れない。

だが就職に有利になるし、ヒーロー免許証は欲しい。

ならばせめて、やるだけやってみて駄目だったら諦めれば良いのだ。

そんな前向きなのか後ろ向きなのかわからない考えで、取りあえず拳を握って気合を

入れるのだった。

個性把握テスト

相澤先生の説明を受けて、入学初日に個性把握テストが行われることになった。肝心の授業内容だが言葉通りの意味に加えて、最下位は除籍処分という常識を疑うものだ。

緑谷君は中学一年生から体を鍛え続け、今では筋肉モリモリのマッチョマンである。並の個性持ちよりは運動神経が良くても、この場に居るのは狭き門を潜り抜けたヒーロー候補生たちだ。

残念ながら彼がもつとも落とされる可能性が高く、私は口には出さないが友人の身を案じた。

しかしここで、入学試験で緑谷君を助けた優しい女の子が一步前に出る。

厳しい担任を前にしても、怯まずに大声で訴えたのだ。

「最下位除籍って！ 入学初日ですよ！

いやっ！ 初日じゃなくても理不尽すぎる！」

けれど相澤先生は、話を聞く気はないようだ。

一切の動揺を見せずに、真面目な顔のまま口を開いた。

「自然災害、大事故、そして身勝手なヴィランたち。

何処から来るかわからない厄災、そういうピンチを覆していくのがヒーローだ」

テレビの向こうのヒーローたちは、困難に立ち向かって打ち破り、民衆の歓声を一身に浴びていた。

そんな華々しい活躍が連日報道されているが、アレは上澄みの中の上澄みだ。

「放課後を待つて、談笑したかったなら、お生憎。

これから三年間、雄英は全力で苦難を与え続ける」

確かに相澤先生の言うように、名門高校である雄英に入学した彼らは、これからトツプヒーローを目指して必死に努力すべきだ。

それはわかるのだが、私の想像していた平穏なスクールライフが音を立てて崩れていく。

「さらに向こうへ。プラスウルトラさ。全力で乗り越えてこい！」

「「おおっ!!!」」

「……お〜」

ヒーロー科の担任に発破をかけられた。

一年A組の生徒たちは若干の戸惑いはあるが、活力を漲らせている。

ただし自分は免許証の修得のためとは言え、何でこの場に居るのだろうかという疑問に思

う。

それでも空気を読んで、一応声を出しておいた。

「さて、デモンストレーションは終わり。こっからが本番だ」

取りあえずは相澤先生に言われた通り、一段階だけ抑制を解除しておく。

(完全抑制状態でも、本気なのは変わらない)

超重力下で全力を出せば、プロのアスリート並のパワーが出せる。

私としても修行になるので良いと思うのだが、担任の先生は認めなかった。

なので今は謎の輝く粒子が全身から漏れ出し、私の体格も二年程成長している。

現場の責任者に顔を向けると何も言わずに静かに頷いたことで、問題ないようだ。

けれど変身状態では、他の生徒と実力差があり過ぎる。

それにジャージは大きめサイズなので大丈夫だが、無駄にキラキラと輝いて目立つの

だ。

ある程度は慣れているとはいえ注目されると恥ずかしく、とにかく今は雑念を振り

払って個性把握テストに挑むのだった。

第一種目五十メートル走は、皆がそれぞれの個性を使って独自の走りを見せてくれた。

爆豪君は両手を爆発させて加速力を生みだし、緑谷君は普通にゴールまで走っていた。

他の生徒も名前は知らないが、頑張っているのは伝わってきた。

二人ずつ順番に測定していき、私は二十一人目の特例生徒だ。

どの種目も最後に測ることになる。

取りあえずスタートと同時に地面がえぐれる程の力で蹴り、さらには重力加速を乗せて一秒ピツタリを叩き出す。

一段回の解放で、ここまで真面目に測定したのは初めてだ。

他の生徒よりは上でも、自己の記録として速いか遅いのかは良くわからない。

けれど一年A組の生徒が褒めてくれたので、良い結果には違いないと納得しておく。

それはそれとして第二種目に進んだが、握力を測定すると五百キロほどだった。

普通に握ったので、これといった感想はない。

第三種目の立ち幅跳びは、個性を使えば何処までも飛んでいける。

第四種目の反復横跳びも抑制解除しているので、常人を越えた記録を叩き出した。

次の第五種目のボール投げだが、優しい女の子は無重力を使ってボールを投げて無限という記録を出した。

私も重力を操作できるが、視界から外れたり認識できなくなれば強制的に解除されてしまう。

それに1Gより下げることができないため、同じように見えても全く別の個性だ。

やがて緑谷君の番になった。

彼は今まで特筆すべき記録を出せていない。

当人もこのままだと除籍処分になるかも知れないと感じているようで、かなり緊張していた。

無個性の彼がヒーロー科に合格したのは凄いけど、やはり個性の差を埋めるのは難しい。

数少ない友人として応援しているが、正直今からの逆転は厳しそうだ。

「緑谷君は、このままだと不味いぞ」

メガネの男子生徒が、緑谷君を心配するような発言をした。

私もそちらに目を向けると、爆豪君がすぐに口を開く。

「たりめえだ！ 必死に食らいついてはいるが、デクは無個性だぞ！」

爆豪君が若干棘はあるが、彼を気遣う言葉を口にする。

「なっ！ 無個性!? 彼が入試で何を成したか知らんのか!？」

「はあ!？」

何をやったのかは私も知らないし、かなり気になる。

だがそれを尋ねる前に、白線の内側に入ったまま動きを止めている緑谷君が覚悟を決めた。

投げる素振りを見せたので、皆の注目がそちらに移る。

「くっ!」

唇をかみしめて、綺麗なフォームで全力投球したのは良かった。

しかしやはりと言うべきか、残念ながらあまり飛距離は伸びない。

「なっ!？」 今、確かに使おうって!？」

青ざめた顔で自分の両手を見つめる彼に、相澤先生から淡々と声をかける。

「個性を消した」

気づくと担任の先生の瞳が赤くなり、炭素繊維に特殊合金を編み込んだ操縛布を展開していた。

あれはイレイザーヘッドがヴィランを捕らえるための戦闘フォームだ。

私も彼と共闘したことがあるので、何となく覚えていた。

「つくづくあの入試は、合理性に欠くよ」

相澤先生が緑谷君を真っ直ぐに見つめる。

そして、責めるような言葉をかけ続ける。

「お前のような奴も、入学できてしまう」

「個性を、消した？」

その瞬間に彼は何かに気づいたようで、驚きの声をあげる。

「あのゴーグル!? そうか! 見ただけで人の個性を抹消する個性!」

抹消ヒーロー! イレイザーヘッド!」

寝袋で廊下に転がっていたときに、私はイレイザーヘッドと発言した。

けれど、どうやら聞こえていなかったようだ。

それに他の生徒が相澤先生のことを話しているが、知名度はかなり低いらしい。

「イレイザー? 俺知らない」

「聞いたことあるわ。アングラ系ヒーローよ」

私も取材は断ってるし、自分からヒーロー活動をしていない。

けれど何故か全国ニュースでバンバン放送されて、主人公として活躍する書物が出回り、世界的なベストセラーという有様で世も末である。

思わずヘルメットを被った現場の猫のように、どうしてと嘆きたくなる。

だが今は、それどころではない。

その辺りの事情は一旦置いておいて、イレイザーヘッドは緑谷君に話しかける。

「見たところ、個性が制御できないんだな。」

また行動不能になって、誰かに助けてもらうつもりだったのか」

「そんなつもりじゃあ！」

だが緑谷君は、それ以上喋ることはできなくなる。

相澤先生が伸ばした操縛布に捕まったのだ。

「どういうつもりでも、周りはそうせざるを得なくなるって話だ」

担任の目の前に緑谷君が引き寄せられ、教育的指導が続けられる。

「昔、暑苦しいヒーローが、大災害から一人で千人以上救い出すという伝説を作った」

これはオールマイトのことで、今でも特集が組まれて過去の事件が報道される。

それにさつきから校舎の影からこつちの様子を伺っているし、気づいているのは観察力に優れた相澤先生と、超感覚を持つ私だけのようだ。

当人は隠れているつもりだし、指摘すると面倒なことになるので気にせず黙っておくことにした。

「二人の少女が暴走する新幹線を素手で受け止め、停車させたこともあったな」

相澤先生だけでなく、他の生徒も一斉に私に視線を向ける。

だがあれは、止むに止まれぬ事情があったからだ。

放っておけば大惨事待ったなしだし、終わり良ければ全て良しである。

しかし恥ずかしくなつて我関せずとそつぽを向くと、やがて空気を讀んで話題が元に戻る。

「同じ蛮勇でも、お前は一人を助けて木偶の坊になるだけ。

みどりやいすく
緑谷出久、お前の力じやヒーローにはなれないよ」

緑谷君は唇を噛みしめて悔しそうに押し黙り、俯いてしまった。

続けて相澤先生は拘束を解除し、彼を自由にして背を向ける。

「お前の個性は戻した。ボール投げは二回だ。とつとと済ませろ」

元の場所に戻る相澤先生だが、ここで先程から羞恥心が限界の私が手を上げる。

「あの、相澤先生。私もいつも無茶をして、大勢の人に迷惑をかけている」

昔は超重力下での日常生活を送るのも苦勞して、血反吐を吐いてぶつ倒れることが何度もあった。

それに一般人がヴィランと戦ったり、個性の使用するのも法律に抵触する。

つまり大勢の人に迷惑をかけているので、もう少し緑谷君に優しくてくしくれても良いと思うのだ。

「それと、緑谷君が個性に目覚めたのは初耳。

今は制御が難しくても、今後は成長する可能性もある」

今の彼を昔の私に似ていることもあって、何とか許してもらえようように相澤先生に訴

える。

するとしばらく考えたあとに、担任の先生は振り向きもせず口を開く。

「性懲りもなく玉砕覚悟の全力か。はたまた萎縮して最下位に収まるか。

どっちに転んでも、ヒーローとしての見込みはない」

今のは誰に向けての返答なのかは良くわからないが、こちらの声が聞こえないとは思えない。

何にせよ相澤先生は、緑谷君を真っ直ぐ見つめたまま動かない。

自分に担任の説明は理解不能だったが、彼はこの発言を受けて何かに気づいたようだ。

覚悟を決めて呼吸を整え、再び全力投球を行う。

「スマーツシュツ!!!」

ボールは未だかつてないほどに遙か遠くへと飛んでいく。

そして、爆豪君の記録に並んだ。

「「おおっ!!!」」

周りの生徒から歓声があがり、今度は私も同じように驚く。

そして緑谷君だが、何故か痛そうな顔をしながら相澤先生に話しかける。

「先生！ まだ、動けます！」

「……コイツ！」

良く見ると緑谷君は、中指が赤く腫れていた。

慣れない個性を使った反動だろうが、本人はまだやる気十分のようだ。

校舎の影のオールマイトも、嬉しそうにしている。

それは置いておいて、最下位の除籍処分を回避できるかはまだわからない。

私は相変わらず緑谷君のことを心配するが、雰囲気だけは何故か良い感じになったのであった。

個性把握テスト終了

今まで良い成績に恵まれなかった緑谷君が、慣れない個性を使ったボール投げで大記録を出した。

同じ一年A組の生徒たちは、それはもう大騒ぎである。

概ね好意的ではあるが爆豪君は驚きの表情で固まり、何とも複雑そうであった。

やがて彼は大きな声を出して、緑谷君を尋問する。

「どういうことだ！ おらあ！ 訳を言え！ デク！ テメエツ！」

ヴィランのように襲いかかることはないが、怒りの表情を浮かべて大声で叫んでいる。

私も初耳で彼の個性について知りたかったけれど、緑谷君はビビりまくりでそれどころではない。

相澤先生がトラブルが起きたら抹消を使う準備をしていたが、幸いその必要はなさそうだ。

「時間が勿体ない。次、準備しろ」

結局、緑谷君の個性についての説明はなく、個性把握テストの続きを行うように促す。

爆豪君は拳を握りしめて怒っているものの、自制はできているようだ。何にせよその後の種目は、問題は起きずに進行した。

終わり良ければ全て良しだろう。

全種目が終わったあとに、相澤先生が個性把握テストの総合順位を一括開示してくれた。

けれど健闘むなしく、残念ながら緑谷君が最下位になってしまった。

私をそれを見て、数少ない友人にどう声をかけたものかと悩む。

すると担任が良い笑顔を浮かべて、堂々と発言する。

「ちなみに除籍は嘘な。君らの個性を最大限引き出す、合理的虚偽」

「はああ!!」

私を含めた生徒が思いきり驚く中で、何処かのお嬢様っぽい人が呆れた声で喋りかける。

「あんなの嘘に決まってるじゃない。ちよつと考えればわかりますわ」

全然気づかなかった。

だが生徒の半数近くは、普通に嘘だと思っていたようだ。

結局色々あったが、クラスの皆は楽しそうに今回のテストのことを話している。

「これにて終わりだ。教室にカリキュラムなどの書類があるから、戻ったら目をしておけ」

相澤先生はそう言つて背を向けて歩いて行き、緑谷君の前で立ち止まる。

「緑谷、保健室でばーさんに治してもらえ。」

明日から、もつと過酷な試練が目白押しだ。覚悟しておけ」

彼にとつては、一難去つてまた一難だろう。

けれどそれはそれとして、ヒーロー科の授業がこのレベルなら何とかかなりそうだ。

私はこつそり、明日も頑張ろうと内心で気合を入れるのだった。

教室に戻つて必要書類に目を通したあとは、そのまま下校時刻となつた。

本来ならこのあとは下宿先に帰るだけだ。

しかしその前に、あることが気になった私は目的の人物に話しかけるために、普通に走つて追いかける。

「緑谷君」

「斥流さん？」

「おおっ！ 斥流せきりゅう陰子君いんしではないか！」

「さつきぶりだね。斥流ちゃん」

個性把握テストが終わったあと、一年A組の教室で簡単な自己紹介をしてくれたのだ。

おかげで緑谷君と一緒に歩いているのが、飯田君と麗日いいたさんと知ることができた。私が三人に挨拶をしたあとに、緑谷君が疑問を口にする。

「斥流さんから話しかけてくるのは、ちよつと珍しいね」

そう言えば寡黙な自分が人に話しかけることは、滅多になかった。それを思い出した私は、静かに頷く。

「実は緑谷君の個性のことで、少し話がある」

「ぼつ、僕の個性が何か!？」

あからさまに動揺している緑谷君だが、理由はわからない。

なので気にせず、続きを話していく。

「緑谷君と私の個性は、似ている」

彼は驚いた顔になり、すぐさま二人が声を出す。

「斥流君！ 緑谷の個性はキミとは違うぞ！」

「そうだね。斥流さんは重力操作だし。ねえ、緑谷君」

彼も同意とばかりに、コクコクと頷いている。

けれど自分も上手く説明するのは難しく、言葉にするよりも直接見せたほうが手っ取

り早いと判断した。

「今から、緑谷君の個性と似ているところを見せる」

まだ困惑している三人だが私は気にせず、大きく息を吸って抑制を解除していく。

一段階だけだとわかりにくいので、完全解放するのだ。

通学路の途中で足を止めて話し込んでいることもあり、周りの人たちは自分たちに注目していた。

けれど今さら待ったはかけられず、何とか心を落ち着けて平静を装う。

やがていつもよりも時間はかかったが、高校一年生ヴァージョンの私に変身が完了する。

「まだ、この姿には慣れてない。時間がかかって、ごめんなさい」

「そつ、それはいいけど！ 斥流さん！ その姿は!?」

緑谷君が私を見て驚きの声をあげたが、小学校児童がいきなり女子高生に変化したのだ。

驚愕して当たり前である。

指定の制服は余裕を持たせていたのでサイズの問題ないはずだが、寸法が甘かったのか胸やお尻が少しキツイ気がした。

普段は袖まくりをしているので、皆と同じように丁寧に直していく。

ちなみにこの状態は煌めく粒子の放出量が大幅に増加しているので、とても目立つ。パワーも強大すぎて、加減に失敗すれば服が破れるだけでなく周辺被害がとんでもないことになる。

だがそんな事情は一体置いておき、私の数少ない友人に話しかける。

「これが完全解放状態」

修行は毎日続けているので、少しずつ超重力の倍率は上がっている。

それでも現在の最終形態なのは間違いない。

それを見た三人は息を呑んでいた。

けれどやがて緑谷君が、緊張しながら口を開く。

「でも斥流さんは、全力を出すと命に関わるんじゃないやあ！」

「その通り。とても危険。でも動かなければ、大丈夫」

超重力をかけずに、日常生活を送るのはとても危険だ。

ほんの少し出力調整に失敗しただけで、周囲の物を壊してしまう。

食器を持ち運ぶと十中八九で割るだけでなく、ドアノブを軽く握ったつもりでもうっかり捻り切る。

ゆえに完全体になるのは余程の強敵が現れるか、周辺被害を気にせずに戦える状況だろう。

あとは服のサイズが合っても、自分の運動性能について行けない。

もし破れたら社会的な死は避けられないので、なるべくなら一、二段階で対処したいところだ。

だがここで私はあることに気づき、緑谷君に率直な質問する。

「そう言えば緑谷君、良く知ってるね」

自分の個性のことは、ある程度は伝えてはいる。

けれど、あまり詳しくは語っていない。

「えっ？ あつ、うん。名もなきヒーローの軌跡を読んだから」

その瞬間に私の表情筋が死に、チベットスナギツネのような微妙な顔になってしま
う。

自身の黒歴史を直視するのが嫌なので読んではないが、あの自伝もどきは相当詳しい
情報が記載されているようだ。

何となく飯田君と麗日うららかにさんに視線を向けると、露骨に顔をそらされた。

それだけで二人も読んでいることを察してしまいが、このままでは話が進まないの
で、何とか平静を装ってコホンと咳払いをする。

「とにかく、緑谷君の個性は今の私と同じ。

負荷に耐えきれず、使うたびにボロボロになる」

「たつ、確かに！」

私の個性は肉体ではなく、服や周囲が酷いことになる。

だが今は彼を納得させるために、そういうことにしておく。

何やらブツブツ言い始めたが、これは緑谷君の癖なので慣れたものだ。

新しくできた友人二人名はちよつと引いているものの、気にせず説明を続ける。

「だから私が、上手く使えるように手伝う」

「斥流さんが手伝ってくれるの!？」

「数少ない友人が困ってるのは、協力する理由にならない?」

もう一人の友達は爆豪君だが、彼は困っていても私の協力を拒否する。

まあそれはそれとして、今は緑谷君のほうに心配なのだ。

「ちなみに、他の数少ない友人って?」

「爆豪君。家族は親しくても、友人ではない」

「そつ、そうなんだ」

三人から憐れみに満ちた視線を向けられる。

だが私に友達が少ないのは、今に始まったことではない。

空気のように扱われるのは慣れているので何も感じないが、優しくされるとつい世話を焼いてしまう。

何にせよ周囲に人が集まってきたので、自身に加重をかけて小学校低学年の姿に戻る。

解放は出力調整に時間がかかるが、封印は慣れているのですぐできるのだ。

周りの人たちから残念そうな声と、逆にやったぜとも聞こえた。

私は何がなんだかわからず、取りあえず無視することにした。

「とにかく、この場で長話は駄目」

緑谷君に協力するのは良いが、道端で話すことではない。

そして少しだけ考えた私は、やがてある提案をする。

「私の家に来る？」

「えっ？ ああうん、僕はいいけど。」

斥流さんの家に招待されるのは、初めてだね」

確かに今まで、友人を家に呼んだことはない。

ジョギングはいつの間にか合流しているし、緑谷君とは毎日学校で顔を合わせていた。

けれどきつと、今彼が考えているのとは少し違う。

私は下宿先に案内するために、のんびりと緑谷君の前を歩く。

「実は雄英高校の近くで、一人暮らししてる」

「ええっ!? 孤児院じゃないの!」

「違う。今はマンシヨンに下宿してる」

緑谷君の動揺が酷くなり、何故か顔も赤い。

さらには麗日さんも反応し、ビシツと手をあげる。

「あのっ! 斥流ちゃん! 私も行つて良い!」

「構わない」

マンシヨンは格安だったが、一人で暮らすには無駄に広い。

その気になれば、四人暮らしも可能だろう。

それに彼女は良い人なので、一緒に来たとしても微妙な空気にはならない。

ここで私は少しだけ寂しそうにしている飯田君に顔を向ける。

「飯田君も、良かったら来る?」

「いつ、いいのか!」

「うん、緑谷君と仲がいいなら、きっと良い人」

自分とは殆ど接点がないので、良くわからない。

けれど緑谷君と仲良くしているなら、きっと大丈夫だ。

何しろ彼は私と同じように、小中学校では友達は殆どいなかった。

そんな緑谷君と仲良くできる二人なら、私も友人になつてくれるかも知れない。

元々人付き合いは苦手で自分から誘うことはないが、雄英高校はヒーロー志望が多い。

善人の比率が他校よりも高いように思える。

なので過去に会った人より比較的話しやすく、私は気楽に家に誘うのだった。

新しい友人

私は雄英高校から比較的近い場所にあるアパートの一室を借りて、そこに住んでいる。

そして今日は、緑谷君と麗日さんと飯田君を家に招いた。

院長先生の知り合いの業者が紹介してくれただけはあつて、格安なのに広々とした新築で、防犯や防音性能もバッチリである。

玄関の鍵を開けて家へ上がった私は台所に向かい、今朝作っておいたお茶を冷蔵庫から出す。

そのままちゃぶ台を囲んで座布団に座っている三人の元に戻って、コップを置いて順番に注いでいく。

「粗茶ですが」

「どっ、どっもー」

来客を出迎えた経験はそれなりにあるが、本当に正しいのかはわからない。

とにかく自分のコップにも注ぎ、次に戸棚から適当なお茶菓子を引っ張り出して大皿に乗せる。

最後に座布団を敷いて、私もよつこらしよと腰を下ろす。

ちなみに緊張しているのは今日会ったばかりの二人だけでなく、昔から付き合いのあ
る緑谷君もガチガチに固まっていた。

「えっ？ 何で？」

「いつ、いや！ 実は女の子に招かれて、部屋に入るのは初めてで！」

「ふーん、私には良くわからない」

うちの孤児院は、家族が頻繁に部屋に入ってくる。

扉の鍵も壊れているし、年齢も性別もバラバラの子供たちが出入り自由だ。

それに今は男女の感情よりも修行優先なので、正直良くわからない。

なお、飯田君と麗日さんも緊張しているため、今度は二人にも顔を向ける。

「申し訳ない！ 憧れのヒーローに招待されたと思うと！」

「わっ、私も同じ！」

私は正式なヒーローじゃないし、活動もしていない。

けれど、知名度だけは異常に高い。

しかし成り行きで実績を上げてしまったし、世間のイメージを変えるのは困難だ。

仕方ないので修正は無理と判断して、今は話を先に進めることに決めた。

「それはそれとして、緑谷君の個性だけ」

「はっ、はい！」

相変わらず緊張している彼は置いておいて、私なりの解釈を伝えていく。

「まずは、個性のオンオフを覚えるといい」

「ええと、どういうこと？」

私は緑谷君に見本を見せるため、ちやぶ台の上に一本のボールペンを置く。

次に個性を発動して重力を逆転させ、天井に向かって落とす。

「これが個性をオンにしている状態。

オフにすると重力は元に戻る」

私は個性を解除して、落ちてきたボールペンがちやぶ台に当たる前に手で受け止める。

「緑谷君も同じように、まずは個性のオンオフを覚えて」

そして緑谷君の顔を真っ直ぐに見つめて説明すると、彼はすぐに返事をする。

「でも斥流さん、僕は個性を使うと体が――」

「動かないで」

「えっ？」

戸惑いの表情を浮かべる緑谷君に、私は続きを説明していく。

「指一本動かさずに、個性だけを発動させるの。」

それがもつとも心身の負担が少なく、壊れにくい」

自分が個性に目覚めた頃は、加重状態で日常生活を送るのも大変だった。

なのでまずはその場から動かずに、超重力の負荷に慣れることから始めたのだ。

そして個性把握テストの緑谷君を見た限り、肉体が耐えられずに壊れているのは間違いない。

ちなみにすぐ隣で聞いている二人は口を挟まずに、成り行き見守っていた。

「緑谷君の個性は、動くことが発動条件？」

「それは違う……と、思うけど」

寡黙な自分にしては、長々と喋っている。

別に疲れはしないが、お茶を飲みながら続きを話す。

「だったら、やはり個性の使用に慣れるのが最優先」

緑谷君がいつの間にか熱心にメモを取っている。

昔から向上心がある人なので教えがいがあると、私は満足そうに頷く。

「必殺技を放つときだけ肉体の限界近くまで上げて、普段は低出力を維持して戦闘を行うのが理想」

私の基本スタイルは、ヴィランの強さによって抑制解放を適時調整する。

そして緑谷君の個性は発動するたびに全力全開であり、体が壊れてしまうのだ。

「自動車のアイドリング状態のようなもの。

でも、出力は上げすぎないでね」

「うっ、うん。確かにそれなら、負荷も軽くできるかも！」

緑谷君の場合は、まずは個性の出力を調整可能になるのが必須だ。

なので最初に個性の負荷を減らした状態で慣れてもらい、そんなアイドリング状態から戦闘モードに移行する。

当面の目標はそんな感じだ。

「あとは拳よりも足のほうが、威力が高い」

「なっ、なるほど！ 参考になる！」

私が重力加速をするときには、毎回蹴り技を放っている。

殴るよりも威力が高いのもあるが、ゼロ距離では威力が激減してしまうし、空から落ちる攻撃なので着地しやすいようであった。

何にせよ言っていることは間違っていないため、そのあとも気づいたことを適時指摘していく。

しばらく私が一方的に話していたが、やがて窓の外が夕焼け空に変わったところで一息ついた。

「現時点で私から助言できるのは、ここらまで」

「斥流さん！ どうもありがとう！ 凄く参考になったよ！」

緑谷君は嬉しそうな顔でお礼を言ってくれた。

私も下宿先に招いて説明したかいたと、微笑みを浮かべて静かに頷く。

ここで今まで殆ど喋らなかつた飯田君と麗日うらちかさんに、お茶のおかわりを勧める。

すると空気を読んで今まで黙っていた彼らが、順番に口を開いた。

「斥流ちゃん！ 凄く的確なアドバイスだったよ！」

「ああ！ やはり個性の使い方に関して、一年A組の誰よりも卓越しているだけはある
！」

「どつ、どう致しまして」

赤の他人の称賛とは違い、彼らは会つて間もないが既に親しい間柄だ。

正面から褒められると、やはり嬉しくなる。

「あとは雄英高校の教師にも、相談したほうがいい。

生徒の私より、的確な助言をもらえるかも」

悩みを抱え込むより、まずは教師に相談するべきだ。

幸いオールマイイトは緑谷君の筋トレ指導に熱心だったし、良いアドバイスをもらえる
かも知れない。

あとは彼の頑張り次第なので、友人としては見守ることしかできない。

だがまあそれはそれとして、他に気になることがあったので率直に口に出した。

「お茶菓子、食べないの？」

「えっ？ ああ、うん。いただきます」

「わっ、私も」

「そっそうだな。ご厚意に感謝する」

三人は今まで出されたお茶を、チビチビ飲むだけだった。

他人の家なので遠慮もあつただろうが、私が促すことで慌てた様子で茶菓子に手をつける。

「良かった。私だけでは食べきれない」

私がホッと息を吐くと、首を傾げた麗日うららかにさんが疑問を口にする。

「お菓子を買いきったの？」

「ううん、私を買ったわけじゃない。」

この地域を巡回してるヒーローから貰った」

ヒーローに出会うたびに、お菓子だけでなく様々な食材を渡されるのだ。

理由や渡す人は日によって変わるので良くわからない。

だがせつかくの厚意を断るのも悪いので、毎回丁寧に礼を言つて受け取っている。

ちやぶ台に置かれているのは全部それであることを説明すると、三人とも微妙な表情

を浮かべる。

「そう言えば斥流さんは、お菓子を買ったりするの?」

「お金が勿体ないから、自分では買わない」

孤児院からは学費だけでなく、家賃や食費を含めた月々の仕送りが届いている。

けれど、その殆どは使わずに貯め込んでいた。

部屋の家具も必要最低限で、最初は元々使っていたお古を引き続き使う予定だった。

しかし何故か院長先生が渋い顔をして判断し、足りない物リストを作成して一通り取り買い揃えたのだ。

結果、下宿先は新しいのばかりになった。

ただし私が折れなかったので必要最低限しか揃っておらず、何処となく殺風景である。

「じゃあ、食事はどうしてるの?」

「最初は食べられる野草や木の実を採取し、親切なパン屋さんからパンの耳をもらっていた。

今は食材をわけてもらったり、モヤシやうどんなどの格安の特売品を買ってる」

「……………うわあ」

皆は何とも複雑な表情を浮かべているが、雄英高校入学後は新聞配達のアルバイトを

辞めて収入が途絶えているのだ。

いくら親切なヒーローに食材やお菓子をいただけるとはいえ、厚意に甘えるだけでは駄目である。

いつ途絶えるかもわからない不安定なモノを当てにするなら、日常生活でも節約しておくに越したことはない。

院長先生からは、新たなバイトはせずに孤児院からの仕送りを使うようにと言われている。

けれど雄英高校を卒業して収入を得られるようになったら、全額返済するつもりなのでなるべく手を付けたくなかった。

結果、今回のような節約生活になっている。

しばらく誰も喋らず、お茶をすすったり菓子を食べる音が聞こえていた。

だがやがて麗日さんが顔を上げて、私を真っ直ぐに見つめてくる。

「斥流さん！ 私と！ ルームシェアしよう！」

「「えっ!?!」」

麗日さんがいきなり何を言い出したのか理解できずに、私だけでなく緑谷君と飯田君まで驚きで固まってしまった。

理由を聞くと、彼女も実家から離れて一人暮らし中で、しかもあまり裕福ではないよ

うだ。

個性も重力系なこともあり、何だか親近感が湧いてくる。

麗日さんは同性で良い人だし、大勢と暮らすのは慣れているので、私としては問題はない。

「保護者の許可次第、……かな」

私は契約したばかりで慣れていないスマートフォンを操作し、育ての親である院長先生に電話をかけて相談する。

するとすぐに麗日さんに交代するように言われて、彼女に受話器を渡してすぐに二つ返事でOKを出された。

おまけに孤児院からの仕送りは今後は全て麗日さんが管理し、返済の必要は一切ないとまで言われてしまったのだ。

追撃とばかりに、引越すなら早いに越したことはないと言われ、自分の借りたアパートに麗日さんが所有する家財道具を運び込むことにまでなる。

もう何が何だかだが、間取りを見ると私の下宿先の方が安くて広い。空き部屋も多々あるので、二人暮らしも問題はなかった。

とにかくやけにグイグイ来るので若干困惑しつつも、院長先生や友人の提案は断りき

れない。

孤児院に戻って黒歴史を知っている家族と顔合わせて生活するよりはマシだと、ここは前向きに考えることにした。

ちなみに麗日さんだけでなく、緑谷君や飯田君も引越し作業を手伝ってくれた。

良い人なのを再確認して、名実共に私の数少ない友人枠となったのだ。

何故か都合良く通りがかったヒーローも協力してくれたので、日が暮れる頃には引越し作業を終えることができた。

本来なら手伝ってくれた全員に寿司を振る舞うところだろうが、私も麗日さんうららかにもまだ学生の身で節約生活中だ。

なので冷蔵庫に入っていた食材を適当に見繕い、急ぎ料理を作って手伝ってくれた人たちに振る舞う。

麗日さんうららかにの家事スキルも自分と同じでかなり高いらしく、台所で共同作業をしていると、ますますシンパシーを感じた。

皆揃って美味しいと言ってくれたので良かったと思いつつ、食べきれない物はタッパに入れて持ち帰ってもらう。

明日はまた学校があるので、適当なところで解散するのだった。

麗日さんとのルームシェア

色々あつて麗日さんとルームシェアをすることになった私は、いつも通りの時間に目を覚ます。

次に寝ぼけながらベッドから身を起こし、辺りを見回した。

「そう言えば、麗日さんと同居してた」

家具の配置が少しだけ変わっていたので違和感を覚えたが、すぐに状況を理解して落ち着く。

ついでに重量級の個性持ちが乗っても大丈夫という謳い文句で販売されている布団セットを、院長先生が入学祝いにプレゼントしてくれたことも思い出す。

私はそれを軽く触りながら、静かに息を吐いた。

「寝心地はいい。でも、煎餅布団も捨てがたい」

長年私の重量を受け止め続けたのだから、すっかりヘタってしまった煎餅布団が懐かしい。

けれど今の布団はフカフカで柔らかくて、寝心地抜群である。

そのうちこつちに愛着が湧くだろうし、自分が使っていた家具は中古品として売りに

出されるらしい。

かなりガタが来てるので高値で売れるとは思わないが、孤児院の運営資金の足しになるなら本望である。

まあそれはそれとして、いつも通りの時間に目が冷めたのだ。

私は日課をこなすために、洗面所に向かって歩いて行く。

「ふああ、斥流ちゃん。起きたの？」

すると物音を聞いて、麗日さんも目が覚めたらしい。

昨日までは空き部屋だった扉がゆっくり開くと、眠そうな顔がひよっこりと覗く。

「麗日さんは、まだ寝ていいいい」

私の修行に麗日さんが付き合う必要はない。

はつきりと告げると、彼女は慌てた様子ですぐに返事する。

「わっ、私も行くから、待っててくれる!？」

「構わない」

ヒーロー科の生徒は朝から元気である。

何にせよ一分一秒を争うものではなく、まだ時間に余裕があった。

なので彼女の準備が終わるまでテレビを付けて適当な番組を見つつ、お茶を飲んでのんびりとくつろぐ。

やがてジャージ姿の麗日さんが気合を入れて居間にやって来たので、二人で外に出て玄関に鍵をかける。

そしてまだ薄暗く静まり返った町中を軽く走って、汗を流した。

何事もなく下宿先に戻ってきた私は、今度はマンションの裏庭に向かう。

広くても離れた場所に民家が立ち並んでいるので、あまり派手なこととはできない。

それにいくら管理人さんに許可を取り、個性の使用が黙認されているとはいえ、周辺に被害が出たら大変である。

「斥流ちゃん、ちよつと見てもらえへん?」

「構わない」

個性を見て欲しいと言われたので、私は良く観察して当たり障りのないアドバイスをすることにした。

だが無重力化したブロックを軽々と持ち上げる彼女は、途中で大きな溜息を吐く。

「斥流ちゃんは、何だか私の上位互換みたいだね」

けれど重力操作と無重力化は、似て非なるものだ。

完全な上位互換とは言えず、私はどう答えたものかと頭を悩ませる。

「上位互換ではなく、何事も適材適所」

なるべく簡単に説明できれば良いが、私は口下手で人と話すのは苦手だ。

けれど麗日さんは数少ない友人なので元気づけてあげたいと考えて、真面目な顔をしておいた。

「重力を逆転させる場合、人を対象には滅多にしない。何故かわかる？」

麗日さんは個性の訓練をしながら一生懸命考えてくれた。

「ええと、……ごめん。わからない」

しかしわからないようなので、私が落ち着いて続きを話す。

「私が重力を逆転させると、解除するまで止まることなく落ちていく」

正確には視界に入っている間か、任意に解除するまでだ。

けれど人は高所からの落下で、打ちどころが悪ければ簡単に死んでしまう。

それに重力を倍にするだけでは、ヴィランは完全に無力化できない。

足場のない空中なら行動を制限できるが、私の個性では殺してしまう可能性がある。

特に戦闘中は個性の制御が難しく、万が一の事故が起きないとは言い切れないのだ。

「でも麗日さんは私と違って、ヴィランを浮かせることではほぼ無力化できる。

相手を傷つけずに捕縛するのは、私には無理。

だから、とても凄い」

「そつ、そうかな？　ありがとう。斥流ちゃん、えへへ」

なので麗日さんの個性は、ヒーロー向きでとても強力だ。

しかし敵は一癖も二癖もある犯罪者で、一芸だけでは務まらないだろう。長所を伸ばすか、使える手札は増やしておくに越したことはない。

私は空き缶を地面に置いて小石の重力を制御し、格闘ゲームの空中コンボのように連続で缶に当て続ける。

さらには少しずつ石の数と速度を増やして、自らの限界を越えるのだった。

だが、修行に時間を取られ過ぎるのは駄目だ。

私たちは学生で時計を確認し、余裕を持ってアパートの自室に戻る。

シャワーを浴びて朝食を済ませ、近場にある雄英高校に登校する。

なお、麗日^{うらひ}さんには、ハードなトレーニングだったようだ。

何とか乗り切ったものの、教室に辿り着いたときに既に疲労困憊であった。

緑谷君や飯田^{いひだ}君や他の生徒に心配されたが、彼女は大丈夫だと顔色悪く返事をしていった。

理由を聞かれたので私と一緒に訓練をしたことを伝えると、古くからの友人二人が達観したような表情に変わる。

クラスメイトも揃って口にはしないが何かを言いたそうな顔だったので、微妙に肩身が狭くなったのだった。

それはそれとして雄英高校ヒーロー科のカリキュラムは、午前は必修科目である。ただ普通に授業を受けるのだが、これこそが私が予想していた学校生活だ。個人的には、ずっとこんな感じでも良かった。

昼は大食堂で一流シェフの料理を格安で食べられるので、自分で弁当を用意する必要はない。

学食は量が多くて美味で安く、孤児院からの仕送りは麗日さんが全て管理している。諸経費も家計簿に計上済みで、返済の必要はないと再三言われた。なので卒業するまでは、昼は大食堂を利用するのが確定したのだった。

一休みして午後になったら、次の授業はヒーロー基礎学だ。

私が自分の席に座り、のんびり窓の外の景色を眺めていた。

やがて開始時間が近くなると、オールマイトの気配を感じ取って廊下に目を向ける。「わーたーしーがー！ 普通にドアから来たー！」

「「「おおー!!!」」」

教室のドアを開けて、マッスルフォームのオールマイトが入ってきた。

クラス中の生徒が驚きや興奮に染まり、たちまち大歓声があがる。

「オールマイトだ！」

「凄えや！ 本当に先生やってるんだな！」

「あれ、シルバーエイジのコスチュームね」

「画風違いすぎて、鳥肌が！」

反応は様々ではあるが、誰もが好意的なようだ。

そして普通に入ってきたオールマイトは、教卓の前まで歩いてきて先生らしく説明を始める。

「私の担当はヒーロー基礎学！ ヒーローの素地を作るため、様々な訓練を行う科目だ！」

「単位数も、もっとも多いぞ！」

進学に必要な単位を取らないと次の学年に進めないのは、雄英高校のどの学科でも同じだ。

なので私は、せめて赤点だけは回避しないと気持ちを引き締める。

「早速だが！ 今日はこちら！ 戦闘訓練！」

「戦闘！」

「訓練！」

いちいちポーズを取りながら説明するオールマイトに、爆豪君と緑谷君がツツコミで

はなく驚きの声をあげる。

クラスの中では、私は常識人枠になるらしい。

声をあげずに、黙って先生の説明に耳を傾ける。

元々人と話すのが苦手だったせいもあり、ヒーロー科の独自のノリについていくのは正直キツイ。

「そして、そいつに伴ってえ！　こちら！」

先生がビシツと指を差すと、教室の壁の一部が迫り出してくる。

「入学前に送ってもらった個性届けと！　要望に沿ってあつらえたコスチューム！」

「「おおー!!!」」

またもや大興奮である。

だが私はここで予想外のこと起きて、思わず固まってしまう。

「着替えたら順次！　グラウンドベータに集まるんだ！」

「「はいっ!!!」」

完全に置いてけぼりになって、このままでは不味い。

私は空気を読まずにビシツと手を上げて、盛り上がり水に水を差すのも厭わずにオールマイトに声をかける。

「オールマイト！　私、コスチュームの届け出をしてない！」

今の発言で、一年A組の生徒たちも気づいたようだ。

私は元々は普通科に入る予定だった。

現在は特例としてヒーロー科に在籍しているが、コスチュームの要望は出していない。

しかしオールマイトには自分の質問は予想済みだったようで、笑顔で自信満々な返事を
をする。

「斥流少女のコスチュームは、無届けということで作成済みさ！」

「えっ？」

全然状況が理解できない。

「要望がなくても大丈夫！」

雄英高校専属のサポート会社は、とても優秀だ！」

良くわからないが私のコスチュームは雄英高校と、その関連企業が用意してくれたの
だろう。

特例として学費免除なので、新しい服がプレゼントされたと思えば幸運と言えなくも
ない。

「ちなみに斥流少女は、ナンバー二十一のケースだ！」

では私は、一足先に向かって待ってよう！」

マッスルフォームを長時間維持するのが辛いので、適当なところで一休みしたいの
だろう。

先生は最後まで格好良くポーズを決めて、教室の扉から普通に出ていく。

そんな彼を見送った私は他の一年A組の生徒と共に、自分のケースを速やかに回収す
る。

思わぬサプライズに少しだけワクワクして、更衣室で専用コスチュームに着替えるの
だった。

ヒーローコスチューム

更衣室で専用コスチュームに着替え終わった私は、授業に遅れないように急いでグラウンドペータに向かう。

正面ゲートを越えると既にオールマイトが待機していて、続々と集合する一年A組の姿を見て堂々とした態度で声を出す。

「格好から入るのも、大切なことだぜ！ 少年少女！」

運動する時には質の良いジャージを着れば、やる気が上がるものだ。

必ずとはいえないが大体合ってるので、私は心のなかで静かに頷く。

「自覚するんだ！ 今日から自分は！ ヒーローなんだと！」

皆と一緒に先生に向かって歩きながら、ヒーローに関してはまだあまり自覚したくはないなと思った。

私は免許証を取得して、就職に有利にしたいだけだ。

命を捨ててまで市民を守る職業を、本気で目指すつもりはない。

「いいじゃないか！ 皆！ 格好いいぜ！」

とにかく全員が外に出て、オールマイトに良く見えるように並ぶ。

彼はそれを、堂々とした態度で褒める。

自分としては今のコスチュームには異議ありで、内心複雑だ。

似合っていると言われて嬉しく思うが、それ以上に小っ恥ずかしさが前に出る。

「さあ！ 始めようか！ 有精卵ども！」

私のモチベは依然として低い、オールマイトと他の生徒はやる気十分だ。

そんな状況で、皆は各々のコスチュームの感想を言い合っていた。

緑谷君はナンバーワンに似たスーツだし、麗日さんは宇宙服っぽくて個性的だ。

「斥流ちゃんのヒーローコスチューム、とっても可愛い！」

ルームシェアしている同居人も褒めてくれた。

けれど私は若干頬を赤らめて、恥ずかしそうに頭をそむけてしまう。

「高校一年にもなつて、魔法少女のコスプレをするとは思わなかった」

ギョツとスカートを握つて答える。

自分と似たような身長で個性もぎもぎの峰田実君みねたみのるの態度がおかしいが、そつちを気に

する余裕もない。

「これがギャップ萌え?！」

ちなみに私のコスチュームだが、収縮性が高く熱や衝撃耐性の高い素材で作られている。

外見は綺羅びやかなフリル付きドレスで、可愛らしいアクセサリーの各種サポートアイテムまで完備だ。

おまけとして抑制解除で発生する煌めく粒子の流れを制御し、翼のように見せる構造になっていた。

なお説明書には演出面を強化と記載されていたが、ただロマンを追求しただけで戦闘能力が上がるなどは一切ない。

そしてヒーローコスチュームを着用した私は、天使や妖精のように可愛らしく見えるらしく、全てにおいて技術部が無駄にこだわっているのがわかる。

当人の要望がなかったので、趣味全開で好き放題に作りましたと言わんばかりだ。

まあそれはそれとして、私は自身の容姿にはあまり興味がなく、美容にこだわる余裕もなかった。

それでも優しい麗日さんは褒めてくれたし、似合っていないよりマシだと前向きに考える。

「でも、やっぱり恥ずかしい!」

羞恥心だけはどうしようもない。

私はスカートの袖を掴んだまま赤面して、その場から一步も動けなくなる。

「おっ、落ち着いて！ 斥流さん！」

何故か緑谷君は、私以上に顔を赤くして動揺している。

あたふたしながらでも何とか落ち着かせようとしてくれているし、麗日さんも同じように声をかけてくれた。

深呼吸をして少しずつ心を静めていくが、高校生にもなれば幼い頃に夢見た魔法少女への憧れは消えている。

一年A組の皆のように、ヒーローへの憧れも全くない。

それにヒコスチュームを着用して抑制解除を行えば、輝く翼を展開してニチアサの魔法少女として戦うことになる。

衣装は可愛らしいが地味ではなく派手で、どう考えてもヒーローの姿を大勢に人々に見せつけるための衣服である。

幸いなのは羞恥心を高める衣装で、ヒーローデビューする予定はないことだ。

あくまで授業の一環であり、校内だけで済むのは大変ありがたい。

だが何とか我慢できるとしても、内心では恥ずかしがっていること変わりなかった。

「さあ、戦闘訓練のお時間だ！」

けれどオールマイトは、全く気にしていないようだ。

時間が限られているのもあるが、授業を次のステップに進めようとする。

しかし、ここで飯田君が手をあげて質問する。

「先生！ ここは入試の演習所ですが！ また市街地演習を行うのでしょうか！」

「いいや！ もう二歩先に踏み込む！」

オールマイトがすぐに質問に答えて説明を始める。

こういうところは教師をしてるなど感心した。

「ヴィラン退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内のほうが凶悪ヴィラン出現率が高いんだ！」

ヒーローとヴィランが屋外で戦っている様子は、良くテレビで報道されている。

しかし統計的にはそっちのほうが多いと聞かされ、きつとカメラでは内部を撮影できないのだと納得する。

「監禁！ 軟禁！ 裏商売！ このヒーロー飽和社会！」

真の賢いヴィランは闇に潜む！

君らにはこれから、ヴィラン組とヒーロー組の二対二に分かれて、屋内戦を行ってもらう！」

ここで個性カエルの蛙吹梅雨さんが、授業内容に疑問を持ったようだ。

「基礎訓練なしに？」

彼女が首を傾げながら質問すると、オールマイトはすぐに答える。

「その基礎を知るための実戦さ！」

ただし！ 今度はぶつ壊せばOKなロボじゃないのがミソだ！」

ここで他にも聞きたいことがあるのか、オールマイトの説明途中に生徒たちが騒ぎ始める。

だがそうやら、先生の許容量を越えてしまったようだ。

「んんんっ！ 聖徳太子イ！」

流石に先生も情報を処理できずに困ったようだ。

懐から取り出してカンペを読みながら、私たちに向けて説明してくれた。

ちなみに内容をまとめると、二人のヴィランがビルは何処かに核兵器を隠した。という設定の訓練だ。

突入して目的の物を回収するか、全ての敵を捕縛すればヒーロー側の勝利。

逆に制限時間まで核兵器を守るか、ヒーローを全員捕まえればヴィラン側の勝利となる。

コンビと対戦相手はくじ引きで決めるため、単純明快でわかりやすい。

途中で飯田君から、チーム編成は適当なのですかと疑問の声があがった。

しかし緑谷君が言うには、プロは他事務所のヒーローと急造チームアップすること多く、そういうのに慣れる訓練も兼ねているらしい。

だが一年A組は本来は二十人のクラスだ。

そこに特別枠の自分が入ると、どうしても余ってしまふ。

他の生徒が箱から順番にくじを引いていき、続々とチームが決まっていくな。

私の番が来る前に箱は回収されてしまい、オールマイトがこつちを真っ直ぐに見つめてくる。

「斥流少女は、私と一対一の訓練だ！」

こういうことは、小中学校でも良くあった。

組分けをして一人余ったときに、じゃあ先生と組もうかというやつだ。

私はそういうのには慣れてるので、最初はよろしくお願ひしますと返そうとした。

けれど今は雄英高校のヒーロー科に所属し、授業内容は戦闘訓練だ。

ナンバーワンヒーローとガチンコ勝負となれば、昔とは全く状況が異なる。

「罰ゲーム？」

「ばっ、罰ゲーム!?! ナンバーワンヒーローと訓練する機会は、滅多にないのだよ!?!」

先生はそう言うが、あまりにも戦力差がありすぎる。

前に模擬戦をしたときより弱体化しているの間違いないが、正面からやり合うと間違

いなくビルが倒壊してしまう。

核爆弾の回収どころではなくなるため、双方が手加減して戦う必要が出てくる。

「周辺被害を抑えつつ任務をスマートに果たすのも、ヒーローにとって重要なことさ！」
「なるほど。つまり、力加減を身につける訓練」

戦闘訓練が社会に出ても役に立つかは微妙だが、変身状態で周辺被害を抑えるのは大切だ。

そんなオールマイイトの教えは、何となく理解できたのだった。

緑谷出久 v s 爆豪勝己

〈みどりやいずく
緑谷出久〉

僕は最近まで無個性だった。

だが中学三年のある日、オールマイトと出会ってワン・フォー・オールを継承する。それは代を重ねるたびに強くなる増強系の個性で、今でも本当に自分なんかで良かったのかと考えてしまう。

けれど平和の象徴であるナンバーワンヒーロー、オールマイトが君はヒーローになれると言ってくれた。

彼の信頼を裏切るわけにはいかないし、僕も心の底から期待に応えたいと思ってる。

いつかはオールマイトのような偉大なヒーローになるのが最終目標だ。

しかしその前に越えるべき壁として、せきりゆう斥流さんの存在があった。

彼女は別にヒーローではないし、それを目指してもいない。

だけど困っている人がいたら手を差し伸べて助け、ヴィランを発見したら見て見ぬ振りせず立ち向かっている。

免許は持っていないが、特例として個性の使用が許可されているし、将来はトップヒーローとしての活躍を期待されていた。

そんな彼女は小学生までは運動が苦手で大人しく、顔立ちが整っていてもクラスでは目立たずに空気のような存在だった。

しかし中学生になってから状況が一変し、全国指名手配中の凶悪なヴィラン、マスキュラーやムーンフィッシュを単独で撃破する。

さらには暴走する新幹線を重大事故になる前に真正面から受け止めて停車させ、乗員乗客を救出してテロリスト集団の捕縛に貢献した。

ヒーロービルボードチャートJ.Pに登録されている人でも、それ程の偉業を行える存在は限られる。

誰もが^{せきりゆう}斥流さんの将来に期待するし、本人に全くその気はなくてもトップヒーロー入りはほぼ確実と言えた。

僕も彼女のようなヒーローに憧れていて、実際に励まされたのだ。

やはり将来は、斥流さんと並び立つ存在になりたい。

オールマイイトから受け継いだ個性があれば、それができるかも知れない。

大怪我を負い、長時間の活動が不可能になった彼から託された重圧はあった。

そして万が一が起きた時は、斥流さんに受け継いでもらう契約を交わした。

そこに彼女の意志は関与していないので、迷惑に思つて拒否される可能性はとても高い。

もしそうなつたら第二候補が居るらしいが、それでもオールマイトは僕を選んでくれた。

彼女とは別の後継者については知る必要はないと言い、話はそれで終わりになつたのだつた。

とにかく、子供の頃からの夢がようやく叶うかも知れない。

歩みを止めずに人よりも何倍も努力すれば、必ず立派なヒーローになれる。

斥流さんとオールマイトの信頼を裏切るわけにはいかないと、固く決意するのだつた。

だが現実には気持ちだけではどうしようもなく、残念ながらワン・フォー・オールを練習する時間が圧倒的に足りない。

雄英高校の入学試験でぶっつけ本番で使用したせいで、腕と足の骨を折ってしまった。

リカバリーガールの治療で事なきを得たが、入学初日の個性把握テストでも指を骨折

した。

まだまだヒーローと呼ぶにはほど遠いし、自身を心底情けなく感じる。

けれどそんな気落ちする僕に、何故か珍しく斥流せきりゅうさんが話しかけてきた。

彼女は基本的に、他人と積極的に関わるタイプではない。

しかも僕の個性のことで話があると聞いて、さらに驚いてしまう。

説明する際に斥流さんの完全開放状態を目にすることになったが、一言で表現すると凄く綺麗だった。

まるで物語や神話に登場する天使や女神のようだったし、それ以外となると言い表す言葉はちよつと出てこない。

だが途中で完全解放状態は命を削ることを思い出して、慌てて止めた。

その後は彼女の下宿先で話すことになったのだが、良く考えたら女の子の家に招かれるのは初めての経験だ。

新しくできた友人二名と一緒になので僕だけでないのが幸いではあったが、始終ガチガチに緊張してしまう。

けれどアドバイスを聞かせてもらい、とても参考になって来てよかった。

それに成り行きで麗日さんの引越しの手伝いをする事になったけれど、手料理を食べられたし役得だったかも知れない。

少しだけ時は流れて次の日になり、午後の授業で戦闘訓練を行う事になった。僕と麗日さんのヒーローチームは、かつちゃんと飯田君のヴィランチームと戦う。先に向こうがビルの中に入って核爆弾の模型を隠し、僕たちは五分後に潜入する。取りあえずこちらは建物の前から動かず、指示があるまで待機であった。

「この建物の見取り図。覚えるの大変だね」

麗日さんがフェンスに腰かけて、見取り図を見て考え込んでいた。

「でも、オールマイトって、テレビのイメージと変わらんね。」

相澤先生と違って罰とかないみたいだし、安心し……安心してないね！」

実は僕も、物凄く緊張していた。

今は、ろくな返事ができそうにない。

「あつ、その、相手がかつちゃんだし。」

飯田君もいるし、ちよつと、大分身構えちゃって」

まだ自身の個性さえ上手く扱えない僕と比べて、二人は明らかに格上の相手だ。

そんな彼らを相手に何処まで戦えるのかと、考えれば考えるほど不安になってくる。

「そっかあ。爆豪君、馬鹿にしてくる人なんだっけ」

「……凄いだよ」

かつちゃんの名前が出たことで、僕は幼馴染の彼との思い出を振り返る。

そして呼吸を落ち着けて、麗日さんに先程の続きを話して聞かせる。

「嫌な奴だけど、目標も、自信も、体力も、個性も、僕なんかより何倍も凄いだ。

でも、だから今は、負けたくない……なっつて」

授業内容とは、あまり関係のないことを口にしてしまった。

けれど麗日さんは明るく笑って、一緒に頑張ろうと言ってくれた。

僕が相棒に恵まれて良かったと嬉しくなっていると、オールマイトの声で戦闘訓練開

始が告げられるのだった。

いよいよ始まったわけだが、僕たちは施設内に窓から潜入することにした。

中に入るのには問題なく、死角が多い屋内の廊下を慎重に探索する。

目的である核爆弾を探しているが、なかなか見つからない。

(ワン・フォー・オールはまだ調整不足だから、対人使用には不向きだ)

僕は戦闘訓練での立ち回りについて考えながら探索する。

斥流せきりゅうさんにアドバイスしてもらってから、急ぎオールマイトと相談して訓練メニュー

に取り入れた。

おかげで体を壊さずに個性を発動できるようになったのは良いが、それだけだ。指一本でも動かさうものなら肉体が耐えきれず、骨折は不可避である。

さらに百パーセントのワンフォーオールを維持するのは難しく、すぐに息切れして強制解除されてしまう。

やはり一朝一夕で身につくものではなく、現状とてもではないが使い物にならない。それでも個性の切り替えを肉体に覚え込ませて、血管を通って体の隅々まで力が行き渡るような感覚を理解はできた。

あとは出力調整が可能になるまで練度を高めるだけだが、やはり時間が足りない。(今のままでは体を壊してしまう。何とか制御しないと)

ワン・フォー・オールは強力な個性だが、今の僕にはせいぜいオールマイトの二十パーセント程度の力しか扱えないだろう。

個性を宿してから、ろくに訓練できていなかったのが悔やまれる。

集中力を切らせば強制解除なら良い方で、下手をすれば暴走だ。

(やはり危険すぎる。今の僕の力と、麗日さんの無重力だけでやるしかないぞ)

今のトレーニングを続けていれば、いつかは自らの限界近くの出力を維持できるようになるだろう。

だがそれは戦闘訓練中には不可能で、やはり現状の戦力で対処するしかない。僕がそんなことを考えながら廊下を進んでいると、突然通路の先から殺気を感じ取る。

「うらあああつ!!!」

通路の影で待ち構えていたのか、かつちゃんがいきなり飛びかかってきたのだ。

僕は咄嗟に麗日さんに飛びついて強引に退避し、彼の爆破から逃れる。

「麗日さん！ 大丈夫?！」

「うん！ ありがとう！ デク君?！」

けれど、完全には避けきれなかった。

麗日さんはコスチュームの頭部が破損していることに気づいた。

心配そうに僕に声をかけてくるが、今はそんなことを気にしている余裕はない。

「掠っただけ!」

何とか安心させたところで、かつちゃんが煙を個性で吹き飛ばす。

そして再び姿を見せて、不機嫌そうな顔を向けてくる。

「こら、デク。避けてんじゃねえよ」

「かつちゃんが敵なら、まず僕を殴りに来ると思った!」

予想はしていたが、相変わらず情け容赦がない攻撃だ。

斥流さんとの訓練でかつちゃんの動きを何度も見ていなければ、今の不意打ちで僕が戦闘不能になり、ろくな対策も取れずに麗日さんもリタイアさせられていた。

「中断されねえ程度に！　ぶっ飛ばす！」

冷静に状況を分析していると、今度はかつちゃんが僕をめぐがけて突進してきた。ならばと、軌道を読んで間一髪で避ける。

「……なっ!？」

それだけでは終わらずに、かつちゃんの腕を取って勢い良く投げ飛ばす。

無個性でヒーローをやるために、格闘技の訓練をしていたのだ。

なお現実には個性を使ったほうが強いし、斥流さんには全く通用しなかった。

それでも筋が良いと褒められたし、着実に強くなってる。

積み重ねた努力は、無駄ではないのだ。

「ぐはっ!？」

おかげでかつちゃんの攻撃を寸前で見切るだけでなく、投げ飛ばして地面に叩きつけることができた。

彼は苦しそうに息を吐き、ほんの少しだけ動きを止める。

それを見た僕は気合を入れて、己を奮い立たせるために大声で叫んだ。

「かつちゃんは、大抵最初に右の大振りなんだ！」

幼馴染の少年が半身を起こして僕を睨みつけてくるが、もう怯みはしない。

「どれだけ見てきたと思ってる！」

強いと思つたヒーローの分析は、全部ノートにまとめてあるんだ！」

斥流さんはノートを取り返すだけではなく、今もずっと僕を応援してくれている。かつちゃんとはコンビを組んでの戦闘訓練も、もはや数え切れない。

二人共自分の尊敬するヒーローであり、ずっと彼女たちに憧れて、何とか追いつこうと必死に努力を続けてきた。

「いつまでも！ 雑魚で出来損ないのデクじゃないぞ！ かつちゃん！」

まだ未熟でワン・フォー・オールを使いこなせない。

それでもナンバーワンヒーローであるオールマイトが選んだ、正式な後継者である。

「僕は！ 頑張れって感じのデクだ！」

だからこそ僕は、今日こそかつちゃんに勝つ。

最高のヒーローになるために、立ち塞がる高い壁を乗り越えるのだった。

斥流陰子 v s オールマイト

緑谷君と爆豪君の戦闘訓練が正面モニターに映し出されたが、とにかく凄かった。

昨日は指を折っていたのに、今日は体を壊さずに使いこなしている。

昔から思っていたが彼は土壇場に強く、やはり天才のようだ。

まるで主人公のような覚醒イベントに、自分以外の生徒も驚きの声をあげていた。

しかし、まだ完全ではない。

個性の出力を調整して爆破を避け続けていたが、途中で回り込まれて背後から一撃を受けて転倒する。

どうやらダメージを受けるか集中力が途切れると強制解除されるようで、動きが止まったところで爆豪君が必殺の一撃を叩き込もうとした。

けれど緑谷君はまだ諦めておらず、再び個性を発動させて、当たる直前で上方に向けて拳を放った。

衝撃でビルをぶち抜いて上昇気流が発生させ、別行動をしていた麗日うららかにさんが飯田君の隙を突いて核弾頭に飛びつくことで、ヒーローチームの勝利となった。

またもや緑谷君が大怪我をしてしまったが、最後の1撃は出力を抑えて放ったよう

だ。

リカバリーガールに見せると、入学試験よりは軽症だったらしい。

むしろ火傷のほうが酷いようで、やり過ぎた爆豪君が最後に謝罪をしていたのが印象的であった。

それはともかく他の生徒も順番に、戦闘訓練や公評を行っていると、やがて私の番が来た。

そこに至るまでは色々なドラマがあつたが、自分には関係ないしカットだ。

皆の性格や個性がわかり、推薦入学者は特に派手で凄かったという結果だけが残る。

私がガードレールに腰かけながら晴れ渡る空を見上げて、授業内容を振り返っていた。

すると突然オールマイトの声が響き渡り、自分の番が来たのだと理解する。

「斥流少女！ 戦闘訓練開始だ！」

「了解」

訓練の開始を知った私はすぐに個性を発動させ、目標のビルの壁面に張り付くように重力を操る。

そして抜き足差し足忍び足で窓に近寄って室内の様子を伺い、核爆弾が見つからなけ

ればすぐに次の部屋へと向かう。

そんなことを何度か繰り返していると、やがて四階に目標物を発見した。

「ふえっ!？」

大きな物音を立てたつもりはないが、オールマイトは私の個性を知っている。

自分の行動を先読みして窓の外も警戒していたようで、バツチリ視線が合ってしまった。

しばらく見つめ合ったまま固まっていた。

すると目標物の目の前に立つナンバーワンヒーローが、挑発的な笑みを向けてくる。

「どうした？ 斥流少女？ まさか、ヴィランが怖いのかね？」

別にヴィランは怖くないが、オールマイトには若干の苦手意識がある。

しかし核爆弾に触れるか、拘束しない限りは私の勝利はない。

彼が持ち場を離れるわけがないし、留年を回避するためにも敗北は避けたかった。

なので単位を取得するためにも勝利が望ましく、覚悟を決めて大きく息を吸う。

次にお決まりの台詞を叫んで気合を入れ、窓を蹴破ってビルの内部に侵入する。

「私が！ 来た！」

「その意気だ！ 斥流少女！」

嬉しそうな表情を浮かべるオールマイトだが、核爆弾を譲るつもりはないようだ。

私はすぐに抑制を一段階まで解除し、彼を避けて目標物に近づこうとする。

(核弾頭を重力操作で動かせれば、楽だけど)

だが迂闊に動かすと爆破する可能性もあるため、なるべく触れずに確保するに越したことはない。

それに戦闘の余波でビルが壊れるのも避けたいが、何をするにもオールマイトが妨害してくるのは目に見えている。

「おっと！ 何処に行こうというのかね！」

窓から侵入してすぐに核弾頭に向かって駆け出すと、予想通りにナンバーワンヒーローが回り込んできた。

やはり近づかせるつもりはないようだ。

「くっ！」

抑制を解除するほど力加減が難しくなり、周辺への被害が広がる。

修行でも二段階は滅多に使わないし、今回の訓練には過剰であった。

なのであまり出力を上げるわけにはいかず、この状態でやるしかない。

「退いて！」

「それはできない相談だ！」

危険物がある密室で、真正面からオールマイトと殴り合う。

衝撃に耐えきれずにビルが倒壊する可能性もあるので、床や柱に当たるのも避けなければいけない。

受け止めたり捌いたりして勢いを殺して戦うため、やるが多すぎて目が回りそうであった。

「斥流少女！ やはり強いね！」

オールマイトが褒めてくれるが、こっちは十五分という時間制限がある。

正直、相手の攻撃に対処するのに手一杯で、まともに返事をする余裕はなかった。

ヴィランなら多少は派手に暴れても全然平気なので、現状はあちらの方が有利に思える。

「さあ、どうするー！」

オールマイトに強烈な一撃を叩き込まれた私は、咄嗟に両腕をクロスして防いだ。

それでも壁際まで後退させられて、目標である核弾頭から遠ざかってしまう。

大したダメージではなくても、そろそろ制限時間に余裕がなくなってきた。

内心で焦り始めた私は、相手との射線を考えながら高速で駆ける。

そして懐から玩具のコインを数枚取り出して、次々と撃ち出した。

「むっ！ そう来たか！」

当然のように彼も予想していて、オールマイトなら容易く見切れるため、全弾を拳で

弾かれて明後日の方向に飛んでいく。

けれど最初からこの程度で止められるとは思っておらず、私はその隙に核弾頭に向かつて走る。

「なるほど！ コインは囷か！ だがっ！」

彼の横をすり抜けようとした私を迎え撃つために、オールマイトが先に行かせまいと立ち塞がる。

解放状態になると煌めく粒子が常に放出されていて無駄に目立つのもあるが、高速戦闘に付いてこれるのは流石であった。

しかし彼が自分を止めようとした瞬間、背後から勢い良く飛んできたコインが次々と当たり、不意打ちを受けたナンバーワンヒーローは大きくよろめいた。

「ぐっ！ っっ、これは！ まさか！」

避けたと思つて油断すると考えて、重力操作でコインを呼び戻したのだ。もし読んでいても、多方向からの攻撃されては対処は困難だ。

実際に防衛も間に合わなかったので、いくら増強系の個性を使うナンバーワンヒーローでも、一瞬とはいえ動きが止まった。

「私の個性は、重力を操る」

さらにダメ押しとばかりに、バランスを崩して隙を作った彼に向けて、お決まりの技

を放つ。

「重力加速！ 二倍！」

「シット!?!」

加速が足りずに威力も抑えめな飛び蹴りは、残念ながらガードされてしまった。

しかし不安定な姿勢で受けたので、オールマイトを部屋の壁際まで吹き飛ばすことができた。

核弾頭から遠ざけられたのは大きく、私はこの機会を逃さずに目標まで一直線に走る。

そして制限時間がなくなるギリギリで、何とかタッチすることができたのだった。

決着がついたあとはモニタールームに戻り、他の戦闘訓練と同じで公評である。

オールマイトは私に出し抜かれたのに、とても嬉しそうだった。

「教え子が優秀だと、先生としては嬉しいものさー！」

私を免許が欲しいだけでヒーローをする気はない。

少し申し訳ないけれど、そんなことは向こうもわかっているだろう。

すぐに先生は、眩しい笑顔で堂々と言い放った。

「斥流少女との戦闘訓練は、資料映像として使わせて欲しいのだが！ 良いかね！」

「えっ？ あっ、うん」

私とオールマイトの戦いから、何を学ぶのかは不明である。

だが優秀なヒーローが増えれば、日本の治安は良くなる。

自分や家族や知り合いの身の安全にも繋がるので、取りあえず許可を出しておく。とにかく戦闘訓練は無事に終了した。

初日の授業で赤点を取らなくて良かったと、ホッと胸を撫で下ろす。

本日の授業が全て終わり、いつも通りに荷物をまとめて帰ろうとする。

ふと窓の外を見ると、夕日をバックに怪我をした緑谷君と爆豪君が何やら話しているのを見つけた。

常人よりも感覚が優れている私なら問題なく聞き取れるが、オールマイトも混ざって何だか面倒そうな予感がする。

それに他人の会話を盗み聞きするのは良くない。

別に非常時でもないし、私はすぐにその場を離れて教室に戻った。

しばらくは椅子に座り、持ってきた本を読んで適当に時間を潰す。

一区切りしたら鞆を持って、普段通りにマイペースに下校するのだった。

学級委員長

雄英高校で戦闘訓練を行い、次の日になった。

私と麗日うららかさんが登校すると、正門の前に大勢のマスコミが集まっていた。

良く見ると緑谷君がマイクを向けられ、インタビュウを受けている。

「キミっ！ オールマイトの授業はどんな感じですか！」

「僕！ 保健室にいかなきゃいけないくて！」

そう言つて緑谷君は、慌てて校内に入つていった。

次にマスコミは私たちのことに気づいたようで、麗日うららかさんにマイクを向ける。

「平和の象徴が教壇に立つている様子を、聞かせてください！」

「よっ、様子!!? ええと、……筋骨隆々！ です！」

何とも微妙なコメントではあるが、最初から答える気が全くない私よりはマシだ。

仲の良い友人や家族とは違い、マスコミの相手は面倒で疲れる。

こっちに何の得もないし、やるだけ損であつた。

「斥流ちゃん！ 雄英高校の授業の感想を！」

「斥流ちゃん！ 平和の象徴について、どう思われますか！」

「斥流ちゃんがオールマイトの後継者というのは、本当なのですか!」

私はマイクを向けられても何も答えず、無言でマスコミたちをかき分けて校内に入っていく。

何故か自分の取材に熱が入っているのを実感しつつ、オールマイトを目当てで集まってきたはずなのに疑問に思う。

ちなみに麗日さんも後ろをついてくるが、取材された経験はあまりないのか緊張していた。

それでも何とか正門を抜けて一息ついた私は、何となく後ろを振り返る。

今度は飯田君いいたが捕まり、真面目にインタビューを受けていた。

マスコミが望む答えかとはともかく、物怖じせず堂々と喋れるのは素直に凄い。

だがまあ何にせよ、平和の象徴が雄英高校の教師を務めるのだ。

全国の人々やマスコミを、大いに驚かせたのは間違いない。

少しでも情報を得ようと正門前に殺到するのも無理はなく、しばらくはとても混雑しそうだと言息を吐くのだった。

そんな面倒な事情はともかくとして、私は一年A組の教室に到着する。

いつも通りに相澤先生の授業を受けるのだが、まずは昨日の戦闘訓練の反省が始まっ

た。

自分としては別に何もなかったので、トントン拍子にホームルームの本題に入る。

「急で悪いが、今日は君らに学級委員長を決めてもらおう」

「「学校つばいの来たー!!!」」

また型破りなヒーロー科の授業をやると思っていた。

良い意味で予想を裏切られて、ホッと息を吐く。

ちなみに普通は、学級委員長など誰もやりたがらない。

少なくとも自分が通っていた小中学校ではそうだったが、雄英高校では何故か皆がこぞって立候補するのだ。

疑問に思った私は首を傾げつつ、緑谷君に小声で尋ねる。

「ヒーロー科の委員長は集団を導く、トップヒーローの素地を鍛えられる役なんだ」

「へえ、そうなんだ」

ヒーローについて聞けば、大抵何でも答えてくれる。

それに彼もちやつかり立候補しようとしているので、普段は引つ込み思案な緑谷君も憧れは止められないらしい。

だがここで飯田君いいたが突然立ち上がり、大きな声を出す。

「静粛にしまえー!」

騒がしかった教室が、一気に静まり返った。

「他を牽引する！ 責任重大な仕事だぞ！」

私は確かかと思いつつ、他の生徒と同じように飯田君に注目する。

「やりたい者が、やれるものではないだろ！ 周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務！」

民主主義に則り、真のリーダーを皆で決めると言うなら！ これは投票で決めるべき

議案！」

などと言いつつも高々と手を上げている飯田君に、皆がツツコミを入れる。

だがしかし、私たちはまだ出会って間がなく信頼も何もない。

皆がトツプヒーローを目指しているなら、誰もが自分に投票するはずだ。

「だからこそ！ ここです複数表取った者こそが！ 真に相応しい人間ということにならないか！

どうでしょうか！ 先生！」

飯田君が相澤先生に許可を求めると、本職のヒーローは気怠そうに返事をする。

「時間内に決めりゃ、何でもいいよ」

そう言つて寝袋を横にして、睡眠モードに入った。

少なくともホームルーム中は、教師としての仕事をするつもりはないようだ。

良い言い方をすれば、生徒の自主性に任せるのである。

しかし、本当にそれで良いのかと私は頭を抱えなくなるのだった。

その後、飯田君いいたが取り仕切る形で投票を行った。

すぐに結果が明らかになったが、黒板に書かれたそれを見て、私は思わず絶叫してしまふ。

「私が三票?! 何でえっ?!」

小中学校の頃にも、委員長を任せられることはあつた。

しかしそれは面倒な役職を押し付けられたからで、私もそこまで真面目に仕事はしていなかつたので別にいいのだ。

けれど雄英高校では、トップヒーローとしての素地を鍛えるために自ら立候補するほど熱心である。

流石にあり得ない結果で異議を唱えたくなり、つい大声を出してしまう。

「飯田君に入れたのに!」

「応援ありがとう! 斥流君! 力及ばずに残念だ!」

私としては、飯田君のような真面目なタイプが向いていると思つた。

けれど残念ながら彼は、票数やおよぶすが足りない。

自分が委員長で、次票の八百万やおよぶすさんが副委員長を務めることになる。

「んじやあ、委員長は斥流せきりゆう。副委員長は八百万やおよろずだ」

担任である相澤先生に言われては仕方がない。私は渋々ながら席から立ち上がって、教卓の前へと歩いて行く。

今年こそは委員長をやらずに済むと思っていたが、結果はご覧の有様だ。

大きく溜息を吐いてしまいが、クラスメイトには好評のようである。

本心からの投票なので、自分の何処に期待される要素があるのはさっぱりわからない。

「いいんじゃないかしら」

「斥流ちゃんは、何だかんだで熱いしな！

やおよろず八百万は、公評の時の格好良かったし！」

蛙吹あすいさんと切島きりしま君が褒めてくれるが、それでもやる気はあまり上がらない。

けれど、決まってしまった以上は仕方がない。

小中学校のように諦めて割り切り、必要最低限の仕事だけにすることに決める。だがまずは教卓に顔が隠れないように、専用の踏み台を用意するのだった。

委員長に選ばれたのは仕方ないし、雑用係は面倒でも一年A組のクラスメイトは好意的だ。

ちゃんと指示すれば仕事を手伝つてくれるので、小中学校と比べればかなり楽である。

なので少しでも前向きに考えながら、昼の休憩時間に数少ない友人たちと大食堂に向かう。

中に入ると相変わらずの大盛況であり、取りあえず空いている席を探して腰を下ろす。

そして先程注文した料理を机に置いて、スプーンを持っていたいただきますをした。

「おおー、今日も凄い人だねー」

「ヒーロー科の他に、経営科やサポート科の生徒も一堂に会するからな」

緑谷君や麗日さん、飯田君と一緒に食堂に来ているが、自分は特に喋ることはない。

何故か小学生低学年から成長しない体を心配され、クックヒーローのランチラッシュの厚意で小さな旗を立てたり、たくさん食べて大きくなるようにと大盛りにされたオムライスをスプーンで崩す。

私は見た目相応で子供っぽい味が好きだし、ケチャップソースのオムライスは嫌いではない。

なの一人だけ黙々と口に運びながら、皆の会話に耳を傾けていた。

「しかし斥流さんの、こごぞという時の胆力や判断力は、他を牽引するに値する。」

だからキミに投票したのだ。選ばれなくても悔いはない」

飯田君がカレーを食べながら喋りかけてきたので、私は一旦手を止めて率直な感想を口に出す。

「でも私は、飯田君に投票した」

「その件は力及ばず、本当に申し訳ない」

彼が私を信頼してくれた証なので、別に悪いことではないのだ。

しかしただの雑用係ならともかく、やはり自分は皆の期待を背負うような人格者ではなかった。

だがそれを口にしても意味はなく、飯田君を余計に傷つけるだけだろうし黙っておく。

「やりたいと、相応しいか否かは別の話。

僕は僕の、正しいと思う判断をしたまでだ」

「ん？ いつもは俺って」

彼の発言に緑谷君が疑問を抱くが、飯田君は少し戸惑っていた。

「ずっと思ってたけど、飯田君って坊っちゃん!？」

麗日さんまで突つき始めるので、ますます収集がつかなくなる。

「そう言われるのが嫌で、一人称を変えていたんだが」

露骨に顔を背けて眩きを漏らす、彼にも色々あるようだ。

一方で私は殆ど会話に入らずに、オムライスの牙城を黙々と崩していた。

「ああ、俺の家は代々ヒーロー一家なんで、俺はその次男だよ」

緑谷君と麗日さんが同時に驚きの声をあげるの、ヒーロー一家は凄いいいということを知る。

さらにターボヒーロー、インゲニウムの名前を出したことで緑谷君が反応した。

その後の会話の流れから、超大手事務所の次男坊で、有名ヒーローの兄に憧れて尊敬していることがわかる。

ヒーローオタクは大興奮であった。

「なんか、初めて笑ったかもね！ 飯田君！」

麗日さんが飯田君の変化に気づいて嬉しそうに声をかけた。

「そうだったか？ 笑うぞ？ 俺は」

私はその様子を見て、緑谷君にとってのオールマイトが、飯田君にとってのインゲニウムなのだと理解した。

だが彼らが話している間にオムライスの牙城をあと少しで攻略し終えそうになったとき、突然けたたましい警報音が鳴り響く。

「警報!」

大食堂に集まっている生徒たちが皆、驚き戸惑っていると、続いて機会音声が流れる。「セキユリティ3が突破されました。生徒の皆さんは、速やかに屋内に避難してください」

私にとっては、雄英高校に来て日が浅い。

普通の学校生活を想像していたのに、まさか警報が鳴るとは完全に予想外だ。

「セキユリティ3って何ですか!」

飯田君もわからないようで、隣の生徒に質問するとすぐに答えてくれた。

「校舎内に、誰かが侵入してきたってことだよ!」

雄英高校に侵入する人なんて居るのかと内心で驚いても、私は相変わらずオムライスを食べ続けていた。

「こんなの初めてだ! キミも早く!」

親切な人で良かったと思ったが、彼は焦った表情で一目散に走り去る。

いくら何でも取り乱しすぎじゃないかと呆れたものの、自分がヤバい事件に遭遇しすぎて感覚が麻痺しているだけかも知れない。

「斥流さんは、随分と落ち着いているね!」

「慣れているから」

私は全く動じずに、黙々とオムライスを処理し続けている。

焦った表情の飯田君が声をかけても、我関せずであった。

自分は事件に巻き込まれるのは慣れているし、侵入者がヴィランならばぶつ飛ばせばいい。

それにここには教師を務めているプロヒーローが大勢居るので、彼らに任せれば何とかなるはずだ。

やがてマイペースな私はオムライスをようやく食べ終わり、ごちそうさまをして席から立ち上がる。

そのまま食器を返却しに行くと、緑谷君たちは何とも言えない表情でその様子を見送っていた。

今日も美味しかったと食堂の人に率直な感想を告げたあと、いつも通りに一年A組に帰ろうとすると、唯一の出入り口が人混みに塞がれていて通れない。

「わあ、大変」

「今気づいたの!?!」

緑谷君が鋭いツツコミを入れるが、私は落ち着いたものだ。

焦っても仕方ないので取りあえず適当な椅子に座り、何気なく窓の外を眺める。するとここで、あることに気づいた。

「マスコミが入ってきてる?」

「何だと!? ……本当だ!」

「ええっ! じゃあ、侵入者って!」

「マスコミってこと!?!」

私のがのんびりしているからか、緑谷君や麗日さんや飯田君も出入り口に向かうのではなく、食堂に留まっていた。

そして彼らも窓から外を見て、問題の侵入者を発見する。

「皆さん! 落ち着いてください!」

マスコミの侵入に気づいた飯田君が、その場で大きな声を出す。

しかし、混乱は広がるばかりで誰も聞いてくれない。

「麗日君! 俺を! 浮かせろ!」

ここで何かを思いついたのか、飯田君は麗日さんにタッチしてもらい宙に浮く。

「エンジン! ブースト!」

次に脚部のマフラーを吹かして、唯一の出入り口に回転しながら突っ込んでいく。

私には何がしたいのかは良くわからないが、大声で叫びながらなのでとても目立つ。

「飯田君!?!」

緑谷君が彼の身を案じるものの、間一髪で壁にぶつかるまえ非常口のランプの上に足を乗せる。

上手い具合に着地に成功したので、私をホツと息を吐いた。

「皆さん！ 大丈夫夫っ！」

一瞬にして全員の視線が集中し、彼は足を震わせながらも大声で説明を続ける。

「ただのマスコミです！ 何もパニックになることはありません！」

大丈夫！ ここは英雄！ 最高峰の人間に相応しい行動を取りましょう！」

飯田君のおかげで混乱は徐々に収まり、皆は落ち着きを取り戻していく。

私はその様子を遠くから眺め、自分はそのままで積極的には動かない。

彼はヒーローらしい素晴らしい機転と判断力だと、とても感心するのだった。

昼食を終えて教室に戻ったあとは、他の委員決めを執り行うことになっている。

教卓の前に立って踏み台に足を乗せる私の隣には、八百万さんやおよろずが控えていた。

けれど、これから順番に決めていく前にコホンと咳払いをして、一つ意見を言わせてもらおう。

「委員長は、飯田天哉君いいたてんやが相応しい」

「ええっ!？」

すぐ隣の八百万さんが驚くが、構うことなく言葉が続ける。

「私はヒーローを目指さないし、積極的に人を導くタイプでもない。」

でも、飯田君は違う。大食堂の混乱を静めたのは、彼。格好良かった」

私はヒーローに憧れていないが、あの時の飯田君は少しだけ格好良かった。

それに堂々と意見を口に出して皆を引っ張っていくのも、彼には向いている。

「俺はそれでもいいぜ。斥流ちゃんも、そう言ってるし。」

飯田、食堂で超活躍したしな」

きりしまえいじろう
切島鋭児郎君だけでなく、上鳴電気君も賛成のようだ。

「時間が勿体ない。何でもいいから早く進めろ」

相澤先生が起きて催促するので、私は飯田君をじつと見つめる。

彼は少し迷ったものの、やがて大きな声を出す。

「委員長の指名ならば仕方あるまい！」

以後はこの飯田天哉が、委員長の責務を全力で果たすことを約束します！」

ビシッと決める飯田君に、多くの生徒が温かい声援がかける。

「任せませ！ 非常口！」

「非常口！ 飯田！ しっかりやれよー！」

その様子を見ると、相変わらず一年A組はノリが良い。

私はとてもついて行けないが、この雰囲気は嫌いではなかった。

ちなみに隣の八百万やおよろずさんが、斥流ちゃんと一緒に良かったと嘆いていた。けれど積極性や協調性、義務感が薄い自分にはヒーロー科の委員長は向いてない。飯田さんに任せられたほうが上手く管理できるので、何とか説得して交代を認めてもらうのだった。

USJの救助訓練

雄英高校にマスコミが侵入してから少し経ち、午後の授業でレスキュー訓練をするこ
とになった。

本当ならオールマイトが参加するのだが、あいにく到着が遅れているらしい。

平和の象徴は弱体化しているとはいえ、ヴィランに後れを取ることはない。

今のところは無理をしている様子もないので、その点については心配はしていないが
教師として遅刻は色々駄目だと思った。

それはもとかく、コスチュームの着用は任意とのことだ。

正直に言えば、ニチアサ魔法少女のコスプレはしたくない。

だが特例制度ではヒーロー科の授業は補助金が出て、もし服が破れても無料で修繕し
てくれるのだ。

実家の負担を減らせるし、制服やジャージよりも丈夫である。

それらを天秤にかけて羞恥心と比べると、小っ恥ずかしいが選択の余地はないのだっ
た。

そんな個人の感情はともかくとして、訓練場は校舎から離れている。

全員バスに乗っての移動とのことだ。

ちなみに緑谷君のコスチュームは、この間の戦闘訓練で破損してしまったのでジャージ姿である。

私は幸いなことに目立った傷はなく、オールマイトも屋内戦闘で力を抑えていたようだ。

衣服のダメージも開発者の想定範囲内に収まったようで、見た目や趣味全開なのとはともかく材質はしっかりしてるなど思った。

それはそれとして、私は長い席が縦一列になって互いに向かい合うタイプのバスに乗る。

訓練所を目指して移動するが、飯田君は座席が予定と違ってシヨックを受けているようだ。

けれど全体の雰囲気は明るいので、問題はない。

「私、思ったことは何でも言っちゃおうの」

暇なので窓から流れる景色を見てみると、蛙吹梅雨あすいっゆさんが緑谷君のほうを向いておもむろに話し出した。

「緑谷ちゃん」

「はっ、はいっ！ 蛙吹さん!?」

「梅雨ちゃんと呼んで」

私は会話には混ざらないが、興味を惹かれて緑谷君に視線を向ける。

蛙吹さんに押されてタジタジであったが、別に嫌っていないようだ。

しかし、あんなに緊張していてちゃんと喋れるのだろうかと不安になる。

「貴方の個性、オールマイトに似てる」

「えっ!? あっ、そっ、そうかなあ!? いやでもお、僕は、そのお!」

私の知る限り、緑谷君はオールマイトに筋トレ指導を受けていた。

個性が増強系なのは似ているし、確かにと静かに頷く。

(他にも何かありそうだけど)

けれど、友人の秘密を探るつもりはない。

そもそもあまり興味もないし、私は外から眺めるだけの静観に徹する。

「待てよ梅雨ちゃん。オールマイトは怪我しねーぞ。似て非なるアレだぜ」

切島鋭児君が呆れた顔で指摘するが、その通りだ。

「しっかし、増強型のシンプルな個性はいいよな!」

派手で、できることが多い! 俺の硬化は対人じゃ強いけど、いかんせん地味なんだ

よなあ」

彼は左腕を伸ばして、実際に硬化させて見せてくれた。

少し形状が変わっているの、個性の発動がわかりやすい。

「僕は、凄いい格好良いと思うよ！ プロにも十分通用する個性だよ！」

緑谷君に褒められて、切島君は嬉しそうだ。

「プロな。しかしヒーローもやっぱり、人気商売みたいところあるぜ！」

目立つヒーローは良くテレビに出るので、彼の言うことも間違っていない。

「僕のネビルレーザーは、派手さも強さもプロ並み」

あおやまゆうが青山優雅君が自信満々に発言し、それをあしとみな芦戸三奈さんが補足する。

「でも、お腹壊しちゃうのは良くないね」

私も昔は疲労困憊で倒れることが多かったし、やはり皆も色々大変なんだと思っ
た。

「まあ、派手で強えって言ったら、やっぱっ！」

とじろき轟と爆豪だよな！」

「爆豪ちゃんはキレてばっかだから、人気でなさそう」

今度はあすい蛙吹さんが、きりしま切島君の発言にツッコミを入れる。

爆豪君はキレ散らかしているものの、実際に行動に移したはしない。

その光景を外から眺めていた私と緑谷君は、珍しいものを見たとはばかりに驚く。

爆豪君は小中学校ではクラスのボス的な存在で、皆が彼の顔色を伺うことはあつてもイジられることはなかった。

正面から意見できるのは自分ぐらいだが、わざわざ話しかける気が起きないので基本的にはスルーである。

そんなことを考えていると、私に声がかかった。

「せきりゆう斥流ちゃんは」

「えっ？ 何？」

爆豪君の話題沸騰中だったのに、蛙吹あすいさんに唐突に話題を振られた。

咄嗟に返事をする、何故か皆は急に口を閉じて静かになる。

視線も一斉にこちらを向けられて、何が何だかわからない。

「派手さも強さもプロ以上ね」

確かに私は強いが、やれることには限度がある。

なのですぐに、否定の言葉を口に出す。

「そんなことない。プロヒーローには、私以上の人は大勢いる」

プロヒーローには自分以上に多芸な人は普通に居るし、取りあえず頭で考えながら皆にわかりやすく説明する。

「私は蛙吹^{あすい}さんのように、カエルのように動けない。

爆豪君のように爆破もできないし、轟君のように凍らせられない。

だから、皆のほうがずっと凄い」

いくら重力を操れるとはいえ、万能ではない。

それに派手で強い者だけがヒーローでもない。

やる気や向上心に溢れた皆のほうが、自分よりも遥かに凄いヒーローなのだ。

そのことを口下手な私が一生懸命伝えると、蛙吹^{あすい}さんが少し照れながら口を開く。

「斥流ちゃんって、根っからのヒーローね」

「やっぱ斥流は、昔から変わらねえなあ！」

「なんと素晴らしい心がけですの！」

皆がそれぞれの意見を口にするが、今のは私なりの理想のヒーロー像を語っただけだ。

自分になりたいわけではないし、一年A組の生徒を褒めたのに、何故か私が持ち上げられている。

どうにも変な方向にいつてしまつて頭を抱えていると、相澤^{あいざわ}先生が席から立ち上がった。

「もう着くぞ。その辺にしとけ」

先生の一言により、バス内の空気が引き締まる。

内心ではナイスタイミングと思いつつ、私はこれから行うレスキュー訓練に向けて気持ちを切り替えるのだった。

停車したバスを降りると、スペースヒーローの13号先生が出迎えてくれた。

緑谷君が言うには、災害救助で目覚ましい活躍をしている紳士的なヒーローらしい。

さらに麗日うららかにさんは大ファンのようで、とても喜んでいた。

そのまま彼女か彼女は良くわからないが、とにかく案内されて巨大なドーム型の施設に入る。

内部は外とは違った世界で、とても広々としていた。

何でも水難事故、土砂災害、火災、暴風などあらゆる事故や災害を想定して、13号先生が作った演習場とのことだ。

ただし略名がUSJなことから、ギリギリを攻めてる感が凄い。

そして私は耳が良いからか、相澤先生と13号先生の会話が聞こえてしまった。

オールマイトは通勤時に制限ギリギリまで活動してしまっただけで、今は仮眠室で休んでいる。

授業終了間際に顔を見せに来るらしく、体調は問題ないらしい。

取りあえず無理はしていないようで、私は静かに安堵の息を吐いた。

その後は13号先生から、自分たちの個性が簡単に人を殺せる力で、それを規制することです今の社会が成り立っている。

過去に行った試験や訓練からも理解できただろうし、今回の授業では各々の個性をどう使つて人々を救出するのかを学んでいく。

私たちの力は人を傷つけるのではなく、助けるためにあるのだと簡単に説明された。やがて、いよいよ授業が始まろうとしたその瞬間に、U S Jの照明が突然不安定になる。

さらに施設中央の噴水付近に突然黒い霧が立ち込め、そこから何か溢れ出てきた。「一塊になって動くな！ 13号！ 生徒を守れ！」

相澤先生は黒い霧に警戒し、皆も異常に気づいたのかそちらに顔を向ける。

私は視力が良いのはつきり見えたが、霧の向こうから多くの人々が湧き出していた。

「また入試ん時みたいにな、もう始まつてるぞパターン？」

切島君が目を凝らして、それを見つめて率直な気持ちを口にする。

皆も興味があるのか中心部に近づこう足を踏み出すと、相澤先生が戦闘用のゴーグル

を装着して再度警告を発した。

「動くな！……あれは！ ヴイランだ！」

黒い靄から出てきた者の中には、私が過去に捕縛したヴィランも混ざっていた。罪を償って刑務所から出てきたのか、それとも脱獄したのかは知らない。

だが雄英高校に不法侵入してきたので、相澤先生の言う通りで相手はヴィランなのだと納得する。

「はあ、また捕まえな」と

あの程度なら、数を揃えても私の敵ではない。

しかし授業が妨害されると、単位修得に悪影響が出るので普通に困る。

さらに質はともかく数だけが多いので、面倒に感じた私は大きな溜息を吐いた。

「斥流せきりゅうはいつも通りだな」

「あの程度なら、問題はない」

相澤先生が緊張気味に声をかけてきたので、彼らを観察して率直な感想を口にする。だがわざわざ雄英高校を襲撃したのだ。

向こうに奥の手や強敵が控えている可能性はあるのだが、自分の感覚が麻痺してるのか別に恐怖は感じなかった。

そして私たちだけでなく、向こうも色々と話しているようだ。

「13号に、イレイザーヘッドですか。」

先日いただいた教師側のカリキュラムでは、オールマイトがここに居るはずなんです
が」

常人よりも五感に優れた私は、彼らの会話を普通に聞き取れている。

黒い靄を纏ったヴィランの発声器官が何処にあるのかは謎だが、今気にすることでは
ない。

「やはり先日のは、クソどもの仕業だったか」

相澤先生は、この間のセキュリティシステムを突破されたことを思い出したようだ。

犯人と思われる彼らに向けて、悪態をつく。

「何処だよ。せっかくこんな大衆引き連れてきたのにさ。」

オールマイト、平和の象徴。いないなんてな。……子供を殺せば来るのかな？」

体のあちこちに手を付けたヴィランが、とんでもない発言をする。

相澤先生は気配が変わったのを感じ取ったのか、操縛布を展開して戦闘状態に入っ
た。

「はあ！ ヴィラン！ 馬鹿だろ！」

ヒーローの学校に入り込んでくるなんて！ アホすぎるぞ！」

脳筋の切島君にしては、真つ当な正論を口にする。

そして八百万やおよろずさんが焦りながら、13号先生に質問した。

「先生！ 侵入者用センサーは!？」

「もちろんありませんが」

けれど作動している様子はないので、明らかに妙である。

「現れたのはここだけか、学校全体か。」

何にせよセンサーが反応しねえなら、向こうにそういう事ができる奴がいるってことだ」

私も轟君の分析が正しいと思うし、この場の皆も同意しているようだった。

「校舎と離れた隔離空間。そこにクラスが入る時間割。」

馬鹿だがアホじゃねえ。これは何らかの目的があつて、用意周到に画策された奇襲だ」

轟君の発言を聞いた私は、彼らの会話をからヴィランの目的について推測する。

そして思ったことを、そのまま口に出す。

「ヴィランの目的はオールマイト。平和の象徴を殺すこと」

全員の注目されるが、気にせずマイペースに続きを話していく。

「どういふことだ。斥流」

「ヴィランは、オールマイトがここに居ると知って襲撃してきた」

彼らの会話が聞こえたとは言わない。

相澤先生ならそれぐらいわかっているだろうし、現時点の推測を伝える。

「恐らく奴らの中に、オールマイトに対抗可能なヴィランがいる」

オールマイトを倒すのは、一筋縄ではないかない。

無策で突っ込んでくるとは思えず、何らかの隠し玉があるのは明らかだ。

なので私は噴水付近に集まっているヴィランを雑に指差して、警告を発する。

「一番ヤバそうなのは、脳みそ丸出しの大男。」

次が体に手をいっばいつけた奴で、最後は黒い霧のヴィラン。

あとは数合わせで、一年A組の皆でも勝てる」

「確かか？」

相澤先生の質問に、どう答えたものかと考えた。

しかし、これといった結論が出てこない。

「悠長に説明している時間もない。」

敵戦力に関しては、私の直感」

現在の状況を自分なりに分析して、過去の経験や直感によって組み立てた予想だ。

外れる可能性もあるが、オールマイトがいるとわかって襲撃してきた。

なので自暴自棄でなければ、切り札を用意するのは当然と言える。

やがて相澤先生は結論を出し、大きな声で叫ぶ。

「……13号！ 避難開始だ！」

13号先生や上鳴電気君かみなりでんきにも、学校と連絡を取るように指示をした。

けれど妨害している個性持ちが居る可能性が高く、そつちに望みは薄そうだ。

そして相澤先生は、迫ってくるヴィランの集団に体を向ける。

「先生は！ 一人で戦うんですか!？」

あの数じゃ！ いくら個性を消すと言っても！

イレイザーヘッドの戦闘スタイルは、敵の個性を消してからの捕縛だ！ 正面戦闘は

！

緑谷君が心配するのも、もつともだ。

相澤先生は正面から戦うタイプではなく、他のヒーローのサポートが主な役目であ

る。

味方の数が多いほど真価を発揮するのだ。

しかし彼はゴグル越してもわかるほど、真面目な顔で私を見つめてくる。

「一芸だけじゃ、ヒーローは務まらない。

……任せたぞ。13号、斥流」

「ええ〜!？」

そう言つて相澤先生はヴィランの集団を迎え撃つために、勢い良く階段から飛び降りた。

ちなみに私はヒーローではなく、ただの一生徒だ。

担任もわかつているだろうが、思わず変な声が出てしまった。

(まあ言われなくても、皆の護衛ぐらいはするけど)

クラスメイトをヴィランから守るのに異論はない。

そして緑谷君の心配はともかく、イレイザーヘッドは奮闘していた。

次から次へと襲いかかってくる敵を、バツタバツタとなぎ倒している。

個性を消せない異形系との戦いも想定していたようで、華麗な立ち回りは流石はプロ

ヒーローだ。

「緑谷君！ 斥流さん！ キミも早く避難を！」

その間に13号先生のあとを付いて、一年A組の生徒たちは出口に向かって走る。

途中で動きが止まっている私たちに気づき、飯田君が振り向いて大声で呼びかけた。

状況を分析していた緑谷君は、思い出したように慌てて追いかける。

けれど自分はその場に留まり、これからどう動くかと迷っていた。

(生徒がヴィランと戦う必要はないけど、相澤先生だけで勝てるとは思えない)

プロのヒーローが居るなら一般人が前に出る必要はないし、今までそうしてきた。

だが後方支援役のイレイザーヘッドが一人だけでは、いつまでも保つはすがない。
(むう、やむを得ない)

私は大きな溜息を吐くが、これから行うことも慣れたものである。
何にせよ、この期に及んでは迷っている暇はない。

だが相澤先生の元に駆けつけようと一歩踏み出した瞬間、USJの入口を塞ぐように
突如として黒い霧が湧き出した。

それはやがて人の形を取り、私たちに向けて流暢に話しかけてくる。
「初めまして、我々はヴィラン連合。

僭越ながら、この度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは。
平和の象徴、オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです」

まさか本当に、オールマイトを殺す気だったとは思わなかった。

予想が的中した私だけでなく、黒い霧を前にして一年A組の生徒たちは驚き固まっ
ていた。

「本来なら、ここにオールマイトがいらつしやるはず。

ですが、何か変更があつたのでしょうか。

もつとも、それはと関係なく、私の役目は——」

13号先生が、ヴィランが話している間に攻撃を仕掛けようとした。

けれどその直前に爆豪君と切島君が飛び出し、黒い靄の男に襲いかかる。

凄まじい爆発と衝撃音、そして煙が辺りを覆って何も見えなくなってしまう。

「危ない危ない。そう、生徒といえど優秀な金の卵！」

「駄目だ！ 退きなさい！ 二人共！」

二人の生徒が射線上にいるため、13号先生が攻撃できないのだ。

それだけではなく、私も他の生徒に視界を遮られてしまう。

一番ヴィランに近く危険な場所に居る彼らを、緊急避難させることができなくなる。

「私の役目は！ 貴方たちを散らして！ なぶり殺す！」

ヴィランの姿さえ認識できれば、重力操作できる。

だが残念ながら、遮蔽物が多すぎた。

「さて、どうしよう」

突如として黒い霧が広範囲を覆うが、私は咄嗟に背後に落ちて難を逃れる。

一連の行動を冷静に観察し、流動体のヴィランと戦ったことを思い出す。

奴は攻撃を当ててもすぐに元通りになっていたが、オールマイトはペットボトルに詰めて封印していた。

同じ手が通用すれば良いけれど、あいにく今は奴を閉じ込められる容器は持っていない。

それに黒い霧は円形に広がっており、他の生徒を閉じ込めている。

迂闊に手を出せば自分も巻き込まれるし、中がどうなっているかもわからない。

飯田君が数人抱えて逃げられたことだけが救いだが、あまり考えている時間はなさそうだ。

そしてこの絶望的な状況を何とかできるのは、現時点では自分しかない。

ならば四の五の言わずにやるしかないと気合を入れ、一段階の抑制を解除して急成長する。

黒霧のドームに捕らわれた生徒を急ぎ救出すべく、姿勢を正して呼吸を整えるのだった。

斥流陰子 v s ヴィラン連合

雄英高校の訓練施設、U S J にヴィラン連合が攻め込んだ。

黒い霧の男の個性が一年A組の生徒たちに襲いかかる。

飯田君や13号先生のおかげで何人かは難を逃れたが、はつきり言って状況は最悪だ。

なので私は躊躇うことなく一段階の抑制解除を行い、ドーム状に展開された黒い霧に向けて、力いっぱい拳を振り抜く。

「吹き飛ばせ！」

ドームの内部には一年A組の皆が囚われている可能性がある。

今の私は手加減したオールマイト程度の力に抑えられており、右ストレートを離れた場所から放ったことで衝撃波が発生した。

そして広範囲に広がった黒い霧を、一瞬で吹き飛ばす。

「なっ!？」

まさか自らの個性をかき消されるとは思わなかったようで、飛ばされた先で寄り集まった霧状のヴィランが思いつきり動揺していた。

「貴女は、まさか!? 二代目オールマイト!?!」

私をの姿を見たヴィランの顔色が、明らかに変わった。

噴水の前から距離があつたし、普段は小柄の幼女なので気づかなかつたのだろう。けれど今は、黒い霧のヴィランは無視だ。

一年A組の皆の安否のほうが気になる。

「戦いたいなら、あとで相手をしてあげる。少し待つて」

向こうの最終目的は、オールマイトを殺すことだ。

しかしヒーロー科の生徒や教師にも、危害を加えるのは間違いない。

だが私はこの場の全てのヴィランに対して、恐怖や脅威とは感じなかった。

むしろ心配なのは、自分よりも弱い人たちに被害が出ることだ。

私の目の前で人が死ぬと寝覚めが悪くなるため、それだけは阻止しないといけない。

幸いなことに黒い霧が晴れた向こうには、一年A組の生徒が集まっていた。

「飯田君、皆は無事?」

自分の近くに居る委員長に尋ねると、すぐに全員の安否を確認して答えてくれた。

「あつ、ああ! 斥流君のおかげで、全員無事だ!」

それは何よりと、ホッと息を吐く。

そして離れた場所に居たヴィランは跡形もなく消えており、私は首を傾げる。

「逃げた？」

「きつと斥流さんに敵わないと思って、戦略的撤退をしたんだろうね」

13号先生の発言で、私はなるほどと頷く。

何にせよ、我が身に降りかかる火の粉は払う。

なので立ち塞がるヴィランは、全員ぶっ飛ばす。

皆が無事なのは良いが、途中で襲撃される可能性はまだ残っている。

黒い霧でワープされたら厄介この上なく、私はこれからどうしたものかと考えていた。

すると13号先生が、飯田君に向けて大声で話しかける。

「委員長、キミに託します！」

学校まで走って、このことを伝えてください！

警報が鳴らず、そして電話も圏外になっていました！」

確かにこの場に留まっても救助は期待できないし、今はレイザーヘッドが戦っているが長くは保たないだろう。

時間が経つても復旧される様子がないので、何処かに妨害系の個性持ちが隠れている可能性が高い。

つまり学校にUSJの現状を伝えることは不可能であり、この場に留まっても状

況は悪くなる一方なのだ。

「それを見つげ出すより！ キミが走ったほうが速い！」

「しかし！ クラスの皆を置いていくなど、委員長の風上にも！」

飯田君は迷っているようで、クラスの皆も内心では怖いのだろう。

だがそれでも、彼の説得に回っていた。

ちなみに私は割りと危機敵状況も関わらず、相変わらずマイペースだ。

嘘偽りのない素直な言葉を口にして、自分なりに励ますことにした。

「たとえヴィラン連合が襲ってきてても、私一人で返り討ちにできる。

だから行って！ 飯田君！」

全く怖がっていない私が声をかけると、皆の視線が一斉に集まる。

「斥流君、それは本当か！」

「本当。全力を出すまでもない」

完全解放では周辺被害が酷いことになる。

たとえヴィランを倒せても、学校の施設を壊した責任を取らされてしまう。

賠償金を請求されるのは嫌なので、可能なら一段階で何とかしたい。

脳みそ丸出しの敵は一筋縄ではいかない予感がするものの、それでも抑制解放のラン

クを上げれば何とかなる。

おかげで飯田君の説得に効果があつたようで、彼は真剣な表情で小さく頷く。さらに13号先生とクラスメイトが後押しする。

「救うために！ 個性を使つてくださいい！」

飯田君も覚悟を決めたようで、もう心配はいらないだろう。

「……さてと」

取りあえずこつちは何とかかなりそうなので、私はUSJの噴水近くに視線を向ける。相変わらず相澤先生が大勢を相手に奮闘しているが、そういつまでもスタミナが保つはずがない。

できれば彼が力尽きる前にオールマイトか他の先生たちが異常に気づき、救助に来て欲しい。

だが現実には厳しく、飯田君がどれだけ早くても知らせても間に合わないだろう。

「13号先生、皆をお願い」

なので私は後ろを振り向き、13号先生だけでなく一年A組の生徒たちに微笑みながら声をかける。

「私は相澤先生を助けてくる。

このままだと、やられちゃうし」

私は返事を聞いたり振り返ることなく、階段から広場に向かって飛び降りる。

「相澤先生！」

抑制を解除した状態は、常に輝く謎の粒子を放出してとても目立つ。

さらに大声で呼びかけたのだ。

降下地点のイレイザーヘッドだけでなく大勢のヴィランも、私の存在に気づいたようだ。

「斥流か！」

「もう大丈夫！ 何故なら！ 私が来た！」

いつもの決め台詞を口に出しつつ、蹴りの姿勢を取る。

相澤先生が私の意図に気づき、その場から急速離脱した。

「重力加速！ 二倍！」

目標は敵が大勢固まっている場所で、高速の蹴りを放つ。

加速を得るのに問題ない距離であり、ヴィランも驚き戸惑っていたので逃げる時間はない。

「ぐわあああつ!!!」

「何だとおおお!!?」

「二代目オールマイトだとおお!?!」

「奴が居るなんて、聞いてねえぞおおつ!?!」

人を避けて当てた地面には、小さなクレーターができた。衝撃波が起きて、巻き上げられた土煙が周囲に広がる。

多くのヴィランが為す術もなく吹き飛び、阿鼻叫喚の地獄となった。

今の攻撃で敵戦力を大きく削ったが、まだ終わっていない。

腕をたくさんつけたヴィランが、重い腰を上げたのだ。

そして安全地帯に退避して呼吸を整えていた相澤先生をめぐって、勢い良く突進してくる。

イレイザーヘッドは接近に気づき、迎え撃つために操縛布を振るう。

拘束には成功したが、抹消の個性の特性を読まれた。

瞬きで解除された隙を突かれて接近を許し、奴の手で掴まれた部位がみるみる崩壊していく。

「相澤先生から！ 離れろ！」

私はヴィランと相澤先生の重力を操り、強制的に引き離す。

そのまま駆け寄って怪我の具合を確認すると、肘の辺りの服がボロボロに崩れていった。

「問題ない！ かすり傷だ！」

幸いなことに崩壊したのはヒーローコスチュームだけで、肉体に到達する前に引き剥

がせたようだ。

しかし敵の個性は強力で、状況によっては私でもやられる可能性がある。

「厄介な個性！」

「お前が言うな!!」

何故か相澤先生と、敵であるヴィランがツツコミを入れる。

言い返したいところだが、そんな暇はなかった。

動きを止めた私に、他のヴィランが次々に襲いかかってきたのだ。

「選手交代！ 相澤先生はサポートをお願い！」

「生徒を前に立たせたくはないが！ 合理的な判断だ！」

そう言ってイレイザーヘッドは私の後ろに下がり、スタミナ切れで疲労した体を少しでも休める。

私の予想通りで、強がってはいるが相当無理をしていたようだ。

私は襲いかかってくるヴィランの攻撃を避け、殴る蹴るで情け容赦なく地面に沈めていく。

手加減はしているので死にはしないが、それでも一撃受けただけで起き上がれなくなる程のダメージを与える。

そのまましばらくは相澤先生を休ませるため、近寄ってくる敵を一方的に叩きのめし

ていく。

だがある程度の時間が経ったことで、重力操作で引き剥がした手付きのヴィランが起き上がってきた。

「普段の仕事と、勝手が違うんじゃないか？」

イレイザーヘッドが得意なのは、あくまで奇襲からの短期決戦じゃないか？」

自分がイレイザーヘッドについて知っているのは、個性と名前と容姿ぐらいだ。

まあ他人の仕事やプライベートにそこまで興味がないのもあるが、手付きのヴィランは良く調べている。

敵の話を知っている間も、私は作業的に向かってくる敵を叩き潰す。

内心では緑谷君みたいな大ファンか、相澤先生のストーカーのどっちかなと変な勘ぐりをしてしまう。

「それとも真正面から飛び込んできたのは、生徒に安心を与えるためか？」

精神攻撃は基本と、何処かで聞いたことがある。

今の相澤先生は相当無理をしているし、後方支援に徹しても疲労はなかなか回復しない。言い返す元気もないようだ。

「格好良いなあ。格好良いなあ！」

私は彼の発言を聞いて若干引きつつ、相澤先生も厄介なファンに絡まれたものだとい

心で同情する。

「ところでヒーロー。本命は俺じゃない！」

こつちが雑魚処理に追われている間に、相澤先生の背後には巨大なヴィランが立っていた。

しかも、それだけではない。

重い拳が、容赦なく振り下ろされようとしている。

私は個性によつて先生を退避させようと考えたが、今からでは間に合わない。

「重力加速！ 二倍！」

幸い距離は近いので、跳躍速度を上げることによつて強引に間に割り込む。

相澤先生の前に立ち、敵の攻撃を受け止める。

「くうっ!？」

けれど相手の拳は、私の予想よりも速くて重かった。

相澤先生に危害が及ぶことはなかったが、無理な姿勢で割り込んだのでガードが間に合わない。

思いつきりぶん殴られて、小さな体が地面に叩きつけられる。

「教えてやるよ。二代目。」

そいつが対平和の象徴、怪人脳無！」

私は怪人脳無によって地面に叩きつけられ、うつ伏せになってしまった。

だがそれだけでは済まずに、巨大なヴィランに伸しかかられて片腕を握られる。

「斥流！」

相澤先生が個性を抹消しようと試みるが、脳無は異形系で効果がない。

イレイザーヘッドは悔しそうに舌打ちし、それを見た見た腕付きの少年が得意気に笑う。

「個性を消せる。素敵だけど、なんてことないね。

圧倒的な力の前では、つまりただの無個性だ」

私の腕を握る力が段々と強くなっていき、さらには頭部を強引に持ち上げて、地面に何度もぶつけてくる。

「そして、いくら二代目オールマイイトだろうと、脳無には勝てない」

手付きのヴィランの煽りが鬱陶しい。

実際には私は殆どダメージを受けていないが、確かに脳無は強い。

一段階のパワーでは、脱出できそうになかった。

「……変！ 身！」

なのでここは二段階の抑制解除を行い、肉体を急成長させる。

「いい加減！ 退いてっ！」

「何っ！ コイツ！ さくらにパワーが!？」

腕と頭部を掴まれて酷い目に遭っていたが、別に怪我はしていない。

先程よりも煌めく粒子の量が増えて二年ほど歳を重ねた私は、小学生高学年ほどの体格になる。

そして巨大な敵の腕力に抗い、強引に立ち上がった。

けれどどこまで力を解放しないと、脳無からは逃げられなかった。

確かにオールライト並みのパワーがあり、とても厄介な敵である。

「落ちろー！」

私は脳無に顔を向けて認識することで、敵の重力を逆転させる。

おかげで脳無のバランスを崩すことに成功し、そのままの勢いで体を捻って素早く回し蹴り放つ。

「変な手応えー！」

脳無と呼ばれた怪物を蹴っても、何故か衝撃が殆ど伝わらない。

ならばと私は奴の腕を掴み、遙か遠くに投げ飛ばす。

「……………ふう」

ようやく背中が軽くなり、大きく息を吐いた。

ヴィラン連合の親玉も、今の私は知らなかったようだ。表舞台では初のお披露目にな

る。

何にせよ向こうの最高戦力である脳無の実力はわかったので、問題なく勝てるだろう。

ただし、この状態になるのは久しぶりだ。

手加減に失敗したら相手を殺してしまうので、これからぶつ飛ばすヴィランを前に軽く柔軟体操しておく。

すると今まで何処に隠れていたのか、黒い靄状のヴィランが手付きの少年の前に転移してきた。

「死柄木弔^{しがらきとむら}」

「黒霧、13号を殺ったのか？」

私たちが目の前に居るのに気にせず、彼らは会話を続ける。

「残念ながらその二代目に阻止され、散らしそこねました」

「はあ!？」

先程のウキウキは何処へやら、死柄木弔^{しがらきとむら}は明らかに不機嫌になる。

それだけではなく、何やら喉の辺りを手で掻き始めた。

「黒霧! お前! お前がワープゲートじゃなかったら! 粉々にしたよ!」

しかし情緒不安定なヴィランなわけではなく、彼はすぐに冷静になる。

「流石に何十人ものプロ相手じゃ敵わない。ゲームオーバーだ。」

「あーあ！ 今回はゲームオーバーだ！ ……帰ろっか」

ここまで大規模な襲撃を仕掛けてきたのに帰るのかと、私は柔軟体操をしながら拍子抜けしてまう。

「あつ、そうだ。帰る前に、平和の象徴としての矜恃を。」

「少しでも！ へし折って帰ろう！」

こつちもちょうど体をほぐし終わったので、迎え撃つのに問題はない。

だが突っ込んでくる死柄木^{しがらきとむら}弔を見据えたところで、私の足元に突然黒い霧が広がる。

「これはっ!？」

まるで踏ん張りが効かずに体が沈んでいき、やがて腰から下が見えなくなる。

私は急ぎ脱出しようと重力を逆転させるが、それを読んでいたのか黒霧^{くろぎり}はゲートを閉じる。

「引きちぎるー！」

腰のあたりがキツく締めつけられたが、それだけである。

しかしお尻がゲートに詰まって、なかなか脱出できない。

脳筋ゴリ押しで無理やり逃げ出すこともできるが、ヒーローコスチュームが破れてしまふ。

修繕費用が無料とはいえ私は痴女ではないので、なるべくならもつと穩便に済ませたい。

「馬鹿な!? ゲートを閉じても引きちぎれない!?

何という頑強さだ!」

超重力下での日常生活に比べれば、この程度は何てことはない。

けれど今すぐに脱出するのは難しく、死柄木弔も急速接近中だ。

「ううむ、どうしたものか」

身動きができないピンチな状況でも、普段のマイペースさが表に出てくる。

だが不安定な姿勢は力加減が難しく、やりすぎてヴィランを殺す可能性が出てくる。

コインを高速で射出したところで、自分はこの場を動かないので効果範囲が狭く軌道を読まれやすい。

避けられるか、ゲートの個性で無力化されそうだ。

「相澤先生! 任せた!」

ならばここは、相澤先生に任せようと大声をあげる。

それと同時に死柄木弔の指が、私に触れた。

「ちっ! 本性格好良いぜ! イレイザーヘッド!」

相澤先生の個性抹消のおかげで、彼の崩壊は不発に終わる。

「好機！」

お互いが触れるほどの至近距離で、動きが止まった。

これなら不安定な足場でも、力加減がしやすくなる。

私は絶好の機会を逃すことなく、カウンターを叩き込もうとする。

「危ない！ 死柄杓しがらきとむら！」

だが突如、私の目の前にワープゲートを出現した。

そこに右ストレートが吸い込まれそうになる。

「そうはいくか！」

黒い霧はワープゲートだと言っていたし、既に何度も見ている。

私は繰り出した拳だけピンポイントに重くして、強引に軌道を変えた。

その結果、自分の足を勢い良く殴りつけることになる。

当然のようにオールライト並のパワーなので、地面に大きなクレーターが形成された。

またもや衝撃波や轟音や広がり、土煙が盛大に舞い上がる。

おかげで死柄杓しがらきは吹き飛ばされ、黒霧も風圧を受けて一時的に個性の制御が利かなくなつた。

私はその隙を逃さずに重力を逆転させることで、不安定な足場から脱出する。

「いい動きをするなあ。増強系の個性とか、お前もオールマイトのフォロワーかあ？」
吹き飛ばされた死柄木しがらきは受け身を取り、私も少し離れた地面に足をつけて彼と対峙して一息つく。

「増強系じゃない。重力操作」

すぐに訂正したが、オールマイトのフォロワーでないと言ったら本人がガツカリしそうだ。

なので、そつちは黙っておくことにした。

「さて、仕切り直し」

先程投げ飛ばしたはずの脳無が、いつの間にか死柄木しがらきの隣に立っていた。

しかも向こうも怪我をしている様子はないので、これから第二ラウンドが始まる。

そんな雰囲気の流れで私もバックアップの相澤先生も呼吸を整えて身構えた。

だがその直後に、USJの入口付近から轟音が響き渡る。

正面ゲートが何者かに蹴破られたのだ。

「大丈夫！ 私が出来た！」

ヴィラン連合の殺害対象、平和の象徴オールマイトだ。

そして私たちにとっては、頼もしい援軍である。

「わあ、コンティニューだ」

死柄木^{しがらぎ}が何を考えているかは、相変わらず良くわからない。

だが私は、何故だが妙な胸騒ぎがした。

このままオールマイトに選手交代して、めでたしめでたしとはいく気がしなかったのだった。

斥流陰子 v s 怪人脳無

USJでヴィラン連合と戦った私は、敵のボスらしき手付きの死柄木弔、幹部の黒霧。さらに、平和の象徴を倒すために作られた脳無を相手に奮闘する。

自分は怪我也なく元気いっぱいだが、相澤先生はかなり疲労している。

後方支援に回ってもらって少しづつ回復はしているが、まだ前線に立つのは難しそうだ。

何にせよ互いに距離を取って仕切り直しになり、いよいよ第二ラウンドが始まろうと
していた。

だがその直前に、USJの正面ゲートが蹴破られる。

ナンバーワンヒーローであるオールマイトが、私たちの救援に来てくれたのだ。

彼は堂々とした立ち振る舞いで、こちらに歩いてきている。

「嫌な予感として、校長のお話を振り切ってやって来たよ。

来る途中で、飯田少年とすれ違った」

良く見ると一年A組の生徒が入口付近に集まっている。

周囲には無力化されて、縛られている大勢のヴィランの姿があった。

きつと黒霧くろぎりがワープゲートを繋げて、生徒を襲わせるために呼び集めたのだ。

13号先生と戦ったときに彼の個性を満たし、警戒されている。物量で押し切るほうが、勝率が高いと考えたのだろう。

結果、多少の怪我はあるが全員無事なようだ。

やはりヴィラン連合は質はともかく数が多いだけの烏合の衆であり、一年A組と13号先生で倒しきった。

「何が起きているか、あらましを聞いた」

そしてオールマイトは、一年A組の皆に声をかける。

さらに階段の直前で足を止め、ネクタイを破りながら叫ぶ。

「もう大丈夫！ 私が来た！」

しかしその顔は笑顔ではなく、怒りが浮かんでいた。

むしろ嬉しそうなのは死柄木しがらぎとむらのほうで、あまりに笑顔が気持ち悪かったので私は若

干引き気味である。

「待ったよヒーロー。社会のゴミめ」

声もウキウキで、とても喜んでいるのは間違いない。

「あれが、オールマイト！」

「生で見るのは初めてだぜ！」

「迫力すげえ！」

「馬鹿野郎！ 尻込みするなよ！ アレを殺って俺たちが！」

残ったヴィランたちが噴水近くで騒いでいるが、彼らに喋れたのはそこまでだった。

次の瞬間にはオールマイトが高速で接近し、拳を叩き込む。

あつという間に、敵全員をノックダウンさせてしまう。

「相澤君、斥流少女。遅くなつてすまない」

「謝らないでください。貴方らしくもない」

相澤先生が、相変わらず真面目な顔で返事をする。

私も何か言わないと不味いかと思い、率直な意見を口に出す。

「問題ない。私と相澤先生だけでも勝てた」

「はははっ、それは頼もしいな！」

直接戦つて、肌で感じた事実を口にしたのだ。

あの程度のヴィランなら、二段階で何とかなる。

何にせよオールマイトの到着でこっちの勝率がさらに上がったのは間違いなく、気づ

けば死柄木弔も、他のヴィランを掃討するついでに殴られたようだ。

飛ばされた手を錯乱しながら拾い集め、一段落してこちらに顔を向ける。

「はっ、国家公認の暴力だ。流石に速いや。目で追えない。」

けれど、思ったほどじゃない。

やはり本当の話だったのかな。弱ってるって話！」

取り付けた手の隙間から、死柄木^{しがらぎとむら}の笑顔が見え隠れする。

「きもっ！」

私は良くわからない気色悪さを感じ、思わず一步下がる。

「斥流少女、大丈夫かね？」

「怖くはない。でも、生理的に無理！」

例えるならゴキブリとかそんな感じだ。手で触ったり近寄るのは嫌だが、ボコボコにするのに何の躊躇もない。

オールマイトが心配してくれたし、後方支援役の相澤先生は怖くはないのかと呆れた表情で呟いていた。

「自分よりも弱い相手を、恐れる必要はない」

「そりゃ、そうかも知れないがな」

私の発言を聞いた相澤先生が、複雑な顔で返事をする。

そして別に怖くはないものの、それとは別の情報を伝えておく。

「脳の怪人はオールマイトに匹敵する力と、桁違いの耐久力を持っている」

「大丈夫！」

彼はいつも自信満々に笑うから、平和の象徴と呼ばれているのだ。

なお、私は死柄木弔しがらぎとむらの相手はしたくない。

ここはナンバーワンヒーローに任せるのが良さそうだ。

私と相澤先生は超。パワー同士の激突に巻き込まれたくないので、少しだけ離れてバツクアツプに専念することにする。

準備が整ったあとに、オールマイトが腕を十字に組んで死柄木めしがらぎがけて突進した。

「カロライナー！ スマーツシュツ！」

左右の手刀で凄まじい速度のクロスチョップが放たれた。

直前になって脳無が死柄木しがらぎを庇い、オールマイトの攻撃を正面から受け止める。

「マジで全然効いてないなあっ！」

そう言いつつも脳無の攻撃を避けて、今度は腹部に渾身の右ストレートを叩き込む。

だがそれでも効果が薄く、次は頭部に立て続けに拳を当てていく。

「顔面も効かないか！」

オールマイトは悔しそうに呟き、そのまま殴り合いに突入する。

「効かないのは、シヨック吸収だからさ。」

脳無にダメージを与えたいなら、ゆっくりと肉をえぐり取るとかのほうが効果的だ。

それをさせてくれるかは、別として」

先程から私の位置取りが悪いようで、脳無に重力操作をかけるにはオールマイトが邪魔になる。

さらに常に高速で動き回っているの、他の障害物に遮られることも多々あった。いつそ高所に移動しようかと考えている間にも、彼らの戦いは激化していく。

「わざわざサンキュー！　そういうことなら！　やりやすい！」

オールマイトは何かを閃いたのか、脳無の背後に回って腰に手を伸ばしてバックドロップを仕掛ける。

すると、まるで大爆発でも起きたかのように衝撃が広がり、周囲の地面が大きくえぐれた。

「コンクリに深く突き立てて、動きを封じるつもりだったか？」

それじゃ封じれないぜ。脳無はお前並みのパワーになってるんだから」

死柄木弔しがらぎとむらは心底嬉しそうに笑う。

どうやらオールマイトを出し抜けて、余程嬉しいらしい。

そして黒い霧が地面に陥没したはずの脳無の上半身を、ナンバーワンヒーローの下方に出現させるだけでなく、脇腹に指をめり込ませて出血させる。

「ふふふつ、いいねえ。黒霧くろきり。期せずしてチャンス到来だ」

今が不味い状態なのは明らかであり、私は隣の相澤先生に許可を取る。

その間にもヴィラン連合の作戦は刻一刻と進行していき、黒霧が自信満々に説明していた。

「目にも留まらぬ速度の貴方を、捕獲するのが脳無の役目！

そして、貴方の体が半端に留まった状態でゲートを閉じて、引きちぎるのは私の役目！」

しかしヴィラン連合の罠は自分が打ち破ったはずだが、オールマイトは私よりも弱い。

もしかしたら、本当に引きちぎられてしまうかも知れない。

何にせよ黙ってやられるのを見ている気はない。

相澤先生にあとのことは任せたので、私は真正面から突っ込んでナンバーワンヒーローを助けに行く。

「重力加速！ 二倍！」

私は跳躍時に重力加速を使い、オールマイトに急速接近する。

「やはり来ましたか！」

だが、それは予想していたようだ。

黒霧くろぎりのゲートが前方に展開される。

「曲がれ！」

「ばっ、馬鹿な!？」

軌道を捻じ曲げると肉体に負荷がかかるが、超重力下で日常生活を送るよりは楽なものだ。

結果的に黒霧くろぎりの壁を強引に避け、オールマイトのすぐ近くに着地することができた。

「悪く思わないで!」

落下の勢いを殺しきれずに地面を大きくえぐってしまった、足元に無数の破片が散らばる。

けれど私はそれに素早く手を伸ばすと、瞬く間に一つに寄り集まった。

コンクリートを超圧縮し、鋭利な刃物が構築する。

「両腕もらったあ!」

オールマイトの脇腹をえぐっている脳無の右腕を斬り落とし、さらに飛び越えた先で振り返りながら一撃を放つ。

ヴィランの左腕も綺麗に切断する。

そして自由になったナンバーワンヒーローの重力を逆転させ、素早くゲートから脱出させる。

「助かった! 斥流少女!」

「どう致しまして!」

地面に降り立つオールマイトは、私と一緒にその場から飛び退いて体勢を立て直す。刃物は危険なのであまり持ち歩きたくないので、元の瓦礫へと戻して足元に散らばらせた。

「攻略された上に、全員ほぼ無傷。凄いなあ。最近の子供は、恥ずかしくなってくるぜ」
何だかわからないが、死柄木しがらぎ木から褒められた。
けれど声は淡々としているし、全然嬉しくない。

「脳無」

死柄木が指示すると、ゲートを通過して両腕がなくなった脳無が平然と立ち上がる。痛みを感じていないだけではなく、切断した先の肉が盛り上がって再生を始めた。

「何だ!? ショック吸収の個性ではないのか!」

「別に、それだけとは言っていないだろ。これは超再生だ」

心底おかしそうに笑いながら喋る死柄木である。

次に脳無を観察すると、確かにコイツはオールマイトの切り札だと理解した。

「脳無はお前の百パーセントにも、耐えられるよう改造されている。

超高性能サンドバッグ人形さ」

平和の象徴の攻撃に耐えられて、同等のパワーを持っていて超再生まであるのだ。

こんな怪物を相手に、勝ち目などあるはずがない。

けれど私は全く怖くはなく、あまり調子に乗られるのも癪なので不敵に笑ってやった。

「対オールマイトの脳無は、確かに凄い。

それでも、私たちは絶対に負けない！」

「斥流少女！」

そう言つて、死柄木を真正面から睨みつける。

何故かオールマイトも先程よりも活力が漲っているし、後方支援の相澤先生もやる気十分だ。

だがそうは言つたものの、現実はこのまま戦うには大きな問題があつた。

ナンバーワンヒーローは活動時間は、限界ギリギリだ。

今は気合でマッスルフォームを保たせている状態で、これ以上の無理をさせられない。

できればなるべく動かないか、短時間で勝負をつけるべきだろう。

オールマイトの様子を観察して、そのような結論を出した私は相澤先生に声をかける。

「相澤先生」

「何だ！ 斥流！」

油断せずに、敵から決して目をそらさない。

そして後方に待機している相澤先生に、大声で指示を出す。

「死柄木しがらきと黒霧くろぎりを抑えて！」

腦無の相手は、私がする！」

「ああ！ 任せておけ！」

相澤先生は、まだ疲労が完全に完全に回復していない。

それでも頑張ってもらうのだ。私も負けていられない。

続いてオールマイトに声をかける。

「オールマイトは、頃合いを見計らってトドメの一撃をお願い！」

「もちろんだ！ 斥流少女！」

ナンバーワンヒーローとして、まだまだ若いヒーローには負けられないさー！」

別に自分はヒーローではないのだが、今は指摘する時間も惜しい。

その間に死柄木しがらきとむらむらは、平和の象徴が暴力装置だ何やら言って、己の立場を正当化しようとしている。

けれど、そんなものをいちいち聞いてやるつもりはない。

私は選手交代とばかりにオールマイトよりも前に立ち、凄まじい勢いで突進してくる腦無を迎え撃つ。

相澤先生は死柄木と黒霧の二対一になるが、少しの間持ち堪えて欲しい。

私は気合を入れるために、心に思い浮かんだことを大声で叫ぶ。

「ヒーローとは！ 常に！ ピンチをぶち壊していくもの！」

脳無の攻撃を全ていなし、敵は頑丈なので手加減する必要がない。

殴るたびに周囲に凄まじい衝撃波が吹き荒れ、周囲の人や物を吹き飛ばしていった。

だがやがてショック吸収の限界を越えたのか、脳無の土手っ腹に重い一撃が入って手の動きが止まる。

「オールマイト！」

「任せろ！」

頃合いを見計らった彼が、凄まじい速度で突っ込んできた。

そして、大きな叫び声をあげた。

「ヴィランよ！ こんな言葉を知っている！ さらに向こうへ！」

私もその隙を逃さず、空に向けて跳躍する。

今度は背後にいたオールマイトが力を溜めて、万全の状態で脳無の目の前に立った。

「プルスウ！ ウルトラアーツ!!」

「重力加速！ 三倍！」

隙だらけの脳無に、オールマイトが全力の一撃を繰り出す。

私も光り輝く粒子を放出しながら、お決まりの赤熱した高速の飛び蹴りを放った。

同時に必殺技を叩き込まれたことで、衝撃吸収の限界を完全に越えてしまったようだ。

USJの天井を突き破り、空の彼方へと吹き飛んでいく。

「やはり、衰えたな！」

全盛期なら、斥流少女の助力なしでも、余裕だったのだが！」

舞い上がった土煙の向こうから姿を現したオールマイトは、清々しい笑顔で勝利宣言を行う。

私もナンバーワンヒーローを前面に押し出して、彼の正体をバラさずに手柄を譲れて満足である。

「さてと、ヴィラン。お互い、早めに決着つけたいね！」

オールマイトは死柄木しがらきと黒霧くろぎりに顔を向けて、堂々と言い放つ。

「チートが！」

確かに彼らにとっては、平和の象徴は理不尽極まりない存在だ。

しかし、ナンバーワンヒーローが居るおかげで日本は他国よりも治安が良い。

(でも、もしかしたら)

ヴィランにも桁外れに強い人物がいるかも知れないし、オールマイトと同じような悪

のカリスマが存在したらとても困る。

(ヴィラン連合を裏で操ってる奴がいるのは、ほぼ間違いない)

奴らはそこまで賢くないし、衝動的に動いているように思える。

けれど雄英高校の襲撃事件を起こせたので、黒幕か協力者の存在が見え隠れしていた。

正体も実力も不明ではあり、もしも対峙したら絶対に勝てるとは言いきれない。

やはり自衛のために修行は続けるべきで、これからも頑張ろうと内心で気合を入れるのだった。

襲撃事件の終わり

脳無とオールマイトの戦いは、ナンバーワンヒーローが勝利した。

しかし死柄木^{しがらぎとむら}は悪態をついてるが、諦める様子はない。

黒霧^{くろぎり}は平和の象徴がダメージを受けていることを指摘するので、もうひと悶着ありそうだ。

おまけに、増援のヒーローが駆けつける前なら勝てると説得している。

私としては戦力差は開く一方なのに、無駄な諦めの悪さに奴らに脳みそ詰まってるのかと疑ってしまう。

「残念だけど、貴方たちに勝ち目はない。

いい加減に降参して」

こっちは気合だけで変身を維持しているオールマイトと、無傷でまだまだ元気な私と、疲労しているが個性を抹消できる相澤先生がいるのだ。

あとではできれば控えていて欲しいが、十三号先生と一年A組の生徒も揃っている。

切り札の脳無を失った今、ヴィラン連合に勝ち目はない。

けれどいつマッスルフォームが解除されるかわからないため、オールマイトは動かな

いほうがいいだろう。

なのでここは私が率先して戦うべきなのだが、自分はヒーロー科に属しているが一般人である。

(それにもし私がヴィラン連合を壊滅させたら、功績がまた増える)

この場にはナンバーワンヒーローが居るし、相澤先生も後方支援をしてくれる。

敵戦力は大きく削れて、勝利はほぼ確定していた。

だからこそ最後はきっちり締めるべきで、できれば終わり良ければ全て良しで済ませたい。

理想としては、ヴィラン連合に襲撃されたがオールマイトが駆けつけて全員やつつけてくれただ。

私は彼らの油断なく観察しつつ、そのようなことを呑気に考えていた。

すると何処からともかく銃弾が飛来し、死柄木弔しがらきとむらの右手に穴を空ける。

「ごめんね。皆。遅くなったね」

振り向くと、入り口付近に根津校長ねづの声が立っていた。

それだけではなく、雄英高校の教師たちが続々と入場してくる。

「すぐ動ける者を、かき集めてきた！」

流石に全員ではないが、まさにプロヒーローの堂々たるメンツが揃っていた。

さらには、飯田君の姿もある。

「飯田君！」

「Aクラス委員長！ 飯田天哉！ ただ今戻りました！」

麗日さんが飯田君の帰還に、喜びの涙を流していた。

そこからは一方的な展開であった。

まだ残っているヴィランは多くいるが誰一人としてプロヒーローには敵わずに、為す術もなく捕らえられていく。

「あーあ、来ちゃったな。ゲームオーバーだ。

帰って出直すか」

死柄木が私たちに背を向けて、黒霧のゲートに入って逃げようとする。

だがすぐに遠距離から撃ち抜かれて、動きを封じられた。

「今回は失敗だったけど、今度は殺すぞ！」

平和の象徴！ オールマイトオ！ そしてえ！ 二代目エ！」

何故私まで目の敵にされるのわからない。理不尽である。

だが死柄木甲は生理的に受け入れられないので、無言で数枚のコインを取り出す。

重力加速で次々と撃ち出しては動けない彼と、ゲートを開いて逃げようとしている黒

霧に当てていく。

「あだだだっ!? 止めろオ! 二代目エ!!!」

「うぐっ! これでは、ゲートの維持が!?!」

若干泣きが入っているが、最初に挑発したのはそっちだ。

死なない程度に、二人揃って容赦なくボコボコにしてやる。

やがて声を出す元気もなくなったことを確認し、取りあえずの気は済んだので静かに息を吐いた。

けれどそこで終わりではなく、私は彼らを睨みつける。

「コンティニューの機会を与えらるても?」

「はあ? ……うぐっ!?!」

「こっつ、この個性は!?! まさか!?!」

気が済んだあとに個性を発動させ、死柄木しがらきと黒霧くろぎりの重力を操作して引き剥がし、急激な加重によって地面に縫いつけた。

「相澤先生!」

「任せろ!」

死柄木しがらきに高速で接近した私は、相澤先生の個性消去が効いている間に躊躇なく中指をへし折った。

「があああっ?!?!」

しかも片手だけでなく、右も左も両方である。

「これがヒーローのやることかよおおっ!!!」

「私はヒーローじゃない。」

それに殺すために襲撃してきたヴィランが、それを言うの?」

ヴィラン連合を逃すと、より強く狡猾に成長してしまう。

それに彼らの背後に巨悪が隠れ潜んでいるのは、ほぼ確定だろう。

多少乱暴であっても逃げられるよりはマシであり、ここでしたっぴり引導を渡してやる。

「死柄木吊!?!」

「怪しい動きをすれば、他の指も折る」

私は死柄木しがらきと黒霧くろぎりの重力を増加させ、相棒を人質に取る。

どうやら仲間思いのようで、完全に動きが止まった。

そして救援に来た雄英高校の先生たちも、こちらの状況を把握したようだ。

彼らを拘束している間に他のヴィランを捕縛しながら、続々と駆けつけるのだった。

その後は、ヴィランは全員捕縛されて警察に引き渡された。

オールマイトも正体がバレずに済んだし、全部彼の手柄になってくれた。
一年A組や教師の誰も大きな怪我はなく、無事だったのどにかくヨシなのだった。

雄英体育祭

雄英体育祭

ヴィラン連合に雄英高校が襲撃されたことは、世間を揺るがすニュースとして大きく報道された。

幸いなことに怪我人は多いが犯人以外はほぼ無傷だし、被害者は全員無事である。

おかげで学校が閉鎖されることもなく、次の日も普通に登校することができた。

だが一年A組の教室は、昨日の事件で大盛り上がりだ。

いつものように自分の席についた私は真面目に授業の予習をしているが、クラスの皆は全国ニュースに映ったことが嬉しいようだった。

「しかし、どのチャンネルも結構でっかく扱ってたよな！」

「びつくりしたぜ！」

かみなりでんき きりしまえいじろう
上鳴電気君や切島鋭児郎君が嬉しそうに話している。

じろうきよつか
その横で耳郎響香さんが、息を吐いて口を開く。

「無理ないよ。プロヒーローを輩出するヒーロー科が襲われたんだから」

せろほんた
続いて瀬呂範太君が机に身を預け、溜息を吐いていた。

「あの時、先生たちが来なかったらどうなっていたか」

確かにオールマイトや他の先生たちが助けに来なかったら、私と相澤先生はともかく一年A組の皆と13号先生は危険だった。

自分は大勢を守るほど強くはないし、やはり何人かが怪我をしていただろう。

「止めろよ！ 瀬呂お！ 考えただけでもちびつちまうだろお！」

みねだみのる
峰田実君が絶叫している。

彼にとつて、昨日の事件は余程恐ろしかったらしい。

「うっせえぞー！ もっと静かにできねえのか！」

勉強中だったのか、ばくごうかつぎ
爆豪勝己君が峰田君に叱責する。

今の発言で静かにはなつたが、その後もオールマイトや私が凄かつただの何だのと盛り上がっていた。

やがて飯田天哉君が朝のホームルームが始まるので席に着くようにと、委員長らしく指示を出す。

するとタイミング良く教室の扉が開いて、相澤先生が姿を見せる。

「おはよう」

寝袋状態でない普通の相澤先生だ。

これまた普段通りに歩いて、教卓の前に立った。

「先生！ 無事だったのですね！」

飯田君が手を上げて、心配そうに声をかける。

彼は私と先生が戦っているのを見ていないし、ヴィランを捕縛したあとは速やかに解散となった。

様子がわからなかったし担任なので、彼が心配するのも当然と言える。

「俺の無事はどうでもいい。何よりまだ。戦いは終わってねえ」

相澤先生の発言を受けて、教室内の空気が重くなる。

私も、またヴィランが襲撃でも仕掛けてくるのかと身構えてしまう。

「雄英体育祭が迫ってる」

「クソ学校っぽい来たーっ!!!」

良い意味での肩透かしを食った。

しかし、相変わらず一年A組のノリにはついて行けない。

あまり喋らない私は、取りあえず何事もないようなので、一人静かに安堵するだった。

ヴィランの襲撃を受けたばかりだが、体育祭を開催するらしい。

雄英高校の危機管理体制は盤石だと、広く知らしめるのだ。

警備は例年の五倍に強化するし、何より雄英高校の体育祭は最大のチャンスだ。

ヴィラン程度で中止して良い行事ではない。

ちなみに私は全く興味はなく、テレビで行われるヒーロー関係の番組は全然見ていなかった。

なお説明された内容を簡単にまとめると、かつてはオリンピックというスポーツの祭典があつた。

規模が縮小して形骸化してしまい、その代わりに雄英体育祭が日本のビッグイベントになった。

有名なプロヒーローもスカウト目的で見に来るので、卒業後はプロ事務所にサイドキックとして雇用されるのがセオリーだ。

年に一回、計三回だけの大きなチャンスで、ヒーローを目指すなら絶対に外せないイベントなのだった。

そんなこんなで午前の授業を終えて昼休みになり、皆は早くも気合十分であれこれ話していた。

けれど私は、一人でのんびりと窓の外の景色を眺めながら考える。

(私はヒーローにならないし、体育祭は欠席しようかな)

ヒーロー免許の修得を目指してはいるが、実際に就職するわけではない。

履歴書に記載する資格の一つでしかなく、採用の足がかりになれば十分だ。

あとは偶然事件や事故に遭遇した際に、個性を堂々と使えれば良い。

けれど普通はヴィランの襲撃に巻き込まれることはないし、そつちは気にしなくてもいいだろう。

しかし、麗日^{つらひか}さんはいつもと様子が違う。

気合を入れすぎて、表情も色々とアレな状態になっている。

理由を聞くと実家が経営の苦しい建設会社で、将来はヒーロー免許を取ってお金を稼ぎ、家族に楽をさせてあげたいらしい。

素晴らしい心がけだとわかり、私も陰ながら応援することを伝えた。

彼女はとても喜んでくれたので、こつちまで嬉しくなったのだった。

ヴィランが雄英高校を襲撃から時間が過ぎて、いよいよ日本を代表するビッグイベントである体育祭が目前に迫ってくる。

けれど私にとっては、進学に必要な単位修得とは関係ない。

ヒーロー事務所のスカウトにも興味が無いため、モチベは低かった。

なので今日もいつものように授業を終え、下校時間になったので席から立ち上がり、下宿先に帰ろうとする。

すると何故か、一年A組と繋がる廊下が生徒ごった返していた。

「なっ、なっ、何事だあああ!？」

麗うららかに日さんが動転し過ぎて、変な叫び声をあげる。

すぐに飯田君も反応するが、私は取りあえず人混みが引くまでは自分の席で待機だ。

「君たち! A組に何か用が——」

状況がわからない以上は迂闊には動けないし、取りあえずはいつものように我関せずを貫く。

「何だあ。出れねえじゃん! 何しに來たんだよお!」

峰田君の発言が委員長のとに続く。

しかし爆豪君は、気にせずに彼の横を平然と通り抜けていった。

「敵情視察だよ。

ヴィランの襲撃を、耐え抜いた連中だもんな」

相変わらずツンツンしている爆豪君は、教室の前に集まっている大勢の生徒を見据えて足を止めた。

「そんなこととしても意味ねーから。退けよ」

下校時間なので帰りたいのだろうが、残念ながら人混みが引く気配はなかい。

今の爆豪君は別に怒っているわけではなく、理性的である。

けれど彼はあまり我慢強くないので、いつ爆発するかはわからない。

「噂のA組。どんなものかと見に来たが、随分と偉そうだな」

彼の発言に反応したのか、廊下の人混みをかき分けて一人の生徒が前に進み出てきた。

「ヒーロー科に在籍する奴は、斥流せきりゅうさん以外、皆こんななのか？」

何故そこで自分の名前が出てくるのが、良くわからない。

しかし多分、いい意味で言ってくれるのだろう。

爆豪君のストレスが一方的に溜まりそうであるが、彼は構わずに言葉を続ける。

「こういうのを見ちゃうと、幻滅するなあ」

そう言って彼は、一瞬だけこちらに視線を向ける。

私は何処かで見た顔だなと思いつつ、何とか思い出そうを頭を悩ます。

「普通科とか他の科って、ヒーロー科を落ちたから入ったって奴、結構いるんだ。……知ってた？」

私が小声でウンウン唸っている間にも、彼は話を続けていた。

「そんな俺らにも、学校はチャンスを残してくれている。

体育祭のリザルトによっちゃあ、ヒーロー科への編入も検討してくれるんだって」

話半分に聞いていたが、そんな制度もあるのかと驚く。

だが今のところは、自分とは縁がなさそうだと思った。
「その逆もまた、然りらしいよ」

何にせよ体育祭の結果次第で、一年A組と普通科の入れ替えもある。
クラスメイトは現実を直視させられ、否応なしに緊張感が高まった。

「少なくとも俺は、調子に乗っていると足元ごつそりすくつちやうぞという。宣戦布告しに来たつもりだ」

爆豪君とは違うが挑発的で、大胆不敵な生徒が現れたものだ。

しかし、そこで私は彼のことをようやく思い出す。

「もしかして、入試で会った心操しんそう人使君？」

「斥流さん、覚えていてくれたのか！」

思い出したのはたった今なのだが、それでも彼は笑顔を浮かべている。

どうやら残念ながらヒーロー科の試験に落ちてしまい、普通科に編入したらしい。

今、再会を喜ぶのも違うような気がする。

けれど基本的にマイペースで行動する私は、率直な言葉を口にする。

「心操君、体育祭頑張つて。応援してる」

「ありがとう。斥流さん。」

あの日の誓いを忘れずに、俺は必ずヒーローになるよ」

あの日の誓いとは何ぞやと、思わず首を傾げた。

けれど忘れていたのを認めるのは恥ずかしいし、本人が聞いてこないなら別にいいかとスルーする。

とにかく私も普通科に編入の可能性があり、油断して足をすくわれないう気をつけたほうが良さそうだ。

一年A組の中では飛び抜けているが、万が一もあるので最低限の活躍はしないといけない。

そんなことを考えていると、またもや新しい挑戦者が現れた。

「おうおう！ 隣のB組の者だけだよお！」

ヴィランと戦ったって言うから、話聞こうと思つたんだがよお！

えらく調子づいちゃってんな！ おいつ！」

普通科の心操君も挑発的だが、新しく現れたB組の生徒も大胆不敵だった。

「あんまり吠えすぎでつと！ 本番で恥ずかしいことになつぞ！」

けれど声はでかいが、発言自体は割りとまともな部類だ。

色々教えてくれるので、心操君と同じで彼も良い人なのだろう。

「無視か！ てめえっ！」

しかし爆豪君は彼の話を聞かずに、無視して帰ろうとしていた。

それを切島君が慌てて止める。

「待てコラ爆豪！ どうしてくれんだ！」

おめえのせいで、ヘイト集まりまくってんじやねえか！」
すると彼は足を止めて、私たちの方を振り向いた。

「関係ねえよ」

「はあ!？」

「上にあがりや、関係ねえ！」

爆豪君は真っ直ぐこっちを見つめてくる。

けれど、その視線は友好的ではない。

中学の頃に毎朝やっていた戦闘訓練と同じで、絶対にぶつ飛ばすと言わんばかりに睨みつけている。

けれど、私は彼より強いので怖くはないものの、答えに少しだけ困った。

「ええとお」

爆豪君に堂々と挑戦された以上、私も何か返事をしたほうが良いのかと思った。

しかし彼はすぐに背を向けて、人混みをかき分けて遠ざかっていく。

「正々堂々！ 勝負！」

取りあえず彼の挑戦を受けて立つことを、私にしては大きな声で伝える。

一年A組も同じで、上を目指すのも一理ありだと考えているようだ。

何にせよこの発言から廊下の人集りは少しずつ数が減っていき、嵐は過ぎたようである。

私はマイペースに帰宅の準備をして、家に帰ったらいつもの自主トレーニングに勤むのだった。

時は流れて、やがて雄英体育祭当日になった。

頻繁ではないがたまに孤児院に連絡すると、子供たちからお姉ちゃん活躍を絶対録画するなど嬉しそうな報告を受ける。

まさか止めてくれとは言えないため、羞恥心に耐えつつにスルーさせてもらう。

それと今年は、特に注目されているようだ。

原因はビルボードチャートJ Pで、第二位のヒーローであるエンデヴァアの息子がいるからである。

さらに二代目オールマイトと呼ばれる私が参加しているのもあるが、そっちは気にせず空気のように扱ってくれると大変嬉しく思う。

マスコミの取材を受けるつもりは一切ないし、早く本物の平和の象徴の後継者がデビューしてくれることを心底願っていた。

何にせよ警備のために全国からプロヒーローを呼んだので、今回はヴィランの襲撃はないだろう。

大会のルールだが、公平な競技のためヒーローコスチュームの着用は不可だ。

選手は全員、学校指定のジャージを着用する。

急成長を想定してサイズを大きめにしているのは良いが、あまり激しい運動をすると破損するため気をつけないといけない。

そんなことを考えながら控室の椅子に座ってのんびりしていると、刻一刻と入場の時間が迫ってきた。

「緑谷」

みどりや
としろぎ

「轟君、何？」

私声が聞こえた方に視線を向けると、轟君が緑谷君に話しかけていた。

彼も自分と同じで、あまり口数が多い方ではない。

その珍しい光景に、自然と注目が集まる。

「客観的に見て、実力は俺のほうが上だと思う」

「えっ！……うん」

はつきりと実力不足を指摘されて戸惑ったものの、緑谷君の自己評価も轟君と同じ

だった。

体を壊さずに個性を使えるようになったとはいえ、持続時間は短いし集中力が途切れれば即解除される。

けれど轟とじろき君の氷は完全に制御されているし、大技を連発して息切れしない限りは、長時間戦い続けられる。

「けどお前、オールマイトと斥流に目をかけられてるだろ。」

別にそこ詮索するつもりはねえが、お前には勝つぞ」

何故そこで自分の名前が出てくるのかは置いておいて、この場の全員が息を呑む。

そして、まだ終わらずに轟君は私にも声をかけてくる。

「それと斥流せきりゆう。俺はお前にも勝ちたい」

「えっ!? あっ、うん。頑張つて?」

「おう、頑張る」

エンデヴァーとは縁があり、彼の家に行ったことはあった。

豪華な食事を一家団欒でいただいたり、戦闘訓練に付き合ったこともある。

だがそれでも頻繁に交流があるわけではないし、彼が何を考えているのか良くわからない。

(とは言ったけど、私は別に負けてもいい)

ヒーロー科に残れるぐらいの順位さえ取れば、勝ちを譲っても構わない。けれど普通科に落ちるラインは不明だ。

念のために、上位をキープしておくべきだろう。

あとは轟君の前で、それっぽくやーらーれーたーをすれば万事解決でハッピーエンドである。

私が頭の中で色々考えていると、普段とは違う様子を疑問に思った切島君きりしまが轟君に近づいて声をかけた。

「おいおいおい！ 急に喧嘩腰でどうした！ 直前に止めろって！」

確かに私との会話はともかく、緑谷君への態度は少し棘があったように思う。

しかし切島君きりしまが轟君を止めるために肩に置いた手は、乱雑に払われる。

「仲良しごっこじゃねえんだ。何だって良いだろ」

そのまま緑谷君に背を向けて去っていく。

そんな彼に、私の数少ない友人は緊張しながら喋りかける。

「轟君が、何を思って僕に勝つて言ってるのかは、わかんないけど」

顔を伏せながらも、緑谷君は自らの思いを口に出していく。

「そりゃ、キミのほうが上だよ。実力だって、大半の人に敵わないと思う。」

「客観的に見ても」

「緑谷も、そういうネガティブなこと言わないほうが——」

切島君が慌てて慰めるが、あまり効果はないようだ。

「でも、皆！ 他の科の人も！ 本気でトップを狙ってるんだ！

遅れをとるわけには！ いかないんだ！」

緑谷君が顔を上げると、何かに吹っ切れたような表情に変わっていた。

正直私は、程々の成績を残せれば良いかなと考えて参加している。

口には出していないし、皆も薄々気づいているだろうが若干肩身が狭い。

どうにも居た堪れなくなつたので、こつそり視線をそらした。

「僕も本気で取りに行く！」

「おう」

轟君は、そんな緑谷君に何かを感じたようだ。

相変わらず表情筋が仕事をしていないが、微かに熱のこもつた返事を口にするのだった。

障害物競走

いよいよ雄英体育祭が始まった。

プレゼントマイクが熱心に解説する中、私たちは堂々とした歩みで入場する。

何となく周りを見ると、一体どれだけ人が集まっているのかわからない程にごった返して、止むことのない歓声を浴びていると凄まじい熱気で体験する。

やがて雄英高校の一年生の全生徒が、競技場の中央に集まった。

規則正しく整列すると、正面の舞台の上に十八禁ヒーローのミッドナイトが立つ。

彼女は大きな声で呼びかけてくる。

「選手！ 宣誓！」

一部の人には好評ではあるが、何とも際どい格好だ。

私も抑制解除すると胸やお尻が少し窮屈だし、ヒーローコスチュームは高校生にもなつて魔法少女のコスプレ衣装だ。

それでもミッドナイト先生よりはマシだし、羞恥心を捨てる気もない。

そして雄英高校体育祭がジャーバージャ姿で良かったと、静かに息を吐く。

「選手代表！ 一年A組！ 斥流陰子！」

せきりゆういんこ

本来ならば実技試験トップの爆豪君が、代表になるはずだった。

しかし総合すれば、特例で編入した私のほうが高かった。

さらに先生たちで話し合った結果、彼は本番で何を口走るかかわからない。

ならばと、のんびりマイペースでも、爆豪君と比べれば言動が比較的まともな私が消去法で選ばれた。

まあそれはともかくとして、呼ばれたので前に出て舞台の階段を登る。

置かれているマイクの前で足を止めると、ミッドナイトが高さを調整してくれた。

小学生低学年の自分に合わせてくれたところで、深呼吸をしてから大きな声を出す。

「宣誓！ 私たちは日頃の練習の成果を存分に発揮し、諦めずに最後まで戦い抜くことを誓います！」

普通科やサポート科なども一緒に競技を行うのだ。

ヒーローには興味がないこともあって、無難にまとめた。

誰からも文句は出ないことに安堵の息を吐き、大人数に見られたり全国放送に流れるといくら私でも緊張はする。

いつまでもこの場に留まっていると恥ずかしくて顔が赤くなってしまうため、ややぎこちないが元の場所に歩いて戻るのだった。

選手宣誓のあとは、ミッドナイトが説明を行う。

第一種目は障害物競走で、一年生の合計十一クラスの全員参加だ。

競技場の周囲四キロを走り、コースアウトしなければ何をしても構わない。

流石は雄英高校だけあって、何とも自由な競技である。

なので私を含めた全員がスタートの位置につく。

続いて三つ点灯しているランプが、一つずつ順番に消えていく。

「スタート！」

ミッドナイトの合図を受けて、全選手が一斉に走り出した。

競技場からの唯一の出口は狭い通路なので、大人数では渋滞してしまう。

「落ちろ！」

私は地面を蹴り、空に向かって落ちた。

そのまま軌道を修正して、横は狭いが縦には広く取られている通路に飛び込んだ。

「おっと！ 斥流せきりゅう陰子いんこの重力加速だあ！」

「斥流せきりゅうは自由に空を飛べる。わざわざ地面を走る必要はない」

解説役は、プレゼントマイクと相澤先生のようにだ。

私が通路に飛び込んだときに、彼らの声が聞こえてきた。

しかし、そう簡単にはいかないらしい。

轟とどろき 君も、すぐに行動に移った。

「行かせねえ！」

個性を発動して、通路を丸ごと氷で封鎖した。

けれど私のほうが速く、間一髪で外に飛び出す。

「やはり、そう簡単には捕らえられねえか」

実はギリギリの回避であつたが、今は轟君に伝える余裕がない。

彼を追い越して第一走者になつた私は、落下の速度を上げすぎると圧縮された大気で

燃え始めるので、頃合いを見て解除する。

そして地面に危なげなく両足をつけて、いつものようにマイペースで走り出す。

「燃えるのは困る」

今はヴィラン襲撃のように非常時ではないし、全国放送で孤児院の家族も見ている。

衣服が破損することは避けたいし、抑制を解除するにしても一段階までにしておきた

かつた。

しばらくは普通に走りながら、何となく後ろを振り向く。

すると狭い通路を他の生徒が続々と抜けてきており、第一走者である私を目指して追

い上げてきている。

けれど、先程はかなり引き離したのだ。

簡単には追いつけない。

だが決して油断は禁物だと考えていると、再びプレゼントマイクの大音量が辺りに響き渡る。

「さあ！ いきなり障害物だあ！ まずは手始めえ！

第一関門！ ロボインフェルノオ！」

前方の広場には入学試験で登場した巨大ロボットが、所狭しとひしめいていた。今回は、倒しても別に点数が加算されるわけではない。

うかうかしていると、後続に追いつかれてしまう。

ここは無視して進むのが得策である。

周囲には私の他に誰も居らず、ターゲットは自分に集中していた。

簡単には通らせてくれそうになさそうだ。

「コインがあれば楽だった」

雄英体育祭は平等をきすため、コスチュームやサポートアイテムは持ち込めない。丸腰で何とかするしかなく、後続が追いつく前に何とかしたい。

悩んでいる時間はあまりなさそうなので、頭に思い浮かんだ作戦を実行に移す。

「仕方ない」

周囲に被害が出るので、できればあまり使いたくはなかった。

けれど石を拾って投げるよりはマシだと判断し、巨大ロボが集まっている広場の重力を倍増させる。

途端に敵の動きが鈍くなり、いくつかは転倒したまま起き上がれなくなった。

効果範囲内に入ると自分も影響を受けるため、自分が走る箇所だけを消しながら一直線に駆け抜ける。

そして私の個性は、視界から外れたり認識できなくなれば強制的に解除される。

自分が通り過ぎたあとの巨大ロボットは、再起動したり転倒から起き上がった。

今度は追いついてきた後続組を標的に、行動を開始する。

「一年A組、斥流！ 巨大ロボットの動きを封じて、悠々と通過あー！」

「重力操作は応用が利く個性だ。」

状況に適した使用ができるかは、経験と素質によるが」

私はヒーローになる気はなくても、訓練や経験はそれなりに積んできた。

このぐらいの危機で狼狽えることなく、ロボット地帯を殆ど一直線に走り抜けた。

「流石は次期ナンバーワンヒーローに、もっとも近い生徒だあー！」

私は足を止めずに走りながらプレゼントマイクと相澤先生の解説を聞いて、また変な噂が流れてると微妙な表情になる。

自分はビルボードチャートJ.Pに参加してないし、プロヒーローでもない。

それにマスコミの取材は断固拒否で積極的な活動もしない自分が、市民の支持を得られるとは思えない。

絶対にはいながらもデビューしても人気は出ないだろうから、ナンバーワンヒーローどころかランク外は確定だ。

私が心の中でツッコミを入れてると、ふと背後に気配を感じたので振り向く。

すると轟とん君が広範囲氷結攻撃を放ち、巨大ロボットたちをまとめて氷漬けにしていた。

「その個性、強すぎない!？」

「斥流が言っても説得力ねえぞー!」

轟君は私の声が聞こえたようで、ツッコミを入れながら凄く速さで駆けてくる。

小学校低学年の体格でも、プロのアスリート程のパワーは出せる。

しかし、個性持ちを相手にしたら勝てる気がしない。

「だったら、もう一度落ちる!」

私は再び跳躍と同時に個性を発動して、低空を移動したり地面に足をつけて走るのを繰り返す。

コースから離れすぎると失格になるし、服が燃えないように定期的に速度調整を行うのだ。

「第二関門は！ 落ちればアウト！ それが嫌なら這いずりな！ ザッ！ フォール！」

やがて第一走者である私の前に現れたのは、断崖絶壁の無数の島と、それを繋ぐ長いロープだった。

プレゼントマイクの解説を聞く限りでは、綱渡りで移動して、穴に落ちずに先に進めということだ。

ならば自分の個性と相性が良いので、何の問題もなかった。

「だが斥流！ 空を飛んで、あっさり第二関門を突破ああああ!!!」

「斥流にとつて、地上の障害の殆どは意味がないからな」

落とし穴を回避した私は、再び地上に降りて走り出した。

そしてしばらく進んでから、後続が気になったので、後ろを振り返る。

かなり差が開いているが、皆は諦めずにちゃんと付いてきているようだ。

「緑谷君、頑張ってる」

ある程度は制御できるようになった増強系の個性を使って、島から島へと跳躍していた。

ロープを這いずっている選手を追い越している。

ちなみにサポート科は自分で作ったアイテムなら持ち込めるらしく、ベイビーがどう

とか言いつつ、ひたすら目立って豪快に崖を飛び越えていた。

他の選手も続々と障害を越えているため、雄英体育祭に対する自分とは違う意気込みを感じる。

「さあ！ 早くも最終関門！ かくしてその実体はあ！ 一面地雷原！

地雷の位置はよく見ればわかるようになってるぜ！ 目と足酷使しろお！」

私はプレゼントマイクの解説を聞きながら、個性を発動して空に向かって落ちる。

「ちなみに地雷は競技用で威力は大したことねえが！

って！ やっぱり斥流には障害物の意味がねえ!!!」

地雷原の低空を滑るように落ちていき、通り抜けたらすぐに着地する。

これが最後らしいので、あとはゴールに向かってひた走るだけだ。

少しだけ後ろを振り向くと、緑谷君と轟君と爆豪君が殆ど団子になって私を追いかけてきていた。

「追いつかれる？」

スタート地点の競技場に通じるトンネルまで、あと少しだ。

けれど三人は足の引つ張り合いではなく、自分に勝つことを前提に動いている。

別に協力関係ではないが、互いに妨害し合ってもいない。

走りながら爆豪君が緑谷君と轟君に暴言を浴びせているものの、それでも争いには

なっていないかった。

「別に抜かれてもいいけど」

彼らの様子を確認した私は、目の前のゴールを再び視界に収める。

自分は全ての障害物を突破して、現状トップを独走している。

たとえ追い抜かれても、第二種目への参加権は手に入るだろう。

ヒーロー科から普通科に落とされると特例制度がなくなるので、それさえ回避できれば良い。

安全圏に入っているのは確実に、何も焦ることはない。

けれど今は、純粹に負けたくないと思ってしまった。

「変ー！ 身ー！」

抑制を一段階解除した私は急成長し、サイズ大きめでダボダボだったジャージが少しだけ引き締まる。

輝く粒子を放出しながら地に足をしっかりとつけて、最短距離を一直線に疾走する。

先程までは後続組が怒涛の追い上げで縮まっていた距離が、みるみる開いていく。

しかしまさか向上心や対抗心が、ここに来て表に出てくるとは思わなかった。

「皆に引く張られた？」

雄英体育祭に挑む人たちは、私と違って一生懸命だ。

彼らに影響を受けたのかも知れないと考えながら、暗い通路を抜けて勢い良くドーム型の競技場に飛び込む。

さらに速度を上げて、ゴールのラインを越えた。

「堂々の一位は、やはりこの少女オ！」

一年A組！ 斥流せきりゅう陰子いんこだああっ!!!」

ゴールラインを越えた私は、勢いが良すぎてなかなか止まれずに靴に少し負担をかけたしまった。

しかし大したダメージではないので、問題なしだ。

プレゼントマイクの解説と、溢れんばかりの歓声で迎えられる。

何にせよ突発的に芽生えた、負けたくないという思いは叶えられた。

第一種目を上位で突破できたので、普通科落ちを回避できて一安心である。

そして封印をかけ直し、元の小学生低学年の体格に戻った。

続いて飛び込んできた緑谷君、轟君、爆豪君に声をかける。

「お疲れ様」

「はあ！ はあ！ 追いつけなかったか！」

「速すぎだろ！ 斥流！」

「やっぱり！ 斥流さんは凄い！」

三者三様の答えを聞きながら、私は轟君をじっと見つめる。

「最初の凍結は危なかった。発動速度次第で、私も巻き込まれていた」

「そっ、そうか！」

ただし動きが大幅に制限される場所限定ではあるが、それは言わなくても良いだろう。

少しだけ嬉しそうな表情を浮かべる彼に、水を差す気はない。

なので私は言いたいことは口にしたので、次々とゴールしてくる生徒たちをのんびりと眺めていたのだった。

第二種目の準備

第一種目の障害物競走が終わり、一年A組は殆ど上位に入っていた。

普通科に編入する線引きは不明だが、取りあえず私は問題なしと見てよいだろう。

うちのクラスは個性的ではあるが、基本的に皆が良い人だ。

できれば全員揃って、次の学年に進みたいものである。

だがまずは、私自身が進学するのが最優先だ。

クラスメイトのことも気にかけるが、競技ではライバルとなる。

少なくとも雄英体育祭が終わるまでは、向こうも自分のことをそう扱うだろうし、なかなか難しそうであった。

そんなことを考えている間に、障害物競走に参加した一年生全員がゴールした。

すると十八禁ヒーローのミッドナイトが競技場におりてきて、大画面での結果発表表を行う。

「第一種目も、ようやく終わりねー!」

簡単にまとめると、私が一位で緑谷君が二位、続いて轟君が三位、爆豪君が四位だ。

あとは良く知らない人が混じってくるので、省略する。

だがやはりA組とB組のヒーロー科が、上位の殆どを独占していた。

「予選通過は上位四十三名、残念ながら落ちちやった人も安心なさい。

まだ見せ場は用意されてるわ」

舞台の上で堂々と喋るミッドナイトだが、コスチュームが少々過激だし途中で舌舐めずりするのはいかがかと思った。

「そして次からいよいよ本戦よ。ここからは取材陣も白熱してくるよ！ 気張りなさい！」

取りあえず本戦に出場すれば、ヒーロー科としては及第点だろう。

普通科に落ちることはないなら、第二種目は上位を目指す必要はない。

程々のところでリタイアしても良さそうだ。

やがて正面のモニターに、新しい情報が映し出される。

私やそれ以外の人も、疑問に思っただけ首を傾げていた。

「騎馬戦？」

騎馬戦は障害物競走と違って、何をやるのか良くわからない。

すると、すぐにミッドナイトが簡潔に説明してくれた。

参加者は二人から四人の騎馬を自由に作り、それ以外は大体普通の騎馬戦と同じルー

ルだ。

けれど違う点もあって、予選の順位に応じて各自にポイントが振り分けられる。例えば四十三位が百十ポイントで、一位上がることにより五ずつ点数が増えていく。

だが何故か、一位のみが一千万ポイントだ。

つまり私を倒せば、たとえ最下位だろうと一発逆転できる。

全員の視線が一斉に自分に集中した。

しかし普段のマイペースさを發揮し、緊張はせずに苦笑しつつ頬を軽くかいてしま
う。

「上位の奴ほど狙われちゃう！ 下剋上のサバイバルよ！」

説明しているミッドナイトは、とても楽しそうだ。

きつとSとかMとか、そういった趣味嗜好を持っているのだろう。

注目を集めた私は別に嬉しくないし、焦ってもいなかった。

どうやって乗り切ったものかと、足りない頭を捻って考えるだった。

一千万ポイントもの大量得点を手に入れた。

しかし結果的に、それを奪うために全員から狙われることになる。

そして第二種目の騎馬戦を行うには、二人から四人のチームを組まないといけない。

現時点ではトップだが集中攻撃を受けるのは確定なため、すんなり協力してくれるかはかなり怪しい。

どう考えても大勢で囲んで棒で叩いたほうが、安全に楽しんでポイントが入る。

私一人ならこの場の全員を返り討ちにできるけれど、予選の障害物競走と違ってここからは本戦だ。

果たしてワンサイドゲームを許してくれるかどうか、ルール変更も有り得そうである。

それに足切りラインを越えたので個人的には別に負けても良いが、相方と組む必要がある以上、勝ち残ることを前提に行動しなければいけない。

とにかくミッドナイトがチーム編成を行うようにと指示して、皆がそれぞれ慌ただしく動き出す。

けれど私は相変わらず、その場に留まったままだ。

ウンウン唸りながら考え込んでみると、予選を突破した心操人使君しんそうひとが心配そうに尋ねてくる。

「斥流さん、どうかしたのか？」

私は現状を整理する良い機会だと思い、声をかけてきた彼に正直に伝える。

「私のせいで、ルールが変更される可能性について考えてた」

「そつ、そうか。大変だな」

話を聞いた心操君は、若干引きつった表情を浮かべている。

けれどここで私は、各々に見せ場を用意しつつ騎馬戦を乗り切る作戦を思いついた。

「心操君。私と騎馬を組んで欲しい」

「えっ!? おつ、俺は構わないが、いいの?」

私は静かに頷いて肯定すると、一年A組のクラスメイトが待ったとばかりに横から口を出してくる。

「斥流さん! 私たちと組むのではないのですか!」

「八百万やおよろずさんたちは、別の人と組んで」

「何故ですの!」

自分と組むと、その他全員から狙われるのだ。

同じチームの人は苦労が絶えないし、怪我をする危険もあるだろう。

私は皆を危険に晒すつもりはなくても、距離を取るのが普通である。

けれど何故か、八百万やおよろずさんだけでなく、他のクラスメイトも若干怒りの表情を浮かべていた。

何か気に障るようなこと言ったかなと戸惑うが、あいにく心当たりがない。

だがとにかく私は、この場を誤魔化すために思いつきを口にする。

「ヒーローとは、常にピンチをぶち壊していくもの」

「その言葉は！ まさか!？」

「そう、オールマイトの言葉」

流石はヒーローを目指しているだけはある。

オールマイトの名前を出すと一年A組だけではなく、聞いていた全員の動きを止ま
た。

「今回は私が、皆の越えるべき壁になる」

「まさか私たちと組まなかったのは！ ヒーローとして成長を促すため!」

心操君しんそうを勧誘したのは偶然で、二人以上は不要である。

しかし正直に告げると、一年A組の皆を傷つけてしまう。

それに自分の発言は、別に間違っていない。

私とそれ以外の一年生には圧倒的な戦力差があり、現実の高い壁になっているのだ。

「わかりましたわ！ 私たちは、斥流さんに全力で挑戦させていただきます!」

「うん、楽しみにしてる」

焚きつけたのは八百万さんだけでない。一年A組の全員もだ。

さらに何故かB組まで飛び火したようで、皆は気合十分なようである。

けれど爆豪君や轟君のように、売り言葉に買い言葉ではない。

あくまでスポーツマンシップに則り、正々堂々と戦おうという雰囲気になってくれた。

なので、とにかく良しとするのだった。

騎馬戦

第二種目の騎馬戦の相方だが、普通科の心操しんそう人使君ひとじを指名した。

彼は良い人なので、快く受けてくれて良かった。

障害物競走は普通に走ってゴールすれば良いだけだったが、今回は集団戦で周りの全
てが敵で私を狙ってくる。

それに個人で戦うなら負けても構わないけれど、相方は勝利を望んでいる。

ならば返り討ちにするしかなく、やり過ぎると急遽ルール変更が行われそうだ。

何しろ年に一度のスカウトされる機会を、私がワンサイドゲームで潰すわけにはい
かないのである。

そこで目標は、初期の一千万ポイントと彼の分を持ったままで、最後まで逃げ切るこ
とだ。

心操しんそう君はヒーロー科に上がりたいし、私も今の特例制度を破棄したくはない。

足切りラインは抜けたと見ているので自分の心配はいらませんが、とにかく勝つための
作戦は既に考えてある。

あとは競技開始と同時に、実行に移すだけだ。

しかしここで、解説役の相澤先生あいざわから待ったがかかる。

「斥流せきりゅう。空中に留まるのは禁止な」

「何故!?!」

ちなみに私が考えた作戦は、競技終了まで空中に留まることだった。

そこなら他の選手の様子が良くわかるし、こちらのハチマキを奪う手段も大きく制限される。

相手の行動に対処しやすく、生存率も上がるのだ。

それに地上では私たちは関係なく、普通に騎馬戦が行われる。

きつと各選手の見せ場もあることだろう。

「今回の雄英体育祭で、一番注目されているのが斥流だ。」

他の選手を同じ目線で競技してこそ、大いに盛り上がる」

「うう〜!」

ようは観客やスカウトのニーズをガン無視するなである。

さらに私に挑戦しようと思気込んでいる選手たちも、同じ土俵に立つことさえできないければ、悔いを残してしまう。

相澤先生の言っていることもわからなくはない。

しかし、開始直前になって必勝の策を封じられたのは痛い。

「それと重力を操作して、相手を落馬させるのもな禁止な」

「はあ、……了解」

もしもの場合に考えてた第二の策まで、ついだとばかりに封じられてしまった。

けれど一千万ポイントや突然のルール変更は、別にそこまで理不尽には感じなかった。

何しろ私とそれ以外の生徒の実力差はとても大きく、この二つの作戦のどちらかを行えばほぼ完封できてしまうのだ。

そして雄英体育祭は生徒に活躍の場を用意し、ヒーロー事務所へのスカウトや適性試験が行われる重要なイベントである。

ワンサイドゲームで盛り上がり欠けたり、呆気なく勝負がついては審査にならない。

ならばここは、私が皆のために一肌脱ぐのも致し方なしだ。

そんなことを考えつつ、何故か動揺せずに落ち着いている心操人使君しんそうひとしに顔を向ける。

「ごめん。勝てるかどうか、わからない」

「でも、斥流さんは勝つ気なんだろう？」

「もちろん」

私も相方のために勝ちたいし、騎馬戦はわざと負けるつもりはない。

それに皆にも越えるべき壁になると発言した以上、情けない姿は見せられなかった。
「俺は斥流さんを信じるだけだ」

「ありがとう。心操君」

彼も勝利を諦めていない以上、私が敗北を受け入れるわけにはいかない。
呼吸を落ち着かせて気持ち切り替え、一段階だけ抑制を解除しておく。

「変身！」

声を出したほうが、個性の制御やイメージがしつかりするのだ。

一時的に成長して煌めく粒子を放出する私に変わり、力加減に失敗しないように軽く柔軟体操を行う。

すると隣で同じように体をほぐしている心操君が、おもむろに声をかけてくる。

「しかし、斥流せきりゅうさんが騎馬をやるんだな」

「私は重い」

私は見た目こそ小柄な女子だが、実際には百キロ以上ある。

超重力を完全に解除する気はないので、心操君が背負うのは無理だろう。

「わかつてはいるが、何か悪い」

「平気。それに心操君は軽い」

体力には自信があるので、彼を背負って競技場を走り回っても問題なしだ。

「そう言う問題じゃないんだが。……つと、そろそろ時間だな」

心操君の言ったように、チーム決めは終了になった。

マイクで拡張された審判役のミッドナイトの声が、周囲に響き渡る。

「それじゃ、いよいよ始めるわよ！」

続いてイレイザーヘッドとプレゼントマイクが解説を引き継ぎ、私たちは騎馬戦の準備を行うのだった。

観客のテンションも、天井知らずに高まっている。

私はそんな中でもものんびりマイペースに、よっこいしよと心操君を背負う。

「注目のチームイベ系！ 作戦タイムを経て！ フィールドに十三組の騎馬が並びだつたあー！」

「なかなか面白え組み合わせだな」

他のチームは皆、やる気十分なようだ。

向けられる視線から、こっちの一千万点を奪おうとしているのは間違いない。

「なるべく、負担がかからないように立ち回る。でも、あまり期待はしないで」

「全員に狙われてるんだ。仕方ないさ。」

それに俺も鍛えているし、心配無用だ」

心操君がどのぐらい耐えられるのかは不明だが、要救助者を担いでいるよりはマシだ。

いざという時には、彼の個性を頼りたい。

だが手の内がバレたら弱いタイプなため、自分のために切り札を使わせるのは申し訳ない。

なるべくなら、次の種目まで温存させてあげたかった。

そんなことを考えていると、プレゼントマイクの大声が競技会場に響き渡る。

「さあ！ 行くぜ！ 残虐バトルロイヤル！ カウントダウン！」

私は開始前に呼吸を整える。

十中八九で全ての選手が、心操君の額に巻かれている一千万点のハチマキを狙ってくるだろう。

「スタート！」

カウントがゼロになり、ミッドナイトが競技開始の合図を出した。

そして予想通り、選手全員が一斉に私たちを指して殺到してくる。

「ポイント一千万の争奪戦だあ！」

「斥流ちゃん！ いただくよー！」

全ての騎馬が、口々に叫びながら突進してくる。

だがこのぐらいいは、想定範囲内である。

「逃げの一手！」

好き放題に暴れて、自分以外のチームを叩きのめすわけにはいかない。

彼らにも見せ場を与えなければいけないし、最後まで生き残ってもらうのがベストである。

なので私は両足に力を込めて、地面を勢い良く蹴った。

彼らの頭上を軽々と飛び越え、さらに心操君に負担をかけないように重力を操作してゆつくりと着地する。

だがここで何故か、両足が地面に沈み始めた。

「これは！」

「地面が泥に!?!」

周囲を慌てて見回すと、一年B組の騎馬が一直線にこちらに走ってくる。

状況を見る限り、彼らの個性なのは間違いないさそうだ。

とにかく私は急ぎ脱出するために、自身の重力を逆転させて空を飛ぶ。

これは一時的な回避手段で、空中に留まるわけではない。

相澤先生は何も言わないので、きつとセーフである。

けれど人を背負ったままでは両手は使えないし、浮いていると踏ん張れない。

負担をかけずに空中を移動する以上は、どうしても動きが直線的になってしまう。

なのでその隙を狙い、じろうきよつか 耳郎響香さんがイヤホンを飛ばしてくる。

さらに緑谷君チームの常闇踏陰君も、チャンスと見てダークシヤドウを伸ばす。

ハチマキを奪おうとしているのは間違いなく、私は彼らの個性を狙ってピンポイントで加重をかける。

目的は相手の落馬ではなく、攻撃の軌道を変えることだ。

かなり危なかったが回避して地面に向けて降下する。

審判は何も言わないので、どうやらセーフ判定のようだ。

「このまま逃げるー！」

「おう！ わかったー！」

着地の直前に重力を逆転させて負荷を減らし、心操君の心身を労るのを忘れない。

そして先程のB組メンバーから遠ざかったからか、今度は足元は泥にならなかった。

けれど、まだ騎馬戦は始まったばかりだ。

決して油断はできない。

ちなみに戦況を見ると、最初は自分に殺到していたが、漁夫の利狙いでハチマキを取

り合っているチームもあるようだ。

色々な戦略があるようで、どうにも一筋縄ではいきそうにない。

「さあつ！ まだ開始から二分と経ってねえが！ 早くも、混戦！ 混戦ーっ！

一千万を狙わず！ 二位から四位狙いってのも悪くねえ！」

プレゼントマイクが解説している間にもお構いなしに、私たちは複数の騎馬に囲まれていた。

やはり一千万ポイントは魅力的らしく、大勢が群がってくるのだ。

峰田君^{みねだ}の粘着玉の軌道を重力操作で避けていると、今度は蛙吹^{あすい}さんが別の角度から舌を伸ばしてきた。

「心操君^{しんそう}！」

「問題ない！」

心操君が咄嗟に上半身を捻って回避する。

しかし、相手の攻撃が一回で済むわけがない。

他のグループも続々と集まってきているし、この場に留まるのは不味い。

ならばと私は再び両足に力を入れて跳躍し、長距離移動を試みる。

「爆豪君^{ばくごう}！」

だが私たちが空中に飛び出した瞬間、待っていましたとばかりに爆発の反動を利用して爆豪君が突っ込んできた。

「斥流！ ハチマキをいただくぜ！」

実際に付けているのは心操君なのだが、一千万は私のイメージが強いようだ。

だがそれはそれとして、彼に渡す予定はない。

お引取り願いたいのが、私との戦闘経験は豊富である。

死角から接近されたことで、気づいたときには迎撃も回避も困難になってしまう。

「……ならばー！」

自身の重力を操作することで、強引に姿勢を変える。

そして爆豪くんをめがけて、牽制の蹴りを放つ。

「くそがつー！」

しかし彼も、ただではやられない。

至近距離での爆破によって視界を塞ぐだけでなく、高速の蹴りによる衝撃波を軽減

し、緊急回避を行った。

ちなみに選手を攻撃する目的での個性の使用は、今回の競技ではルール違反だ。

けれど双方が火力は抑えているし、こっちも爆風を受けて距離が遠のいた。

何の問題もないのだ。

おかげで右足には何の異常もなく、服も破れていない。

今回は引き分けということで、両者は離れた地面に向かって落ちて行く。

「あぁー！ 騎馬から離れたぞ！ いいのか！ アレっ！」

「テクニカルだからOKよ！ 地面についてたら駄目だったけど！」

解説が抗議したが、審判が許可を出した。

流石は雄英体育祭だ。色んな意味で普通の騎馬戦とは違っている。

だが地上との距離が近くなって重力操作で落下の衝撃を緩和しようとしたとき、今度は緑谷君チームがジェットパックを使って急速接近してきた。

「(ハハ)しかない！」

手を伸ばしてきた彼らを叩き落とすことは簡単だ。

しかし、競技のルールに引っかかったら困る。

「心操君しんそう！ しっかり掴まって！」

「わかった！」

こちらを掴む手に力が入ったことを確認したあと、急いで個性を発動する。

先程と同じ要領で自身の重力を操り、強引に軌道を変更したのだ。

「重力加速！ 二倍！」

ただし、普通に重力を制御しただけでは避けきれない。

なので二倍の負荷をかける必要があったのだが、今は心操君しんそうを背負っているのだ。

加速は短時間に留め、緑谷君たちから逃れたらすぐに解除する。

「くっ！ 追いつけない！」

何とか緑谷君たちのチームを振り切った私は、地上に降り立つ前に重力を逆転させて衝撃を緩和する。

危機一髪だったが、両足を地面につけて一息つく。

そして、思わぬ負担をかけてしまった心操君しんそうに声をかける。

「大丈夫？」

「だっ、大丈夫だ！ 問題ない！」

直接顔を見上げてないので表情はわからないが、すぐに返事を聞けたので問題はないと判断した。

しかし、またもや他の騎馬が集まってくる。

私は彼らから逃げるために、競技場を駆け回る。

一段階の制限解除をしているとはいえ、普通科の生徒を担いでいるので速度はあまり出せない。

時間が経過するごとに、解説だけでなく観客や報道陣も熱狂が高まっていく。

中心人物は、言わずと知れた私と心操君だ。

そして他の選手の攻めも苛烈になってきたことから、決着は近そうだと本能的に察す

るのだった。

騎馬戦の決着

競技場を逃げ回りながら周囲を観察するとB組がA組を挑発し、互いの点数の奪い合いが勃発していた。

私としてはタゲが変わって逃げやすくなるので良いが、そう上手くいくはずもない。

今は目の前に轟君チームが立ち塞がり、さらに残り時間が半分を切ったとプレゼントマイクが宣言する。

「いよいよ騎馬戦は後半戦に突入！ 予想だにしないB組優勢のなかあ！

果たして、一千万ポイントは！ 誰のものになるのかあ！」

正面に立つ轟君の表情を見る限り、本気で取りに来ていた。

重力制御でバランスを崩して落馬させたり、空中に逃れて時間切れまで下りてこないのは禁止されている。

ならばやはり、正面から迎え撃つのが得策だ。

こうすれば私以外の生徒がスカウトの目に留まる可能性が高まるし、彼らも絶好の機会を逃したくないだろう。

「そろそろ、取るぞー！」

堂々と宣言する轟君である。

そして騎馬役のメンバーも、一步も引く気はなさそうだ。

私も相手の心操君を勝たせてあげたいし、覚悟を決めて呼吸を整えて心を落ち着かせる。

(空には逃げられないし、私から攻撃するのも駄目)

私だけが縛りプレイを強要されている。

しかし現実には実力差があるので、良い勝負を演出するには手加減も致し方なしだ。

「斥流さん！ 残り時間が半分を切った！」

「了解！ このまま逃げ切る！」

心操君しんそうの言葉を聞いた私は、轟君たちの騎馬を回れ右して走り出す。

一千万ポイントのハチマキは魅力的で常に狙われるし、誰が立ち塞がったとしてもやることは変わらない。

「しっかりと防げよお！ 無差別放電！ 百三十万ボルトオツ!!!」

だがここで轟君の騎馬をしている上鳴電気君かみなりでんきが、大声で叫んだ。

「不味い！」

私は咄嗟に、自身の重力を逆転させる。

同時に上鳴電気君の放電が、周囲一帯に広がった。

地面に足をつけているチームが無差別に痺れ、動きが止まる。

自分は咄嗟に体を浮かせて回避したので無事だが、まともに受ければ少しビリっとしただろう。

ちなみに背負っている心操君は酷いことになっただろうけど、何とかだったので良いである。

「残り六分弱！ あとには引かねえ！ 悪いが我慢しろー！」

大勢の足が止まったのを見計らった轟君が広範囲攻撃を行い、周囲のチームをまとめて氷漬けにした。

一対一がお望みなのか、邪魔が入るのを嫌ったのかはわからない。

だがついでに、他のチームのハチマキをちやつかり奪っていく。

「関係ない！ 逃げる！」

あまり速度を出すと、背負っている心操君に負担がかかる。

けれどモタモタしては、飯田君を振り切れない。

跳躍して距離を稼ぐことも考えたが、轟君たちは当然予想しているだろう。

他チームの動きを封じて安全を確保した今、私の一挙手一投足に集中しているのがわかった。

(空中で無理な軌道修正はできない。氷漬けにされたら困る)

今は心操君を背負っているので、あまり負荷をかけるわけにはいかない。

なので彼らに追いつかれないよう、懸命に逃げ続ける。

たまに履いている靴を蹴り飛ばし、ゲゲゲの妖怪のように自在に操って牽制して時間を稼ぐ。

八百万やおよろずさんが創造した盾で弾かれても、一瞬でも動きを止められれば御の字だ。

「ああーつと！ 斥流チーム！ もうあとがなーい！」

けれどプレゼントマイクの解説通りに、とうとう競技場の端まで追い詰められてしま

う。

しかも周りは、分厚い氷の壁で囲まれている。

私なら問題なく飛び越えられるが、その隙に攻撃されるだろう。

「どうしたものか」

蹴り壊せば通れるが、やはり隙ができてしまう。

それに外に出れば、また多くのチームをやり合わなくてはいけない。

一対一のほうが気楽といえれば気楽であり、私が迷っているうちに飯田君が仲間にか何かを喋りかけた。

「皆！ 残り一分弱！ このあと俺は使えなくなる！ 頼んだぞ！」

「飯田！」

飯田君の発言は、轟君も予想外だったようで驚いていた。何にせよ、いよいよ仕掛けてくるらしい。

「しつかり掴まってる！ 取れよ！ 轟君！」

彼のマフラーから出る炎が、青色に変化する。

外から見るだけで、明らかに個性の出力が上がった。

「トルクオーバー！ レジプロバースト！」

今までよりも遥かに速く突っ込んできたが、私にはしつかり見えている。

だが無理に回避した場合、心操君の負担がとんでもないことになってしまう。

ならば、急ぎ別に手を打たないといけない。

私は咄嗟に、すぐ近くの氷の壁を蹴り碎いた。

「借りるよ！」

当然のように破壊され、無数の氷の欠片が辺りに散らばった。

私はそれを重力操作で一つにまとめあげ、真四角の壁に姿を変える。

「これは！ 氷の壁だど!？」

目の前に勢い良く突き立てることで、私は飯田君たちから姿を隠す。

たとえ轟君が氷をすぐに消しても、逃げる時間を稼ぐことはできる。

「読まれていたかつ！ だが！ まだだつ！」

結局大した足止めにならずに、氷の壁を迂回して轟君チームが突っ込んでくる。

けれどほんの少しだけ動きを止めている間に、距離を稼ぐことができた。

おかげで追いつかれる寸前に、レシプロバーストの効果時間が切れたようだ。

「こっつ、これでも駄目か！」

「駄目ではない。惜しかった」

黒い煙を出して足が止まった飯田君の健闘を、私は顔だけ向けて軽快に走りながら素直に称える。

実際にあと少しで追いつかれていたし、ハチマキに触りかけていた。

「そろそろ時間だあ！ カウンtdown！ スタート！」

やがてプレゼントマイクが、騎馬戦の終了時間を告げる。

だがその瞬間に氷の壁を突き破り、爆豪君と緑谷君のチームが乱入してきた。

一瞬そちらに注意が向き、轟君たちも諦めずにやる気十分なので、私は再び身構える。

しかし、無慈悲にそこで時間切れとなった。

「タイムアップ！ 第二種目！ 騎馬戦終了！」

競技が終了し、爆豪君は肩透かしを食ったように地面に落下する。

緑谷君も必死な表情で乱入してきたのに、無慈悲な時間切れで呆然としていた。

「斥流さん、地面におろしてくれ」

「うん」

騎馬戦は終わったので、もう心操君を背負っている意味はない。

私は言われるままに彼を下ろしたあと、いつものように超重力をかけ直してロリ体型に戻った。

試合中は彼の表情を気にする余裕はなかったが、今は真つ青な顔をしていた。

「ええと、大丈夫？」

「すまん。……無理そうだ」

外傷はないがとても苦しそうで、両手で口元を手で押さえている。

それを見た私はすぐに察し、慌てて八百万さんやおよろずに向けて叫んだ。

「八百万さん！ エチケツト袋を出して！」

「えっ!? あつ、はい！」

八百万さんは最初は私の顔を見て、次に隣の心操君に視線を向けてギョツとした。けれど、おかげですぐにエチケツト袋を創造してくれた。

「できましたわ！」

「ありがとう！」

取りに行く時間が惜しいので、重力操作で手元に引き寄せる。

心操君に手渡すと、お礼を言ったり自分で使う余裕もないらしい。

私はすぐに口の下で袋を広げた。

「心操君。無理をさせて、ごめん」

「きつ、気にしないでくれ！ 斥流さんのせいじゃ！ うっぷー！ おろろろっ!!!」

結果だけを見れば、一千万ポイントを守りきった堂々の一位である。

けれど周囲の視線は嫉妬や妬みなどではなく、心操君への憐れみが大多数だった。

しかし手加減したとはいえ、普通科の生徒がここまで付いてこれるのは素直に凄い。

後半は流石に酔ってしまっただが、試合終了まで脱落せずに耐え抜いたのだ。

彼の気合と根性は、大したものである。

やがて少しだけ落ち着いたようなので、心操君をリカバリーガールの元に連れて行く

のだった。

緑谷出久 v s 心操人使、追加で斥流陰子

一千万ポイントを所持したまま騎馬戦を勝ち抜いた私は、上位十六名に選ばれて第三種目に進んだ。

一位は当然私だが、二位は轟君、三位は爆豪君、四位は緑谷君といった各チームが順次選ばれる仕組みである。

ちなみに心操君の三半規管が壊滅的なダメージを受けて嘔吐した以外は、他の人たちは大きな怪我也なかつたのは良いことだろう。

このあとは一時間の昼休憩を挟んで、雄英体育祭は午後の部に続く。

私がいつもの食堂にいくと、非常に混雑していたが食事をするだけなら特に問題はなかつた。

なお、午後は応援合戦のイベントがあると、みねだみのる峰田実君が言っていた。

何処に需要があるかはわからないがやおよろず八百万さんに衣装を提供してもらい、チアガールの真似事をしてみる。

意外と好評だったが、少し悲しい。

ロリコンが多いのかなと思いはしたものの、気にせず第三種目へと進む。

次は十六名からなるトーナメント戦で、くじ引きによって組み合わせが決められていく。

私は第五試合に、芦戸三奈あしどみなさんと戦うことになった。

しばらく正面モニターを眺めていたが、客席に心操君しんそうが見つけたので呑気に近づいていく。

様子を見る限り、昼休憩を経てすっかり体調が回復したようだ。

けれど念のために、一声かけておく。

「心操君、大丈夫？」

「ああ、もう問題ない。心配をかけたな」

「そう、良かった」

彼をおぶって第二種目の騎馬戦を戦い抜いたのだ。

負担をかけすぎたせいで第三種目に参加できなかつたらどうしようと、内心では少し不安だった。

けれど外から見ても問題はないようで、ホッと息を吐いた。

そのあとのことだが、選手たちが各々の対戦相手の情報を調べつつ、交流を持ったり

と色々する。

さらに、レクリエーションの借り物競争を行っていた。

私も参加して普通に走ってゴールしたので、特筆すべきことは別にない。

それよりもヒーローのセメントスが即席の試合会場を作り終えた。

いよいよ第一試合が始まるのだ。

すっかりおなじみになった解説役のプレゼントマイクが席について、大声を張り上げる。

「オーディエンスども！ 待ちに待った最終種目が、ついに始まるぜえー！」

彼の告知に合わせるように、緑谷君と心操君が両側の通路から出て舞台上上がる。

「ルールは簡単！ 相手を場外に落とすか！ 行動不能にする！」

あとは、まいったとか言わせても勝ちの、ガチンコだあ！」

何とも単純明快でわかりやすいルールだ。

リカバリーガールが待機しているので、怪我をさせてもOKらしい。

しかしヒーローはヴィランを捕まえるのが役目なため、審判から見て命を奪いかねない行為はストップがかかる。

私は一年A組の選手が集まっている見学席から、のんびり様子を見ていた。

すると心操君が試合の前に、緑谷君に向けて何かを語りかける。

「まいった、か。これは心の強さを問われる戦い

強く思う将来があるなら、なりふり構ってちや駄目なんだ」

私は耳が良いので、集中すれば普通に聞こえる。

そして彼の個性を考えれば、戦いはもう始まっていると言っても過言ではなかった。

やがてプレゼントマイクが試合の開始を告げて、緑谷君はすぐに仕掛けずに様子見の構えを取る。

慎重なのは良いが、心操君にとってはそれは悪手だと思った。

「斥流^{せきりゅう}さんは、雄英高校を襲撃したヴィランを倒したらしいけど。キミはどうなんだ？

たった一人の少女に守られておいて、ヒーロー科の生徒として恥ずかしくないのか？」

「……っ！ 僕だつて！ 斥流さん——」

私が無なのかが気になるけれど、緑谷君に喋れたのはそこまでだった。

心操君の個性の発動条件を満たしたことで、彼はその場から一步も動けずに棒立ちになる。

「俺の勝ちだ！」

心操君の勝利を確信した眩きのあとに、プレゼントマイクの解説が続く。

「緑谷！ 開始早々！ 完全停止！」

心操君の個性は洗脳で、一般的なヒーローのように見た目が派手で戦闘向きなものは違う。

けれど、とても強力だ。

何しろ彼の発言に答えて効果が発動すれば、命令されるまでは棒立ちになってしま
う。

つまり現時点で、心操君の勝利は確定したと言っても過言ではない。

緑谷君は指一本動かさなくなり、一年A組の皆や競技場に集まった観客も戸惑っ
ている。

プレゼントマイクの適当な解説には、お前本当に教師かとツツコみを入れたくなる。

しかし彼のおかげで、洗脳の個性や弱点がバレずに済んで良かった。

「お前は、恵まれていいよな。みどりやいずく 緑谷出久」

もはや勝ちが決まったからか、心操君は余裕の態度だ。

そして棒立ちの緑谷君に、続けて命令を出す。

「振り向いて、そのまま場外まで歩いて行け」

命令を受けた緑谷君は、その通りの行動を取る。

見学席に集まっている一年A組の皆は、とても混乱しているようだ。

特に麗日うららかにさんと飯田君いいいだは、仲が良かったからか激しく動揺している。

「デク君！ どうして！」

「このまま場外に出たら！ 試合に負けてしまうぞ！」

私も試合の様子を見ていて、質問答えて良いものかどうか迷った。

だが彼らには事実を教えることに決め、おもむろに口を開く。

「心操君の個性は洗脳。今の緑谷君は、彼に操られている」

「そつ、そうなの？ 斥流ちゃん」

うららかに麗日さんの問いかけに、私は静かに頷く。

「斥流君！ 何故そのことを、緑谷に教えてあげなかったんだ！」

「教えたら、公平じゃなくなる」

飯田君の発言には、若干の苛立ちが込められていた。

けれど私は何処吹く風で、素直な気持ちを言葉にする。

「私は緑谷君と親しいけど、心操君も応援してる」

第二種目では心操君と一緒に戦ったし、緑谷君も数少ない友人だ。

両方嫌いではないので、片方を最優先しないために何も情報を教えなかった。

私の発言を受けて、飯田君と麗日さんは黙りこむ。

他の一年A組の生徒も、こつちを見たまま口をつぐんでいる。

「それにヒーローとは、常にピンチをぶち壊していくもの」

今の言葉を聞いた周りの皆は、何も語らない。

しかし真面目な表情に変わり、試合の成り行きを見守っている。

私も緑谷君と心操君がどうなるかが気になるので、そつちに視線を向けた。

彼がかけられた洗脳を解けるかはわからないが、決着はすぐにつくだろう。

「わかんないだろうけど、こんな個性でも夢見ちゃうんだよ」

試合中の心操君が、場外に向かって歩いて行く緑谷君に向けて話しかけていた。

「少なくとも斥流さんは、俺がヒーローになれると本気で信じてくれてるんだ」

確かに入学試験で、そのような発言をした覚えはある。

しかし自分は彼にとって、そこまで大きな存在だったのかと驚く。

聞こえてしまったのは仕方無いが、何だか無性に恥ずかしくなる。

(このことは黙っておこう)

心操君も、誰かに聞かせたいわけではないだろう。ここは、何も知らないフリをしたほうが良さそうだ。

やがて緑谷君は、試合場の端まで追い詰められる。

誰もがこのまま決着かと思つたが、何故か操られて自由が利かないはずの右手が微かに動いた。

「緑谷君！ 駄目！」

いつものんびりしている私にしては珍しく、慌てて立ち上がる。

そして真剣な表情で大声で叫ぶと、周りの人たちの視線が一斉に集中した。

しかし、今は気にしている余裕はない。

「その力は！ 今の貴方では、制御できない！」

自分の声は今の緑谷君に聞こえていないだろう。それでも、叫ばずにはいられなかった。

常人よりも優れた五感と今まで積み重ねてきた経験により、彼が個性を発動させようとしていることを感じ取る。

だがそれは今まで緑谷君が見せたモノではなく、明らかに異質だった。

増強系の個性の扱いによく慣れてきたのに、急に新しい力を使いこなせるわけがない。

「これはどうしたことかあ！」

突風が巻き起こっただけでなく！ 緑谷の右手から黒い鞭が現れたあ！」

結果は、プレゼントマイクの解説の通りだった。

彼は指を弾いて突風を起こして洗脳を解いたのは良いが、直後に右手から無数の鞭が現れたのだ。

制御は全くできておらず、辺り構わず振るわれて周囲を破壊し始める。

どう見ても暴走しているのが、目に見えていた。

「世話が焼ける！」

幸い、まだ試合中止や失格の声は出ていない。

けれど放置して良い問題ではなく、このまま暴走しつぱなしでは被害が広がる一方だ。

対戦相手の心操君しんそうだけでなく、使用者である緑谷君も大怪我を負う可能性もあった。

「変ー！ 身ー！」

予想もしていなかった危機的状况に対して、私は一段階だけ抑制を制解した。

そして勢いよく跳躍し、緑谷君に向かって高速で落下する。

途中で黒い鞭が数本飛来して、中には心操君を狙っていたものもあった。

なので全てを落ちながら弾き飛ばし、すぐに緑谷君の目の前に着地する。

衝撃で試合上に足先がめり込んでしまったが、服が燃えなかつたので私にとっては些

細な問題だ。

「斥流さん！ どうして!？」

くっ！ 駄目だ！ につ、逃げて!？」

緑谷君は何とか抑え込もうとしているようだが、状況は芳しくはない。

なので彼を安心させるために、オールマイトの決め台詞をいつものように堂々と断つてのける。

「もう大丈夫！ 何故なら！ 私が来た！」

すると焦っていた緑谷君は、ほんの少しだが落ち着きを取り戻す。

取りあえずこつちに飛んできた鞭は弾いているが、いつまでもこうしているわけにはいかない。

「とにかく早く、個性を消して」

「それが！ さつきから、消そうとしてるんだけどー」

どうやら緑谷君の個性は完全に暴走して、制御不可能のようだ。

ならばと、発想を変えて彼に尋ねる。

「緑谷君は個性を使う前に、何をしようとしたの？」

急には答えられないのか、少しだけ間があった。

黒い鞭の一本が心操君を狙っていたので、瓦礫を飛ばして軌道を変えておく。

「試合に勝つことに、必死だった！」

洗脳を解いて、心操君しんそうを場外に出そうと！

私は緑谷君の発言から、個性の発動条件を推測する。

洗脳を解くために自らに扱える限界以上に、引き出したのは間違いない。その証拠に、指が折れていた。

(でも、彼の個性は増強系だったはず)

心操君を場外に出すにせよ、肉体を強化して押し出せばいい。

(近寄るのは危険だと判断した?)

緑谷君にとつては、心操君は全く未知の個性を持っている。

発動条件を完全に絞り込めていないとすれば、まずは安全のために相手の身動きを封じるか、近づかずに何とかしようとするはずだ。

あくまでも私の予想だが、取りあえずは考えはまとまった。

「緑谷君！ 今は止めようとは考えないで！」

黒い鞭に、別の命令を与えるの！」

緑谷君からの返事はないが、多分聞いてくれているはずだ。

審判には止められていないが時間の問題だろう。

早めになんとかしたいとこだ。

「鞭を使って私を捕らえて！ 今はそれだけを考えるの！」

「えっ!? わっ、わかった！ 斥流さん！ ごめん！」

試合場を壊すほどの鞭でも、当たったところで私は痛くも痒くもない。

ウニヨウニヨ動く黒い触手つぼいものが、緑谷君の命令に従って私をめぐめて殺到する。

「さあ、来い！」

暴走している無数の鞭を何とか操ろうとしているからか、動きが全体的にぎこちない。

まだ目覚めたばかりの個性なものもあるだろうが、余裕を持って避けられる。

そうしているうちに、気づけば少しずつ本数が減っていった。

けれど、逆に速度と精密さは上がっていく。

(もうコツを掴み始めた？ ……やはり天才か)

だが、緑谷君の健闘もそこまでだった。

やがて汗だくで息も絶え絶えになり、気絶はしなかったが試合場で倒れてしまう。

それと同時に、黒い鞭も完全に消失する。

「余計なお世話をごめん」

「そつ、そんなことないよ。ありがとう。斥流さん」

倒れた緑谷君の前にしゃがみ込むと、疲れ切った声でお礼を言われた。

彼はもはや、一步も動けそうにない。

しかし審判が止めていないので、一応試合はまだ続いているようだ。

私は立ち上がり、心操君しんそうに振り向く。

「心操君、どうする?」

「本来なら、黒い鞭で俺は負けていた。

だから今回は、緑谷の勝ちでいいさ」

心操君は苦笑気味に眩き、自分の負けを認めた。

確かに緑谷君の鞭を弾かなければ、その時点で戦闘不能になっていた。

私としてどっちが勝っても別に良いので、揉めなくて良かったとホッと息を吐く。

「心操君! 降参により、緑谷君! 二回戦進出!」

審判も異議はないのか、緑谷君の勝利を宣言する。

客席からも大歓声が聞こえてきて、取りあえず丸く収まったようだ。

「試合を引つ掻き回しちゃった」

「気にするな。斥流さんは、助けてくれたんだ。ありがとう」

咄嗟の判断で飛び込んだことを感謝されて、何だか恥ずかしい。

けれど納得してるなら良いので、どう致しましてと返しておく。

「緑谷君は、医務室まで歩ける?」

「ちよつと、無理かも」

確かに倒れたまま起き上がれていない。

指も折れているし、疲労困憊のようだ。

ならばここは、数少ない友人として肩を貸すべきだろう。

「仕方ない。私が——」

「俺が緑谷を医務室に運ぶよ」

私が名乗り出ようとすると、心操君しんそうが引き受けてくれるらしい。

緑谷君は、少しだけ驚いていた。

けれど医務室に行く前に、あることを思い出した私はコホンと咳払いをする。

そして、真面目な顔で彼に告げる。

「心操君しんそう。キミはヒーローになれる。」

今日、試合を見ている人の多くが、キミに可能性を感じた」

「ははっ、そいつはありがたいな」

彼の個性が強力でヒーロー活動に役立つと、そんな話をしている人たちの声が聞こえてくる。

なので、そのことを心操君に伝えた。

彼は少しだけだが、顔をほころばせていた。

「最終種目！ 真っ先に二回戦に進出したのは！ A組！ 緑谷出久みどりやいずくう！」

プレゼントマイクの宣言のあとに、再び大歓声が両者に向けられる。

さらには同じ普通科の仲間にあかく迎えられ、心操君の精神的な負担が軽くなった。彼なら緑谷君を任せて問題ないだろう。

私は行きと違って、普通に通路を通り自分の席に戻ることにした。

だがその前に、審判役のミッドナイトに呼び止められて注意される。

もし次に何かやるようなら、その前に一声かけるようにとのことだ。

止める気はないのかと疑問に思ったが、絶対に駄目と言われたりお説教を受けるよりはマシだし、素直に頷いておくのだった。

エンデヴァーと轟君の関係

一回戦は色々あって、緑谷君の勝利になった。

私も審判に注意された以外は、特にこれといったペナルティはなかった。

いくら自由な校風が売りな雄英高校だとしても、私に対する信頼度が高すぎる。

深く考えずに勢いで飛び出した自分が悪いのは明らかだし、ここは寛大な措置に感謝しておく。

自分は基本的にマイペースなので、確約はできないのだ。

それはともかく、負傷した緑谷君は心操君しんそうが医務室に連れて行ってくれた。

私は一年A組の見学席に戻るために、ドーム型の競技場内の通路を歩いていた。

すると途中でナンバーツーヒーローであるエンデヴァーと、ぼったり遭遇する。

「エンデヴァー。こんにちは」

「おう、斥流か」

彼とは何度か会ったことはあるし、昔は全力で挑んだことがある。

それでも別に親しくはなく、ただの顔見知り話すことは何もない。

向こうもあまり多くは語らない人なので、私は簡単な挨拶だけして横を通り抜けよう

とする。

「斥流陰子。少しいいか」
せきりゅういんこ

けれど目の前の彼が、突然呼び止めてきた。

足を止めて厳つい顔を見上げると、何故か腕組をして燃える顎髭を弄っていた。

「焦凍は、雄英高校で上手くやっているだろうか」
しやうとう

「轟君は口数は少ないけど、クラスメイトと上手く付き合えてる」

ただし轟君も自分のことは全然話さないの、人付き合いは苦手なのかも知れない。

それでもクラスの雰囲気は決して悪くはなかった。

「ふっ、焦凍は俺の息子。」
しやうとう

そして、いずれはオールマイトを越えるヒーローになる。心配無用だったか」

結局何が言いたいのかわからない私は、答えに困って静観する。

だが強面の顔を崩さないエンデヴァーであるが、今はただ嬉しそうに見えた。

「ああ、それと、また家で食事でもどうだ」

私は全国ニュースに出てから、エンデヴァーの実家に招待されたことがある。

彼の家族とも幼い頃に顔合わせは済んでいるが、あまり頻繁ではない。

強く印象に残っているのは、料理は美味しかったが食卓の空気が重かったことだ。

冬美さんが私に声をかけて、それをネタにして話題を広げていた。

自分はあまり喋るほうではないし会話が苦手なのに、何故かエンデヴァー家での口数が多いように思えるほどだ。

冷れいさんも別居中ではあるが食事は一緒に取るため、見た目は幼女の私に世話を焼いたり色々話しかけたりもした。

昔はあんなことがあったので、轟家と自分の関係は結構複雑なのだ。

そんなことを思い出しながら、目の前のナンバーツーヒーローに質問する。

「それで、家族関係の修復は？」

「……まだだ」

前々から忠告はしていたが、家族関係が相変わらずよろしくないのは如何なものかだ。

「ヒーローは、いつ死んでもおかしくない。

家族の幸せを願っているなら、最後には笑ってお別れできるように、家では良い父親でいるべき」

「返す言葉もない」

気づけば何故か、エンデヴァーの家庭環境に対して話をしていた。

向こうは私が相手だと比較的話しやすいようだが、こっちは別に人生相談に乗る気はないのだ。

(轟燈矢君と話したのが、最初だっけ)

ずっと昔に、重力操作で長距離移動の訓練をしていた。

たまたま人気のない場所で休もうと山中に降下したら、轟家の長男である燈矢君と出会ったのだ。

彼が言うには、父親に個性を見せる約束をしたが、残念ながら時間になっても来てくれなかったらしい。

その頃の私は思いつきで行動し、彼の実家にお邪魔させてもらった。

そこで壮絶な家庭環境を目の当たりにして、このままだと不味いと本能的に理解したのだ。

何しろ燈矢君の父親は児童虐待を繰り返してるし、母親は精神を患って入院一歩手前である。

当然ながら家族関係は修復不可能なほどにズタボロで、キンキンに冷え切っていた。

なので、子供の私は足りない頭で一生懸命考えた。

そしてエンデヴァーに決闘を挑むことを思いつき、もし自分が勝ったら虐待を止めて家族と仲良くするようにと主張する。

当たり前だが全く聞く耳を持たずに、馬鹿にされる有様であった。

けれど私は諦めずに、多少強引にでもエンデヴァーに戦いを挑む。

だがその頃はまだ弱かったので、全解放状態でも普通に負けた。

諦めずに何度挑戦しても、そのたびにボコボコにされた。

それでも自分がここで折れたら、轟家はそれこそ完全に終わってしまう。

寝覚めが悪いにも程があり、どうしても諦めるわけにはいかなかった。

幸いなのは体は比較的頑丈だったことと、エンデヴァーも子供が相手なので手加減してくれたことだ。

日が暮れる前に孤児院に戻り、次の日には再戦をして、またボコボコにされる。

そんな日々がしばらく続き、相変わらずエンデヴァーには勝てなくても何か思うところがあつたのか、少しずつ家族に歩み寄っていく。

相変わらず近寄り難くて多くを語らないが、きつと何かが変わつたのだ。

いちいち孤児院に帰るのも面倒になり、昼食は轟家で食べることも多かつた。

だが食卓を囲む仲になっても、本名は決して名乗らなかつた。

やがてそろそろ自分がいなくても家庭崩壊はないだろうと判断した私は、何も言わずに彼らの前から姿を消したのだった。

次にエンデヴァーと顔を合わせたのは、私が凶悪なヴィランを倒したニュースが全国で放送された数日後だ。

あの頃から自分の容姿があまり変わっていないのもあって、すぐに気づいたらしい。事務所に所属する多くのヒーローが孤児院を訪れただけでなく、轟家への養子縁組や個性婚とか変なこと言い出すので、内心はドン引きであった。

だが、その場でぶん殴ってお帰りいただくことはしなかった。

轟家があのあとにどうなったかが気になったので、食事にお呼ばれするぐらいは許可したのであった。

そんな昔の思い出はともかく、エンデヴァーは口下手で我が道を行くヒーローだ。

あれから長い時間が経っても、家族関係は決して良好とは言えなかった。

だからと言って自分が何とかできるとは思えないし、そこまで肩入れして世話を焼く気も起きない。

彼の頑張り次第で何とでもなるしと考えていると、外から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「邪魔だ」

今頃になって、通路の真ん中で長話をしていることを思い出した。

私はすぐに壁際に寄る。

「醜態ばかりだな。焦凍しやうとう」

先程までのエンデヴァーは柔らかな表情だったのに、すぐに厳しい顔に変わる。

そのまま轟君を叱責する。

「左の力を使えば圧倒とは言わんが、善戦はできたはずだ。

いい加減、子供じみた反抗は止めろ」

ちらりとこつちに視線を向けるエンデヴァーに、全力を出しても自分には勝てないと言いたいのだと察する。

しかし相変わらず変わっていないこの人と思いつつ、私は大きな溜息を吐く。

「お前には、オールマイトを越えるという義務がある」

そんな義務はないとツツコミを入れたいところだ。

だがこれは他人の家庭の問題で、死人が出たり精神が崩壊しそうな昔とは違う。

少しは落ち着いたはずだ。

「母さんの力だけで勝ちあがる！ 戦いでテメエの力は使わねえ！」

「今は通用したとしても！ すぐ限界が来るぞ！」

どうやら私が世話焼きを止めた頃から、あまり変わっていないようだ。

しかし、生半可な助言は聞く耳を持たないだろう。

ならば、こうなったら仕方ないと奥の手を使うことに決める。

「このことは、冷さんに報告する」

「斥流！ 母さんに伝えるのは止めてくれ！」

「待て！ 冷は関係ないだろ！」

轟親子が思いつき取り乱している。

二人にとつては、それだけ冷さんの存在は大きいのだ。

今は自宅療養中で、実家の離れに籠もつてエンデヴァーとはあまり顔を合わせていない。

食事に誘われたときには一家団欒していたが、空気は重かった。

いつものんびりマイペースな私でなければ、きつと喉に通らず味も良くわからない。ろくな会話もできなかつただろう。

けれど二人が冷さんのことを大切に思っているのは、十分に伝わってきた。

「仲良くしろとは言わないけど、喧嘩はしないで。」

冷さんが悲しむ

「……わかつた」

「仕方あるまい」

感情的には納得できなくても、渋々ながら矛を収めてくれたようだ。

私も院長先生には頭が上がらないし、母は偉大ということだろう。

取りあえず気を取り直して、これから試合をする彼を真っ直ぐに見つめて声をかけ

る。

「轟君のお母さんは、お父さんを愛している」

突然何を言い出すのか理解できないようだ。

二人揃って困惑しているが、構うことなく続きを口にする。

「冷さんが本当に望んでるのは、復讐ではなく家族の幸せ」

好き放題に発言した私は、そこで一息つく。

彼らに背を向けて、通路を歩いて行く。

「あとは冷さんに直接聞いて」

冷さんの家族には口にしにくいことも、昔から見た目が子供の私には良く話して聞

かせてくれた。

家庭の問題に首を突っ込んで、一步も引かずに仲を取り持ったのが大きかったよう

だ。

向こうは完全に気を許して、今では親しい友人として接している。

自分としては歳が離れすぎているので、知り合いのお姉さんのな立ち位置である。

ともかくエンデヴァーと轟君が戸惑っていたが、気にせずにこれ以上話すこともない

ので去っていくのだった。

ちなみに雄英体育祭だが、ここからは自分とあまり関係ないのでダイジェストで進行する。

轟君と瀬呂範太君の試合は、氷の大技ブツパによってあっさり勝負がついた。

あまりにも圧倒的な実力差だったからか、競技場は自然とドンマイコールが響き渡った程だ。

本人はイライラしてやってしまったらしいが、相変わらずとんでもない範囲と威力であつた。

B組の塩崎茨さんとA組の上鳴電気君の試合は、百三十万ボルトを棘付きの蔦を伸ばして切り離すことで防がれた。

その直後に地下から忍び寄つた蔦で、グルグル巻きにされて勝負ありだ。
上鳴君も決して弱くはないのだが、今回は相性が悪すぎた。

飯田天哉君と兎目明さんの試合は、何とか彼女の独擅場であつた。

サポート会社に見せるために様々なアイテムを相手選手に貸し出し、自己アピールを欠かさない。

十分間逃げ続けて全てのサポートアイテムの紹介が終わつたら、自ら場外に出て試合

終了である。

私は散々振り回された飯田君が、少しだけ可哀想に見えたのだった。

斥流陰子 v s 芦戸三奈

雄英高校体育祭の第三種目は、第五試合が開始された。

一段階の抑制解除をした私が、試合の舞台に向かつて真つ直ぐ歩いていく。所定の位置につくと、プレゼントマイクの解説が競技場に響き渡る。

「第五試合！ あの角から何か出んの!? ヒーロー科！ 芦戸三奈！」

芦戸あしどさんと戦うのは初めてだが、向こうはやる気十分なようだ。

「能力と実績は既にプロレベル！ ヒーロー科！ 斥流陰子！」

私はヒーロー免許だけ修得できればいいので、職業にするつもりはない。

しかし長年の修行や実戦で鍛えられたし、実績も無駄に積み重なっている。

「さあー！ じっくりみようか！ 第五試合！ スタート！」

プレゼントマイクが試合開始を告げると、芦戸あしどさんが大きな声で私に話しかけてきた。

「斥流ちゃん！ 本気で挑ませてもらうよ！」

「ええ？ その、……困る」

私的には勝敗はどうでも良かった。

最終種目まで来れば、ヒーロー科の足切りはないと思っっているからだ。

けれど芦戸あしどさんは、本気で挑んでくるらしい。

ここでもしわざと負けたら、彼女は私の実力を知っているのです、あとで色々言われそうだ。

(バレたら彼女の誇りを傷つける。できれば降参したかった)

酸の上を滑るように移動して接近してくる芦戸あしどさんを前にして、どう対処するのが正解なのかと迷う。

取りあえず殴りかかってきた彼女の腕を取って、豪快に投げ飛ばす。

「えいつ」

「きやつ!?!」

まさか投げられるとは思わなかったのか、軽々と宙を舞っている芦戸さんは驚きのあまり固まっていた。

このままでは受け身を取れずに、地面に叩きつけられてしまう。

なので私は硬いコンクリートと接触する前に重力を逆転させ、落下による衝撃を和らげた。

「斥流ちゃん、何で助けるの?」

ふわりと地面に接触した芦戸さんが、仰向けに倒れながら声をかけてくる。

「助けないと、芦戸あしどさんが大怪我する」

率直な気持ちと告げると、芦戸さんはムスツとした顔になる。

けれど本当に加減しなければ、怪我をしてしまうのだ。

(さて、どう戦ったものか)

場外まで放り投げればその時点で勝負ありだが、不完全燃焼で終わるのは良しとしな
いだろう。

やはり勝ち負けはともかく、彼女が悔いを残さないのがベストである。

やがて傷一つない芦戸さんが起き上がる。

そして、今度は手が届かない位置から酸を飛ばしてしくる。

私は軽やかに避けるだけでなく、今度はこつちから彼女に接近し、後ろに回り込んで
足払いを仕掛けた。

「わっ!?!」

頭をぶつける瞬間に個性を発動し、怪我なく倒れられるようにする。

すると、またもや不満そうな表情を浮かべた。

「もうっ! 斥流ちゃん! 真面目にやってよ!」

「私は真面目にやっている」

二回目ともなれば戸惑うことなく起き上がり、今度は近接格闘術を仕掛けてきた。

酸が分泌されているので手足には迂闊に触れないが、見てから避けるのは造作もない。

芦戸さんはクラスメイトで良い人だし、なるべくなら彼女の望みを叶えてあげたかった。

「斥流ちゃんに勝てないのは！ わかってるけど！」

「なら、諦める？」

「絶対に嫌！」

これは長い戦いになりそうだと溜息を吐く。

しかし芦戸あしどさんは増強系の個性ではないし、常に全力で挑んでくるので、スタミナ切れになるのは案外早いかも知れない。

私はしばらく芦戸さんを投げたり転ばせたり、様々な手段で転倒させ続けていた。

すると、やがて少しずつ息切れし始める。

「そろそろ諦める？」

「まっ、まだ！」

何とも諦めが悪いが、うちのクラスは大体そんな人ばかりだ。

粘り強さがヒーローの秘訣かどうかは知らない。

だが自分のようにやる気がないよりは、断然マシだろう。

けれどこのまま続けても、私が負けることはない。

かと言ってわざと負けたり降参し、クラスメイトを傷つけるような真似はしたくもなかった。

「わかった。次で終わらせる」

「えっ!?!」

芦戸あしどさんはとても頑張っていた。スタミナ切れも間近だし、きつと悔いは残らないだろう。

私は呼吸を整えて意識を集中させると、天に向かって勢い良く拳を振り上げた。

「はあっ!」

「きゃああっ!!!」

瞬間、競技場に凄まじい暴風が吹き荒れた。

至近距離で風圧を受けた芦戸さんは、木の葉のように宙を舞う。

ついでに、空を漂っていた雲まで吹き飛んでいく。

このままでは彼女は場外どころか、地面に叩きつけられると誰もが思った。

けれど私が煌めく粒子を放出して重力操作で飛行し、空中で危なげなく捕まえる。

そのままゆっくりと試合場の端っこに着地して、彼女だけを場外に優しく下ろす。

「私の勝ち」

驚いて固まっている芦戸あしどさんに、勝利宣言を行う。

「芦戸あしどさんは頑張った。勝負ありでいい?」

「あつ、うん、そうだね。」

あははっ! まだまだ斥流ちゃんには敵わないや!」

困った顔で笑いながら負けを認めた芦戸さんだが、とても満足そうだ。

怪我也擦り傷や打撲ぐらいで酷くないし、彼女にとつても悔いが残らない戦いだっ
と思う。

自分はこのまま二回戦に進むことになるが、降参するのは次の試合でもできるので良
しとする。

「斥流ちゃん、また戦ってくれる?」

「……気が向けば」

クラスメイトの頼みを嫌とは言わないが、体育祭のように大勢の前でやるのは断固拒
否したいところだ。

そこで審判のミッドナイトが宣言を行う。

「芦戸さん! 場外! よって、斥流せきりゆう陰子いんこさん! 二回戦進出!」

試合が終わったので、解放状態である意味はなくなつた。

すぐにまた加重をかけて、元の幼女へと戻る。

「さっきの斥流ちゃん、可愛かったのにー」
「嫌。あまり長く解放状態で居たくない」

可愛さよりも個性と体力を伸ばすのを優先したいし、私にはそういうのは縁がない気がする。

それよりも今は、芦戸あしどさんの手を引いて医務室に向かうのだった。

次の試合は常闇踏陰君とこやみふみかげと八百万やおよろずさんだ。

連続攻撃によって防戦一方になってしまい、八百万やおよろずさんはあつという間に場外に押し出された。

とにかくダークシャドウは強く、個性創造も弱くはないが、作り出すのに時間がかかる弱点を突かれた。

そしてB組の鉄哲徹鐵てつてつてつてつとA組の切島銳児郎きりしまえいじろうの試合だが、両者の個性はかなり近い。

接近戦の殴り合いは引き分けに終わり、腕相撲で勝敗を決めることになった。

結果は、切島銳児郎君きりしまえいじろうが僅差で勝利した。

次の麗日うららかにさんと爆豪君ばくこうの試合がどうなったかと言うと、まさに一方的な展開だった。

彼は女性が相手でも容赦しないのは良くわかってるし、ヒーローになるために常に全力である。

麗日さんも無重力の個性で罨を張り、頑張っていた。

しかし空から降り注ぐ無数の瓦礫は、一撃で吹き飛ばされてしまう。

それにも諦めなかったが、最終的には爆豪君の勝ちが確定した。

ちなみに爆豪君は、実力差がどうか、女の子を痛めつけてどうか外野から言われていた。

自分は芦戸あしどさんに怪我をさせないように気をつけたが、結果的にワンサイドゲームをしてしまったので少し肩身が狭かったのだった。

緑谷出久とエンデヴァー

〈緑谷出久〉
みどりやいずく

一回戦の全ての組み合わせが終わり、小休憩を挟んで二回戦が行われる。

次は轟 君と僕の試合だが、その前に麗日うららかさんを励ましに行つた。

けれど結果は、逆に応援されてしまった。

ちなみに斥流せきりゅうさんから、くれぐれも全力で戦わないようにと釘を差された。

暴走するたびに止めに入るのが面倒だからだ。

それに試合中に棒立ちはとて不味いし、いつ失格になつてもおかしくない。

心操君しんそうとの戦いは、勝ちを譲つてもらつたようなものだった。

それはともかく僕は控室から出て、試合場に向けて通路を歩きながら気合を入れ直す。

「今は試合に集中しないと！」

オールマイイトからも個性の暴走に関する情報を得て、黒鞭やかつての継承者のことが少しだけわかつた。

だが今は雄英体育祭に集中するほうが大切だと思い直したが、やはり注意力散漫になつていたようだ。

こちらに近づいてくる気配に、直前になるまで気づけなかった。

「エンデヴァー!?!」

「おう、いたいた」

通路の曲がり角から突然姿を見せたナンバーツーヒーローに、驚いて立ち止まる。思わず大声を出してしまったが、彼は驚かれるのに慣れていているようだ。

全く動じずに、僕の前に立つ。

「エンデヴァー! 何でこんなところに!?!」

あまりにも予想外だったのと高圧的な雰囲気、少しだけ後ずさつてしまう。

「キミの活躍、見せてもらった。素晴らしい個性だね。」

指を弾くだけで、あれ程の風圧。

パワーだけで言えば、オールマイトや^{せきりゆういんこ}斥流陰子に匹敵する力だ」

斥流さんとはもかく、オールマイトとの関係をこの人に知られるのは不味い気がする。

僕は嫌な汗をかきながら、エンデヴァーをじつと見つめる。

「そのあとの鞭の個性は制御が甘い、成長の余地ありだな。」

しかし焦凍しやうとうのような複数の個性ではなく、斥流陰子せきりゆういんこと同じ発展型か？」
轟君は生まれつき、炎と氷の両方が扱える。

斥流さんは個性を鍛えて伸ばし、複数の特性を持たせるまで成長させた。
そしてオールマイトが増強系に近い性能だ。

まだどうして黒鞭くろむちが扱えるかはわからないが、ワンフォーオールは発展しているのかも知れない。

しかし彼が何を考えているにせよ、これ以上詮索されるのは不味い。

「何を、何を言いたいんですか？ 僕はもう、行かないとー！」

重圧を受け続けるのも辛いし、ワンフォーオールとオールマイトの関係を探られる可能性もゼロではない。

けれどエンデヴァーは、僕に淡々と話しかけてきた。

「うちの焦凍しやうとうには、オールマイトを越える義務がある。

キミとの試合は、テストベッドとして、とても有益なものとなる。

くれぐれも、みつともない試合はしないでくれたまえ」

その言葉を聞いた僕は、思わず身を固くする。

轟君は、父親から受け継いだ炎を使わずに一番になり、エンデヴァーを完全否定と言っていた。

「言いたいのはそれだけだ。直前に失礼したな」

エンデヴァーが立ち去ろうとする前に、僕は決意を込めて話しかける。

「僕は、オールマイトじゃありません！」

当たり前のことですよね！ 轟君も！ 貴方じゃない！」

その時点で僕は、色んな感情がごちゃ混ぜになっていた。

だがとにかく、それだけは言わなければいけないと感じたのだ。

しかしこの時、予想もしていなかった声が別の方向から聞こえてきた。

「エンデヴァー、何してるの？」

「斥流さん!？」

通路の向こうからひよっこり顔を覗かせて声をかけてきた彼女に、僕たちは殆ど同時に驚きの声をあげてしまった。

彼女は相変わらずマイペースで落ち着いており、のんびりこちらに向かって歩いてくる。

「休憩中に、偶然話し声が聞こえた。

エンデヴァーのことは冷^{れい}さんから、気にかけておいて欲しいと頼まれてる」

「冷^{れい}からだど？」

僕には何のことかわからない。

しかし、斥流さんは静かに頷いて続きを話す。

「あとは冷さんれいから聞いて」

「斥流、俺にそれができると思っているのか？」

「互いに歩み寄る、良い機会」

「……むう」

二人とも、完全に僕を置いてけぼりにしている。

けれどエンデヴァーは何か思うところがあるようだ。

燃える顎髭を弄って、深く考え込んでいた。

しばらくナンバーツーヒーローと話していた斥流さんは、やがてこちらに顔を向けて

口を開く。

「緑谷君」

「えっ？」

「貴方は自分が思い描く、最高のヒーローを目指せばいい」

真つ直ぐに僕を見つめる斥流さんの言葉を聞いて、何故か肩が軽くなつて安心を覚え
た。

「焦らず一歩ずつ進んでいけば、いつかは必ず辿り着く」

「……斥流さん」

僕にとっての彼女は、やはりオールマイトと同じで尊敬すべき師匠だった。

困っている時に、進むべき道を指し示してくれる。

危険な状態に陥って、助けられたこともあった。

ただしヒーロー扱いすると露骨に嫌な顔をされるので、そこだけは気をつけなければいけない。

「エンデヴァーは、ビルボードチャートJ Pのトップヒーローだから、重圧に抗えないのはわかる。

でも緑谷君なら、いつかは彼に負けないヒーローになれる」

エンデヴァーはナンバーツールのプロヒーローだ。

「斥流さんは僕がこのまま成長を続ければ、最高のヒーローになると言ってくれた。俺を前にそんな発言ができるのは、斥流ぐらいだぞ」

「当の本人は呆れた顔で斥流さんを見ているが、それに関しては別に怒りはしないようだ。」

「将来的には、轟君と緑谷君がワンツートになるかも」

「もちろん焦凍しょうとが一位に決まっている！」

すると斥流さんは首を傾げて、エンデヴァーにじつと見つめる。

「どうだろう？ エンデヴァーは家庭の問題が」

「斥流う！ 家庭の問題はヒーローランキングに関係ないだろうがあ！」

大きな声が辺りに響き渡るが、斥流さんは全く動じていない。

「大いに関係ある。轟君が炎を使いたがらないのは、エンデヴァアのせい」

「ぐっ!? 悔しいが反論できん！」

彼女とエンデヴァアのやり取りを見てみると、何だか僕の想像していたナンバーツーヒーローのイメージが、音を立てて崩れていく。

けれど別に不快ではなく、厳格でストイックな炎熱系のヒーローも家では父親をしているのだと、新しい視点で見ることができた。

「とにかく緑谷君は私たちのことは気にせずに、試合に集中して」

「えっ？ あつ、うん」

「あまり長く立ち話をしていると、最悪不戦敗になる」

「そうだった！ 急がないと！」

斥流さんに言われて思い出したが、今は試合に向かっていている途中だった。

まだ放送で呼び出されてはいないものの、選手や観客を待たせるわけにはいかない。

なので取りあえず考えるのは後回しにして、今は師匠の言った通りに目の前の試合に集中するのだった。

〈せきりゆういんこ
斥流陰子〉

お手洗いに行つてから、自分の席に戻る途中で緑谷君とエンデヴァーが話している内容を偶然聞いた。

そこでふと、冷れいさんに言われていたことを思い出す。

色々と不器用な人なので、もし余裕があればそれとなくフォローをして欲しいということだ。

それ以外にも色々言われているが、多すぎて全部は覚えていない。

とにかく自分も人と話すのは苦手なので、正直上手く手助けできる気がしない。どう考えても場を引つ掻き回すことしかできないだろう。

けれど、少し怒っていた緑谷君を落ち着かせられたので良しなのだった。

彼を試合場に向かわせたあとは、エンデヴァーに自販機のオレンジジュースを奢つてもらった。

だがそこで相談があると切り出されたので、取りあえず人の居ない雨除けドームの天井部分に移動し、並んで座る。

私は緑谷君と轟君の試合を観戦しながら少しだけ話をする。

「とにかくエンデヴァーは、良い父親になって家族の尊敬を集めること」
「むう、やはりそれしかないか」

半分ほどに減ったオレンジジュースの缶を、雨除けドームの天井に静かに置く。

そして隣に座るエンデヴァーと、他愛もない話を続ける。

今さら過去の過ちを認めて謝罪したところで、解決する問題ではない。

下手をすれば、精神的に楽になりたいからだと言われかねない。

「家族関係の修復は一朝一夕にはいかない」

「だろうな。気長にやるしかあるまい」

積み木を崩すのは一瞬だが、組み立てるのは長い時間がかかるのと同じだ。

けれど私が轟家にお邪魔しなくなってから、かなりの年数が経っているのにあまり変わっていない。

何処かのバスケ漫画のように、何も成長していないと言いたくなる。

「しかし、斥流はやけに慣れているな」

一息ついたエンデヴァーが、緑茶のペットボトルを傾けながら尋ねてくる。

何が慣れているのかは良くわからず、少しだけ考えた。

「孤児院には、色んな人が居るから」

「……そうか」

轟君ではないが、複雑な家庭環境を体験した子供たちを多く見てきた。

私は昔から多忙で、親に反抗する暇もなく、人よりも早く自我が構築されて大人になった。

そんなことを考えていると、試合はいつの間にか終わっていた。

最終的に、氷だけでなく炎を出した轟君の勝利だ。

緑谷君は個性に目覚めたばかりで持続時間が短く、しかも衝撃を受けると解除されてしまう。

最後の熱風を吹き飛ばしたのは良いが、個性が解除されて踏ん張れなかった。

場外に飛ばされて負けてしまったのだ。

最初から本気で戦えば勝っていたのに、相変わらず他人の世話を焼くのが好きな人だ
と思った。

「あの少年はキミに似ているな」

「何処が？」

隣のエンデヴァーに顔を向けて尋ねると、強面だが嬉しそうに笑っていた。

「余計なお世話は、ヒーローの本質だ」

「私は緑谷君ほど、余計なお世話は焼いてない」

通りかかった時に困っていて、他に助けられる人がいなければ世話を焼くぐらいだ。

それに勝利を捨ててまで、他人のために身を捧げる自己犠牲精神も持ち合わせてない。

「だがキミは燈矢^{とうや}だけでなく、俺たち家族を救ってくれた」

あれも成り行きでやっただけで、私としても仕方なく首を突っ込んだのだ。

喜々として危険に飛び込むような、酔狂な性格ではない。

最初にエンデヴァーと戦ったときはボロ負けだったが、あの時はきつと若気の至りだったのだろう。

何にせよ話題が途切れたし、オレンジジュースも飲み終わった。

私はその場からゆっくり立ち上がる。

「そろそろ次の試合」

「ああ、相談に乗ってくれて助かった」

「構わない。ジュース奢ってくれてありがとう」

基本的に麗日^{うららひ}さんから毎月のお小遣いを受け取って、やりくりしている。

しかし、飲み食いしたり実際にお金を使うことは殆どない。

今回はエンデヴァーに奢ってもらえてラッキーだったと思いつつ、自分の席に戻るのだった。

斥流陰子 vs 一年A組上位陣

エンデヴァアの相談に乗っている間に、緑谷君と轟君の試合が終わった。

次は飯田天哉君と塩崎茨さんだ。

前の試合でステージが壊れたので修復に時間がかかったが、彼らの試合自体はすぐに決着がついた。

レシプロバーストによって蔦の攻撃を避けて、そのまま人並み外れた馬力で場外まで押し出すことで勝利したのだ。

そして次に進み、私こと斥流陰子と常闇踏陰君の試合となった。

一段階の抑制解除を行い、互いに位置につく。

すると審判から開始の合図が告げられ、先手必勝とばかりに向こうから攻めてくる。

「ダークシャドウ！」

予想通りに。彼の個性が突っ込んできた。

しかし見えているので危なげなく。右へ左へと華麗なステップを踏んで避けていく。それどころか。戦いながら話しかける余裕まであった。

「常闇君とこやみ」

「どうした!」

「私は降参する」

「「はあ!」」

常闇君だけでなく審判や解説までもが、思いつきり驚かれた。

さらには他に聞こえていた人たちも啞然としている。

ダークシヤドウまで驚いて攻撃を止めた。

しかしすぐに彼は、動揺しつとも尋ねてくる。

「どういふことだ!」

「雄英体育祭で、これ以上勝ち進む理由がない」

第三種目まで進めば、ヒーロー科からの足切りはほぼない。

芦戸三奈あしとみなさんは試合結果に納得できないと、絶対にあとで色々言われていた。

だが今は沈着冷静な常闇君が相手なので、きつとすんなり降参させてくれると信じて

声をかけたのだ。

「断る! 俺は実力で斥流に勝つ!」

「常闇君とこやみも? ……はあ、困った」

審判も横を向いて口笛を吹いて、先程の降参は聞こえてないフリをしている。

他の試合のように、常闇君の勝利を宣言してくれない。

何とも理不尽を感じながら、再び動き出したダークシャドウの攻撃を躲していく。

ヒーロー科や雄英高校は戦闘狂の集まりかと勘違いしそうだが、彼らは基本的に良い人である。

（それに実力差があるから、勝つのは容易）

常闇君も諦める気はなさそうなので、私は避けたあとに空に向かって跳躍する。

そして、飛び蹴りの構えを取った。

「来るか！ 戻れ！ ダークシャドウ！」

私の行動を予測してダークシャドウを呼び戻して守りを固めた。

相手の準備が整ったことを確認した私は、個性を発動して狙いを定めて落下を開始する。

「重力加速！ 二倍！」

飛び蹴りの軌道は適時修正できるので、一度ロックオンすれば避けるのはほぼ不可能だ。

下手に回避しても余波に巻き込まれ、受け止めるか迎え撃つのが一番被害を軽減できる。

赤熱するほどの加速は出していないが輝く粒子が放出され、流星のように降り注ぐ高

速の蹴りと、常闇君のダークシャドウが空中で激しくぶつかり合う。

その瞬間、凄まじい衝撃波が発生した。

「くうっ！ コイツは!？」

「吹き飛ばせ！」

少しか拮抗したが、高速で繰り出された蹴りがダークシャドウを大きく弾いた。

狙うは無防備になった本体だが、直撃させる気はない。

軌道を修正して常闇君のすぐ前に落下し、片足が思いつきりめり込んだ。

そんな私に驚きつつも彼はまだ諦めておらず、ダークシャドウを急ぎ呼び戻そうとする。

だが私は常闇君の相棒が戻る前に、彼が対処できないほどの速さで足払いを仕掛けて転ばせた。

そしてめり込んだ足を引き抜いて、急いで起き上がろうとしている彼の前に立つ。

「私の勝ちでいい?」

「ああ、……俺の完敗だ」

もし不審な動きをしたら、特に思いつかないが酷いことをするつもりだ。

私はボロが出る前に降参してくれて良かったと、内心でホッと息を吐いた。

審判も私の勝ちだと宣言する。

取りあえずは常闇君に手を伸ばして起き上がってもらい、転倒させたときに怪我はしてないかと気遣うのだった。

次の試合は爆豪君と切島君だが、長々と語るようなこともない。

持久戦で先に息切れた切島君を爆豪君が追い詰め、そのまま爆破で押し切つての勝利だ。

続いて準決勝の第一試合は、どちらもプロヒーローの息子である轟君と飯田君である。

初手レシプロバーストで速攻を仕掛けたが、小技でマフラーを凍らせることで個性を強制的に妨害して隙を作り出された。

続けて顔以外を凍らせることで、行動不能に追い込んだ。

そして次は、私と爆豪君が戦うことになる。

彼とは毎日のように訓練していたので、お互いの手は知り尽くしていると行って良

い。

いつも通りに一段階の抑制解除を行い、爆豪君の爆破ラツシュを避け続ける。

「かすりもしねえ！ いい加減！ くらいやがれ！」

互いの個性を知っているとは言っても、対処できるかは別である。

私が爆豪君の爆破を避けるのは容易ではあるが、彼がこちらの攻撃を防ぐのは難しい。

なので自分は戦いながら会話ができるほど余裕があり、今回も降参して良いかと尋ねたのだが、予想はしていたが逆ギレされてしまった。

「ジャージを燃やしたくない。当然避ける」

「ちくしょうが！」

彼が悔しそうに舌打ちするが、いくら柔肌は燃えないとはいえまともに受けるつもりはない。

社会的な死は避けたいし、ジャージの修繕費用もタダではないのだ。

「そろそろ終わらせるけど、いい？」

「良いわけねえだろ！ クソが！」

彼はまだ試合の続行を望んでいるようだが、今回は戦闘訓練ではない。

爆豪君のスタミナが切れるまで付き合っていたら、何気にガッツがあるので日が暮れ

てしまいそうだ。

ここで私はどうしたものと悩みつつ、審判のミッドナイトに視線を向ける。すると彼女は少しだけ困った顔をして、小さく頷いた。

「爆豪君、今度は私の番。耐えて」

「ちいつ！ 仕方ねえ！ 来いやあ！」

ヒーローは攻撃だけではなく、防御も重要なのは言うまでもない。

爆豪君は素早く距離を取って、こちらの様子を油断なく伺う。

私は呼吸を整えて、しっかりと両足で踏ん張る。

そして右手を引き、正面の彼を見据えて全力の一撃を放った。

「くそつたれええええ!!」

予想は可能でも、回避は不可能なとんでもない風圧が襲いかかる。

爆豪君は過去最高レベルの爆破で迎撃した。

しかし、それでも抗いきれずに少しずつ押し流される。

結果的に彼は必死に耐えながらもズルズルと後退していき、やがて場外のラインを越えて敗北したのだった。

爆豪君との試合が終わり、審判のミッドナイトが疲労の回復のために時間まで休むようにと言われたが、私は別に疲れていない。

しかし試合会場が破壊されていたので修復する必要があり、少しだけお手洗いに行つてすぐに戻ってくる。

競技場に入ると、向かい側から轟君がやって歩いて来た。

口を開くことなく互いに試合上の内側に入って、配置につく。

「雄英高体育祭も、いよいよラストバトル！」

解説役のプレゼントマイクだけでなく、見物に来た観客も大盛り上がりだ。

「ヒーロー科！ 轟焦凍！とじろうきしやうと ヴァーサス！ ヒーロー科！ 斥流陰子！せきりゆういんこ」

そして審判からスタートの合図が出た瞬間、轟君がいきなり問答無用で大技をブツパしてくる。

それは試合場の殆どを氷漬けにするほど強力なので、普通なら逃げる隙もなくやられてしまう。

しかし私は事前に攻撃を察知して、空中に逃れていた。

一段階解除しているので光り輝く粒子を放出しつつ、リング内に出現した巨大な氷柱に、私は妖精のようにふわりと舞い降りる。

「一応聞くけど、降参していい?」

「負けるのは嫌だが、勝ちを譲られても嬉しくねえよ」

予想はしていたが、やっぱり正々堂々と勝負しないと駄目らしい。前の試合の爆豪君もそうだった。

何にせよ仕方ないので溜息を吐きながら、氷柱の真上から拳を打ち込んで木端微塵に打ち砕き、そのまま下のリングに舞い戻る。

「手加減されるのが嫌なら、轟君も左を使つて」

「……それは」

緑谷君の説得で炎の個性を出していたが、まだ躊躇っているようだ。

できれば家庭の問題に首を突っ込みたくないけれど、全力を出さずに負けて後悔して欲しくもない。

「エンデヴァーも反省していた」

「斥流、親父と話したのか?」

「少しだけ」

プライベートなので、詳しい内容までは口にしない。

けれどエンデヴァーなりに、これからは家族との時間を大切にするらしい。

良い方向に行くとは約束できなくても、少なくとも悪い結果にはならないはずだ。

「苦勞をかけて悪いな」

「構わない」

ジューズ一本を奢ってもらう代わりに愚痴を聞かされ、無難なアドバイスをした。

私にとっては殆どプラマイゼロで、礼を言われることは何もしていない。

「とにかく、全力を出して」

「ああ、そうさせてもらおう!」

その瞬間、彼の左腕から炎が吹き出して私に向かって放たれた。

ジャージを燃やされるわけにはいけないので、基本的には逃げの一手だ。

しかし今度は、進行ルートに氷の壁が立ち塞がる。

背後から迫る炎のことを考える避ける時間はなさそうなので、正面から蹴り碎いて強引に突破した。

「ははっ! 物ともしないか!」

彼もエンデヴァーに似て、あまり自分の感情を表に出さない。

けれど今は息を切らしながらも、楽しそうに笑っていた。

「やっぱり斥流は! 最高のヒーローだな!」

「何それ!?!」

轟君から最高のヒーローと言われたのは初めてだった。

「俺がヒーローを志した原点だ！」

「意味わかんない！」

回り込まれたので、迫りくる炎を拳を振るって風圧でかき消す。

戦いの最中に、全く意味がわからない発言に困惑する。

しかし轟君は話している間にも慣れない個性を使い続け、さらには連戦の疲労により少しずつ動きが鈍ってきた。

回避に専念して様子を見ていたが、そろそろ終りが近いことを察する。

頃合いだと動きを止めた私は、大きな声で叫んだ。

「轟君！ 全力で打ち込んできて！ 負けても後悔しないように！」

すると轟君は再び気合を入れて、両腕に炎と氷を収束させていく。

「悪いな斥流！ 胸を借りるぞ！」

私は念のためにもう一段階の抑制解除を行い、彼の攻撃に備える。

「膨冷熱波！」

右の氷結が私めがけて放出され、続いて左の炎熱も解き放たれた。

冷やされた空気が膨張することによって、桁違いな爆風を引き起こされる。

だがこれは、緑谷君との戦いで一度見ている。

まだ慣れていないので、威力の調節や溜め時間などの問題もあるが、破壊力だけなら

既にプロヒーローレベルだ。

そして、格好良い技名までつけられている。

私はネーミングセンスがないのか、特に良いものが思いつかない。

けれど向こうが必殺技を叫んだのだから、こっちも何か名付けるべきだろう。

「ええと！ 全力パンチ！」

腰の入った正拳突きが、激しく荒れ狂う暴風を生み出した。

目前まで迫った膨冷熱波ぼうれいねつぱに激突し、相殺する。

何とも情けない技名だが、工夫や技術も何もないゴリ押しパンチだ。

なので、これで良いのだと納得させた。

試合場は突風が吹き荒れ、それもすぐに止んだ。

あとに残ったのは無傷で堂々と立つ私と、力を出し尽くしてうつ伏せに倒れて起き上

がれなくなった轟君だった。

「轟君！ 行動不能！ よって！ 斥流さんの勝利！」

十八禁ヒーローのミッドナイトが、新版らしく私の勝利を宣言する。

競技会場から、割れんばかりの大歓声があがった。

「以上で全ての競技が終了！ 今年度一年体育祭の優勝は！」

A組！ 斥流陰子おおお!!!」

解説のプレゼントマイクが大声で伝えて、より一層の盛り上がりを見せる。

何となく流れて優勝してしまった身としては、真面目に競技している生徒に少し申し訳なく思った。

けれど対戦相手は全力を出せて悔いなしだったし、とにかくヨシとするのだった。

その後の表彰式が行われたが、一位は若干居心地が悪い私で、二位は無表情に戻った轟君、三位は何処かムスツとした顔の爆豪君、同じく三位には心ここにあらずの飯田君だった。

そして取材陣からは、眩しいばかりのフラッシュが焚かれている。

自分は明らかに場違いではあるが、一位になってしまった以上は仕方ない。

しかしメダル授与でオールマイトが登場したおかげで、主役が交代してくれて本当に助かった

三位から順番に首にかけていき、やがて彼は私の前に立つ。

「斥流少女、優勝おめでとう！ 見事な戦いぶりだった！

ここまで個性を使いこなせる生徒は、そうはいない！」

「頑張った」

私に気の利いた言葉は無理だ。

なので、無難に短く終わらせる。

「さあ！ 今回の勝者は彼らだった！」

しかし皆さん！ この場の誰にも、ここに立つ可能性はあった！」

オールマイトが私たちではなく、他の生徒や客席に向けて話し出す。

「ご覧いただいた通りだ！ 競い！ 高め合い！」

さらに先へと登っていく！ その姿！

次代のヒーローは確実に！ その芽を伸ばしている！」

確かに次代のヒーローは、日々成長している。

今回は私が勝ったが、来年には追い越されることを期待したい。

ひよっとしたら、この中から新しい平和の象徴が生まれるかも知れない。

そう思うと、今から少しだけ楽しみになったのだった。

闇を祓う流星

ヒーローネーム

色々あつたが、雄英体育祭は無事に終わった。

だがまあ、それに関しては別にどうでもいい。

重要なのは、その間に起きたか知ったことだ。

まず飯田いいたてんや天哉君のお兄さんがヒーロー殺しに敗北し、救援要請を受けて駆けつけたジエントル・クリミナルが危機一髪で助け出した。

インゲニウムは大怪我はしたが、ヒーロー活動ができなくなる程ではない。

今は病院で治療を受けており、ステインには残念ながら逃げられてしまったようだ。

守りながら戦うのは大変なので、頑張ったと思った。

それに悪いニュースはまだある。

雄英高校を襲撃してきたヴィラン連合、そのリーダーである死柄木しがらぎとむら弔と幹部の黒霧くろぎりが行方不明になったことだ。

彼らは護送中に口から黒い液体を吐き出し、二人ともそれに飲み込まれて忽然と消え去ったらしい。

現在、警察が全力で捜索中とのことだ。

自分はテレビのニュースには興味がなかったし、世間は雄英体育祭一色になっていた。

普段からのんびりマイペースな性格なので、もしかしたら耳に入っても直ちに影響があるわけではないため、知らずにスルーしていたのかも知れない。

だが、ヴィランのことはヒーローに任せれば良い。

自分のような一般人が、わざわざ危険に首を突っ込む必要はないのだ。

それよりも麗日うららかにさんの両親が突然下宿先に来て、私も一緒に大歓迎されたほうが重要である。

彼女と同じで良い人なのは別にいいが、二人にも名前を知られていて恥ずかしかった。

ちなみに雄英高校の体育祭は、日本を代表するビッグイベントだ。

当然のように全国放送され、リアルタイムで視聴していた人も大勢いる。

大会が終わったあとテレビでバンバン報道されて、全国的に大盛り上がりであった。

早朝のジョギングや個性の訓練でも、頻繁に声をかけられる。

別に珍しくはないが、麗うららか日さんまで話題に入ってくるのは珍しい。

良し悪しはともかくとして、自分の周囲の状況が少しずつ変化しているのを感じたのだった。

多少賑やかになっても、私は基本的にマイペースだ。

時間に余裕を持っていつも通りに登校して、一年A組の教室に入って自分の席に着く。

教科書を開いて予習をしていると、クラスメイトの話題が耳に入ってくる。

どうやら全員が一躍有名人になったようで、通学途中で色んな人に声をかけられたらしい。

教室中がその話題で持ちきりで、雰囲気はとても明るい。

(私は面倒に思ってるけど)

他人と関わるのは面倒だが、嫌いではない。

しかし、訓練の時間が減るのは困る。

それに別に、称賛されたくてヒーロー科に通っているわけではない。

今の社会と価値観が違うのは、今に始まったことではないし、クラスメイトもそのことを知っている。

私もわざわざ水を差したりはせずに、机の上に教科書を広げて真面目に予習を行っていた。

すると教室の扉が開いて、相澤先生あいざわが入ってきた。

彼は教卓の前に立ちつて簡単な挨拶をしてから、授業内容について説明する。

「今日のヒーロー情報学、ちよつと特別だぞ」

私以外の生徒も一斉に身構える。

自分は予習復習はきっちりしているが、そこまで自信があるわけではない。

それでも抜き打ちテストが来ても、赤点は回避できるだろう。

けれど担任の先生から告げられた内容は、私の予想外でだった。

「コードネーム。ヒーロー名の考案だ」

この発言を受けて、一年A組の教室は大盛り上がりだ。

しかし、すぐに静まり返る。

「と言うのも、先日話したプロヒーローからのドラフト指名に関係している」

担任との付き合いも長くなってきた。

大声で騒いでいると、怒られることを学習したようだ。

「指名が本格化するのを経験を積み、即戦力として判断される二、三年から。

つまり、今回一年のお前らに来た指名は、将来性に対する興味に近い」

私のように成り行きでヴィランと戦って、ニュースに出ることは滅多にない。なので、雄英体育祭での活躍で初めて目にするスカウトも多い。

一目見ただけで未来のヒーローが務まるかどうかを見極めるのは、なかなか難しいだろう。

「卒業までに、その興味が削がれたら、一方的にキャンセルなんということとは良くある」その発言を聞いた峰田実君が、震えながら机を叩く。

「大人は勝手だ！」

「いただいた指名が、そのまま自身へのハードルになるんですね！」

続いて声を出した葉隠はかくれさんは、上昇志向が強いのか元氣いっぱいであった。

「そう、でつ、その集計結果がこうだ」

相澤先生がりモコンのボタンを押して、黒板に映像を映し出した。

パツと見た感じ私の指名がとても多く、一万件を越えている。

轟君と爆豪君が数千であると続いているのだが、その二人も大きく引き離していた。「例年はもつとバラけるんだが、斥流……いや、三人に注目が偏った」

どういう基準で選ばれたのかは、各々の順位を見れば何となく理解できる。

しかしヒーローの志を持たない私を高く評価するのは、如何なものかだ。

指名がないよりはあったほうが良いが、将来就職する気はないので少し困る。

「この結果を踏まえ、指名の有無に関係なく、いわゆる職場体験つてのに行ってもらおう」
相澤先生の説明を聞き、中学校の頃に新聞配達のバイトをした経験がある私は何となくだが想像ができた。

「お前らはUSJのとき、一足先にヴィランとの戦闘を経験してしまったが。

プロの活動を実際に体験して、より実りある訓練にしようってこった」

その際にヒーロー名も決めるようで、私を含めたクラスの皆は、なるほどと頷く。

「まあ、そのヒーロー名はまだ仮ではあるが、適当なもんは——」

「付いたら地獄を見ちゃうよ！」

ここで教室の扉を勢いよく開けて、十八禁ヒーローであるミッドナイトが入室してきた。

「学生時代に付けたヒーロー名が世に認知されて、そのままプロ名になってる人は多いからね」

確かに学生の頃に名前が売れすぎて、そっちの名でしか認知されなくなる人もいるだろう。

私の活動期間は卒業までで、今回のように体験で終わるだろうがネタに走るつもりもない。

恥ずかしい思いもしたくないので、足りない頭を捻って頑張って考える。

やがて皆が順番に教卓の前に立って、ヒーロー名を発表していく。

そのたびに審査を行うミッドナイトやクラスメイトが、一喜一憂したりと大変賑やかだ。

一年A組は相変わらずノリが良いし、この独特な雰囲気は嫌いではない。

ただ私は一緒に混ざったり話するのが苦手なので、基本的には外から眺めているだけだ。

それでも楽しめてはいるし皆は目指すヒーロー像が明確で、自分のように捻り出すのに苦労することはないだろう。

ちなみの中には自身の名前をつける人も居たりと、色々あるんだなと思っていると、とうとう私の番が来た。

なので教卓の前まで歩いて行き、記入用紙を立てて皆に見せる。

「流星ヒーロー。シューティングスター？」

今までは即、何らかの評価を口にしていたミッドナイトが発言に困っていた。

そして、どういう理由でヒーロー名を付けたのか尋ねてくる。

「変身すれば光る粒子を放出する。」

それに大抵が短期戦で終わるから、流星のように一瞬だけの輝き」

あとは重力加速による必殺の蹴りは、流れ星のようにも見える。

個性の仕様で目立ちたがり屋の青山君あおやまではないが、煌めく粒子は夜空の星々を彷彿とさせる。

それを聞いたミッドナイトは、とても良い笑顔を浮かべた。

「いいわね！ 光り輝く斥流さんには、とても似合っているわ！」

取りあえず二代目オールマイトから脱却できたので、良しとしておく。

そのあとは職場体験の用紙が配られたが、私には一万件以上の指名が入っている。

特に行きたいヒーロー事務所もないし、この中から選ぶのは大変だ。

自分だけでは判断が難しいため、下校前に職員室に向かう。

幸いなことに、目的の人物はすぐに見つかった。

なので扉を開けて失礼しますと中に入り、彼の元に真っ直ぐに歩いて行く。

「相澤先生、どの事務所を選べばいい？」

生徒が困った時は、担任に相談するものだ。

なので私は相澤先生に頼ることにし、彼の事務机の上に多数の指名用紙を置いた。

「斥流は、行きたい事務所か、成りたいヒーローはないのか」

「ない」

「そうか」

本当に行きたい事務所も、成りたいヒーローも私にはなかった。

やがて担任は頭を軽くかいて、事務机の上に置かれた一万件以上の指名リストを手取る。

そして手早く順番に目を通し、適時にこちらに確認を取る。

「斥流の個性と相性が良い、大手の事務所が合理的か」

生徒の相談に真面目に乗ってくれるのが相澤先生だ。

良い担任だと思いつつ、私も指名リストを閲覧する。

「しかし、斥流の個性は幅が広すぎる。

事務所を選ぶのも一苦労だぞ」

「……ううん」

私は近接も遠距離も対処できて、ヴィランの捕縛や高速移動も可能だ。

やれることが多く、これといった希望もないので選択を絞り込むのも一苦労である。

しばらく二人で悩んでいると、何故か他の先生たちが集まってきた。

「斥流さんのことでお悩みですか？」

「大変そうですね。イレイザーヘッド」

相澤先生が彼らにも指名リストを見せると、他の教師は揃って顔を見合わせる。

そのまま、ああでもないこうでもないかと相談が始まり、少しずつ人数が増えていく。そのうち話題が専門的すぎて、どうにもついて行けなくなる。

私は職場体験先を相談したのに大事になってしまったと、何とも申し訳なく思うのだった。

職場体験学習

飯田君のお兄さんがヒーロー殺しに遭遇して入院するほどの大怪我を負ってから、彼の様子がおかしくなった。

時々だが、何やら思い詰めたような顔つきに変わるのだ。

口下手な自分が声をかけても、慰めにはならないのはわかっている。

しかし彼は私の数少ない友人で、できれば何とかしてあげたい。

なので職場体験が始まるその日に、相澤先生の話が終わった直後、別れる前の飯田君を呼び止めた。

「飯田君、待って」

他人と関わることはない私が、珍しく自分から声をかけた。

驚いて振り向いた飯田君以外にも、他のクラスメイトや相澤先生の視線も集まる。

けれど、そんなのはお構いなしにマイペースで話しかける。

「飯田君は、ヒーロー殺しを探すつもりでしょう？」

「斥流さん、俺は別にインゲニウムの敵討ちなんて——」

私はヒーロー殺しを探すしか言っていない。

だが彼は動揺からか、兄の敵討ちを考えていることを口走ってしまった。

ここで慌てて否定しても、飯田君が例のヴィランを気にしているのは事実は変わらない。

「ヒーロー殺しを探すのは、構わない」

「いいの!?」

飯田君が驚いて尋ねてくるが、私は気にせずに頷いて続きを話す。

「今の飯田君は、何を言っても止まらない。

それに、パトロール中に偶然遭遇する可能性もある」

ヒーロー殺しが潜伏している可能性が高い地域を、パトロールするのだ。

本人が意図せず遭遇したり、襲撃されることもあるだろう。

なので私は、ポケットからスマートフォンを取り出した。

殆ど使ったことがないので若干操作が怪しいが、慎重にタッチしていく。

「ええと、ここを……ここかな?」

少し時間はかかったが、飯田君の番号が電話帳に登録してあることを確認する。

他には実家の孤児院と緑谷君と麗日さんなので少ないが、元々人付き合いは苦手交友関係が狭いので仕方ない。

だが今はそのような事情は置いておいて、飯田君の顔をじっと見つめる。「もしヒーロー殺しを発見したら、すぐ連絡して。」

マップにピンを刺して、私でないA組の誰かでもいいから」

後ろで話を聞いているクラスメイトに視線を向けると、私の意図に気づいたらしい。皆が任せておくとばかりに、力強く頷いてくれた。

「飯田君には酷なことを言うけど、インゲニウムはヒーロー殺しに負けた。」

正直、キミが勝てるとは思えない」

ステインは多くのヒーローを殺害、もしくは再起不能に追い込んでいる。

それでも捕まらずに、これまで逃げ延びているのだ。

少なくとも戦闘能力が、かなり高いのは間違いない。

「相手の個性も掴めていない今、単独で戦えるのはトップヒーローぐらい」

プロヒーローでも普通に負ける相手で、しかも個性も不明なのだ。

下手をすれば、トップレベルでも負ける可能性があった。

「絶対に一人で戦ったら駄目。仲間を頼って」

飯田君を真つ直ぐに見つめる。

とにかく彼に伝えるべきことは全て言い終わったので、私は大きく息を吐いた。

「わかった。ヒーロー殺しを見つけたら、すぐに連絡する」

「お願い」

ヒーロー殺しを探すのは止めないが、もし見つけたら誰かに連絡が入るようになった。

それが私か他のクラスメイトかはわからなくても、すぐに警察やヒーロー事務所に伝えられるだろう。

とにかくこれで数少ない友人が大怪我したり、殺される事態は避けられるはずだ。(ステインは他のヒーローに捕まるか、飯田君とは出会わないのが理想)

だが未来は誰にもわからない以上、今は飯田君の無事を心の中で祈るのだった。

少々不穏な気配があったものの、一年A組の職場体験が始まった。

正直かなり悩んだが、ナンバーツーヒーローのエンデヴァーの事務所に行くことになる。

それに関しては、別に深い意味はない。

業界最大手で個性の幅も広いので、合理的だという理由で選ばれたのだ。

私の個性は使い勝手が良く、様々な局面への対処が可能である。

そして大手の事務所なら活躍の機会だけでなく、学ぶことも多い。

普通に良い選択だったのではないかと思う。

それはともかく、事務所の受け付けを殆ど顔パスで通り抜ける。

久しぶりに再会したプロヒーローのバーニンさんに軽く挨拶して、そのまま奥に案内された。

ちなみに職場体験は私だけではなく、轟君も一緒だ。

案内役を含めて三人で廊下を歩いて、執務室に移動する。

特に問題なくエンデヴアーと面会できたのは何よりだ。

しかし、相変わらざるの強面顔であった。

「待っていたぞ！ 焦凍！^{しょうと} 斥流！

ようやく覇道を進む気になったか！」

立派な父親やヒーローとして、家族に尊敬される目標を定めたはずだ。

あの日の相談は一体何だったのかと言わんばかりの、色々駄目なお父さんに思える。

「アンタが作った道を進む気はねえ。俺は俺の道を進む」

案の定、轟君は炎熱系の個性持ちなのに、家族関係はキンキンに冷えきっている。

私にとっては見慣れた光景で、バーニンさんは慣れているらしい。

今は職場体験中だし他所の家なので珍しく空気を読んで黙っているが、ナンバーツー

ヒーローは突然大声をあげた。

「ふん！ まあいい！ お前たちも準備しろ！ 出かけるぞ！」

「何処へ？」

「ヒーローというものを見せてやる！」

ここで私は、エンデヴァーがこれから何をするのかを何となく理解する。

彼は息子に、自分がどれから優れたヒーローかを見せようとしているのだ。

父親は背中で語ると聞いたことがあるが、それは現代よりも昔の考え方のはずである。

しかし家族を思つての行動なのは明らかで、たとえ小さな一歩でも前に進んでいくつもりだ。

二人のやり取りを外から眺めている私は口を出さずに、ただ空回りしてる感が否めないと思つたのだった。

職場体験が始まってから、毎日のようにパトロールに出ている。

そして市内に起きた事件や事故を、迅速に解決していく。

エンデヴァーは轟君に良いところを見せたいようだが、互いの温度差ゆえに全く伝わっていないような気がする。

「やっぱり斥流は凄いな」

少し遅れて現場に駆けつけた轟君は、コンビニを襲ったヴィランたちを重くして動けなくしている私を見つける。

「そんなことない。エンデヴァーが協力してくれたおかげ」

視界から外れると、ヴィランにかけた個性が強制的に解除される。

エンデヴァーが上手く立ち回ってくれたおかげで、周囲の人にも怪我がなく速やかに捕獲できたのだ。

「見たか！ 焦凍しやうとうおおおお!!!」

しかし背後のエンデヴァーが息子を前に得意気にドヤっているのが、馬鹿でかい声からヒシヒシと伝わってくる。

今までの轟君は、父親のヒーロー活動を殆ど見たことがない。

この機会に、立派で尊敬できる父親だと思ってもらいたいのだろう。

けれど元々彼はあまり感情を表に出さないし、私も何を考えているのか良くわからない。
い。

なので、父に対する好感度は不明である。

何にせよ今は決して高いとは言えないため、どうしたものかと考える。

「私は重力を操作するから、この場から動けない。」

轟君は視界を塞がないように、ヴィランの捕縛をお願い」

「おう、任せておけ」

事務所には連絡したので、増援や警察がそのうち到着する。

だが迅速に犯人を確保できて轟君の到着も早かったので、少し時間がかかりそうだ。

続けて私は、強面の表情には出さないが内心で困っているであろうエンデヴァーに声をかける。

「エンデヴァー、轟君に捕縛のお手本を」

「うむ！ ヴィランの捕縛は、ヒーローの基本だ！」

エンデヴァーは、すぐに私の意図に気づいたようだ。

息子である轟君に近づき、真面目に指導を始めた。

だがその光景は父子ではなく、まるで会社の先輩と後輩である。

相変わらずコミュニケーションの取り方が不器用ではあるが、それでも少しずつ歩み寄っているのは間違いない。

いつか仲直りできたなら良いなと思いつつ、ヴィランを逃さないために重力操作を続ける。

しかしそれから間もなく、管理区域内で他のヴィランが暴れていると報告が入ってくる。

私はその場から動けないので、指導中だったエンデヴァーが向かうことになり、渋い

顔をしながら一時的に轟君と別れるのだった。

保須市の事件

職場体験が始まってから数日が経過すると、エンデヴアーの事務所から保須市ほすに人員が派遣されることになった。

何処かに潜伏しているヒーロー殺しを捕らえるため、パトロールや捜査を強化するためらしい。

全国指名手配中の悪名高いヴィランは放つて置けないし、相手の実力は未知数である。

トップヒーローでも不覚を取ることがあるだろうから、万全を期したいのだろう。

その点、エンデヴアーの事務所は業界最大手で人員にも余裕があるので、援軍に持つて来いだ。

ちなみに私と轟君は、ナンバーツーヒーローのサイドキック（仮）という名目で同行させてもらうのだった。

移動中は、何も問題はなかった。

しかし現地に到着して、私たちは大いに驚く。

何しろ夜の保須市は、火災や戦闘が頻発していたのだ。

正直一目見ただけでは、何が起きているのかが良くわからない。

なので私が目を凝らして状況把握に努めていると、轟君が何かに気づいたようにスマートフォンを取り出した。

「どうしたの?」

「緑谷から連絡だ。……これは?」

驚きの声をあげた轟君に、嫌な予感がした。

私は悪いとは思うが、横から彼のスマートフォンを覗き込ませてもらう。

すると、保須市地図にピンが立てられていた。

「ヒーロー殺し?」

「緑谷が何の意味もなく、送ってくるはずはねえ。

可能性は高いな」

職場体験に出発する直前、飯田君に伝えた内容は緑谷君にも聞こえていた。

絶対にそうだとは言えないが、ヒーロー殺しを発見した可能性は高い。

できることなら、今すぐに向かうべきだろう。

「エンデヴァー! ヒーロー殺しを見つけた!」

「何だと!」

そうエンデヴァーに伝えた直後、何処からか悲鳴が聞こえてきた。声の大ききからして、すぐ近くだろう。

「この忙しいときにもー！」

自分の体は一つしかない。

ただでさえ混沌としている保須市なのに、全てを救うことなどできない。

(選ばないと駄目だ)

緑谷君は入学よりも強くなったが、ヒーロー殺しに勝てるとは思えない。

しかし彼は自分と違って頭が良いので、無策で闘いを挑むことはないだろう。

ならばきつと遠くから様子を窺うだけで留めて、今は何処かに身を潜め、増援が駆けつけるのを待っているはずだ。

体育祭で友人を助けるために自ら不利な勝負を挑んでしまったが、流石に命を捨てるような真似はしないと信じたい。

それに緑谷くんも成長しているので、絶望的な状況に陥ろうとも時間を稼ぐぐらいいはできるだろう。

そのように考えた私は、轟君を真っ直ぐに見つめる。

「轟君は緑谷君を助けに行つて、私が駆けつけるまでの時間稼ぎをお願い！」

正直、自分判断が正しいかはわからない。

けれど不確定なヒーロー殺しよりも、目に見える危機に晒されている一般市民を助けるの重要だ。

轟君も迷ったあとに父親の顔を見て、エンデヴァーは静かに頷く。

「焦凍しょうと！ 友人を助けに行つて来い！」

大丈夫だ！ 俺たちもすぐに向かう！」

「親父。斥流。わかった。行かせてもらおう！」

轟君は最後に、私に視線を向ける。

そして次に振り返らずに前だけを見て、全力で走つていった。

父親が息子を信じて送り出す、感動的な場面だ。

できれば彼が見えなくなるまで見送りたいが、残念ながらそんな時間はない。

私はエンデヴァーに同行し、悲鳴が聞こえた場所に急ぎ駆けつける。

するとそこには、雄英高校の襲撃事件で見かけた脳みそ丸出しの怪物が居た。

さらに混乱して逃げ惑う一般市民に、今まさに襲いかからんとしている。

しかしそうはさせまいと、ヒーローコスチュームを着用したお爺さんが民間人を守るために、三次元的な高速戦闘を行い翻弄していた。

ジェット噴流のように空中を移動する彼は、相当な腕前のようなだ。

それでも脳無は並外れた耐久力を持っていて、まともなダメージが入っているように見えない。

「止めとけ！ こらあー！」

お爺さんの個性は不明だが、空中を自在に飛び回って蹴りを放っている。

私は当たる直前に怪物の重力を増加させて、敵の行動を完全に封じ込める。

「エンデヴァーー！」

「おうよ！ 燃えろ！」

すると絶好の機会にエンデヴァーは燃え盛る炎を放ち、脳無はたちまちに全身を火に包まれて苦悶の声をあげる。

どうやら熱には耐性がないようで、普通に大ダメージを受けているようだ

お爺さんも途中で援護に気づき、空中で軌道変更して着地する。

襲われていた一般市民も無事のようにだ。

状況がまだよくわかっていないが、当面の危機は去ったと判断して良いだろう。

「ヒーロー殺しを狙っていたんだがな。タイミングの悪い奴だ」

流石はナンバーツーヒーローだ。

どんな状況でも決して動揺せず、堂々と不敵な笑いを浮かべている。

「存じ上げませんが、そこのご老人。

あとは俺に任せておけ！」

「アンタは？」

エンデヴァーはそう言って、元ヒーローと思われる謎の老人に近づいていった。

「マジ!？」

「何でここに!？」

助けた一般市民から驚きの声が出るが、エンデヴァーは堂々と答える。

「決まっている。ヒーローだからさ」

本当はさっき言った通りで偶然だ。

しかし目の前で人が襲われていたら、ヒーローとして見て見ぬ振りはできない。

(緑谷君と轟君は大丈夫かな)

脳無が片付いたのなら、友人が心配なので私も向かいたところだ。

けれどエンデヴァーが放った炎が消えると、傷を追った怪物が姿を見せる。

まだ戦闘不能にはなっておらず、無駄にしぶといと思った。

「アンタ、気をつけろ！ コイツは！」

お爺さんが警告を発する。

瞬間、脳無はまるで爆発するかのように、強大な炎を全方位に放出した。

「吸収と放出か！　だが、吸収時にダメー지가残るとは！」

エンデヴァーは炎を操作して消し去り、お爺さんは脳無を良く観察しながら空を飛んで逃れた。

私は二人の一般市民を抱きかかえて重力を操作し、焼かれる前にその場から高速で離脱する。

「違うぞ！　轟とどろき！　コイツ、個性を複数持つてる！」

「なるほど！　そういうことか！」

取りあえず助けた市民の二人をゆっくり地面に下ろし、私も加勢しようとしたヴィランの方向に顔を向ける。

だが既に脳無は地面にめり込んでおり、その上にお爺さんが立っていた。

エンデヴァーの加勢も必要なかったようで、もしかしたら彼は歴戦の戦士なのかも知れない。

「斥流。ご老人。そのヴィランは、うちのサイドキックに任せる。」

向こうの加勢も、このエンデヴァー一人で事足りる！」

たまたま今回のヴィランが弱かったのか、それともエンデヴァーやお爺さんが強いのかはわからない。

けれど他にもコレと同じ強さなら、確かにナンバーツーヒーローだけでも何とかかなりそ

うだ。

「エンデヴァー、もし何かあったら連絡を」

「わかっている。斥流も気をつけることだ」

そういうわけで私とお爺さんはエンデヴァーとは別行動になり、急ぎ緑谷君と轟君の元に向かう。

ヒーロー殺しがまだ現場に残っているかはわからないし、私のスマートフォンには何の連絡も入っていない。

それでも万が一のことを考えて油断はせずに、元プロヒーローっぽいお爺さんを案内するために先行し、目的地に向かって一直線で移動する。

二人共空を飛んでいるので地形に左右されず、あつという間に現場が見てきた。

いきなり路地裏に入るのは危険だと判断し、少し離れた道路に着地する。

だがここでお爺さんが、何かに気づいたように大声を出す。

「なっ、何故お前がここに!?!」

「グラントリノ!?!」

目的地である路地裏からは、緑谷君、飯田君、轟君の三人だけでない。

さらに見知らぬヒーローらしき人も同行しているし、ついでにテレビで見た人物像とそっくりなヒーロー殺しが黒鞭に捕縛された状態で、引きずられるように大通りに現れ

たのだ。

ちなみにステインは気絶しているようで、完全に白目をむいていた。

「新幹線で座つてろつて言つたらー！」

どうやら謎のお爺さんはグラントリノと言うらしく、彼は凄まじい速度で飛び出して、緑谷君の顔面に蹴りを打ち込んだ。

「誰？」

「僕の職場体験の担当ヒーロー、グラントリノ。でも、何で？」

一応手加減はしてくれていたようで、緑谷君はすぐに起き上がってきた。

飯田君と謎のヒーロー以外は大した怪我もなく、心配した割りには意外と元気そうである。

「その少女に案内されてな」

会話に入るタイミングが掴めなかったが、グラントリノ紹介してくれた今がチャンスだ。

取りあえずコホンと咳払いを行うと、ようやく皆が私に気づいたようで大きな声をあげる。

「斥流さん！」

「どうも」

二名ほど怪我はしているが、歩くのには問題はなさそうだ。

病院での治療が必要ではあるけれど、この程度なら後遺症は残らないだろう。

「まあようわからんが、取りあえず無事なら良かった」

「グラントリノ、ごめんなさい」

緑谷君が職場体験の担当ヒーローに頭を下げるが、本当に無事で良かった。

ヒーロー殺しも黒鞭で拘束されているし、どうやら私の心配は杞憂だったようだ。

「この辺りだ！」

今度は何処からか、大勢の声と足音が聞こえてきた。

私たちは条件反射的に、そちらに顔を向ける。

「エンデヴァーさんから応援要請を承ったんだが——」

「子供？」

「酷い怪我じゃないか！ 今すぐ、救急車を呼ぶか！」

エンデヴァーの要請を受けたのか、多くのヒーローが駆けつけてくれた。

しかし彼らは自分のように、現場に到着した頃には既に事件は解決していたのだ。

個性によって縛られたヒーロー殺しを見つけて、思いつき驚いていたのだった。

緑谷君の黒鞭ではなく捕縛用の縄に切り替えて、救急車と警察の手配が進められる。

そんな中で飯田君が緑谷君と轟君に謝罪していた。

私は完全に部外者なため、遠くから眺めるだけだ。

それでも会話の内容は耳に入ってくるが、彼はヒーロー殺しに復讐するつもりだったらしい。

けれど犯罪者を捕まえるのは正しい行いなので、そこまで重く受け止めなくてもと思った。

そんなめでたしめでたしの雰囲気だったが、そこで突如空を飛ぶヴィランが急速接近してくる。

気づいたグラントリノが警告を発した。

「伏せろー!」

だが言われた通りに伏せた私以外は、皆全く反応できていない。

空から飛来した脳無が背後から緑谷君を驚掴みにして、急速に飛び去っていく。

けれど、黙って見送るつもりはない。

起き上がった私はヒーロースーツのポケットからコインを何枚か取り出し、目標めがけて高速で射出する。

「撃ち抜け!」

状況判断能力に優れていたおかげか、脳無はまだあまり離れていない。

目視できる距離ではあるものの、十分な威力を得るために普段よりも重力強めでコインを撃ち出した。

そして軌道は、自らの意思で自由に換えられる。

複数の玩具のコインがヴィランの胴体を貫通するだけでなく、すぐに戻ってくる。外から見ると、まるで格闘ゲームの空中コンボのようだ。

あらゆる角度から攻撃している割に、緑谷君だけは器用に避ける。

だが短時間のうちに、空を飛ぶ脳無を何度も打ちのめす。

結果、敵の意識を刈り取るだけでなく、翼も穴だらけになって落下する。

地面に激突する前に重力を逆転させて勢いを落とし、捕まっていた緑谷君も一段階の抑制解除を行った私が駆けつけ、空中で引き剥がした。

取りあえず怪我をしていないようなので、ホツと息を吐いて軽やかに着地する。

「危なかった」

「あつ、ありがとう。斥流さん」

「どう致しまして」

取りあえず友人を助け出した私は、いつまで抱えているわけにはいかない静かに地面におろした。

そして、まだ辛うじて生きている脳無を油断なく観察する。

だがここで皆の視線が外れたヒーロー殺しが、いつの間にか縄を切つて自由になつていた。

けれど、武器を持つて暴れているわけではない。

「偽物が蔓延る！ この社会も！」

彼は重症の身でありながら二本の足で立ち、鬼気迫る表情で大声をあげていた。

「いたずらに力を振りまく！ 犯罪者も！ 肅清対象だ！」

周りのヒーローは、完全に気圧されている。

「全ては！ 正しき社会のために！」

ちなみに私にとっては理解不能の戯言なので、正直困惑しつぱなしだ。

「偽物は！ 正さねば！ 誰かが！ 死に染まらねば！」

ヒーローを！ 取り戻さねば！」

ふと気づくと、いつの間にかエンデヴァーも駆けつけていた。

けれど彼まで足を止めて、ヒーロー殺しの気迫に飲まれている。

「来い！ 来てみる！ 偽物ども！」

何にせよ、このままヴィランの演説を聞き続けたくはないし、プロヒーローが止められないのは割とヤバイのとは思った。

そこまで考えた私は体が勝手に動き、さらにもう一段階の抑制解除を行う。

そして勢い良くステインに突進する。

「俺を殺していいのは！ 本物のヒーロー——」

煌めく光の翼が地面を滑るように移動し、一瞬だけ保須^{ほす}市の夜の闇を明るく照らした。

まるで流星のように高速で飛来した私は、ヒーロー殺しの顔面に拳を叩き込む。

「いい加減に！ 黙れ！」

「だげづええ!!?」

手加減したので死にはしない。

しかし彼は吹き飛ばされて、道路を何度か跳ねて転がっていく。

良くわからない演説を聞かされて若干虫の居所が悪い私は、ついカツとなつて大声を出す。

「私はお前ほど急ぎすぎてもいなければ！ ヒーローに絶望もしてもいけない！」

「につ、……二代目オールマイト!?!」

何処かで聞いたような映画の台詞だが、咄嗟に出してしまったので仕方ない。

虫の息のステインが、倒れながらも顔だけをこちらに向けてくる。

「につ、二代目なら、俺の考えを理解——」

「ヒーローだつて人間だ！ ときには失敗するし、助けられないこともある！」

それをヴィランに落ちたお前が、肅清しようなんて！ エゴだよそれは！」
私はヒーローが何とかしてくれるなら放置するし、彼らに頼らなくても生きていくために修業を続けている。

ちなみに一般人なので命を懸けて市民を助ける義務は発生せず、自分は安全な場所で好き放題に言っているだけであつた。

しかし瀕死のステインは口答えせずに、黙って聞いていた。

「すつ、全てのヒーローや市民が、二代目と同じ志を持っていれ、……ば」
彼に喋れたのはそこまでだつた。

無理をしていたのか痛みで意識を失つたらしく、死んではいないが倒れたまま動かなくなつた。

やがて救急車が到着したので、病院に行けば助かるだろう。

少々すつきりしない終わりではあつたが、事件は解決したし良しとする。
私は再び封印を施して元のロリ体型に戻ると、大きく息を吐くのだった。

期末試験

保須市でのヒーロー殺しの事件は解決した。

だがその際に、エンデヴァーと私が協力して捕らえたことになる。

実際には轟君と緑谷君と飯田君の三人のおかげだが、警察関係者と相談して伏せることになったのだ。

なお、何故か自分が関わっているのかと言うと、ヒーロー殺しの演説中にぶん殴ったせいである。

誰かがカメラで撮影していたようで、それがネットにアップロードして世界中に拡散された。

もはや自分が関わってないとは言い逃れができないほどに、決定的な状況証拠なのだ。

ついでに現場のプロヒーローたちは、彼の気迫に飲まれて動けなかった。

しかしただ一人空気を読まずに、ヴィランをぶっ飛ばしたのが私である。

ヒーロー免許を持っていない学生でも、名前だけは広く知られている。

無駄に実績がある一般人である程度は大目に見てもらっているため、ステインを捕ら

えても問題なしだ。

それに今さら功績が一つ二つ増えたぐらいで、日常生活が激変したりはしない。

雄英高校を卒業するまでは、ヒーロー（仮）として授業の一環でちよこちよこ活動はするだろうが、それだけだ。

免許を修得して卒業したあとは、野となれ山となれなので気楽なものだった。

ちなみに現在はアップロードと削除のイタチごっこで、隠れていた悪意はステインに感化されて一齐に動き出すとか言われているが、その辺りは公安警察やプロヒーローが頑張つて何とかするだろう。

学生の身である私には、基本的に関係も影響もないので我関せずを貫くのであった。

少しだけ時が流れて、私は職場体験を終えて雄英高校に戻ってきた。

いつも通りに登校して一年A組の教室に入ると、皆が各々のヒーロー事務所でどんなことをしたかを語り合っており、自然とヒーロー殺しの話題になる。

轟君と緑谷君と飯田君が中心ではあるが、やはり私にも声がかかった。

エンデヴァーと共闘して倒したことになるものの、自分は最後に一発ぶん殴っただけだ。

なので自分の席に座って教科書を開きながら、私はどう答えたものかと頭を悩ませ

る。

「殆どエンデヴァーがやって、私はサポートしただけ」

そんな感じに無難に答えておいた。

脳無と戦つたり増援のヒーローを呼んだのは彼だ。

保須市の事件では、一番活躍しているのは間違いない。

それに自分がサポートに徹していたのは本当なので、嘘は言っていないのだった。

夏休みには合宿がある。

しかし、その前に期末テストを受ける必要があつた。

予習復習は毎日きちんとやっているが、筆記と演習の二種類あるし気は抜けない。

ルームメイトである麗日さんと一緒に、勉強を頑張つて決して油断せずに試験に望む。

同居人はあまり勉強が得意ではないようなので、私が少し教えることになった。

こつちも見直しになるので構わないし、数少ない友人とコミュニケーションを取るのも悪くはない。

そんなこんなで三日間に及ぶ筆記試験を終えて、次は演習をすることになった。

話を聞く限り、前年度まではロボット相手の戦闘だった。

しかし今年は、二人一組と教師一人で対決する実戦に近い形式に変わったらしい。ちなみにA組は特別枠の生徒が一人居て、二十一人だ。

どうしても割り切れずに、余りが出てしまう。

結果、また私だけ別枠で行うことになったが、基本的に相性が悪い教師との組み合わせだ。

試験に挑む前から、先行き不安なのだった。

なお、私の番が来るまではカットさせてもらおう。

皆は凄く頑張っていて、色んなドラマがあつたという結果だけが残る。

それはともかく、時は流れて最終戦になった。

私は一段階だけ抑制を解除して、試験会場である市街地演習場に移動する。視界が開けていないビル街なため、この時点で自分の個性とは相性が悪い。

私が冷静に状況を分析していると、周囲に大きな声が響き渡る。

「斥流チーム！ 演習試験！ レディーゴー！」

チームと言いつつ、実際には一人っきりの孤独な戦いが今始まった。

「手加減なしのプロヒーロー二人と戦う！ 酷い苛め！」

他の生徒の試験を見た限りでは、教師に体重の半分の重りをつけていた。

しかし私にはプロの中でも上位のヒーローを呼んで、全力で戦わせるのだ。静かに耳を澄ませれば誰が相手かと、おおよその位置はわかる。

なので比較的冷静ではあるが、やりにくいヒーローには違いないので、つい溜息が出てしまう。

すると目の前の地面に影が差して、私はそれを確かめるために顔をあげる。

「やあ、斥流ちゃん。久しぶり。」

あつ、それとも流星ヒーロー、シューティングスターって呼んだほうがいいかな？」

ランキング三位のプロヒーロー、ホークスである。

彼は市街地演習所の上空を飛び、私を発見したようだ。

飄々とした態度でも決して油断せずに、こちらに話しかけてくる。

相変わらず何を考えているのか、良くわからない。

だが、すんなり合格させてもらえないのは理解している。

「お好きにどうぞー！」

何にせよ、今の彼は敵だ。

私は懐からコインを取り出して、高速で射出した。

「おおっと！ 怖い怖い！」

彼も背中の中の羽を自在に操り、すぐに迎撃に移った。

空中でぶつかり合つて火花を散らす、私はすぐに背を向けて走り出す。

（私は視界が遮られると解除される。でも、ホークスは違う）

どういう理屈か不明だが、ホークスの羽は見えてなくても自在に操れるのだ。

ビル街では私のほうが不利なため、彼を撃ち合いで倒すのは諦めたほうが良いだろう。

「逃げるの？ 判断が早いね」

当然のように後を追ってきたので、駄目で元々でホークスに加重をかけようと試みる。

だがすぐに彼はビル陰に隠れ、個性の範囲外に逃れてしまう。

「けれど、ピンチはチャンス」

いくら私を捉えているとしても、切り離された羽は本体よりも動きが遅い。

一段階の抑制解除には追いつけないため、逃げるチャンスでもある。

今のうちにゴールに駆け込めば、演習試験は合格だ。

ここは逃げるが勝ちで、私は全力で走り出す。

雄英高校の市街地演習場はかなり広いが、今の自分ならすぐにゴールに辿り着けるは

ずだ。

けれど、わかってはいたが世の中はそんなに甘くない。

「待っていたぞ！ 流星ヒーロー！ シューティングスター！」

「うわあ」

建物の影から飛び出してゴールが視界に入った瞬間、プロヒーローのエンデヴァーが仁王立ちして待ち構えていた。

予想はしていたが、取りあえずは慌てて急停止する。

「悪いね。シューティングスター」

最初からゴール前で戦うつもりだったようだ。

後ろから悠々と追いついたホークスがゆっくりと降下して、そのまま私の背後に着地する。

（一人ずつ倒すべきだった？）

だがあのままホークスと戦っても、向こうはまともに相手はしなかっただろう。

真正面からの戦闘は私が有利だが、時間制限がなくなるまで逃げ回れば相手の勝利なのだ。

しかも今の自分は、ヒーローを演じている。

市街地への被害は可能な限り抑え、ヴィラン役と戦わなければいけない。

なので私は怯まずに気合を入れるために、現状できることを大きな声で口に出した。「戦闘を行いつつ、チャンスがあればゴールに向かう！」

他にも色々な作戦があるだろうが、私にとってはこれが現状の最適解だと判断する。試験を突破する条件、は最初から提示されていた。

向こうも私がどのように行動するかは、予想できていただろう。

「ならば！ 乗り越えてみる！」

エンデヴァーが両腕を十字にクロスさせて、両手両足を大の字に開いた。

「受ける！ プロミネンスバーン！」

熱線を極限まで圧縮して放射する必殺技だ。

彼は市街地への被害など、お構いなしで攻撃してきた。

まともに受けたら、常人は間違いなく灰になってしまう。

そして私の柔肌はともかく、耐熱性に優れたヒーローコスチュームも燃えてしまうかも知れない。

一瞬、空中に逃れることを考えたが、背後のホークスにここぞとばかりに狙い撃ちにされそうだ。

ならばと、抑制を二段階まで解除して地面をしっかりと踏みしめる。

「吹き飛ばす！」

私は全力で拳を振るうことで、凄まじい突風を発生させる。エンデヴァアの奥義と真つ向勝負であり、互いの一撃が衝突した。しばらく拮抗したのちに、相殺に成功する。

だが衝突の中心地は、周辺への被害が酷いことになっていた。かつては市街地演習所だったが、今は瓦礫の山である。

しかしおかげで巻き込まれることを恐れて空に飛び上がったホークスが、激しく乱れる気流に翻弄されていた。

ほんの少しであっても自由に動けなくなった今が、絶好の機会である。

「好機―」

「行かせん―」

技を放ったあとに体制を立て直したエンデヴァアが、今度は拳から炎を放射する。

横を抜けるためにゴールを目指して走る私を、カウンターののように直接殴りつけてきた。

ここで少しでも時間をかけると、ホークスが参戦してくるのは確実だ。

時間も限られているし、また二対一の戦闘に戻るのには避けたいところである。

だが私を迎え撃つエンデヴァアだが、身体能力を増強する個性ではない。

肉弾戦なら、こっちのほうが有利だ。

少なくとも抑制解除を二段階まで行えば、本気のオールマイトと真正面から殴り合えるのは確認済みである。

彼の攻撃を寸前で見切って避けた私は、背後のホークスを視界に収めた。

そして彼に加重をかけて、真つ逆さまに地面に落とす。

「ちよつ！ エンデヴァーさん!? 避けてくださいい！」

「おい！ こつちに来るな!？」

いくらホークスでも、超重力からは逃れられない。

このまま地面に激突すれば、いくら手加減しても大怪我は確定だろう。

なので咄嗟にエンデヴァーがカバーに入り、間一髪で受け止める。

しかし、私の攻撃はまだ終わっていない。

「シューティングスターちゃん!？」

「どうも」

ホークスは私がエンデヴァーを追い抜いて、ゴールを目指すと考えていたのだろう。

だが実際には炎を纏った大男の影からひよつこり顔を覗かせたので、ナンバーツーヒーローも揃って驚愕の表情を浮かべていた。

おかげでほんの一瞬とはいえ二人は硬直し、その隙に悠々と手錠をかけられた。

「私の勝ち」

今の私はオールライト並の速さで動ける上に、殆どゼロ距離まで接近を許した。さらには二人揃って無防備な体勢なため、諦めてお縄につくしかないのだ。

「斥流チーム！ 勝利条件達成！」

審判の勝利宣言も周囲に響き渡り、私の合格が告げられる。

負けたエンデヴァーは炎熱を吹かして、満足そうに笑う。

「良い動きだったぞ！ シューティングスター！」

「はあ、死ぬかと思つたわ」

そしてホークスは、超重力での落下が恐ろしかったようだ。若干青い顔をしている。

確かに必死に逃げようとしてもびくともせず、あのまま地面に叩きつけられたら大怪我確定だった。

怖がられても当然である。

「オールライトに迫るパワー！ この目でしかと見せてもらった！」

「本当に。流石は新世代の平和の象徴ですわ」

シューティングスターに名称が変わってそちらを呼んでくれたが、世間の評価は二代目オールライトのようだ。

何とも渋い表情になってしまったものの、演習試験は突破できた。

今は二人の言うことは気にせず、赤点を取って補修を受けずに済んだことを、素直に

喜んでおくのだった。

シヨツピングモール的事件

少しだけ時が流れて、期末テストが終わった。

そのあとに相澤先生あいざわから説明を受けたが、赤点でも林間合宿に行けるらしい。

一人の欠員もなくA組の皆で行けるので、一安心である。

ちなみに次の休みに、全員でシヨツピングモールに行くことになった。

けれど、私は欠席させてもらった。

休日の大型店舗はとても混雑するのだ。

昔ならともかく今の私は有名人で、きっと皆に迷惑をかけてしまう。

それに、お金は節約するに越したことはない。

なので孤児院からの仕送りを管理している麗日うららひさんに、必要な物があれば購入してき

て欲しいとお願いしておいた。

お出かけを見送った私は一人で学習机に向かつて、真面目に勉強をしていた。

やがて一段落したのでお茶を飲んで一休みし、椅子にもたれて息を吐く。

「……そろそろ行くかな」

椅子から私はクローゼットの前に移動して、あまり袖を通していない私服を取り出

す。

フオツションセンスにはあまり自信はないため、目についたものを適当に選んでいく。

「変装すれば、大丈夫なはず」

芸能人が変装して出歩いているのは、良くある話だ。

なので私も顔を隠せば、人混みでも目立たないかも知れない。

流石に大人数で行動すればバレるだろうが、遠くから見ているだけなら大丈夫だ。

何だかんだで一年A組の皆のことは気に入っているし、たまには外出するのも悪くない。

着替え終わった私は戸締まりをして、しっかりと顔を隠してから、麗日さんたちが居るショッピングモールに向かうのだった。

公共交通機関を乗り継いで大型ショッピングモールにやって来た私は、超感覚を頼りにクラスメイトを探す。

顔を隠して移動してきたので見た目通りの小さな子供として扱われ、目立たないのは良いことである。

とにかく正面入口を抜けて店内に入ると、疲れたのかベンチに座って休んでいる緑谷

君を見つけた。

「……………あれは？」

私は声をかけてびつくりさせようと一歩踏み出したが、彼は一人ではなかった。フードを被った誰かと、何かを話しているようだ。

最初はわからなかったが、じつと観察すると何処かで見た覚えがある。

「死柄木弔？」

雄英高校を襲撃したヴァイラン連合の一人が、死柄木弔しがらきとむらだった。

護送中に脱走して行方を眩ませていたのに、それが何でこんな場所に居るのだろうか
と首を傾げる。

だがそんな彼は、緑谷君の首に手をかけていた。

個性を発動させて、いつでも殺せる状況である。

「彼に私の正体がバレると不味い」

相手はヴァイランなので正体がバレたり警察が来たら、緑谷君を人質にするか殺しそう
だ。

シヨッピングモールで遭遇したのは偶然ではあるが、今は隠れて様子を窺うしかない
と判断する。

やがて麗日さんが現れて緑谷君に話しかけたときには、どうなるかと緊張した。けれど幸い何も起きずに、無事に解放された。

少し咳き込んで顔色も悪いが、怪我もせずに生きているので良しだ。

「待て！ 死柄木弔！」

余程苦しかったのか、緑谷君は汗をかき喉を押さえている。

そして、去りゆくヴィランを必死に呼び止めた。

「オールフオーワンは！ 何が目的なんだ！」

「……知らないよ」

至極あつさりとした答えを返す。

死柄木はそのまま歩いて行く。

「それより気をつけとけよ。次会うときは、殺すと決め——」

だが、彼がまともに喋れたのはそこまでだ。

今まで隠れていた私は、抑制を一段階解除して勢い良く飛び出す。

そのままヴィランの横つ面をぶん殴って、吹き飛ばして壁に激突させる。

「がはっ!? てっ、てめえは！」

「流星ヒーロー。シューティングスター！ 別に覚えなくてもいい！」

ショッピングモールの壁に叩きつけた死柄木弔しがらきとむらに、躊躇わずに加重をかけた。

これで彼は、指一本満足に動かせなくなる。

「斥流さん!？」

「斥流ちゃん!？」

緑谷君と麗日さんが、同時に驚きの声をあげる。

今はヴィランから視線をそらすわけにはいかなないので、顔を向けずに素早く指示を出す。

「二人は通報と、避難誘導をお願い！」

コイツは触れたモノを崩壊させるから、迂闊に近寄るのは危険で拘束も難しい！」

「わっ、わかった！」

「う、うん！」

すぐに二人が率先して動き、周りの人たちも次第に状況を把握していく。

だが平穏な日常にヴィランが潜んでいたことを知らされ、動揺や混乱が大波のように広がっていく。

「おっ、オールマイトを殺したあとは、てめえの番だ！」

「オールマイトも私も、お前に殺されるほど弱くない」

その気になれば、死柄木^{しがらきとむら}が個性を発動する前に一方的に殴り倒せる。

だがここには未だに避難が完了していない大勢の人が居るし、周辺被害をあまり広げ

るのはよろしくない。

なので凶悪なヴィランを捕らえるだけで、良しとしておく。

「ちっ！ そのようだな！ ここは退くしかねえか！ ……黒霧イ！」

指一本満足に動かせないのに根性で喋り続けるのは凄いなと思っていると、私の背後に何者かの気配を感じた。

それと同時に、大勢の悲鳴が響き渡る。

「さあ！ どうする！ ヒーロー様よオ！」

「お前は、見下げ果てたクズ」

「ありがとう！ ヒーロー！ 最高の褒め言葉だぜ！」

死柄木弔は黒霧に命じて、ショッピングモールに他のヴィランを呼び寄せたのだ。
しがらきとむら

視線はそらせないので気配で判断する限り、きつと脳無だろう。

緑谷君たちがヒーローと警察に通報しているし、避難も始まっている。

しかしこの状況は非常に不味く、下手をすれば大勢の犠牲者が出てしまう。

私には放置することはできず、覚悟を決めて大きな声を出す。

「やるしかない！ ……変！ 身！」

さらにもう一段階解放することで、本気のオールマイトレベルにまで身体能力を高める。

目の前のヴィランは、ここで捕らえておきたいが仕方ない。

視線をそらして黒霧のワープゲートで呼び出され、今まさに破壊活動を始めようとしている一体の脳無に狙いを定める。

「させない！」

混乱して逃げ惑っている人々の頭上を飛び越え、巨大な脳無の目の前まで一瞬で移動する。

そして下顎を勢い良く蹴り上げて、頑丈で重い体を上空に吹き飛ばす。

「重力加速！・三倍！」

跳躍と同時に重力を逆転させて、高速の蹴りを無防備な脳無に叩き込む。

久しぶりに私の服が圧縮された大気の熱で燃えたが、そこは非常時なので諦めるしかないのだった。

やがて煌めく流星になった私は地上にふわりと舞い降り、ボロ雑巾のようだった瀕死の脳無が、ショッピングモールから少し離れた駐車場に落下する。

もはや動き出す力も残ってないようで、死んではないが痙攣を繰り返すのだった。

戦闘が終わったので、封印をかけ直して幼女体型に戻る。

死柄木弔しがらきとむらを拘束していた場所に視線を向けると、やはり逃げられていた。

「……逃げられた」

怪我人や死傷者を出さずに、ショッピングモールの被害も殆ど出ていない。

けれど首謀者であるヴィランは逃げてしまった。

私は一般人だし、一人では手が回らないので仕方がない。

なので、あとは警察やヒーローに任せるしかないだろう。

だが、それよりも今は他にやることがある。

麗日さんを見つけて、真つ直ぐ駆け寄った。

「麗日さん！」

「どうしたの！ 斥流ちゃん！」

今は避難誘導の真つ最中で、大忙しの彼女の元まで走って行く。

そして、大きな声で呼びかけた。

「服を貸して！」

「えっ!? あつ、うん！ ちょっと待ってて！」

ショッピングモールで、服を色々買い込んでいるのを期待する。

サイズが合わなくて良いので、急ぎ替えの衣服に着替えたかった。

彼女も殆ど下着姿の私を見てすぐに気づいたようで、買い物袋の中身を慌てて確認す

るのだった。

林間合宿

シヨッピングモールしらがきとむらの事件のその後だが、警察とヒーローが懸命な捜索をしても死柄木弔しらがきとむらの足取りは掴めなかった。

残念ではあるが、それは私の役目ではない。

結果的に被害も抑えられたし、服が燃えても全裸にならなかった。

損害賠償も請求されなかったので、良しとしておいたのだった。

それはそれとして、雄英高校の一学期の全課程が終わる。

夏休みに入ったのだ。

本来なら、実家の孤児院に帰るところである。

しかし今年うつらかは麗日うらひさんの下宿先に引き籠もり、長期休みの課題を黙々と進めていた。その途中で逃したヴィランのことを考える。

「うーん、捕まえても逃げられちゃなあ」

死柄木弔しらがきとむらと黒霧くろぎりは捕まえるのに苦労するうえ、護送中に逃走したことがある。

つまり裏で手引したヴィランが居るのは確実で、そいつを何とかしない限りはイタチ

「ごっこは終わらない。

「いつそ心が折るまでボコる？」

ヴィランの心が折れるまで殴り倒せば、犯罪行為を止めて大人しく刑務所生活を送る気になるかも知れない。

「でもまあ、私が気にすることでもない」

しがらきとむら
死柄木弔や黒霧は全国指名手配されている。

警察やヒーローも頑張っているし、一般市民である私と彼らが遭遇する確率は殆どない。

だがショッピングモールでの事件は偶然だとしても、オールマイトと同じで私も標的にしている。

やはり日夜個性と肉体を鍛え続け、万が一に備えておいほうが良いと結論を出したのだった。

長期休みの合間に、雄英高校の林間合宿が始まる。

現地まではバスに乗って移動するのだが、出発してから一時間後に突然停車した。

全員が降ろされて外に出ると、辺りには何も無い山岳地帯である。

けれどそこには既に、関係者一同が待機していた。

「よう！ イレイザー！」

先に停まっていた黒い乗用車から、プツシーキャッツのマンダレイとピクシーボブが降りてくる。

そして一連の流れでポーズを取りつつ、彼女たちは簡単な自己紹介を行う。

「今回お世話になる。プツシーキャッツの皆さんだ」

相澤先生がそう言ったあとに、ヒーローマニアの緑谷君みどりやが大興奮する。

しかし活動日数の話になった途端、ピクシーボブに取り押さえられた。

（でも、あの子は一体？）

マンダレイの隣りにいる少年は、始終ムスツとした顔で私をチラチラ見てくる。

何となく気になったので、言いたいことでもあるのかと声をかけようとした。

けれどその前に林間合宿の説明が始まり、そつちはお預けにして黙って聞く流れになる。

「ここら一带は、私たちの所有地なんだけどね。」

あんたらの宿泊施設は、あの山の麓ね」

「「遠い！！」」

一直線に落ちていけばすぐに着くが、入り組んだ山道を走れば時間がかかりそうだ。

しかし、この時点で皆も何となく察したらしい。ちらほらとバスに戻ろうとしてい

る。

「今は午前九時三十分。」

早ければ、十二時前後かしら？」

この程度ならトップヒーロー二人とガチンコ勝負するより優しいし、面倒になったら飛んでいけばすぐに着く。

相変わらずマイペースな自分は特に動揺もせずに、その場から一步も動かない。

「十二時半までかかったキティは、お昼抜きねー!」

皆は一斉に走り出してバスに戻ろうとするが、相澤先生から無慈悲な言葉をかけられる。

「悪いね諸君。合宿はもう、始まつちまつてる」

続いてピクシーボブが両手を地面に置くと、足元の土が急激に盛り上がる。

それはまるで洪水のように低いところに向かい、一斉に流れ出した。

私は服を汚したくないので、重力操作で難を逃れて空中に留まる。

その様子を相澤先生が、微妙な表情で見ながら口を開く。

「斥流^{せきりゅう}、やり過ぎない程度に皆をサポートしてやつてくれ」

「わかった」

林間学校は成り行きで参加しているだけだが、雄英高校の教師やプロヒーローがわざ

わざとスケジュールを組んでくれたのだ。

マンダレイとA組の皆とのやり取りを聞きながら、ならば邪魔をしないように程々に空気を読んで動くべきだと思った。

取りあえず重力操作によって、崖下まで一直線に落ちていく。そして皆の目の前で逆転させ、足音もなく静かに着地するのだった。

十二時までに突破しないと、昼飯は抜きになる。

そのためには土の塊の魔物を倒しつつ、魔獣の森を抜ける必要があった。

私は相澤先生の指示通りにサポートに徹して、危ないときだけクラスメイトを助ける。

彼らは未来のヒーローで、この程度の危機を切り抜けなければ凶悪なヴィランとは戦えない。

なので林間学校を行い、過酷な環境で皆の個性を伸ばすのだ。

取りあえず私は基本的に何もせず、皆のあとをトコトコ付いていく。

一年A組は決して弱くはなく、チームワークも取れているので魔物の殲滅力も高い。自分が手を貸す機会もあつたが、殆どは彼らだけで何とかしてしてくれた。

やがて日が暮れてきた頃に、ようやく林間合宿の目的地に到着する。

「何が三時間ですかあ！」

「それ、私たちならつて意味！ 悪いね！」

ピクシーボブはあらかじめ合宿地で待っていたようだ。

一年A組の皆が空腹と疲れだけでなく、あちこち傷だらけで地面にへたり込む。

「でも正直、もつとかかると思ってた。

私の土魔獣が、思ったより簡単に攻略されちゃった。

いいよ君ら、特に！ その四人！」

そう言つてピクシーボブは緑谷君、爆豪君、轟君、飯田君を指差す。

さらに若いツバメにツバをつけ始めたり、結婚適齢期がどうかという話まで出る。

私は完全に置いてけぼりなので気にしないが、緑谷君は謎の少年が気になっているらしい。

相変わらず不機嫌そうな表情でこつちをチラチラ見ている子供のことを、率直にプツ

シーキヤッツに尋ねる。

「ああ、この子は私の従兄弟の子供だよ」

マンダレイの紹介を聞く。

すると従兄弟から預かっているだけで、彼女たちの子供ではないらしい。

「ほら、挨拶しな。一週間一緒に過ごすんだから」

しかし、少年はそれでも動こうとはしない。

そこで優しい緑谷君が、ゆっくり近づいていく。

「えと、僕、雄英高校ヒーロー科の緑谷。よろしくね」

子供に手を差し伸べる姿を見て、相変わらずの世話焼きだと思った。だが彼は私たちに背を向け、捨て台詞を口にしながら去っていく。

「ヒーローになりたいなんて連中と、つるむ気はねえよ！」

その様子を見たマンダレイは、何とも困った顔をする。

そして次に私を、じっと見つめた。

「……何？」

「いえ、別に。ただ、冼汰君も大変だなと」

どうやら子供の名前は、冼汰君と言うらしい。

今までの感じから、十中八九で私に関係している。

けれど、正直心当たりは全くない。

A組の皆にも注目されているけれど、本当に知らないのだ。

「私は何も知らない」

他に言うようななかった。

始終マイペースで、嘘をつく性格でないことは良く知られている。

なので、私の発言が事実なのを理解してくれた。
疑問は残ったものの、私たちは本来の林間合宿に戻ったのだった。

怪我や汚れはなくても、昼を抜いたのでお腹は空いていた。

晩御飯は普段よりも量を増やし、美味しくいただく。

次は温泉に入って汗と疲れを洗い流すのだが、その前にプツシーキャッツのメンバーから少し話があると呼び出された。

しかし指定の部屋に到着した私が見たものは、腰にタオルを巻いた緑谷君が気を失った洗汰君に寄り添っている光景だった。

それにヒーローコスチュームを一部脱いだマンダレイの姿もある。

「どういふ状況？」

たった今到着した私としては、困惑しかない。

事情を尋ねると温泉で峰田君が覗きを行い、それを洗汰君が仕切り板の上に待ち伏せして阻止したらしい。

けれどもどうつかり女湯を見てしまい、興奮のあまり足を踏み外して落下する。

緑谷君が咄嗟に空中でキャッチして、事なきを得たということだ。

説明を聞いた私は、とにかく何事もなくて良かったと静かに息を吐く。

「斥流ちゃんを呼んだのは、この子のことでね」

私も気になっていたので、ちようど良かった。

そして、何となく緑谷君に視線を向ける。

「あの、僕は席を外したほうが良くないですか？」

「あまり大勢に言いふらすことではないけど。キミなら構わないよ」

「そういう判断基準なのは、不明ではある。」

しかし私は、人と会話するのは苦手だ。

緑谷君が居てくれたほうが心強い。

そのことを伝えると、彼も付き合ってくれるようだ。

ちようどピクシーボブも、飲み物を持って部屋に入ってきた。

「この子の親はヒーローなんだけど。昔、斥流ちゃんに助けられてね」

「えっ？」

私と緑谷君は同時に驚いた。

次に飲み物を渡してくれたピクシーボブに、視線を向ける。

「全国指名手配中の凶悪ヴィラン、マスキュラーって覚えてない？」

「ええと、……多分」

ヴィランとの戦闘はいつも短時間で終わるし、刑務所送りになるので二度と会うこと

もない。

そもそもあまり興味がないうことを覚えていられるほど、私はそこまで賢くはなかった。

「とにかくそこで斥流ちゃんは、洗汰君の両親を助けたの」

話している内容について、何となくは理解はできた。

「でっ、それ以来、洗汰君は斥流ちゃんに憧れててね。」

わざとヒーローを毛嫌いしたりと、色々拗らせちゃったの」

子供が拗らせるのは珍しくないが、ヒーローに興味がないところまで真似るのはどうかと思う。

けれど洗汰君の心情は、自分に憧れるという一点以外は何となくだが想像がついた。

「そういうわけだから言葉通りに受け取らず、それとなく気にかけておいて欲しいの」

「わかった」

子供のお守りは慣れているし、気にかけるだけなら何とかなる。

喋ってコミュニケーションを取るは苦手だが、見ているだけなら大丈夫だ。

「緑谷君もお願いなね」

「わかりました！」

同じ人に憧れる者同士、洗汰君を放つてはおけません！」

緑谷君の口から、私あまり聞きたくない発言が出てきた。
なので若干引きつった表情を浮かべ、彼に声をかける。

「オールマイイトに憧れてたのでは？」

「憧れは一人じゃないから！」

キラキラした瞳で見つめられながら返答された。こつちとしては、若干引いてしま
う。

確かに憧れの対象を複数持つ人もいる。

それでもナンバーワンヒーローの平和の象徴と、一般女子高生を同列に並べないで欲
しい。

けれど、数少ない友人の趣味嗜好を諫めるのものはばかられる。

（夢と現実の違い）

私に憧れる人たちも、いつかは夢ではなく現実を見るようになる。

ただの一般人ではなく、本物のヒーローを目標にするのだ。

自分は彼らの背中を、ほんの少しだけ押してあげたと思えばいい。

なので私に憧れているのも今だけだと、気持ちを切り替えるのだった。

個性強化訓練

洗汰君が私に憧れていることがわかった。

だがそれはそれとして、林間合宿が始まる。

目的は、全員の強化と仮免許の修得に向けての訓練だ。

ヒーローになる試験がどんなものかは知らないが、この機会に強くなっておくに越したことはない。

雄英高校に入学してから精神面や技術の上昇はあっても、個性そのものはあまり成長していない。

今は早朝で、合宿所の前で相澤先生がそのように説明してくれていた。

「ただし、斥流セッキリゅうは除く」

「解せぬ」

私は確かに超重力下で心身を鍛えているけど、劇的なレベルアップはしていない。

雄英高校に入学してから大きく成長したのは、皆のほうだと弁明した。

しかし残念ながら相澤先生だけでなく、クラスメイトも誰も納得はしてくれなかった。

そのまま何食わぬ顔で個性強化訓練に移行するので、私は仕方ないかと思いつながら指示に従うのだった。

やることは個性の限界突破で、一年A組とB組の大人数で行う。

ただし教官は担任だけでなく、プッシーキャッツも手伝ってくれる。

皆が様々な訓練を、真面目に行っていた。

私は高校一年生の体格まで急成長し、卵を一つずつ掴んでは慎重に隣の箱まで移動させている。

「うおおおおおっ!!! すっげえ美人!!!」

男子連中が私を見て騒いでいるが、集中力を切らすわけにはいかない。気にする余裕はなかった。

なお激しい運動をしなければ完全体でも命に別状はないと勘違いされているので、細な出力調整と持続時間を伸ばす訓練をしているのだ。

汗をかきながら卵を一個ずつ移動させながら、私はあることを考えていた。

(確かに理にかなっている。完全体の有り余るパワーを抑えるのは、封印なしでは難しい)

超重力による何重もの枷があって、ようやく日常生活が送れるのだ。

だが非常事態になれば全力全開で戦うこともあるだろうし、もしこの状態で人命救助をするハメになったら、うっかり人を握り潰してしまうことも十分に考えられた。

だからこそ卵で加減を覚えるのは理に適っているのだが、正直これがなかなか難しい。

「ああ！ 卵が！」

指先が卵の殻を押し潰し、受け皿にしている容器に殻が落下する。

高校一年生まで急成長した私は、身体能力が桁外れに上がっていた。

少しでも加減に失敗すれば、卵をすぐに割ってしまうのだ。

けれど訓練方法としては正しいので、決して手を抜くことはできない。

「殻を拾うの大変」

ヒビ割れた殻が容器に落ちてしまったので、それを除去しなければいけない。

だがこれもちやんと、訓練として成り立っている。

出力調整を完璧にするためには、避けては通れないのだ。

なので私は溜息を吐きながらも、一つずつ丁寧に取り除いていくのだった。

やがて日が暮れて食事の時間になり、皆でカレーを作ることになった。

孤児院でも献立に困った時の定番だ。

私が作り慣れていることがわかると、いつの間にか料理の先生のような立ち位置になる。

そして初心者向けの、簡単なアドバイスを行うようになった。

不味いよりも美味しいほうが良いので教える分には問題ないが、人と話すのは苦手だ。

もつと適した人材が居るはずではあるものの、残念ながら集まっている生徒の中では一番調理技術が高かった。

けれどちゃんと食べられる物ができたし、終わりよければ全て良しだ。

無事に完成して晩御飯の時間になった。

すると冼汰君が、一人で何処かに歩いていくのが見えた。

みどりや
緑谷君が気づいて後を追う。

それを外から眺める私は、どうしたものかと迷いつつもカレーを黙々と食べる。

(私は人と話すのは苦手)

自分では、何を話して良いのかわからない。相手が熱烈なファンならなおさらだ。

きっと冼汰君こうたの分のカレーを置くこともできずに、そのまま持って帰ってきてしまうだろう。

子供の相手は慣れているとは言え、全然知らない他人といきなり打ち解けるのは難易度が高い。

ならば緑谷君に任せたほうが、きっと上手くいくだろう。帰ってきたらそれとなく尋ねるぐらいで、ちょうど良いと思ったのだった。

次の日も、初日と同じような訓練だ。

皆、相当疲れている以外は特に語ることはない。

けれど夜に肝試しを行うことになり、私は緑谷君と一緒にグループになった。

広場で夜空を見ながらのんびり順番を待っていると、何やら妙な違和感を覚える。

「何か焦げ臭い？」

A組のメンバーと一緒に集合場所に居た、プツシーキャッツのピクシーボブが何かを嗅ぎつけたように鼻を動かす。

「黒煙？」

「何か燃えているのか！」

この時点で、もう嫌な予感しかなかった。

私は急いで一段階の抑制解除を行い、二歳ほど急成長する。

ジャージは大きめサイズなので問題はなく、呼吸を落ち着けて感覚を研ぎ澄ます。すると、いつの間に接近されていたようだ。

森の中に潜む何者かの気配を察知し、大声をあげる。

「ヴィランの襲撃！ 皆！ 備えて！」

「「?!」」

全員が驚きの表情に変わるが、流石はプロヒーローと、その卵たちだ。すぐに真剣な顔つきになり、自分と同じように周囲を警戒する。

「なっ、何!?!」

「ピクシーボブ！」

だが少し遅かったようだ。

ピクシーボブの体が突然浮き上がり、森に引きずり込まれかけている。

「やらせない！」

私は彼女を個性の対象に指定して、こっちに落とそうとする。

しかし相手の個性を解除しなければ、引っ張り合いになってしまう。

最悪ピクシーボブの体が二つに引き裂かれる事態を避けるべく、視線をそらさずに懐から一枚のコインを取り出す。

超感覚で大体の目星をつけて、素早く撃ち出した。

「そっ！」

すると目標として指定した茂みの奥で、射出したコインが金属に弾かれるような音が響いた。

防がれたようなので、相手のダメージは期待できない。

だがおかげでピクシーボブの個性は解除され、こつちに引き寄せることができた。

私は落ちてきた彼女を危なげなく受け止め、怪我をしないように優しく地面に下ろす。

「残念。飼い猫ちゃんには、先に眠ってもらおうつもりだったけど」

すると森の奥から二人の不審者が喋りながら、私たちに向かつて歩いてくる。

どうやら彼らが襲撃者で、間違いはなさそうだ。

「何で!? 万全を期したはずじゃあ!」

何でヴィランが居るんだよお!」

峰田君が恐怖と驚きが混じった表情を浮かべている。

それが普通の反応だし、非常事態なので仕方ない。

他のA組の面々も似たようなもので、精神的な動揺が顔に出ている。

私とプッシーキャッツのメンバーは冷静に対処しているが、今はとても不味い状況だ。

なのでできる限り周囲の状況の把握に努めつつ、まずは緑谷君に指示を出す。

「緑谷君は洗汰君こったをお願い!」

私たちは、彼が何処に居るかを知らない!」

本来なら、この場に居るプロヒーローに指示を仰ぐべきだ。

しかしここで緑谷君みどりやに行ってももらわないと、もし最悪の事態が起きていたら誰も洗汰こうた君を助けられない。

「ただし！ 極力交戦は避けて！ 洗汰君こうたの安全が最優先！」

「わっ、わかつたよ！ 斥流さん！」

「プツシーキャッツもそれでいい！」

念のためにプロヒーローの意見も伺うと、誰もが口を閉ざしたままで静かに頷く。

目の前のヴィランに集中したいのか、話を聞く余裕がないのかはわからないが、取りあえず意義はないようだ。

だがここで、さつきはニューハーフっぽいヴィランが喋っていたが、今度はトカゲ人間っぽい奴が堂々とした立ち振る舞いで語りかけてくる。

「ご機嫌麗しゆう！ 雄英高校！ 我らヴィラン連合！ 開闢行動隊！」
かいびやく

私としては向こうの自己紹介には全く興味がないので、作戦タイムだと割り切つて思考を整理していく。

「俺はスピナー！ ステインの夢を紡ぐ者だ！」

そう言つてヴィランは、馬鹿でかい武器を取り出して構えた。

その間に私は考えをまとめて、素早く次の指示を出す。

「皆も交戦を避けつつ、一塊になって先生の元に避難！」

余裕があれば、緑谷君を助けてあげて！」

さらに抑制をもう一段階解除して、オールマイトの本気の戦闘力まで高めた。

私は呼吸を整えて光の粒子を放出しながら、右拳を後ろに引いて構えを取る。

「時間が勿体ない！ 速攻で叩き潰す！」

ヴィランが襲いかかってくるのと、私が全力で正拳突きを放つのはほぼ同時であった。

凄まじい衝撃波が生まれ、あっという間に敵を飲み込んで抵抗虚しく吹き飛ばされる。

「なっ！ 吹き飛ばされる!？」

「これが！ 新たな平和の象徴の力なの!？」

荒れ狂う暴風は前方の森の一部をえぐり、多くの木々をなぎ倒した。

念のために立ち回りには気をつけ、ヴィランは肝試しの方向とは別方面に飛ばす。

これで彼らは死ななくても、大きなダメージを受けたはずだ。

少なくともしばらくは、戦線復帰は不可能だろう。

その間に連絡を受けたプロヒーローが到着すれば、奴らを捕まえてくれる。

やがて吹き荒れていた風が止み、私は大きく息を吐く。

そして私の背後の居る一年A組と、プロヒーローのプッシーキャッツに呼びかけた。「私だけで、全員を助けるのは無理！」

だから！　あまりあてにはしないぞ！」

そう言って私は、自身の重力を操作して空に向かって落ちて行く。

森が赤く燃えていることから、相当派手に暴れているようだ。

しかし敵は森の中に潜んでおり、視界が塞がれて超感覚でも大体の位置を割り出すのが精一杯である。

さらに味方が何処にいるかも不明なのだ。

迂闊に動けない今の状況に、とても困っていた。

「……あれは？　ラグドール！」

視界に入ったのは偶然だ。

それでもプッシーキャッツの一人であるラグドールが、何者かに襲われていた。

一刻を争う事態なので、私に躊躇いはなかった。

「重力加速！　二倍！」

影になっていたのでヴィランの正体は不明だが、直撃させたらやり過ぎてしまう可能性がある。

なので目の前に当てて衝撃で吹き飛ばすように、必殺の蹴りをお見舞いした。

結果、地面に小さなクレーターができて、周囲のモノがヴィランごとまとめて吹き飛ばす。

ラグドールも余波に巻き込まれたが、私は素早く彼女を抱きかかえて戦線を離脱する。

ジャージの右足が燃えてしまったが、それ以外は無事だ。

それに彼女も体のあちこちに軽い怪我はしていても、元氣そうである。

「動ける?」

「問題ない!」

吹き飛ばしたヴィランのことが気になるが、空から見る限り何処に居るかはわからない。

気を失ったのか逃げたのかは不明ではあるものの、助けられたので良しとする。

私は空を飛んで、宿舎に向かって一年A組とプッシーキャッツの前に降り立つ。

まとまっているので、気配を探りやすかった。

それともかく、抱えていたラグドールを地面に下ろす。

「私は他の皆を助けに行く! あとは任せる!」

彼女たちはプロヒーローなので、自分が指示しなくても大丈夫だ。

一年A組の皆もまだ未熟ではあるが、そこそこ強いので一対一にならなければ大丈夫

だろう。

なので私は再び空に落ちて、急いで皆を助けに行くのだった。

上空からの監視

林間合宿中に、ウイルスに襲撃された。

私は皆を助けるために別行動を取り、空高くから地上を見下ろしていた。

今のところは雄英高校の生徒が頑張っていて、怪我人は出ても何とか敵を撃退できている。

向こうが狙っていた爆豪君も、何とか危機を免れたようだ。

結果だけを見れば、私が表立って動かなくても何とかなつたようだ。

けれど、被害が少ないに越したことはない。

寝覚めが悪いのも嫌である。

途中で脳無に襲われていた、やおよろずしも八百万百さんを助けたし、その際にウイルス連合とのイ

タチごっこを終わらせるべく、ある物をいくつか創造してもらおう。

私は新しい装備である夜の闇でも目立たない黒いマントを被り、ジャージの下を着替える。

そして封印をかけ直して元のロリ体型に戻り、キラキラと輝く粒子の放出を止める。

用が済んだあとはお礼を言って、再び空に向かって落ちていくのだった。

しかし上空から監視していた気づいたのだが、緑谷君の成長は凄まじい。

凶悪なヴィランであるマスキュラーを、大きな怪我もなく撃破したのだ。

他の仲間の援護があったとはいえ、殆ど単独と言っても過言ではない奮闘ぶりである。

爆豪君も着実に力をつけていて、迫りくる危機に柔軟に対処して見せた。

常闇君とくやみの暴走を、森が火事にならない範囲での小規模爆破を連発し、見事に抑え込んだりと八面六臂の大活躍だ。

私との戦闘訓練が生きてるかどうかはわからないが、彼も緑谷君とはタイプが違うが天才だ。

だがその最中に、マジシャンを気取ったヴィランの手により、爆豪君と常闇君は忽然と姿を消してしまう。

「はて、どんな個性？」

潜伏していた敵に、気づけない私も悪かった。

しかし、やはり距離が遠いと息を潜めて隠れている者を見つけにくい。

それでも耳を澄ませば、ある程度は向こうの声を拾えるので、私は少しでも状況把握に努める。

「我々はただ、凝り固まってしまった価値観に、それだけじゃないよと道を示したいだけだ。」

今の子らは、価値観に道を選ばされている」

木の上から雄英高校の生徒たちに向けて語りかけるヴィランはとても目立ち、明らかに自分に酔っている。

だが上空に隠れて地上の様子に目を光らせている私にとって、今の状況は好都合だ。

「爆豪だけじゃない！ 常闇もないぞ！」

障子目蔵君が辺りを見回して声を出す。

続けて轟君が、焦った様子で口を開く。

「わざわざ話しかけてくるとは、舐めてんなあ！」

「元々エンターテイナーでさ。悪い癖さ。常闇君はアドリブで、もらっちゃったよ」

そう言ってマジシャンのヴィランは、輝く小さな二つの玉を見せびらかす。

彼がエンターテイナーと言うなら、きつとあれが二人が姿を変えた物だろう。

轟くんがとにかく取り返さなければと、最大出力で氷を放つ。

「悪いね！ 俺は逃げ足と、欺くことだけが取り柄だよ！」

しかし、敵は巨大な氷柱による攻撃を予想していたようだ。

空を飛ぶように避けて、ひたすら逃げる。

「開闢行動隊！ 目標回収達成だ！ 短い間だったけど、これにて幕引き！

予定通り！ 五分以内に回収地点に向かえ！」

回収地点が何処かは、まだわからない。

それでもマジシャン風のヴィランを追っていけば、すぐにわかるだろう。

あの場に居たメンバーも、絶対に逃すまいと必死に追いかける。

その際に機転を利かせ、蛙吹あすいさんの舌で緑谷君と轟君と障子君しょうじの三人を飛ばして、空中を移動するヴィランに勢い良くぶつめた。

あまりにも予想外の行動だったのか避けきれずにまともに当たり、地上に落下する。

だがそこには既に、敵の中で無事な者たちが集結していた。

さらには何処に隠れていたのか、黒霧くろぎりまで待機していたのだ。

そこに一年A組まで混ざるので、何とも混沌こん沌としている。

だが向こうには、もはや交戦の意思はないようだ。

次々とゲートに入っては、何処かにある拠点に撤退していく。

しかし、マジシャンにぶつかった時に爆豪君と常闇君を取り返していたようで、奴らの目的は達成できていない。

私たちの勝利だと思われたが、ヴィランは何故かその様子を楽しそうに見つめていた。

「マジックの基本だね。物を見せびらかすときつてのは、見せたくない物があるときだぜ」

そう言つてヴィランが口を開けると、舌の上には二つの玉が隠されていた。

三人がぶつかったときに奪つていたのは、轟君の氷だったのだ。

「まっ、まさか!?!」

「右手に持つてる物が、右ポケットに入つてるのを発見したら!」

そりゃ! 嬉しくて走り出すさ!」

奴はエンターテイナーを気取つているだけはある。

緑谷君たちが急いで追いかけたのに、ゲートに入つてお辞儀までする余裕があるのだ。

「待てえええ!!」

「そんじゃ、お後がよろしいようで」

だが奴が完全な勝利を確信したそのとき、茂みに身を潜めていた青山優雅君あおやまゆうががネビルレーザーを放つた。

油断していたヴィランの横つ面に当たり、仮面が外れる。

それだけではなく、口から二つの玉が零れ落ちた。

ここで私はようやく監視を止めて、攻勢へと転じる。

「今っ！」

二段階の抑制解除を行うだけでなく、重力加速をかけて地上に向けて高速で落下する。

黒いマントやジャージが圧縮された空気により燃え出すが、どうせ髪や柔肌は無傷なので構いはしない。

光の粒子を放出しながら、すぐに個性の有効射程に入った。

なので奴が次の行動に移る前に、常闇君と爆豪君を重力操作でこっちに引き寄せる。

さらには耐熱袋から何枚ものコインを取り出し、黒い霧のゲートに向けて手当たり次第に乱射した。

「がはああっ!? にっ、二代目えー! おっ、俺のショーを台無しにしゃがってええっ!」
マジシャンのヴィランに何発か当たって悶絶しても、手加減はしているので気絶することはない。

先程の余裕は何処へやらで、命から逃げるようにゲートの向こうへと消えていくのだった。

やがて地上が近づいてきたので重力を逆転させて、速度を落としていく。
勢いを殺しきれずに突風で砂埃が舞い上がったが、この場合は仕方ない。

とにかく私はゆっくりと地面に両足をつけて、青山君が隠れている茂みに顔を向けてお礼を言う。

「二人を取り戻すなら、ここしかないかった。」

青山君、手伝ってくれてありがとう」

青山君はその場から動かさずに、震えながらもガッツポーズをする。

この場に居る緑谷君、轟君、障子君は困惑しているようだ。

だが一から十まで説明するのが面倒なので、今は一旦置いておく。

取りあえず仕掛けを確認すると、服と違って燃えたり壊れたりせずにきちんと作動していた。

「うん、問題なし」

玩具のコインをワープゲートに向けて乱射したとき、八百万やおよろずさんに創造してもらった発信機をいくつか紛れ込ませたのだ。

運が良ければヴィラン連合の足取りが追えるし、もし駄目でも何か手がかりが得られる可能性がある。

ジャージは完全に燃え尽きたが、幸い下着は無事だ。

今は早いところ先生に報告したほうが良いと判断した私は、再び幼児体型に戻る。

男子に服を借りることも考えたが宿舎に行けば予備があるだろうし、先に戻っている

と皆に告げる。

そして、音もなく空に向かって落ちていくのだった。

少しだけ時が流れて、ヴィラン連合に林間合宿を襲撃されたことが全国ニュースで報道された。

雄英高校が完全敗北したと世論で騒がれ、各メディアは寄つてたかつて叩き出す。

確かに、多くの怪我人が出てしまった。

ヒーローを目指す名門校が、何度も襲撃を許している。

お前の管理体制ガバガバじゃねえかと、憤る人も居るだろう。

けれど、私から見れば雄英高校は頑張つて対策をしていた。

そもそもワープゲートと使つていつ何処に現れるかわからないヴィランを防ぐことなど、事実上不可能である。

しかし、林間合宿の場所を知る者が極僅かなのに襲撃された。

情報が何処からか漏れている可能性があり、非常に困った事態と言える。

私だったら責任追及の突き上げにキレ散らかし、やってられるかと匙を投げるだろう。

別にヒーローはやっていないが、もし就職していたら辞表の一つでも叩きつけて責任

を放棄していた。

しかし雄英高校の先生たちは、正義感や責任感が強いようだ。

自分のように我が道を行くマイペースさや、無責任な行いはしなかった。

わざわざ記者会見を開いて、私たち生徒のために頭を下げてくれた。

大人として立派な対応だが、外から見ていても不快だ。

だからこそ普段なら断っていた出勤要請を、二つ返事で引き受けた。

ヴィラン連合を潰せば、先生たちは二度と大衆の前で頭を下げずに済む。

それに友人や家族や知り合いも、怖い目に遭わなくなるのだ。

私はヒーローではないし、それになるつもりも毛頭ない。

強くなるために過酷な修業を続けているのは、全て自衛のためだ。

基本的に行き当たりばったりだし、いつもマイペースで難しいことは考えていない。

だからこそ一度決めたことは、一切躊躇わずに実行に移す。

さしずめ今は、打倒ヴィラン連合と気合を入れるのだった。

シューティングスター v s オールフォーワン

現在の雄英高校の立場から、増援要請は難しい。

なので、かつてのOBや伝手を辿つての人員を集めた。

それでも何人ものトップヒーローが参戦している。

流星はヒーローの名門校だけはあった。

そして全国から密かに集められた多くの超人は、二手に分かれて行動を開始する。

一つ目は調査で明らかになった、ヴィラン連合が利用していると思われる酒場。

二つ目はワープゲートに撃ち込んだ発信機によって判明した、重要拠点だと予想される工場である。

ちなみに雄英高校の記者会見は敵の油断を誘う作戦だ。

その隙に、スピード勝負で一斉に突入する。

ヴィランには何もさせずに、夜が明ける前に速やかに全員を捕らえるのであった。

私はトップヒーローのベストジョーニストたちと共に、謎の施設の方へと向かう。

外から見る限りは何かの工場だが、総員が配置について開始時刻になると、マウントレデイが個性を使って約二十メートルの巨体になる。

そして軽トラックを靴の代わりにして、明かりの一つもついていない静まり返った施設に^{かかと}踵落としを叩き込む。

「ふんっ！」

嚴重にシャッターが閉められていても、壁に大穴が開いてしまえば問題はない。

私は上空で待機なので、自分以外のメンバーが内部に突入する様子を見守る。

天井に開いた穴から覗き見た限り、多くの脳無に水槽のようなモノに入れられて待機していた。

だが今なら動いてないため、敵に利用される前に無力化できる。

ベストジーニストが無数の糸を操り出し、迅速に捕縛していく。

「脳無格納庫！ 制圧完了！」

手の空いている警察隊は、酒場に突入したヒーローと連絡を取る。

するとヴィラン連合の捕縛が完了したと報告が入った。

自分は何もせずに解決したが、これでいい。

被害を出さずにヴィランを捕らえられるのが、もつとも良い結果だ。

けれどまだ油断はできないため、私はヒーローコスチュームを着用して、一段階の抑

制解除状態で空から見張っていた。

何かあったときに即対処が可能な自分が、全体の様子を観察する。

後方支援を行うのは、理に適っていた。

破壊した施設はしばらく経っても、何の動きがない。

どうやら本当に終わったようだ、空を飛びながら安堵の息を吐いた。

「止まれ！ 動くな！」

彼らは奥に進んでいるため、空からでは施設内の様子はわからなくなった。

しかし超感覚で聞き取った限りでは、ギャングオルカが何者かの接近に気づいて警告を発したようだ。

続いてベストジーニストが糸による捕縛を試みて、音の具合から成功したのがわかる。

「ベストジーニストさん！ もし民間人だったら！」

「状況を考えろ！ その一瞬の迷いが現場を左右する！」

「ヴィランには！ 何もさせるな！」

マウントレディが戸惑いながらもトップヒーローに尋ねるが、彼の意思は揺るぎない。

だが捕縛の締めつけをさらに強めた瞬間、正体不明の人物を中心にして大爆発が起き

た。

敵の拠点と思われる施設が突然大爆発を起こし、瓦礫の山へと変わった。

ある程度の状況は掴めたが、それでも何が起きたのかは全てを把握するのは困難だ。「せつかく弔が自身で考え、自身で導き始めたんだ。

できれば邪魔はよして欲しかったが」

気づけば倒壊して瓦礫となった施設に、のっぺらぼうの男が一人で佇んでいた。

奴の正体は不明だが、ヒーローたちを爆発で吹き飛ばしたのは間違いなさそうだ。

「さて、……やるか」

そして彼は、何処からともなく黒い水を呼び出した。

それは拘束が解かれて自由になった脳無を、次々に飲み込みだした。

「あれはっ!？」

死柄木弔や黒霧が護送車から脱走したときにも、アレと似たような現象が起きた。ならば黒い水は転移系の個性だ。

きつと脳無を何処かに送るつもりなのだと察した私は、速やかに行動を起こす。

「変！ 身！」

抑制解除をもう一段階進める。

さらに重力加速の二倍で降下し、光の粒子を放出しながら謎のヴィランに高速の蹴りを放った。

「ふむ、良い個性だ」

「片手で防がれた!？」

しかし奴はのっぺら坊のような顔をしているのに、上空からの攻撃に正確に対応した。

一瞬のうちに片手を肥大化させて、赤熱した飛び蹴りを軽々と受け止めたのだ。

どうやら目の前のヴィランが使えるのは、転移の個性だけではないらしい。

何とも厄介な相手の出現に思わず舌打ちし、まだ他にも隠しているかも知れないと思った私は、奴が何か仕掛ける前に一旦飛び退いて距離を取った。

(突入したヒーローや警察隊が無事なのは、不幸中の幸い)

私の周囲には怪我をして動けない彼らが横たわっているが、命に別条はないようだ。少しだけ安心し、彼らを庇うように一歩足を踏み出す。

あとは脳無の転送を中断させられたのも大きく、取りあえずは良しとしておく。

「流石ナンバーフォー、ベストジーニスト。

僕は全員消し飛ばしたつもりだったんだ」

謎のヴィランは手を叩いて、自分の背後で倒れているベストジーニストを褒め称えて

いる。

その何処となく余裕のある態度を見た私は、あることを思い出して冷や汗をかく。「皆の衣服を操り、瞬時に端に寄せた判断力。技術、並の神経じゃない」

今回の作戦を実行する前にヴィラン連合の説明を聞いたとき、悪の象徴であるオールフォーワンが、影から操っている可能性があると聞いていた。

己の安全が確保されない限りは姿を現さないらしいが、私は何故か目の前のヴィランがそれなのだと本能的に理解する。

「話が違う。……だから何だ！ 一流は！ そんなものを失敗の理由に！」

ベストジーニストが自らの衣服を操り、AFOに向けて放つ。

だがそれよりも先に、ヴィランは指先から空気の塊を射出した。

「危ない！」

ベストジーニストを狙った空気の弾を超感覚で察知した私は、その場から動くことなく素早く片手で弾き飛ばした。

「なるほど、相当の練習量と実務経験ゆえの強さだ。

ベストジーニスト、キミのはいらないな。用もちとは、性の合わない個性だ」

AFOの表情はわからない。

だが彼は地面に降り立って、今度はのっぺら坊の顔を私に向ける。

「斥流陰子。せきりゅういんこ キミの個性は有用だ。

「とむら 弔の役に立——」

「誰がやるか!」

グダグダと長話をしている隙を突き、AFOに重力加速の三倍で蹴りを繰り出した。しかし、距離が近く加速が足りなかったようだ。

「またもや片手を肥大化させて防がれてしまう。」

「これも駄目かつ!」

「今まで二段階の抑制解除に対処できるのは、本気のオールマイトぐらいだった。」

「ならば、やはり目の前の相手はAFOだ。」

「それほどの強さを持っているのは、悪の象徴ぐらいだろう。」

「複数の個性を持っているようなので、近くに留まっていると何をされるかわからな
い。」

「私は飛び退いたあとに、ベストジーニストや周りの人を抱えて急いで離れる。」

「状況判断能力も素晴らしいね。今からでも僕の——」

「だがその時、私とAFOはこの場所に急速接近する何者かを感知した。」

「やはり、来ているな」

「そして突然空から降ってきたオールマイトが、オールフォーワンにタックルを叩き込

んだ。

あまりの衝撃に周りの地面がヒビ割れて、盛大に吹き飛んでいく。

「全てを返してもらおうぞ！ オールフオーワン！」

「また僕を殺すか！ オールマイト！」

私は近くに倒れているヒーローたちが巻き込まれないように、まだ退避させていないヒーローや警官を急いで回収する。

危ないのでさらに距離を取り、避難が完了した私は暴風や土煙やらで視界が悪かったので、その場でじつと待つ。

「随分遅かったじゃないか」

土煙の向こうから、A F O の声が聞こえてくる。

「バーからここまで五キロあまり。」

僕が脳無を送り、ゆうに三十秒が経過しての到着。

衰えたね。オールマイト」

確かに私から見ても、彼は全盛期よりも衰えている。

それでもA F Oを倒すために、急いでここに来てくれたのだ。素晴らしいヒーローである。

「貴様こそなんだ。その工業地帯のようなマスクは。随分無理してるんじゃないか

！」

オールマイトは軽く体をほぐしながら、AFOを挑発する。

「六年前と同じ過ちは犯さん！ オールフォーワン！」

貴様を今度こそ、刑務所にぶち込む！」

オールマイトの肉体が、さらにもう一段階肥大する。

きつとこれが、彼の全力全開なのだろう。

「貴様の操る！ ヴィラン連合もろともお！」

オールマイトが跳躍してAFOに飛びかかった。

だが奴は冷静に左手を構え、嬉しそうな声を出す。

「それはやるが多くて大変だな！ お互いに！」

そしてAFOは、ナンバーワンヒーローさえも軽々と吹き飛ばす突風を発生させる。

まともに受けたオールマイトは呆気なく吹き飛ばされ、崩れたビルに激突しそうになった。

それを見た私は、彼に向けて慌てて個性を発動する。

「オールマイト！」

オールマイトの重力を操作することで、ビルへの衝突の勢いを急激に弱める。

おかげで彼は地面に着地し、こちらを見つめて礼を言う。

「助かった！ 斥流少女！」

「どう致しまして」

AFOは自らの個性に関して、何やらブツブツ呟いている。しかし、今の私に気にする余裕はなかった。

「キミは少し厄介だね」

オールフオーワンがそう言うのと、転移を中断してこの場に残っていた脳無が一斉に行動を開始する。

厄介なことに、狙いは私ではなく無差別のようだ。

怪物たちは周囲に散らばり、人々を襲いだす。

「オールマイトはAFOを！ 脳無は私が！」

「悪いな！ 任せた！」

オールマイトは態勢を立て直し、AFOに向かっていく。

そして私は辺りか回す大暴れする脳無の群れを見据えて、孤独な戦いを挑むのだった。

自分が対処した脳無だが、質はともかく数だけは多かった。

それが広範囲に拡散されたので、全てを倒しきるまで無駄に時間がかかってしまう。

倒れたヒーローや一般市民が巻き込まれるの防ぎながらなので、とにかく面倒で手間がかかる。

AFOの言う通りで、守るべきものが多いと大変であった。

けれどようやくそれも片付いて一息つき、空を飛んで元の場所に戻ってきた私は、上空からオールマイトとAFOの戦いの様子を伺う。

(あれ? このままだと、負ける?)

脳無を処理しながらも状況を観察していたが、現状はどんどんオールマイトに不利になっていく。

(AFOは、まだ余力が残ってる)

けれどオールマイトには活動限界があつて、長期戦は不利だ。

時間をかければ他のヒーローが駆けつけるが、きつとその前にマッスルフォームが解除されるだろう。

それにとえ維持できたとしても、地力で負けているのでAFOは倒せそうにない。

だが悪の象徴はナンバーワンヒーローが打ち砕いてこそ、誰にとつても納得できる平和な未来を勝ち取れるのだ。

けれど現実オールマイトだけでなく、駆けつけたプロヒーローたちまで一網打尽にされかねない程、AFOが強すぎた。

(まあ、私より弱いけど)

AFOというヴィランは、未だかつてないほどの強敵ではある。

しかし私は別に、怖くも何ともない。

なので自分が戦えば勝てるだろうが、オールマイトを差し置いて戦いを挑んで良いものかと悩む。

(もう、あまり時間はない。……どうしよう)

今の様子はヘリコプターから撮影されている。

時間切れでオールマイトの本当の姿を多くの国民に知ってしまったら、今まで彼が必死に築いてきた平和の象徴が崩れてしまう。

私はかなり迷ったが、やがてやむを得ないと判断して地面にゆっくりと降下する。

「オールマイト！ 選手交代！」

「せつ、斥流少女!？」

個性を発動して、息も絶え絶えのオールマイトを安全圏まで退避させる。

逆に私はAFOをめがけて、勢い良く飛び出してた。

「オールマイトが出るまでもない！」

流星ヒーロー！ シューティングスターが！ AFOを倒す！」

オールマイトもAFOも、私の突然の行動も発言も意味不明だろう。

ちなみに自分も考えながら動いているわけではないので、勢い任せである。

「AFO！ 光栄に思うといい！ 私がこの姿で戦うのは、お前が初めてだ！」

何にせよ、ナンバーワンヒーローの限界に近い。

個性が解除されて正体がバレるのだけは、何としても避けたかった。

「変！ 身！」

三段階上げた私は中学生ほどの体格に急成長すると、光の粒子を放出しながら高速で駆けて、真正面からAFOに殴りかかる。

「むうっ!? 転送！ 衝撃反転！」

またもや腕を増強して攻撃を防ごうとする。

だが私の身体能力は、二段階よりも大幅に強化されていた。

なので援護に駆けつけてくれたヒーローの一人、グラントリノが目の前に転送されても問題はない。

難なく避けて目で追えない速度で、悪の象徴の背後に回り込む。

駆けつけたヒーローや周りで見えていた人だけでなく、ヴィランの大ボスさえも驚きの表情に変わった。

私は躊躇うことなく、そのままの勢いで拳を叩き込む。

「がはっ!？」

しかも一発だけでなく二発、三発と豪雨のような連打を浴びせていく。

「A F O！ お前は！ 今！ ここで！ シューティングスターが！ 倒す！」

A F Oは死角からの猛烈なラッシュを受けて、踏ん張りが効かずに宙に浮き上がる。

だが私は重力操作で無理やり地面に縫い付け、何処へも逃げる事ができずに一方的に殴られ続けていた。

もはや悪の象徴は、こつちを振り向くことさえできない。

あつという間に全身が傷だらけになり、その姿はまるでボロ雑巾であった。

けれど私は、そこで止めるほど優しくない。

A F Oが大ダメージを受けて一時的に行動不能になったのを見計らい、私は大空に跳躍した。

するといつの間にか夜が明けていたようで、朝日をバツクに蹴りの姿勢を取る。

「重力加速！ 四倍だあああつ!!!」

それは太陽のように眩しく輝き、暗い闇を照らす流星であった。

重力加速四倍の蹴りは、寸分違わずにA F Oの腹部に叩き込まれる。

周囲一帯は地震が起きたかのように激しく揺れ動き、凄まじい衝撃が発生して砂嵐が舞いあがり、巨大なクレーターができあがった。

A F Oは陥没した地面に上半身がすっぽりと埋まり、犬神家のような情けない姿を晒

し、ビクンビクンと痙攣けいれんを繰り返している。

砂嵐が収まってしばらくは、離れた場所に着地して注意深く様子を伺っていた。だが敵に動きがなく、戦闘継続不可能なのは明らかだ。

このままだと最悪窒息死しそうなので、呑気に近づいて片手で足を掴む。よいしょと引っこ抜いて、一応の安否確認を行う。

「ギリギリ生きてるから、ヨシー！」

超再生の個性があっても、瀕死に留めるのが精一杯のようだ。外傷もかなり酷いが、内部はそれ以上のダメージを受けている。

とてもではないが治癒が追いつかない。

私が片手で掴んでぶら下げてるボロ雑巾が、悪の象徴らしい。

「……意外と弱かった」

全力で戦うまでもなかったの、ラスボスを倒したらそういう評価になる。

けれど表に出していないだけで彼以上に強いヴィランは星の数ほど居るだろうし、今まで通りに自主トレーニングを続けようと心に決めるのだった。

神野区で大暴れしていたヴィラン連合とその黒幕であるAFOは、全員捕縛されてタ

ルタロス刑務所に送られることになった。

一方で私は個性を使って邪魔な瓦礫やビルを撤去し、怪我をした人々の救助活動を行っていた。

ヒーローでもない一般人の私が慈善活動をしても、貰えるのは金一封や表彰状がせいぜいだが、別にそれを目当に頑張っているわけではない。

目の前で見て見ぬ振りをして犠牲者が出たら寝覚めが悪くなるし、自分が動けば多くの人を確実に助けられるのだ。

なので取りあえず各地から大勢のヒーローを救助隊が到着するまでは、頼りにないが私が代わりになるつもりである。

やがて私は巨大な瓦礫を持ち上げて邪魔にならない場所に運んでいると、全身傷だらけのオールマイトが取材を終えて、こちらにゆっくり歩いて来た。

「オールマイト。貴方の秘密、守りきれなかった。ごめんさい。」
「キミのせいじゃないさ。気にする必要はないよ」

今のオールマイトは、筋骨隆々のマッスルフォームではない。

本来の姿であるガリガリの状態で、おまけに怪我人なので全身が包帯だらけだ。

彼を慕う多くのヒーローや医者や看護師、さらには取材陣や大勢のファンを引き連れ

ていることから、やはりナンバーワンは凄いと思った。

「実は病院に行く前に、キミにどうしても頼みたいことがあるんだ」

私は巨大な瓦礫を土埃が起きないように、足元にゆつくりと置く。

そしていつもより真面目な表情のオールマイトを、じつと見つめる。

「斥流少女も気づいているだろうが。私はもう、これ以上ヒーロー活動はできない。

事実上の引退さ」

AFOと戦う前から無理を続けてきたし、私もそろそろ限界が近いと思っていた。

しかし平和の象徴が存在するから、日本の犯罪率は他国を大きく下回っているのだ。

オールマイトが引退したら、ヒーロー社会は不安定になる。

抑圧されていたヴィランは息を吹き返して治安の悪化を招き、最悪力こそ全ての世界になりかねない。

私がそんなことを考えていると、彼はこちらを真っ直ぐに見つめる。

「そこで私の後任。つまり新世代の平和の象徴を、斥流少女に託したい」

「……はっ？ はあっ？ はああああっ?!」

彼が何を言っているのか信じられずに、思わず大声を出してしまう。

そして焦った表情を浮かべた私は、痩せ気味のオールマイトにズンズン近づいていく。

「ななななっ！ 何でそんなことを!？」

「いつ、いや、だから！ 私の後を継ぐのは、斥流少女しかないよー！」

「エンデヴァーに任せるべき！」

エンデヴァーはオールマイトとはタイプは違うが、立派なナンバーツーヒーローだ。それが何故、一般生徒に平和の象徴を継がせるのか全く意味がわからない。

そもそも受け継げるものなのかさえ不明なのに、本当に何が何だかだ。

「何より私は、ヒーローにならない！」

「わかっている！ わかっているとも！ だが、それでも私は！ キミに託したい！」

オールマイトは、とても真剣な表情を浮かべている。

断つて諦めさせるのは骨が折れそうだ。

私は大きな溜息を吐き、どうしたものかと悩みながら晴れ渡る空を眺める。

しばらくして結論が出たので、再び彼に顔を向けた。

「私はヒーロー活動はしないけど、名前を貸すぐらいなら構わない」

オールマイトの後継者が居ないのなら、本物の平和の象徴が見つかるまで預かるのはいい。

ただしヒーロー活動は一切する気はないので、本当に名前だけだ。

これ以上を望むなら諦めてもらうが、彼は本当に嬉しそうに私の手を取って、笑顔で

言葉をかける。

「ありがとう！ 斥流少女！ よろしく頼む！」

「ええと、……どう致しまして」

名前だけ貸す約束はしたが、本当に新世代の平和の象徴をやるつもりはないのだ。オールマイトも引退したら手が空くし、今後はきつと後任の育成に専念するのだから。

そして彼が見定めた立派なヒーローに、後を継いでもらえば万事解決である。

「じゃあ、私は救助活動に戻る。」

オールマイトも早く病院に行つて、怪我を治療して」

「ああ、わかった！ 邪魔をして悪かった！」

オールマイトは全身包帯だらけなのに、良い笑顔を浮かべていた。

だが無理はできないので、医療チームや他の大勢の人たちと一緒に病院に向かう。ちなみに彼が連れてきたヒーローやファンは、私と一緒に救助活動を行うようだ。

自然とチームを組んで崩れたビルや瓦礫を撤去し、被害を受けた人たちを助けていくのだった。

その後について少し語ると、後期のビルボードチャートJ Pはオールマイトの引退やヴィラン連合やA F Oの襲撃で、かなり混沌としていた。

いざ開催されたビルボードチャートJ Pは、やはり大きな順位変動があった。

何より凄いのは、初登場で過去最低年齢の流星ヒーロー、シューティングスターが堂々の一位だったことだ。

事件解決数、社会貢献度、国民の支持率の三つをヒーロー公安委員会が独自に数値化して集計しているらしいが、自分はこれといった活動をしていない。

何がそこまで評価された一位なのが、全くわからなかった。

目の前で人が困っていたら助けるし、凶悪なヴィランが手の届く範囲に現れたら捕まえるが、それでもヒーローをやるつもりはない。

名義上は日本一位のヒーローの後継者だとしても、私はオールマイトのような平和の象徴には絶対なったりしない。

相変わらずマイペースでのんびりしているが、ヒーローを目指さないことだけは確固たる信念を持っているのだった。